一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第19集

大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ

福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査

２００３

福岡県教育委員会

一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第19集

大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ

福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査

序

福岡県教育委員会では国土交通省九州地方整備局（旧　建設省九州地方建設局）の委託を受け、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。現在、浮羽町、吉井町では大部分の調査を終え、一部の区間で一般共用が開始されています。

本書は、平成11年度に行った浮羽郡田主丸町所在の大的・日詰両遺跡の発掘調査記録です。

大的遺跡では古墳時代中期と弥生時代前期の集落跡が、日詰遺跡では平安時代、古墳時代後期、弥生時代前期の遺構が確認されました。大的遺跡と日詰遺跡は浅い谷をはさんで隣り合っています。浮羽地方の古墳時代の集落については、浮羽バイパス建設に伴う発掘調査の進展により徐々に様相が明らかになりつつあります。ここで、新しい事例を加えることができました。また、弥生時代前期の集落については、稲作文化が浮羽地方に定着し始めた時期の集落であり、大変興味深いものです。

本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。
発掘調査、整理作業ならびに報告書作成にあたり、多くの方々にご協力いただきましたことを、深く感謝いたします。

平成15年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　森山　良一

例　　言

1．この報告書は、平成12（2000）年度から平成13（2001）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現　国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第19集である。

2．本書に掲載した大的遺跡、日詰遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第15地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字田主丸字大的、字日詰に所在する。

3．本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は空中写真企画ならびに九州航空株式会社に委託した。

4．本書に掲載した遺構図は調査担当者のほか、児玉真一、進村真之が作製し、岩橋純子、上村智美、大塚ヒロ子、河内享子、江田裕子、小西富美子、小西裕子、秦良子、原紀代の協力を得た。

5．出土遺物の整理・復元作業は岸本圭の指導のもと、九州歴史資料館で行った。

6．出土遺物の実測は調査担当者のほか、小澤佳憲、坂元雄紀が行ない、平田春美、棚町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、堀江圭子、若松美枝子、栗林明美、寺岡和子、中川真理子、橋之口雅子、西亜彩子の協力を得た。

7．遺構、遺物の製図は調査担当者のほか、小澤、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子、荒川妙、橋之口雅子が行った。

8．本書の執筆は、児玉、大庭、小澤、坂元、今井が分担し、目次にその担当を明記した。編集は、今井が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……………………………………………………（今井）１
　Ⅰ　調査の経過 ……………………………………………………１
　Ⅱ　調査の組織 ……………………………………………………１
第２章　位置と環境 …………………………………………………（小澤）５
　Ⅰ　地理的環境 ……………………………………………………５
　Ⅱ　歴史的環境 ……………………………………………………７
第３章　大的遺跡の調査の記録 ……………………………………11
　Ⅰ　遺跡の概要 ………………………………………………（今井）11
　Ⅱ　基本層序 …………………………………………………（今井）11
　Ⅲ　遺構と遺物 ……………………………………………………13
　　（１）第１遺構面 ……………………（遺構：大庭、遺物：小澤）13
　　（２）第２遺構面 ……………………（遺構：児玉、今井、遺物：小澤）15
　　（３）第３遺構面 ……………………（遺構：今井、遺物：小澤）45
　　（４）その他の遺構と遺物 …………（遺構：今井、遺物：小澤、坂元）55
　Ⅳ　おわりに …………………………………………………（今井）66
第４章　日詰遺跡の調査の記録 ………………………………（大庭）69
　Ⅰ　遺跡の概要 ……………………………………………………69
　Ⅱ　基本層序 ………………………………………………………69
　Ⅲ　遺構と遺物 ……………………………………………………73
　Ⅳ　おわりに ………………………………………………………110

図　版　目　次

大的遺跡

図版１（上）　浮羽バイパス建設予定地を望む（東から　手前は１次調査区　空中写真）
　　　（下）　大的遺跡１次調査区第２遺構面全景（上が北　空中写真）
図版２（上）　６号溝土層断面（北から）
　　　（中）　２号竪穴住居跡（南東から）
　　　（下）　２号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版３（上）　２号竪穴住居跡カマド（南東から）
　　　（中）　２号竪穴住居跡カマド完掘状況（南東から）
　　　（下）　２号竪穴住居跡カマド土層（南東から）
図版４（上）　２号竪穴住居跡カマド土層（南西から）
　　　（中）　２号竪穴住居跡壁際土坑（南西から）
　　　（下）　２号竪穴住居跡壁際土坑１（南東から）

図版５（上）　2号竪穴住居跡壁際土坑２（南東から）
（中）　2号竪穴住居跡土器出土状況（西から）
（下）　3号竪穴住居跡（西から）
図版６（上）　3号竪穴住居跡屋内土坑（北から）
（中）　3号竪穴住居跡小石集積状態（東から）
（下）　3号竪穴住居跡壁小溝（南から）
図版７（上）　3号竪穴住居跡壁小溝土層断面（北西から）
（中）　3号竪穴住居跡壁小溝土層断面（北から）
（下）　3号竪穴住居跡壁小溝土層断面（北から）
図版８（上）　4号竪穴住居跡（南から）
（中）　4号竪穴住居跡完掘状況（南から）
（下）　4号竪穴住居跡屋内土坑（北から）
図版９（上）　6号竪穴住居跡（北東から）
（中）　6号竪穴住居跡完掘状況（南東から）
（下）　6号竪穴住居跡屋内土坑（北西から）
図版10（上）　7号竪穴住居跡（北西から）
（中）　7号竪穴住居跡屋内土坑１（南から）
（下）　7号竪穴住居跡屋内土坑２（北から）
図版11（上）　7号竪穴住居跡小ピット、区画小溝（北西から）
（中）　7号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
（下）　7号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
図版12（上）　4号土坑（北から）
（中）　4号土坑土器出土状況（南東から）
（下）　4号土坑土器出土状況（南から）
図版13（上）　4号土坑土器出土状況（南東から）
（中）　5・6号土坑（南から）
（下）　8号溝土器出土状況（西から）
図版14（上）　浮羽バイパス建設予定地を望む（西から　空中写真）
（下）　1次調査区第3遺構面全景（上が北　空中写真）
図版15（上）　1号竪穴住居跡（南から）
（中）　1号竪穴住居跡完掘状況、8・13号竪穴住居跡（上が北　空中写真）
（下）　5号竪穴住居跡（上が北　空中写真）
図版16（上）　5号竪穴住居跡弥生土器出土状況（南から）
（中）　7号土坑（北から）
（下）　9号土坑（北から）
図版17　6号溝、2・3号住居跡出土土器
図版18　3号住居跡出土土器
図版19　3・4・6号住居跡出土土器

図版20　　６・７号住居跡出土土器
図版21　　７号住居跡、４号土坑出土土器
図版22　　４号土坑、８号溝、５・９・14・18号住居跡、ピット出土土器
図版23　　西側谷部、包含層出土土器、調査風景
図版24　　出土土製品、鉄製品
図版25　　出土石製品①
図版26　　出土石製品②

日詰遺跡

図版１（上）　１区第２遺構面空中写真（西から）
（下）　１区第２遺構面空中写真（東から）
図版２（上）　１区第２遺構面空中写真（上から、上が北）
（中）　１区第１遺構面全景（東から）
（下）　１区住居跡集中区中央（北から）
図版３（上）　調査区東壁中央土層（西から）
（中）　調査区東壁南端土層（西から）
（下）　調査区西壁北端土層（東から）
図版４（上）　１号竪穴住居跡（南から）
（中）　１号竪穴住居跡カマド（南から）
（下）　２号竪穴住居跡（東から）
図版５（上）　２号竪穴住居跡カマド（東から）
（中）　３号竪穴住居跡（西から）
（下）　３号竪穴住居跡カマド（西から）
図版６（上）　４号竪穴住居跡（南から）
（中）　４号竪穴住居跡カマド（南から）
（下）　５号竪穴住居跡（南から）
図版７（上）　５号竪穴住居跡カマド（南から）
（中）　６号竪穴住居跡（東から）
（下）　７号竪穴住居跡（南から）
図版８（上）　８号竪穴住居跡（北から）
（中）　９号竪穴住居跡（南から）
（下）　９号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）
図版９（上）　９号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）
（中）　10・11号竪穴住居跡（南から）
（下）　10号竪穴住居跡カマド（南から）
図版10（上）　11号竪穴住居跡カマド（南から）
（中）　12号竪穴住居跡（上から、上が東）
（下）　12号竪穴住居跡カマド（南から）

図版11（上）　12号竪穴住居跡カマド断面（南西から）
（中）　１号掘立柱建物跡（北から）
（下）　１号掘立柱建物跡（上から、上が北）
図版12（上）　１号土坑（北から）
（中）　７号土坑（北東から）
（下）　８号土坑（南から）
図版13（上）　７号溝断面（南東から）
（中）　９号溝断面（南東から）
（下）　10号溝断面（北東から）
図版14（上）　11号溝東端断面（西から）
（中）　11号溝北端断面（南から）
（下）　道路状遺構（上から、上が北）
図版15（上）　道路状遺構検出状況（北西から）
（中）　道路状遺構完掘状況（北西から）
（下）　P24土器出土状況（北西から）
図版16　１・２・９・12号竪穴住居跡・３号土坑出土土器
図版17　４・７・８号土坑、１・２・７・９号溝出土土器
図版18　ピット、第１・２遺構面・包含層出土土器①
図版19　第２遺構面・包含層出土土器②、調査風景、弥生時代前期甕
図版20　出土土錘・石製品・金属器

挿　図　目　次

第１図　大的遺跡・日詰遺跡周辺遺跡図 ……………… 4
第２図　大的遺跡・日詰遺跡の位置 ……………… 6
第３図　大的遺跡・日詰遺跡周辺地形図 ……………… 10

大的遺跡

第１図　西側谷部土層図 ……………… 11
第２図　第１遺構面遺構配置図 ……………… 12
第３図　１号土坑実測図 ……………… 13
第４図　２・３号土坑実測図 ……………… 13
第５図　６号溝土層断面実測図 ……………… 14
第６図　６号溝出土土器実測図 ……………… 15
第７図　第２遺構面遺構配置図 ……………… 16
第８図　２号竪穴住居跡実測図 ……………… 17
第９図　２号竪穴住居跡カマド実測図 ……………… 18

第10図　２号竪穴住居跡出土土器実測図 ……19
第11図　３号竪穴住居跡実測図 ……21
第12図　３号竪穴住居跡出土土器実測図① ……23
第13図　３号竪穴住居跡出土土器実測図② ……25
第14図　３号竪穴住居跡出土土器実測図③ ……26
第15図　４号竪穴住居跡実測図 ……27
第16図　４号竪穴住居跡出土土器実測図 ……28
第17図　６号竪穴住居跡実測図 ……30
第18図　６号竪穴住居跡出土土器実測図① ……31
第19図　６号竪穴住居跡出土土器実測図② ……32
第20図　７号竪穴住居跡実測図 ……33
第21図　７号竪穴住居跡出土土器実測図① ……35
第22図　７号竪穴住居跡出土土器実測図② ……36
第23図　掘立柱建物跡実測図 ……37
第24図　４号土坑実測図 ……38
第25図　４号土坑出土土器実測図① ……40
第26図　４号土坑出土土器実測図② ……41
第27図　４号土坑出土土器実測図③ ……42
第28図　５・６号土坑実測図 ……43
第29図　８・16・18号土坑出土土器実測図 ……44
第30図　第３遺構面遺構配置図 ……46
第31図　１・８号竪穴住居跡実測図 ……47
第32図　１号竪穴住居跡出土土器実測図 ……48
第33図　５号竪穴住居跡実測図 ……49
第34図　５号竪穴住居跡出土土器実測図 ……50
第35図　９～11号竪穴住居跡実測図 ……51
第36図　９・11号竪穴住居跡出土土器実測図 ……52
第37図　12・13号竪穴住居跡実測図 ……52
第38図　14号竪穴住居跡実測図 ……53
第39図　18号竪穴住居跡実測図 ……54
第40図　14・18号竪穴住居跡出土土器実測図 ……55
第41図　８号土坑出土土器実測図 ……55
第42図　７～12号土坑実測図 ……56
第43図　ピット出土土器実測図 ……57
第44図　東側谷部・西側谷部出土土器実測図 ……58
第45図　包含層出土土器実測図① ……60
第46図　包含層出土土器実測図② ……61
第47図　出土土製品実測図 ……62

第48図　出土石製品実測図 ……63
第49図　出土鉄製品実測図 ……64

日詰遺跡

第１図　１区西・東壁土層実測図 ……70
第２図　１区第１遺構面遺構配置図 ……71
第３図　１区第２遺構面遺構配置図 ……72
第４図　１・４・８号竪穴住居跡実測図 ……74
第５図　１号竪穴住居跡カマド実測図 ……75
第６図　１・２号竪穴住居跡出土土器実測図 ……76
第７図　２・９号竪穴住居跡実測図 ……77
第８図　２号竪穴住居跡カマド実測図 ……77
第９図　３号竪穴住居跡実測図 ……78
第10図　３号竪穴住居跡カマド実測図 ……78
第11図　３～６号竪穴住居跡出土土器実測図 ……79
第12図　４号竪穴住居跡カマド実測図 ……79
第13図　５号竪穴住居跡実測図 ……80
第14図　５号竪穴住居跡カマド実測図 ……81
第15図　６・７号竪穴住居跡実測図 ……81
第16図　９号竪穴住居跡カマド実測図 ……82
第17図　９・10号竪穴住居跡出土土器実測図 ……82
第18図　10号竪穴住居跡・カマド実測図 ……83
第19図　11号竪穴住居跡・カマド実測図 ……84
第20図　12号竪穴住居跡カマド実測図 ……85
第21図　12号竪穴住居跡実測図 ……85
第22図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 ……86
第23図　１号掘立柱建物跡実測図 ……87
第24図　１号掘立柱建物跡出土土器実測図 ……88
第25図　１～３号土坑実測図 ……89
第26図　１・３号土坑出土土器実測図 ……90
第27図　４～６号土坑実測図 ……91
第28図　４号土坑出土土器実測図 ……92
第29図　７号土坑実測図 ……93
第30図　７・８号土坑出土土器実測図 ……93
第31図　８号土坑実測図 ……94
第32図　道路状遺構実測図 ……94
第33図　道路状遺構ピット個別実測図 ……95
第34図　１・２・５～７・９号溝出土土器実測図 ……96

第35図　7号溝実測図 ……97
第36図　7号溝断面実測図 ……98
第37図　9～11号溝実測図 ……99
第38図　9～11号溝断面実測図 ……100
第39図　11号溝断面実測図 ……101
第40図　ピット出土土器実測図 ……102
第41図　第1遺構面・包含層出土土器実測図① ……103
第42図　第1遺構面・包含層出土土器実測図② ……104
第43図　第2遺構面・包含層出土土器実測図 ……105
第44図　出土土錘実測図 ……106
第45図　出土石製品実測図 ……107
第46図　金属器・ガラス実測図 ……108
第47図　1区時期別遺構配置図 ……111

表目次

第1表　浮羽バイパス各調査地点一覧 ……3
第2表　大的遺跡出土　土製品・石製品・鉄製品一覧表 ……65
第3表　日詰遺跡出土　土製品・石製品・金属器・ガラス一覧表 ……109

第1章　はじめに

Ⅰ　調査の経過

一般国道210号は福岡県久留米市を起点に大分県日田市を経由して大分市に至る道路で、豊後街道として古くからこの地域の幹線道路であった。浮羽バイパスは、この国道210号の交通混雑の緩和と地域産業の発展を目的として、昭和48（1973）年度に事業化され、昭和52（1977）年度から用地買収に着手している。田主丸町豊城から浮羽町山北に至る総延長約14.0km、幅員16～25mの第1級道路である。現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定的に対面2車線で共用が開始されている。

この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年2月3日付で建設省九州地方建設局（現　国土交通省九州地方整備局）福岡国道工事事務所（以下、福岡工事事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現　総務部文化財保護課　以下、県教委）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼があった。これに基づき、浮羽町所在塚堂遺跡群の発掘調査を昭和54（1961）年度から57年度までの4ヵ年にわたって実施した。その後、昭和61（1986）年4月2日付で福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の調査について」との調査依頼があり、県教委は塚堂遺跡をのぞく16地点で発掘調査が必要と回答した。この16地点について、随時協議しながら現在まで発掘調査を実施している。

本書で報告する日詰、大的の両遺跡は15地点に当たる。大的遺跡の南側に隣接する田主丸中学校に大型車の侵入路がないことから、地元の強い要望があり建設が急がれた。そのため平成12（2000）年2月16日～24日に試掘調査を実施し、遺構の存在を確認した。よって、日詰・大的合わせて約2,600㎡を対象に、平成12年5月8日より本調査に着手した。7月12日まで大的遺跡の第1遺構面の調査を行い、第2遺構面を検出するまでの間、日詰遺跡の調査を行った。11月6日より大的遺跡第2遺構面の調査を開始し、12月25日に終了した。第3遺構面の調査は、湧水が激しいことから稲刈り後に着手することとし、平成13（2001）年11月21日からの開始となった。平成14（2002）年3月8日にすべての調査を終了した。

Ⅱ　調査の組織

発掘調査および報告書作成の関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡工事事務所

（現　国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所）

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]
所長	森　将彦	森　昌文	森　昌文
副所長	兼武征二郎	有働　伸幸	小串　正志
	田中　義高	田中　義高	百田　国広
建設専門官			池田　正
建設監督官	有家　信義	浅井　博海	浅井　博海
調査第二課長	赤星　文生	久野　隆博	久野　隆博
			上村　一明

調査第二係長	大榎　謙	大榎　謙	大榎　謙
			長友　浩信
専門調査員			島川　浩一
建設技官	松山ひろみ	佐藤　博信	佐藤　博信
工務課長	後藤　昌隆	末岡　彰	末岡　彰
工務第一係長	古木　英昭	山口　隆	山口　隆
			竹永　浩
工務第三係長	川内　学	川内　学	川内　学
技術審査係長			森山　安夫

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	［平成12年度］	［平成13年度］	［平成14年度］
総括			
教育長	光安　常喜	光安　常喜	森山　良一
教育次長	榊原　英夫	森山　良一	三瓶　寧夫
総務部長	岩本　誠	三瓶　寧夫	松本　通憲
文化財保護課長	柳田　康雄	井上　裕弘	井上　裕弘
参事	井上　裕弘		
参事兼課長補佐		平野　義峰	久芳　昭文
参事兼課長技術補佐	橋口　達也	橋口　達也	橋口　達也
			川述　昭人
課長補佐兼管理係長	平野　義峰		
参事補佐兼管理係長			古賀　敏生
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事補佐兼調査第二係長	児玉　真一	児玉　真一	児玉　真一
庶務			
管理係長		三笠ひとみ	
事務主査	吉武　祐二		
主任主事		秦　俊二	秦　俊二
調査・報告			
主任技師	今井　涼子	今井　涼子	今井　涼子
技師	大庭　孝夫		大庭　孝夫

発掘調査中には、田主丸町教育委員会の丸林禎彦氏、江島信彦氏に大変お世話になった。また、田主丸中学校の皆さん、近隣の住民の方々には調査の経過を温かく見守っていただいた。記して感謝いたします。

第1表　浮羽バイパス調査地点一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積(㎡)	発掘調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮　羽	9．日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉　井	7．塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54~57・59~61	S57～59・62	11～5集
3	吉　井	7．能楽	—	5,100	試掘のみ	H6	—	—
4	吉　井	6・7．三牟田	堂畑	8,400		H8・9・12～	H13～	17集
5	吉　井	6．新治	仁右衛門畑	8,400	3,000	H7～9	H11・12	12・14集
6	吉　井	6．稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9	9集
7	吉　井	6．稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9	9集
8	吉　井	6．清宗	—	2,400	試掘のみ	H1	—	—
9A	吉　井	5・6．上菅A	堺町・大碇	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉　井	5・6．上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5．船越A	船越高原	25,000		H8～12	H11～13	13・15・16集
11	田主丸	5．船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6～9	H10	11集
12	田主丸	5．殖木		19,200				
13	田主丸	5．常盤	松門寺A	15,000		H11～	H13～	18集
14	田主丸	5．野田A′		14,800				
15	田主丸	5．野田B	大的・日詰	10,800		H12～14	H14～	本書
16	田主丸	5．野田C		13,500		H14～		
17	浮　羽	7．朝日	—	2,400	試掘のみ		—	—
18	浮　羽			28,400				
19	浮　羽			16,600				

1. **日詰遺跡**
2. **大的遺跡**
3. 西郷天神面遺跡
4. 水分遺跡
5. 松門寺A遺跡
6. 秋成亀王遺跡
7. 船越一ノ上遺跡
8. 船越宮ノ前遺跡
9. 船越高原遺跡
10. 殖木A遺跡
11. 殖木B遺跡
12. 寺徳古墳[16]
13. 益生田井尻遺跡[17]
14. 中原狐塚古墳
15. 中原森山古墳群
16. 西館古墳[18]
17. 麦生古墳群
18. 益永古墳群[19]
19. 益生田古墳群A群[20]
20. 益生田古墳群B群
21. 益生田古墳群C群
22. 益生田古墳群D群
23. 田主丸大塚古墳[21]
24. 大塚古墳群
25. 大塚清長橋古墳群
26. 石垣城ヶ谷古墳群
27. 平原古墳群
28. 森部古墳群

第1図　大的遺跡・日詰遺跡周辺遺跡図（1/30,000）

第２章　位置と環境

Ⅰ　地理的環境

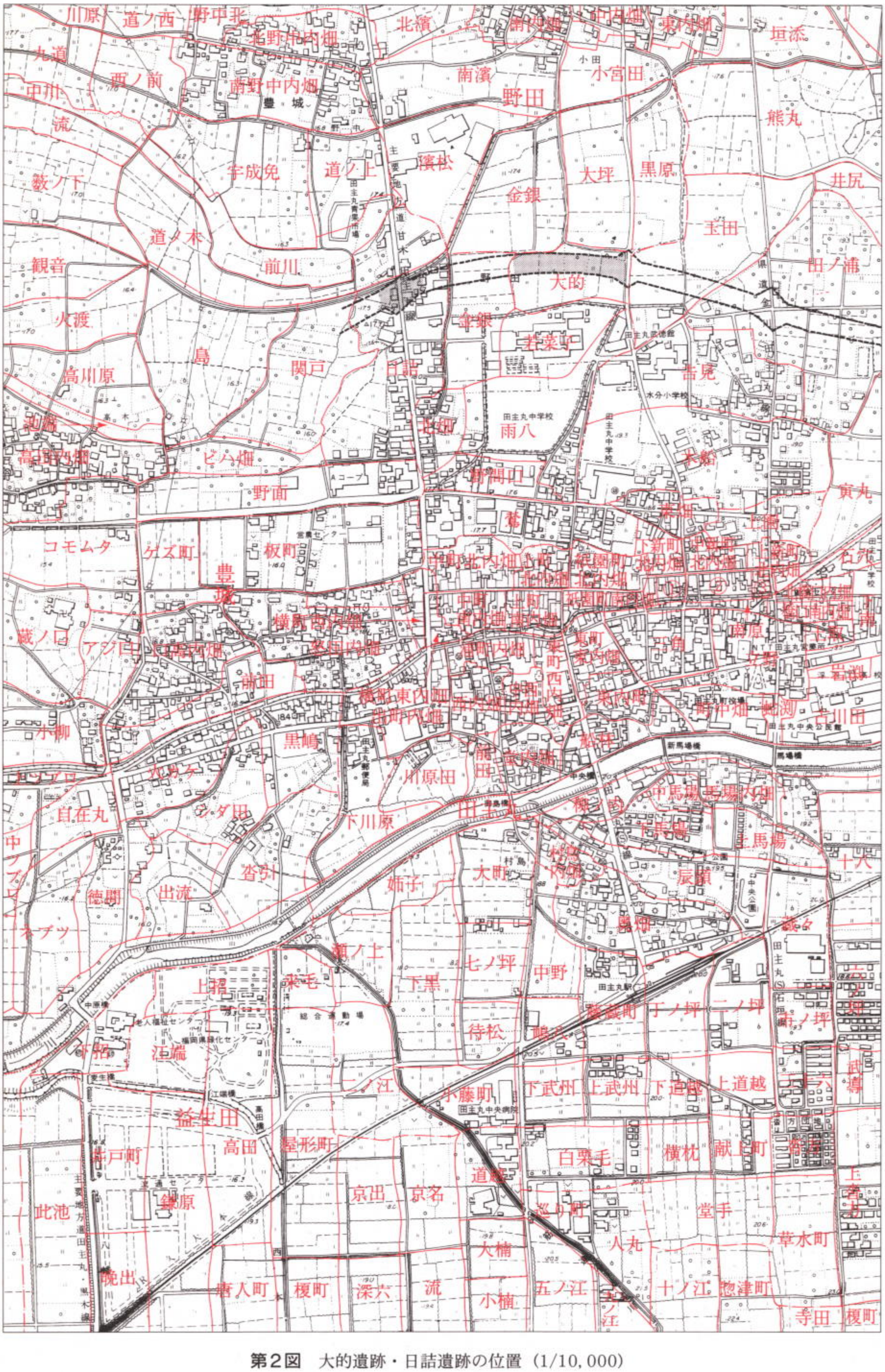
大的遺跡と日詰遺跡は福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸に所在する。これら二つの遺跡は筑後川南岸に広がる低地帯中に隣接して立地しているが、双方の遺跡が乗る微高地の間には浅い谷地形が存在し、両遺跡を区切っている。従って、それぞれが主に所在する小字名を遺跡名として冠することとした。

田主丸町は、九州一の大河である筑後川の中流部に形成された広範な平野である筑紫平野の一角に所在する。筑後川は大分県の日田盆地を源流域として西流し、数多くの支流を飲み込んで流量を増しながら有明海へと注いでいる。

流域にはこれら支流と筑後川本流によって形成された平野群が存在するが、これらは大きく上流域の日田盆地、中流域の筑紫平野、下流域の筑後・佐賀平野に分けることができる。大分県日田市を中心とし、大分・福岡県境の夜明渓谷までの上流域に形成される日田盆地から流れ出た筑後川は、北を古処山系、南を耳納山系という東西に連なる山塊群から流れ出る小・中河川と筑後川自身の解析・堆積作用により形成された広大な筑紫平野を形成しながら西へと流れ下る。この筑紫平野は、筑後川のもっとも大きな支流である宝満川の西側に南北にのびる鳥栖・小郡丘陵群によって区切られて巨大な三角形状を呈しており、筑後川はこの西側の有明海沿岸に展開する佐賀・筑後両平野の間を悠々と流れ下って有明海に注ぐ。

この東西に長い三角形状を呈する筑紫平野は、筑後川が南側の耳納山麓を流れるために、主に北側に広範な河岸段丘を数段にわたって形成する一方、南側には耳納山麓から発達した扇状地帯が迫り、北側と比べて支流が急流で低地帯も狭い。したがって、筑後川の氾濫原である低地帯や、扇状地端部の湧水ポイント付近といった生活に不適な場所が多く広がり、なおかつ用水の完備による氾濫原の開発が可能になる近世までは、水田経営に適した場所も豊富な湧水の見込める扇状地端部や河岸段丘直下といった狭い場所に限られており、北岸と比べて遺跡の分布は限られている(1)。しかしながら、それでもなお筑後川のすぐ南側に広がる氾濫原中の微高地やその南側の河岸段丘上、そして耳納山麓に展開する尾根状丘陵から扇状地帯中部にかけては、古くからの人々の生活の舞台となってきた。

大的・日詰遺跡はこれらのうちもっとも低地の、筑後川の氾濫原中の微高地上に立地する遺跡群である。ただし、そのすぐ南側には比高差２～５ｍほどの河岸段丘が東西に連なっており、両遺跡はこの河岸段丘から舌状につきだした尾根状微高地の先端部に存在するため、古くから比較的安定した土地であったと考えることもできる。実際、昭和28年の大水害の際には、筑後川からあふれ出した泥流が近辺を襲い、遺跡地の北側は水位が３ｍ以上にも達したというが、遺跡地近辺は腰の高さ程度の冠水であったと聞く。近世以来の集落はこの南側の河岸段丘上を中心として展開しているが、ここからも多くの弥生時代～古代の採集資料が発見されている。今後の発掘調査の進展による両者の関係の解明が待たれるところである。



第2図　大的遺跡・日詰遺跡の位置（1/10,000）

II　歴史的環境

以下では田主丸町内の遺跡群について、報告された資料を中心としながら概観する中で、今回報告の大的・日詰両遺跡を取り囲む歴史的環境の一端を述べることとする。ここでは主に、両遺跡群が営まれた弥生時代から古墳時代にかけての田主丸町周辺地域の歴史的環境について触れていくこととする。また、当該地域における古墳群の動向はこれまでの報告書に詳述されているため、ここでは集落資料に焦点を絞って触れていくこととしたい。

田主丸町における最も早い時期の資料として、殖木地区遺跡群で旧石器時代のものとされる石鏃が(2)、また山麓部で細石刃や剥片が採集されており、また縄文時代の資料としては千代久遺跡における土器棺墓等の資料が見られる(3)が、いずれも断片的な資料であり当時の生活を知る資料としては不十分である。

弥生時代に入るとこの状況は一変する。これまで弥生時代早期（刻目突帯文期）の資料は山麓部の断片的な採集資料が知られるのみであった(4)が、近年船越高原遺跡群からまとまった量の刻目突帯文土器が検出された(5)。残念ながら遺構に伴うものではなく、また時期的にも後続する資料がないためその位置づけはむずかしいが、初期農耕集団の西日本各地への入植の試みの一環として重要であろう。

さて、持続的な農耕集落の成立は、今回報告の両遺跡をのぞけば水分遺跡に求めることができよう。水分遺跡は今回報告の大的遺跡・日詰遺跡に南接する旧田主丸中学校校庭内から発見された集落である。校舎建て替えに伴うトレンチ調査によって、板付II式期（新段階）～城ノ越式期（弥生時代前期後半～中期初頭）の集落が確認された(6)。今回報告の大的遺跡とは、地形的にも一連の段丘上に立地しており、時期的にも近接することから、何らかの関係が予想されるが、大的遺跡の資料は亀ノ甲系の甕を伴っておらず、壺にもやや古い資料が見られることから、若干先行する可能性が高い。一方、日詰遺跡の資料とは時期的にも近いが、今回の調査により大的遺跡と日詰遺跡の間に浅い谷状地形が確認されていることから、日詰遺跡に集落が確認されるならば、両地点に近接した異なる集落単位が併存していたと考えることができよう。また、同時期の資料として、前述の船越高原遺跡群（前期末～中期前葉）、西郷天神面遺跡（前期末～中期初頭）(7)、豊城中ツブロ遺跡（前期末～中期初頭）(8)などが挙げられる。ただし、豊城中ツブロ遺跡から住居跡や土坑が確認されたほかは明確な遺構を伴うものはなく、持続的な集落経営を示す資料は少ない。

後続する中期前半から中葉にかけては、やや資料の充実が見られる。船越一ノ上遺跡からは中期初頭～中葉の住居跡や土坑、甕棺墓などがまとまって検出された(9)。また、西郷天神面遺跡からも中期中葉ころの甕棺墓が数基検出された。秋成亀王遺跡からも同時期の甕棺墓が検出されており(10)、今後の調査が待たれる。千代久遺跡では中期前半期の住居跡が検出された。

また、船越高原遺跡群からは中期中葉から末にかけての大規模な集落が検出された。船越宮ノ前遺跡からも中期後半の包含層資料がみつかっている(11)。とくに船越高原遺跡群の資料は充実しており、美津留川の対岸に位置する吉井町鷹取五反田遺跡(12)と並んでこの時期の中心的な集落であった可能性が高い。

このような中期の資料群の充実と比べて、弥生時代後期の資料は少ない。大的遺跡・日詰遺跡で見られるように後期中葉前後の包含層資料は点々と見られるものの、まとまった資料としては松門寺Ａ遺跡が挙げられるのみである(13)。なおかつ松門寺Ａ遺跡からは後期中葉～後半の資料が検出

されているが、土坑のほかは目立った遺構は検出されておらず、多くが包含層資料であり、この時期の集落の実体は未だ不明瞭といわざるを得ない。

後期の資料の欠如と後期中葉期のみの小規模集落の成立は、浮羽郡全域で共通する現象である。この時期は全国的に見てもしばしば「倭国大乱」と関連づけられるような集落動態の画期が指摘されてきており、筑紫平野でも平塚川添遺跡などで環濠集落が掘削されたり(14)、西ノ迫遺跡という高地性集落が営まれたり(15)といった特徴的な動態が認められる。今後の資料の蓄積によるこの時期の集落動態の明確化は、続く古墳時代への変化への道筋を解明するアプローチとして求められている。

古墳時代前期の資料は、田主丸町内においては前段階の弥生時代終末に引き続いてほとんど認められない。この地域では隣接する吉井町の塚堂遺跡群において弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての資料が見られる程度である(16)。これは当該地域における前期古墳の欠如とリンクしており、筑前地域との好対照をなしている。

前期後半の資料として、船越高原遺跡群の集落が挙げられる。住居跡９棟のほか土坑などが検出されており、比較的まとまった資料である。このほか、千代久遺跡からも同時期の集落が検出されており、殖木地区遺跡群でも前期後半～末の資料が断片的ではあるがみつかっている。

中期の資料としては、船越高原遺跡群で２棟の竪穴住居跡が検出されたほか、西郷天神面遺跡では住居跡が１棟、松門寺Ａ遺跡では中期前半の包含層がわずかではあるがみつかっている。古墳時代中期までの資料は以上のように断片的なものが多くその様相は定かではなかった。今回報告の大的遺跡では５世紀台の集落が検出されており、当該地域における貴重な調査例として注目される。

これに比べて古墳時代後期以降の資料は充実している。まず古墳時代後期であるが、代表的な遺跡として船越高原遺跡群が挙げられる。６世紀後半～７世紀初頭の大規模な集落として注目され、当該期の住居跡は60棟近くに達する。このほかにも豊城中ツブロ遺跡では７世紀台と考えられる住居跡が３棟検出されており、船越宮ノ前遺跡でも６世紀後半～７世紀初頭の住居跡群が検出されている。

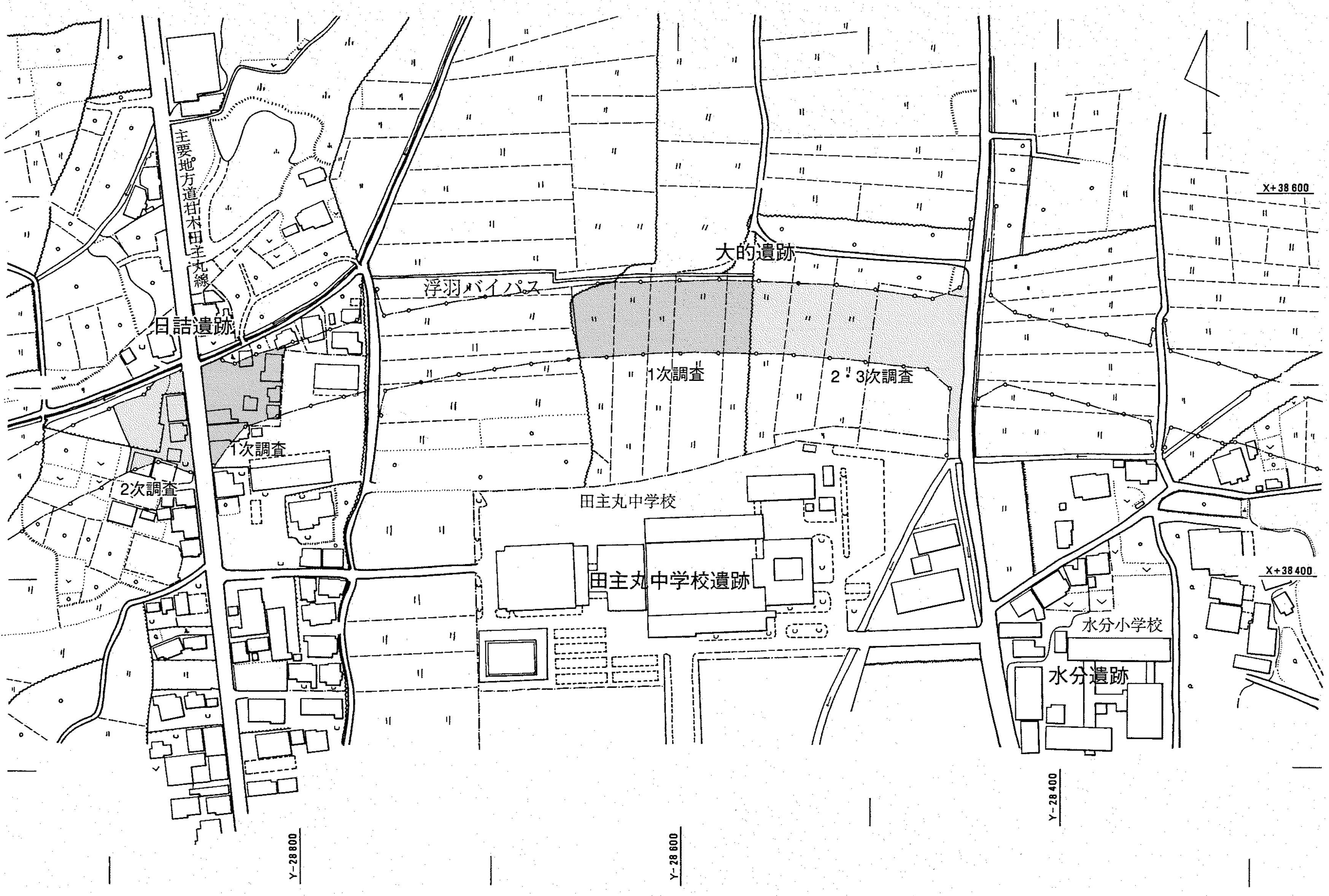
この後７世紀後半にかけて一時的な資料の空白が認められるが、７世紀末から８世紀初頭を前後する時期に、再びまとまった資料が出現する。船越高原遺跡群では、７世紀末～８世紀前半にかけて再び集落が営まれている。船越宮ノ前遺跡でも、ほぼ同時期に数棟の住居跡が営まれていることが確認された。松門寺Ａ遺跡でも、７世紀末～８世紀初頭の包含層資料が報告された。さらに、今回報告する日詰遺跡でも、６世紀後半と７世紀後半～８世紀初頭の集落が検出されており、この地域における特徴的な集落動態をよく示している。

このように、古墳時代前期から中期にかけての資料が貧弱である点、また５世紀台～６世紀前半、７世紀前半～後半に集落がほとんど認められなくなる点は、当該地域の古墳時代における特徴的な集落動態であろう。今後の重要な研究課題である。

註

（1）扇状地端部に遺跡の分布が薄い点については、湧水が容易に得られたために水田化が図りやすく、早くから水田が広がっていたために開発が遅れ、結果として遺跡の把握が進んでいない可能性も考えられる。今後の調査の進展を待つ必要があろう。

（2）丸林禎彦編1996『殖木地区遺跡群Ａ地点・Ｂ地点／鷹取一条遺跡』　田主丸町文化財調査報告書第５集　田主丸町教育委員会
（3）秀嶋龍男編1993『千代久遺跡Ⅰ』　田主丸町文化財調査報告書第３集　田主丸町教育委員会
秀嶋龍男編1994『千代久遺跡Ⅱ』　田主丸町文化財調査報告書第４集　田主丸町教育委員会
（4）片岡宏二1996「第３章　原始・古代－ムラの成立と古代国家－」２　農耕の始まりとその文化　田主丸町史編集委員会編『田主丸町史　第二巻』ムラとムラびと　上　田主丸町
（5）江島伸彦編2000『船越高原遺跡』　田主丸町文化財調査報告書第13集　田主丸町教育委員会
斎部麻矢編2000『船越高原Ａ遺跡Ⅰ』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第13集　福岡県教育委員会
進村真之編2001『船越高原Ａ遺跡Ⅱ』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第15集　福岡県教育委員会
進村真之編2002『船越高原Ａ遺跡Ⅲ』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第16集　福岡県教育委員会
（6）栗原和彦編1985『田主丸古墳群』　田主丸町文化財調査報告書第２集　田主丸町教育委員会
（7）丸林禎彦編2000『西郷天神面遺跡』　田主丸町文化財調査報告書第14集　田主丸町教育委員会
（8）丸林禎彦編1998『豊城中ツブロ遺跡』　田主丸町文化財調査報告書第10集　田主丸町教育委員会
（9）丸林禎彦編1996『船越一ノ上遺跡』　田主丸文化財調査報告書第８集　田主丸町教育委員会
（10）栗原和彦編1985『田主丸古墳群』　田主丸町文化財調査報告書第２集　田主丸町教育委員会
（11）江島伸彦編1997『船越宮ノ前遺跡Ⅰ』　田主丸町文化財調査報告書第９集　田主丸町教育委員会
（12）水ノ江和同編1999『鷹取五反田遺跡Ⅰ／稲崎Ａ・Ｂ遺跡』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第９集　福岡県教育委員会
水ノ江和同編1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集　福岡県教育委員会
（13）今井涼子編2002『松門寺Ａ遺跡』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第18集　福岡県教育委員会
（14）松尾宏編2001『平塚川添遺跡Ⅰ』　甘木市文化財調査報告書第53集　甘木市教育委員会
（15）中間研志1993「３　西ノ迫遺跡の調査」　佐々木隆彦・髙橋章・中間研志編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－25－』朝倉郡杷木町所在鞍掛・前田・西ノ迫遺跡の調査　福岡県教育委員会
（16）馬田弘稔編1983『塚堂遺跡Ⅰ』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第１集　福岡県教育委員会
副島邦弘編1984『塚堂遺跡Ⅱ　Ａ地区』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第２集　福岡県教育委員会
佐々木隆彦編1984『塚堂遺跡Ⅲ　Ｅ地区』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第３集　福岡県教育委員会
馬田弘稔編1984『塚堂遺跡Ⅳ　Ｄ地区』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集　福岡県教育委員会
馬田弘稔編1988『塚堂遺跡Ⅴ　Ｅ地区（１・３～６地点）』　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第５集　福岡県教育委員会



第3図　大的遺跡・日詰遺跡周辺地形図（1/3,000）

大的遺跡 I

第３章　大的遺跡の調査の記録

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は浮羽郡田主丸町大字田主丸55-1・2、56-1・2、57、58に所在する。

周辺は筑後川が形成した自然堤防と後背湿地が複雑に入り組んでおり、本遺跡は東西を浅い谷に挟まれた微高地上に位置する。標高は現地表で16.8mである。浅い谷を挟んだ東岸、西岸は自然堤防で、標高は東岸で約19m、西岸で18m弱を測り、本遺跡と１～２mの比高差がある。このため、試掘調査前には谷状の低湿地で遺構は存在しないだろうと予測していた。しかし試掘調査を行ってみると、湧水が激しいものの遺構の存在が確認でき、旧地形が複雑であること、居住域が低地にも広がっていることを改めて知ることとなった。

奈良時代、古墳時代の遺構を確認し、調査を実施したが、調査終了間際になって、弥生時代の遺構の存在が確認された。そのため、翌年度に弥生時代の遺構の調査を実施することとなった。古墳時代と弥生時代は、本来ほぼ同一面で遺構が確認できるのだが、年度が改まることもあり、第3遺構面として調査を行った。

検出した遺構は、第１遺構面が土坑３基、溝７条、第２遺構面が竪穴住居跡６軒、掘立柱建物１棟、土坑２基、溝12条、第３遺構面が竪穴住居跡８軒、土坑６基、溝１条である。

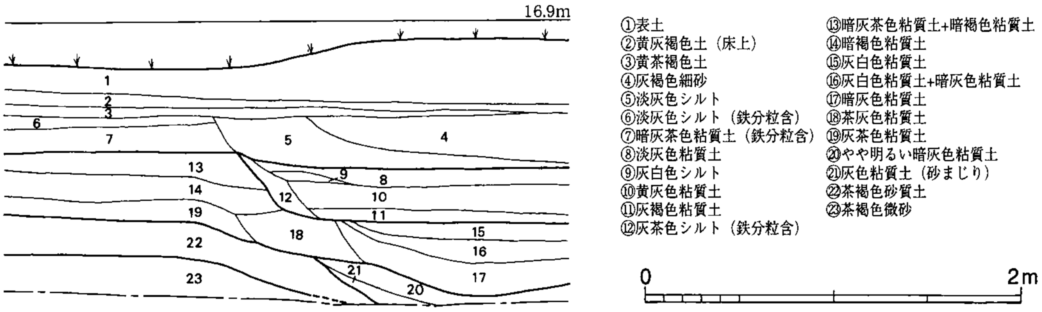
Ⅱ　基本層序

本遺跡は筑後川の堆積作用により形成されたため、砂質土と粘質土の堆積が基本の土壌である。茶褐色微砂、茶褐色砂質土、その上層に灰茶色粘質土、暗褐色粘質土、暗灰茶色粘質土と堆積し、現在の水田床土と耕作土に達する。　東西の浅い谷は、灰白色や灰褐色の粘質土、淡灰色シルト、灰色細砂などが堆積しており、東西で特に違いは認められない。

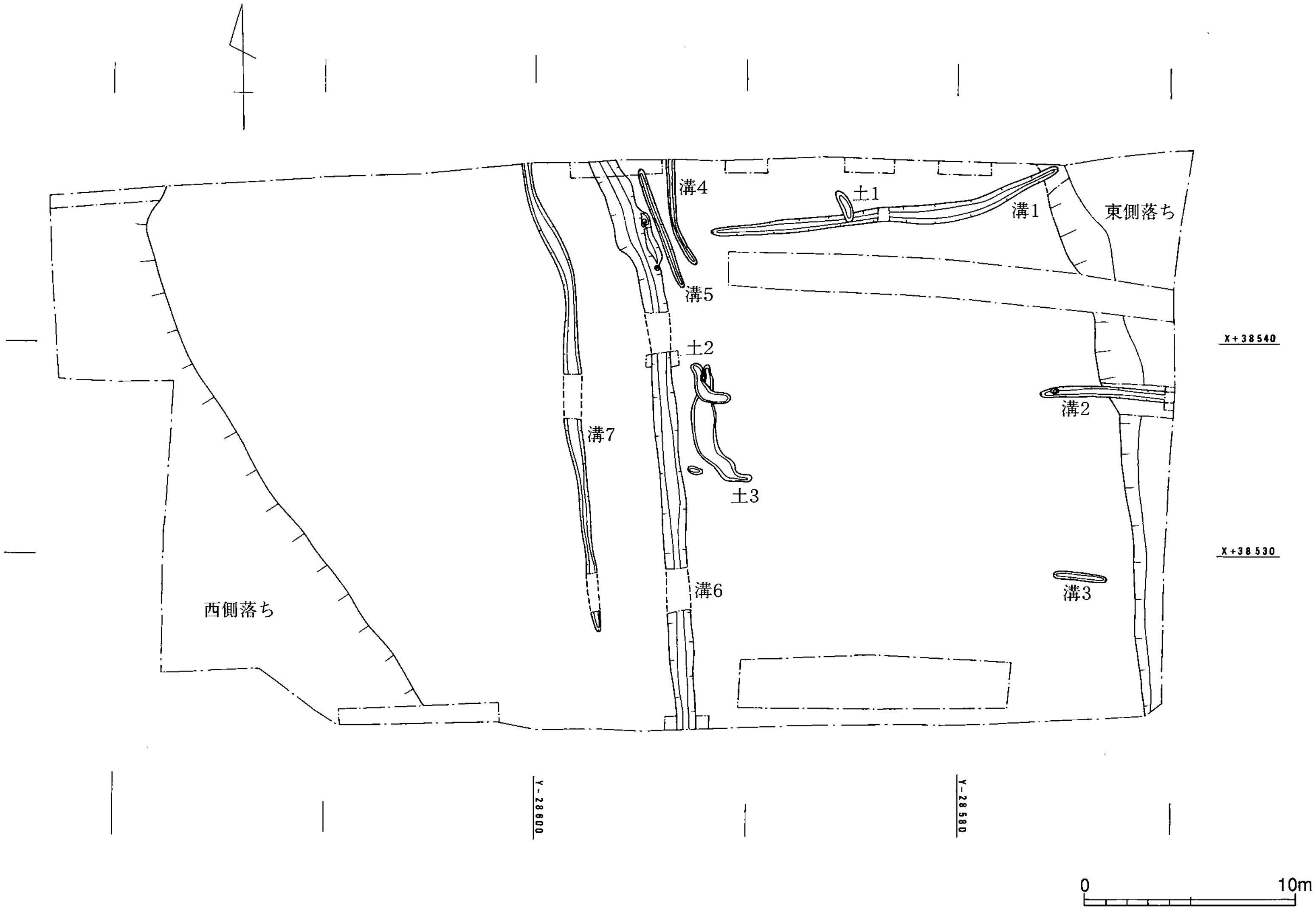
調査区南壁西端部付近、つまり西側谷部の落ち際で土層観察を行ったところ、8～11層と12層、17層と18層の境目は、鉄分が固着してガチガチになっている。一時期水が豊富にあったためであろうか。谷部の堆積土ならびに遺構面上の堆積土は粒状の鉄分を含むものが多い。また、７号住居跡は谷部の堆積層16層にきられる。

調査区東端は農道で区切られること、調査区内に含まれる谷部が狭いことから、谷部の堆積土層を確認するにとどまり、遺構面と谷部の関係を土層でつかむことはかなわなかった。

第１遺構面は暗灰茶色粘質土と暗褐色粘質土の混じった層の上面で、遺構埋土は暗灰茶色粘質土、第２遺構面は茶褐色砂質土層上面で、遺構埋土は暗褐色粘質土、第３遺構面も茶褐色砂質土層上面で、場所により茶褐色微砂上面である。遺構埋土は遺構面よりもやや暗い暗褐色砂質土である。



第１図　西側谷部土層図（1/40）

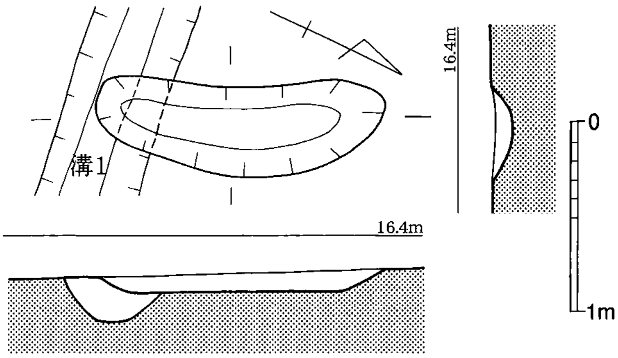


第2図　第1遺構面遺構配置図（1/300）

Ⅲ　遺構と遺物

（1）第1遺構面（第2図）

検出した遺構は土坑3基、溝7条、ピットである。6号溝以外の溝はいずれも深さが浅く、遺構の残りは非常に悪い。調査区中央の6号溝付近が最も標高が高く、中央から東西方向にゆるやかに傾斜する地形で、調査区東西端では谷状の落ちを形成する。遺構に伴う出土土器は少なく、落ち部分から土器が出土した。



第3図　1号土坑実測図（1/40）

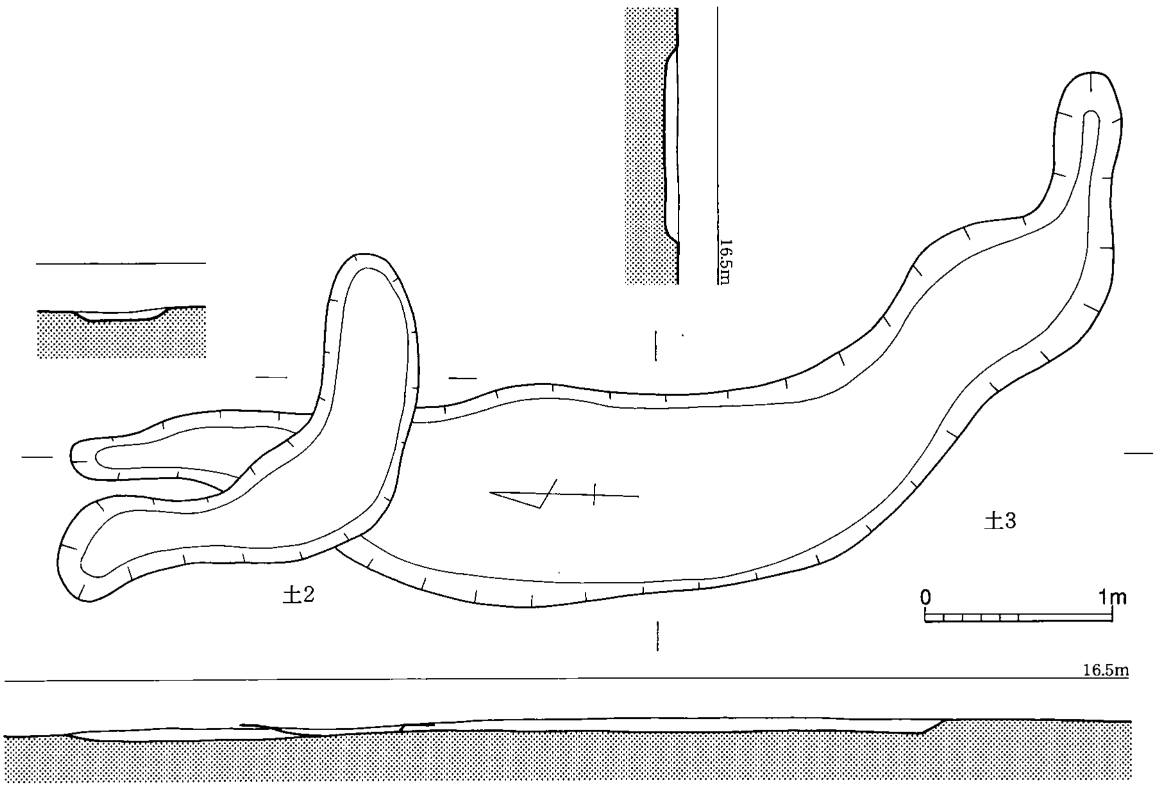
土坑

1号土坑（第3図）

調査区中央北側に位置し、1号溝を切る。長軸152㎝、短軸48㎝、深さ13㎝の東西に細長い楕円形を呈す。出土土器は小片のため図示できるものはない。

2号土坑（第4図）

調査区中央、6号溝のすぐ東に位置し、3号土坑を切る。西から北方向の細長い弧状を呈し、東西144㎝、南北172㎝、深さ8㎝を測る。遺物は出土していない。



第4図　2・3号土坑実測図（1/40）

3号土坑（第4図）

調査区中央に位置し、2号土坑に切られる。長軸450cm、短軸106cm、深さ7cmの先端部が次第に細くなる、南北に細長い土坑である。遺物は出土していない。

溝

1号溝（第2図）

調査区北側に位置し、東西方向にのびる溝である。長さは16.6m、幅は西側0.6m、中央0.9m、東側0.4m、深さは西側28cm、中央24cm、東側11cmを測る。出土土器は小片のため図示し得ない。ほかに土錘（第47図3）が出土している。

2号溝（第2図）

調査区東端中央に位置する東西方向の溝で、東端は調査区外までのびる。長さは5.8m以上、幅は中央0.5m、調査区壁際で0.5m、深さは中央14cm、壁際で14cmを測る。溝西側はピットに切られる。出土土器は小片のため図示し得ない。

3号溝（第2図）

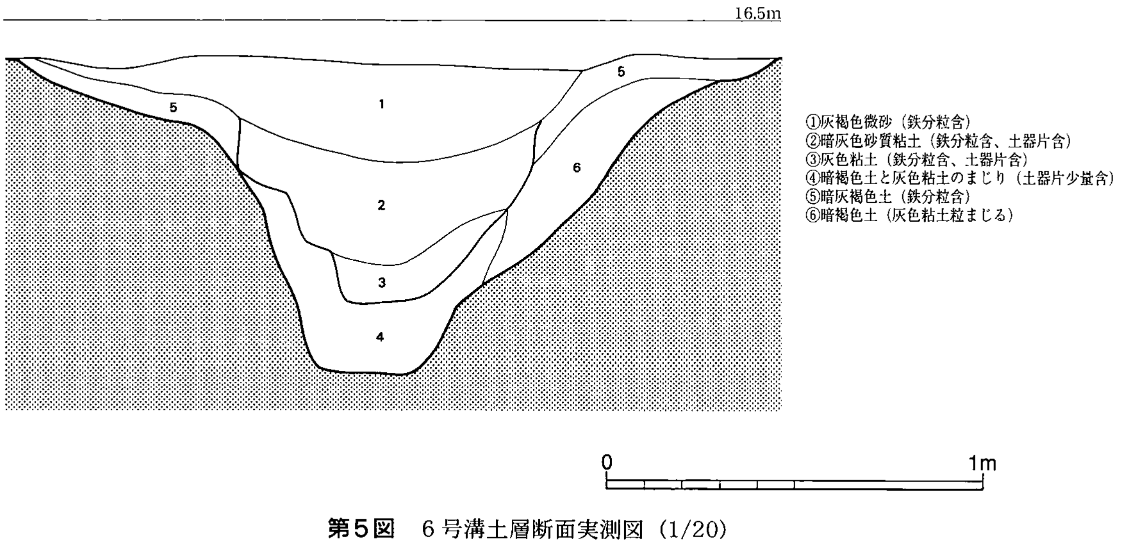
調査区東南に位置する東西方向の小溝である。長さは2.5m、幅は0.3m、深さは10cmを測る。遺物は出土していない。

4号溝（第2図）

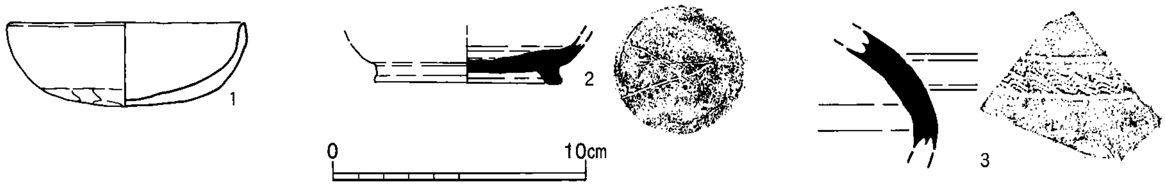
調査区中央北側、南北方向にのびる小溝で、北端は調査区外までのびる。5～7号溝と並列する。長さ4.9m以上、溝中央で幅0.3m、深さ4cmを測る。遺物は出土していない。

5号溝（第2図）

調査区中央北側、南北方向にのびる小溝で、4・6・7号溝と並列する。長さ5.9m、溝中央で幅0.3m、深さ6cmを測る。遺物は出土していない。



第5図　6号溝土層断面実測図（1/20）



第6図　6号溝出土土器実測図（1/3）

6号溝（図版2、第5図）

調査区中央を南北方向に流れる溝で、南北両端は調査区外までのびる。4・5・7号溝と並列する。長さは26.9m以上、幅は北側1.4m、中央1.1m、南側1.0m、深さは北側0.6m、中央0.7m、南側0.8mを測る。溝の立ち上がりは、西側が東側に比べてやや緩やかに傾斜する。溝は一度埋没した後、再び2・3層部分を掘削し、規模は小さくなるものの、溝として利用していることが調査区南端の土層から確認できた。土器のほかに土錘（第図5）が出土している。

出土土器（図版17、第6図）

土師器（1）　1は杯である。径が小さく、胴の屈曲が大きいため、口縁がやや直立気味となる。内外面ともに丁寧な横ナデを施し、底部はヘラナデ仕上げ。

須恵器（2・3）　2は高台付きの杯である。高台はヘラ削り後に高台部のみナデを施し、ヘラ記号を入れる。3は䱍の肩部である。平行する沈線の間に波状文をめぐらせる。

7号溝（第2図）

7号溝は調査区中央を南北方向に流れる小溝で、北側は調査区外までのびる。4～6号溝と並列する。長さは22.1m、幅は北側0.4m、中央0.8m、南側0.5m、深さは北側7㎝、中央2㎝、南側3㎝の浅い溝である。遺物は出土していない。

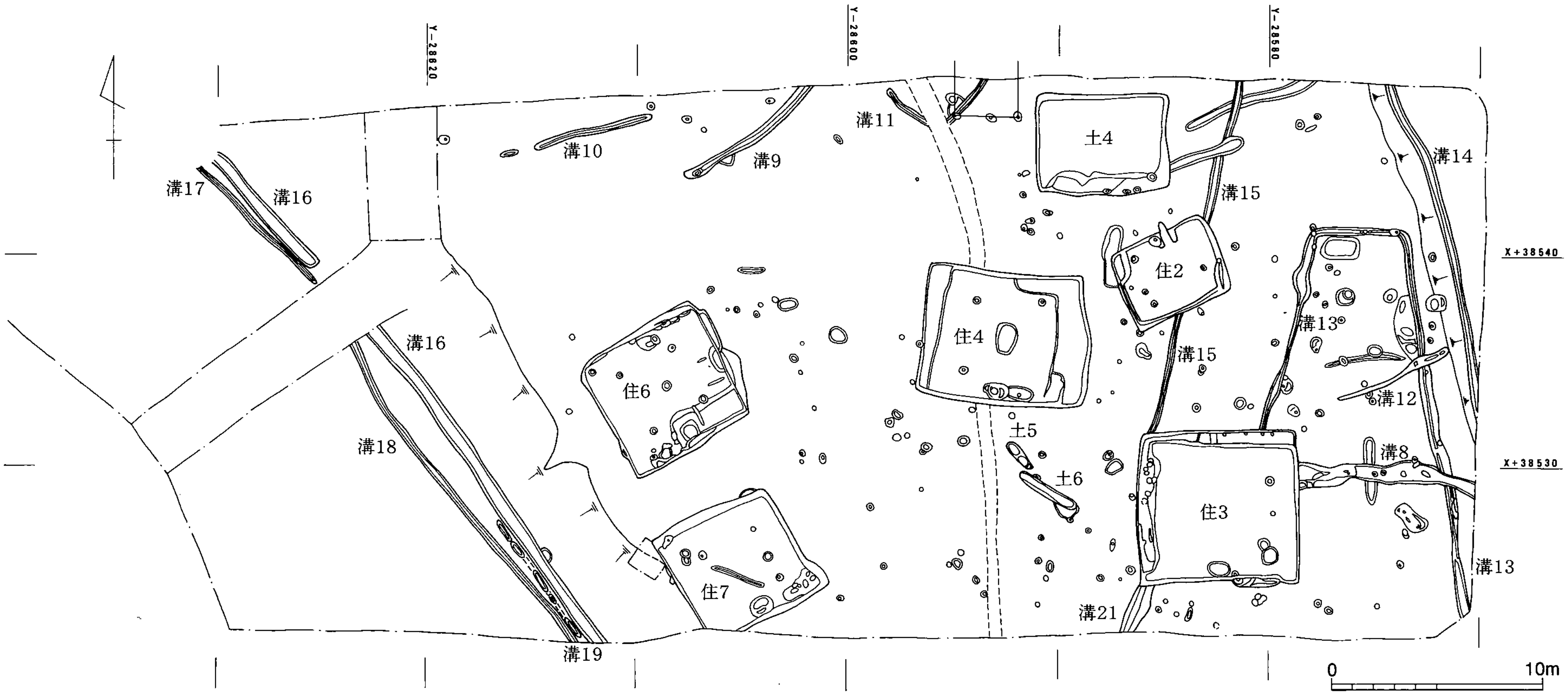
（2）第2遺構面（図版1、第7図）

竪穴住居跡6軒、土坑2基、溝12条を検出した。調査区東壁から10mほどの間には、遺構埋土と同様の暗褐色粘質土が30㎝ほど堆積しており、遺構の検出は困難であった。8・12・13号溝はこの暗褐色粘質土除去後に検出した。また、14・16～19号溝は第3遺構面調査時に東西谷部の落ち際で検出したが、遺構埋土の状況から第2遺構面の遺構と判断した。

竪穴住居跡

6軒の竪穴住居跡（建て替えを含む）を検出した。総じて遺存状況は良好で、床面には板材や棒杭を打ち込んだ跡や集石遺構が存在する例もある。平面的に見て3・4号住居跡は主軸をほぼ同じくし、四壁はほぼ東西・南北のラインに乗っている。2・6・7号住居跡も互いに主軸を同じくするが、前2軒と比べて主軸は西にぶれる。両グループには竪穴部の床面積に大きな違いが見られ、3・4号住居跡は40㎡ほどであるのに対し、2・6・7号住居跡は20～30㎡程度と狭い。屋内土坑は、カマドが付設された2号住居跡には存しないが、ほかの5軒の住居跡では南壁のほぼ中央に設置されている。この5軒を見る限り、カマドが出現した時点で屋内土坑が消滅している。

この集落では、主柱穴の検出及び確認がきわめて困難である。通常の地山が存在せず、筑後川の氾濫原に成立した遺跡であるため、検出遺構面が砂地である場合は床面の遺構を確認できない場合が多かった。砂地に立地する遺跡の調査の宿命かもしれない。



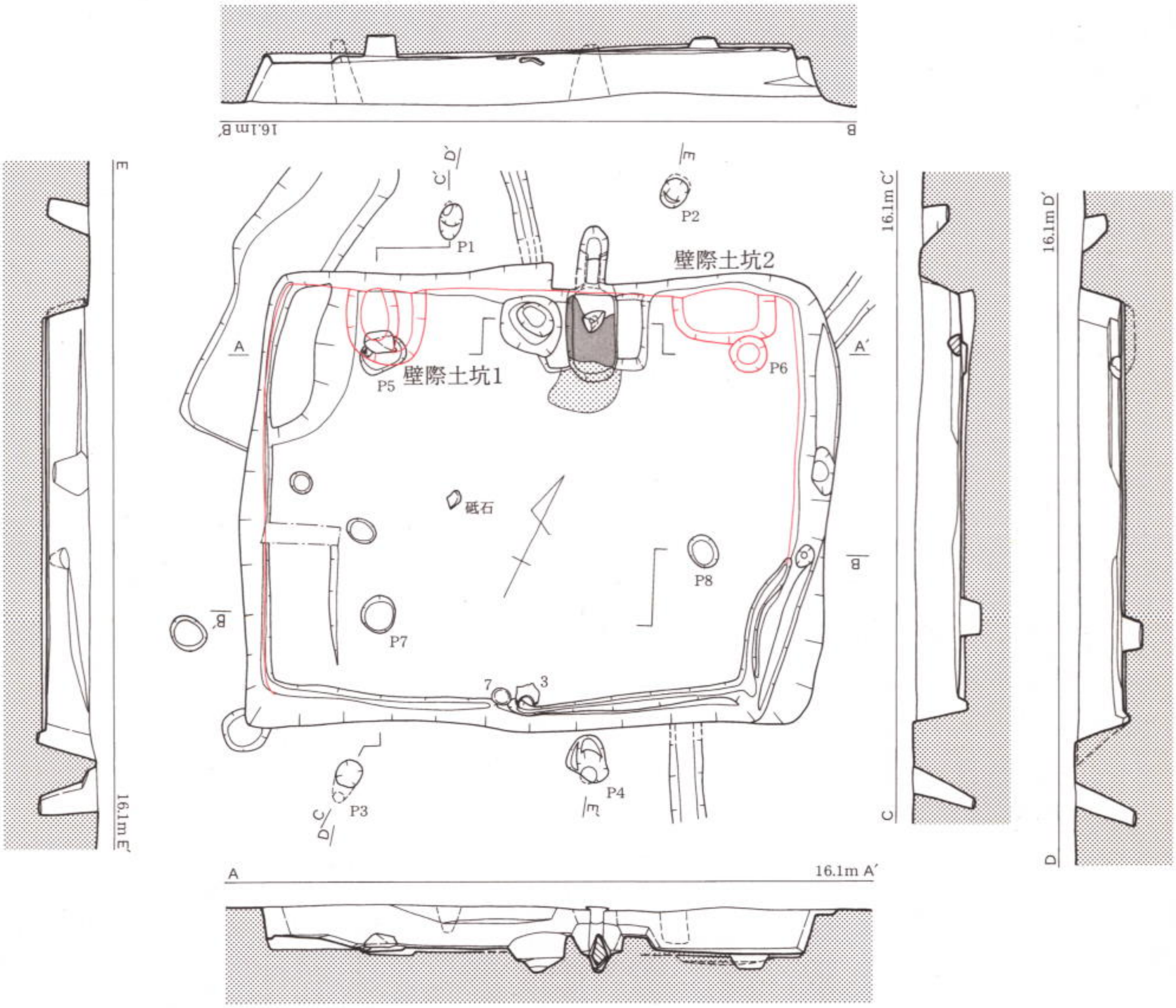
第7図　第2遺構面遺構配置図（1/300）

検出した竪穴住居跡は6軒と少ないが、この遺跡でカマドが出現する頃の集落跡として興味深いものである。

遺構検出当初は4号土坑を竪穴住居跡と考えており、1号竪穴住居跡とし、調査中に土坑であることが判明した。また、6号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡の間に竪穴住居跡と思われる黒褐色土の堆積があり5号竪穴住居跡としていたが、上層の土の取り残しで遺構ではなかった。これらのことが判明した時には既に他の住居跡の土器の取り上げを行っており、混乱を避けるため番号の付け直しは行わなかった。

2号竪穴住居跡（図版2～4、第8図）

調査区の東半部に検出した竪穴住居跡で、北に4号土坑、西に4号住居跡が接近して存在する。プランは東西に長い隅円長方形を呈し、主軸は真北から27°西に振れる。竪穴部の規模は上端で、北・南壁ともにほぼ4.5m、東・西壁それぞれ3.8m・3.9m、壁高は45cm前後である。北壁の中央



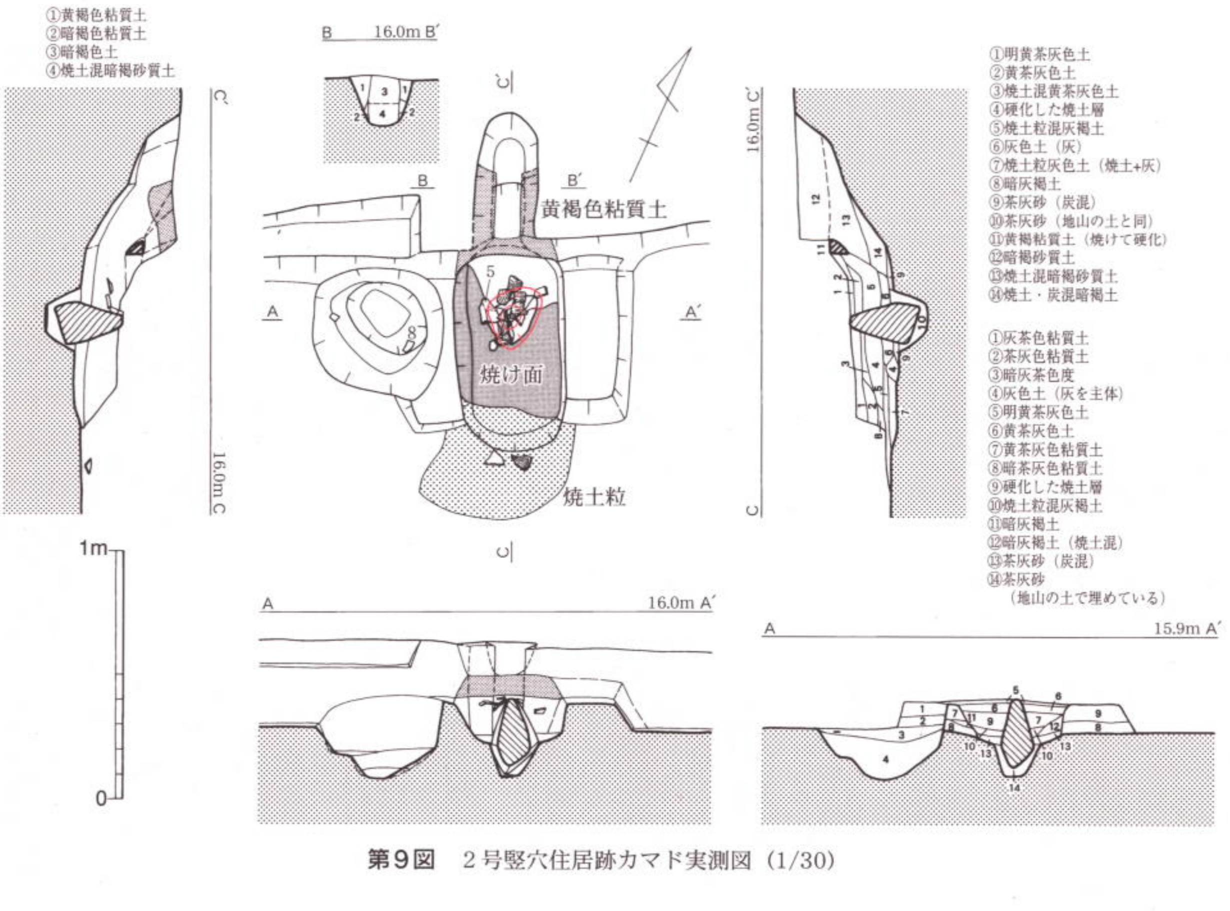
第8図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）

よりやや東よりにカマドを造り付けている。

主柱穴は竪穴部外にあり、北壁際のＰ1・Ｐ2及び南壁際のＰ3・Ｐ4である。柱は抜き取られており、柱痕は残らない。各柱穴は傾斜させて掘られており、柱を建てた場合、柱が竪穴部側に傾く。各柱穴相互の上端中心間距離は、Ｐ1～Ｐ2間2.0m、Ｐ3～Ｐ4間2.1m、Ｐ1～Ｐ3間4.9m、Ｐ2～Ｐ4間5.0mである。検出面からの深さは、Ｐ1；21.8cm、Ｐ2；29.9cm、Ｐ3；49.8cm、Ｐ4；50.8cmを測り、北壁側の柱穴は南側のそれより浅い。また、柱が立っていたと思われる位置と壁との距離は、Ｐ1；48cm、Ｐ2；77cm、Ｐ3；45cm、Ｐ4；38cmを測り、カマドに近いＰ2がほかの柱穴より30cm以上も壁から離れた位置に掘り込まれている。Ｐ5～Ｐ8は、Ｐ6が床面を掘り下げて検出されたこと、深さが10～20cmと浅いことから、主柱穴ではなく支柱穴ではないかと推測する。

西壁に沿って、幅40～50cm、高さ10cmほどのベッド状遺構が付設されている。中央が１mほど途切れ、その途切れた中心付近に深さ５cmほどの小穴が存在する。このベッド状遺構の土は地山と比べてやや濁った色をしており、客土して造り付けたものと考えられる。また、西・南壁及び東壁の一部に壁小溝が巡る。東南隅の壁小溝は内側に湾曲して弧を描いており、壁の形状がほかの部分と異なり傾斜がやや緩く内側に張り出していることなどから、この部分に竪穴部の昇降施設があった可能性がある。

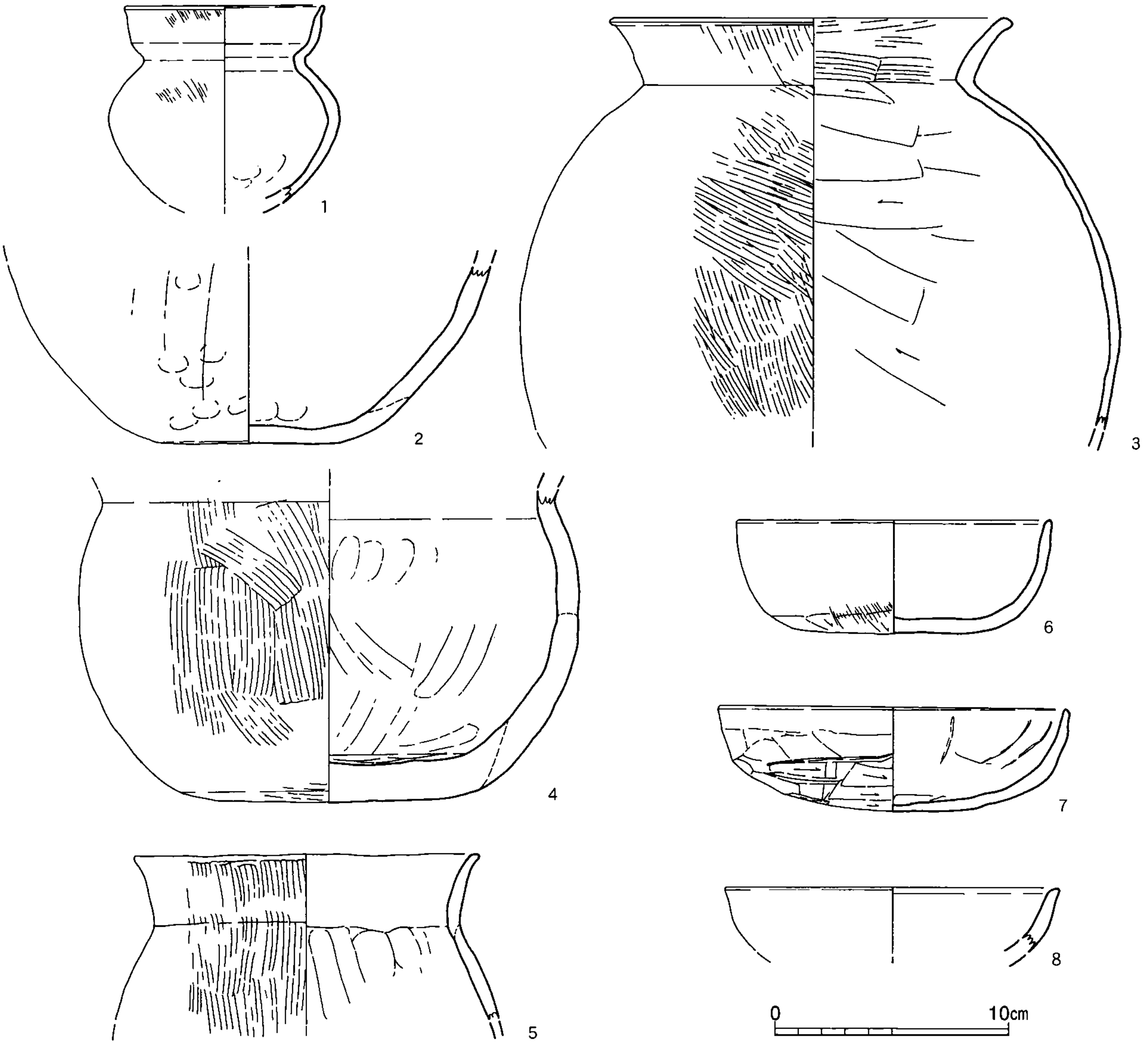
床は、顕著ではないが貼床の可能性がある。床面の遺構を検出し、さらに掘り下げてから、カマド施設の両側に壁際土坑１・２を検出した。この遺構のプランは、床面上の遺構を検出した時点では確認できず、３～５cm掘り下げたあとにやや濁りのある埋土がつまった両土坑を確認した。深さは10cmほどで、埋土に炭や焼土は含まない。



第9図　２号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版２・３、第９図）

北壁の中央よりやや北に偏した位置に造り付けたもので、煙道の下半部が遺存している。また、左袖の一部と壁を掘り込んで径52cm、深さ21cmの二段掘りの小土坑を併設している。内部には灰がつまっていた。埋火に利用したり、炭化した焚き物の保管等に使用されたものと思われる。袖部は粘質土を積んで壁体をつくる。庇の部分及び焚口側の袖部は壊れているが、本来の規模は、幅95cm、袖部長80cmほどであったと思われる。焚口部から火床にかけては住居の床面から２～３cm低い。焼土排除後の火床の寸法は長さ71cm、最大幅36cmである。火床中央よりやや奥に長径21cm、短径18cm、深さ14cmの穴を穿ち、石を立てて支脚としている。支脚周辺には土師器の甕の破片が散乱している。住居廃棄時に近い時期のものであろう。煙道口から支脚中心までの距離は28cmである。火床には粘質土を敷いていたようで、粘土粒子や炭が積み重なっている奥部を除き高い火熱を受けて赤く硬化していた。焚口部前面の床面には焼土粒が薄く散乱していた。煙道は、長さ51cm、幅25cmの横断面Ｕ字形の掘り方の両側面に黄褐色及び暗褐色粘土を貼り付けて幅11cm、深さ15cmの垂直な壁体を構成している。この粘土による壁体は、煙道口に一部残る天井部と一体のも



第10図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

のとして造られたものである。煙道の床面は二段に傾斜しており、煙道口側が約30°、煙道部側が約20°である。煙道の埋土の下層には焼土や炭を含む暗褐色土が堆積し、その上に焼けた粘土粒を含むよく締まった硬質の暗褐色砂質土があり、煙道壁体の崩落したものと思われる。

出土遺物（図版17、第10図）

土師器、砥石（第48図６）を検出した。砥石については後項で述べる。甕４・５はカマドの石製支脚の上及び周辺において、破片の状態で検出した。カマド廃棄時のものと思われる。甕３・杯７は、南壁際の中央部に検出した。ともに床面に器面が接地するが、杯７は完型品であり置かれているような状態であるのに対して、甕３は口辺部～体部の大半を欠失し、倒立した状態で検出された。このことから、杯７は住居の廃棄時に放置され、甕３は捨てられたか、流入したものと思われる。杯８はカマド右横の土坑内の、灰などの埋土中から出土した破片であり、本住居には伴わない。ほかの出土品はいずれも埋土中からの出土である。

土師器（１～８）　１は小型丸底壷である。外面はナデ仕上げで、ミガキは認められない。

２～５は甕である。２は長胴の甕の底部か。内・外面とも指押さえ調整が強く残り、その後板状工具によるナデ仕上げ。体部外面下半にスス付着。３は球胴の甕である。内面ヘラ削りにより胴部壁を薄く仕上げる。４は短胴の甕か。５は長胴甕の口縁部。外面に黒斑とススがみとめられる。

６～８は杯。６は立ち上がりが強く屈曲する。

３号竪穴住居跡（図版５～７、第11図）

住居群の最も東に検出した住居で、２号住居跡の南に位置する。２軒が主軸を同じく重複しており、下層の住居を３号住居跡Ｂ、４方向に１ｍ程度拡張した上層の住居跡を３号住居跡Ａとする。上層の３号住居跡Ａから説明する。

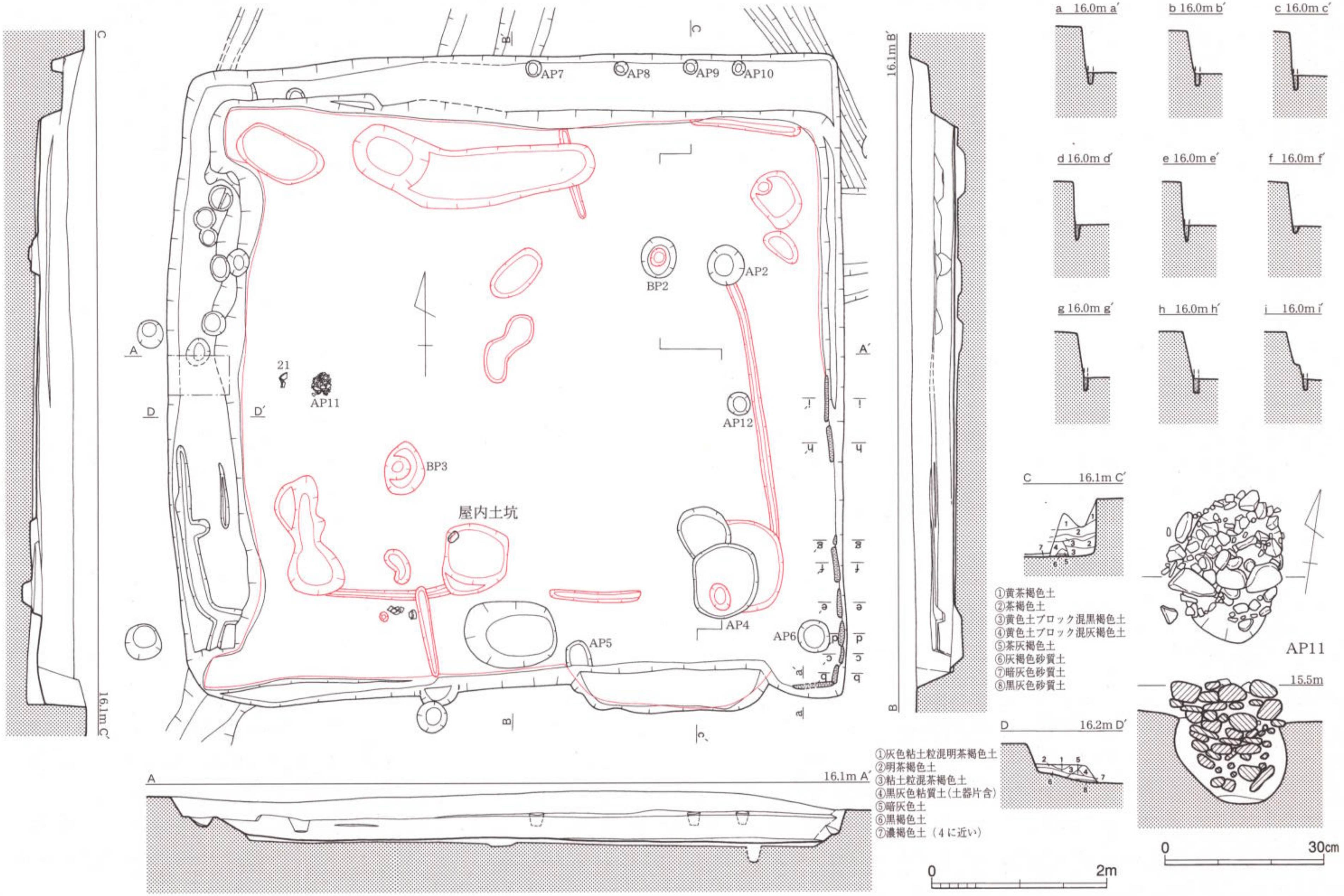
３号住居跡Ａ

主軸をほぼ南北に置き、隅円方形を呈する。南壁の中央に屋内土坑が、東側に昇降施設と推定される階段状の遺構がある。竪穴部の規模は上端で、東壁6.4m、南壁7.5m、西壁７m、北壁7.3m、深さは40cm前後である。

主柱穴は明確ではないが、４本柱で屋根を支えたと思われ、ＡＰ2がその一つにあたると思われる。ＡＰ4は竪穴部の規模から見て主柱穴としてはややひ弱に思われるが、柱配置の面から主柱穴の一つと推定しておく。ＡＰ1・ＡＰ3に相当する柱穴は検出できなかった。ＡＰ2～ＡＰ4間の心心距離は3.8mである。

南壁中央に屋内土坑がある。プランは東西に長い楕円形を呈し、上端で長軸1.04m、短軸0.74mを測る。深さは15cmで浅い。本土坑の西0.4mの下層に、幅0.1m、長さ1.03m、深さ５cmを測る南北方向の溝を検出した。後述する７号住居跡にも同様の溝を屋内土坑の東側床面で検出している。類似の遺構の顕著で良好な例は、甘木市宮原遺跡２・３号竪穴住居跡(1)においてみられた。板材を打ち込むか埋め込んだものと思われ、屋内土坑に関係する遺構だと推測される。しかし、屋内土坑と一体となる立体的な構造は明らかにし得ない。

上述の屋内土坑の東に、竪穴部の昇降施設と思われる遺構を検出した。プランを確認したあとに少し掘り下げたため、下半部しか土層を図化できなかった。プランは、楕円形を長軸で半裁した形状を呈する。掘り方は、壁際で東西長2.24m、南北長0.48m、深さ32～45cmを測る。土層から観



第11図　3号竪穴住居跡実測図（1/60, 1/10）

察すれば、客土により階段状の昇降施設を造ったようである。ただ、客土部分の遺存状態が良好ではないため、その規模は明確にはしがたい。階段を下りて東西にあるＡＰ5・ＡＰ6は昇降施設に伴う柱穴かもしれない。

北壁及び西壁に沿って、類ベッド状遺構を検出した。通常のベッド状遺構とは異なり、平坦面は最大で60cm、最小で20cmと幅が狭く、高さは最低で20cm前後、最高で32cmほどと高い。実生活上の用途（機能）については、この部分からの出土遺物が少なく推測する資料に欠ける。一方、北壁東半部の壁際に、径・深さともに15cm前後の小ピット群（ＡＰ7～ＡＰ10）を検出した。これら相互の間隔は１ｍから0.5ｍと不揃いであるが、ほぼ一直線上に並ぶ。棒杭状の木材を打ち込み、横木を渡し、道具や用具の類を吊す施設であったのかもしれない。いずれにせよ、この類ベッド状遺構は、近隣に類型がなく、用途（機能）については明確にしがたい。

東壁際の南半部床面に、板材を打ち込んだ遺構を検出した。この種の遺構の報告例は三輪町犬竹遺跡(2)、小郡市薬師堂遺跡１号住居跡(3)がある。後者については筆者が実査し(4)、前者については調査中に実見した。これらの遺構は、細い溝を掘ったあとに板材を設置したと考えるよりも、その断面幅が狭く、断面下端が尖った例が多いことから、板材を打ち込んだと考えるほうが自然である。本例は、土層断面及び平面形から判断して、板材の厚さは厚くて５cm前後、幅は８cm～42cm、打ち込んだ深さは８cm～18cmであった。板材の下端の処理はすべて尖らせたものと平坦面を呈する形状のものと二者があった。板材の打ち込み痕は９ヶ所しか確認できず、竪穴部壁面を一巡せず、壁体の弱い部分の補強を目的に部分的になされたものであろうかと推測する。

西壁に沿う類ベッド状遺構からほぼ１ｍ東の床面上に集石遺構を検出した。２～８cmほどの玉石状の小石を径20cm、深さ15cmのピット（ＡＰ11）に土とともに埋め、それを覆い隠したような状態で検出した。この遺構は南北壁からほぼ等間隔に位置し、これと対になる位置（東壁側）に径25cm、深さ18cmほどのＡＰ12がある。この二つのピットは小さくて浅いものであるが、弥生時代後期の２本柱で屋根を支える際の柱配置に通じるものがあり、支柱穴ではないかと推測する。もしそうであるならば、ＡＰ11から支柱を抜いた後に、柱穴を玉石で覆い隠したものであろうと推測する。類似例として浮羽町日永遺跡東部地区52号住居跡例(5)がある。この遺構では、主柱を抜いたあと一つの石材で柱穴を覆い隠していた。

なお、本住居には炉の存在を示す痕跡は見いだせなかった。

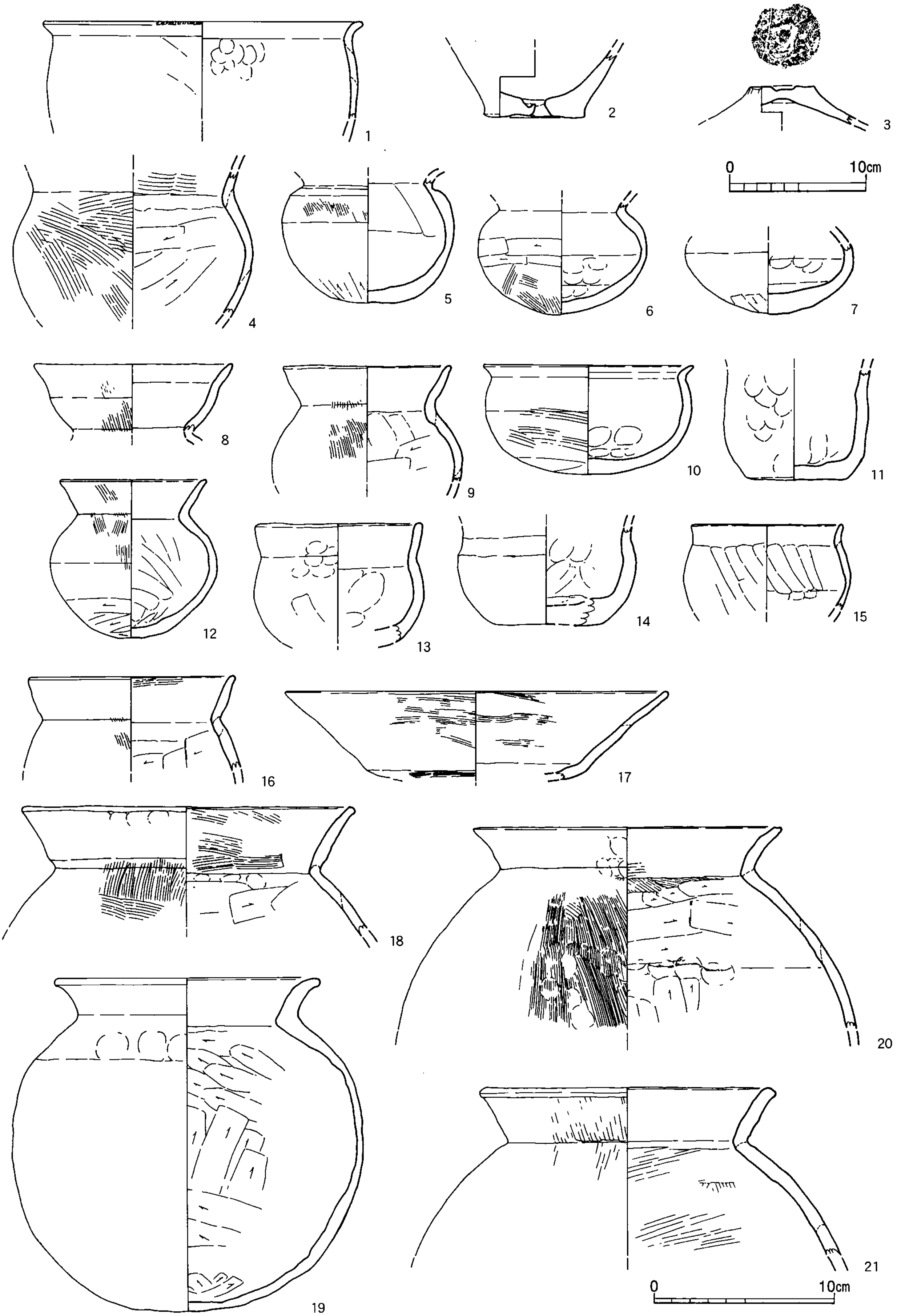
３号住居跡Ｂ

この住居の規模（範囲）は明確にしがたいが、住居Ａの下層に検出した東壁及び南壁に併行する壁小溝、北・西に沿う類ベッド状遺構に囲まれた範囲であろうと推測する。不正確ではあるが竪穴部の規模は東西６ｍ前後、南北５ｍ前後であろう。

主柱穴は３号住居跡Ａと同じく明確ではない。想定した住居の規模（範囲）から、ＢＰ2及びＢＰ3がその可能性がある。南壁際の中央よりやや西よりに屋内土坑を検出した。この屋内土坑の存在から２棟の住居跡の重複が判明した。検出時の規模は、径80cm前後の不正円形を呈し、深さ15cm程度であった。この屋内土坑の位置から判断して３号住居跡Ａ・Ｂとも家屋の主軸方向は変更していないことが窺われる。本住居跡は、３号住居跡Ａとして拡張する際に、壁や床面の遺構が大きく壊されたようであり住居跡に伴うと思われる遺構はほとんど残っていない。

出土遺物（図版17～19、第12～14図）

埋土中から多量の土器とともに打製石鏃、磨石、銛、鉄刀子各１点(第48図１・２、第49図５・２)



第12図　3号竪穴住居跡出土土器実測図①（1～3は1/4, 他は1/3）

が出土している。特に、竪穴部の南東隅付近においては、竪穴部が少し埋まった時点で多量の土器が投棄されたと思われる状態で出土した。しかし、図示した土器のうち、本住居に直接伴う状態で検出した例はない。小型の甕14・16及び手捏ね土器46は屋内土坑の埋土中から出土した破片資料である。小型丸底壺6・7・12・13、甕20・23、甑33、椀37、杯38・40・41、鉢43は、先述した竪穴部の東南隅に投棄された状態で出土した。甕18、高杯28、杯42は床面を掘り下げる過程で検出した。ほかの土器や石鏃、鉄鏃、刀子は竪穴部の埋土から出土したものである。磨石は集石部からの出土である。

弥生土器（1～3）　1・2は甕である。1は口縁端部全面に刻目を持つが、屈曲から板付Ⅱ式の範疇に含まれよう。内面に指頭圧痕が残るが、内外面とも仕上げ調整はナデである。2も前期の甕形土器底部である。焼成前に先端のとがった棒状工具で底部に穿孔を施し、甑としているが、内部からと外部からの穿孔の位置がずれ、最終的に外部からの穿孔で貫通している。内外面ともナデ。3は蓋である。中央部を内外部の両方から押し込んで薄くしている。外面の全体が黒斑で黒褐色を呈する。

土師器（4～47）　4～16は小型壺である。5・6・8・9・12は小型丸底壺の範疇に入るものであろう。10・11・14・15は頸部が締まらず、小形の鉢に近い形状を有する。16は頸部の形状からはやや細長い全体形が想定され、25と形状が近い。小形の甕とすべきか。以上の壺のうち、8・10・12は布留式に伴うものであろう。

18～25は甕。口縁部が直線的に外反するものが多い。21をのぞいていずれも外面ハケメ、内面胴部はケズリ調整を行う。18は布留式甕である。19は球胴であるが、23・25は胴部上半の形状からやや長胴のものであろう。そのほかはいずれも小片のため全体の形状は知り得ない。18をのぞきいずれも5世紀前半段階のものか。

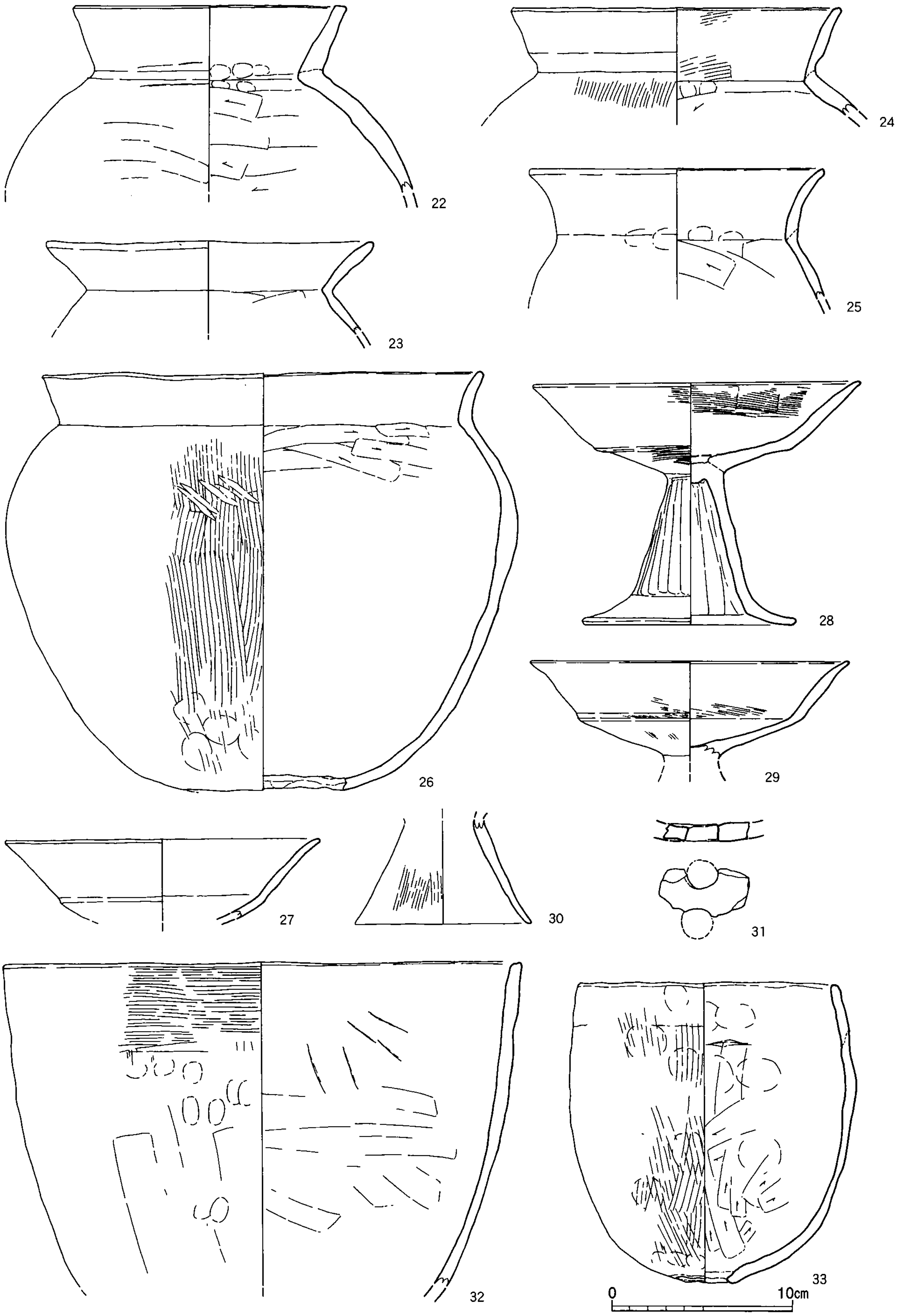
26は鉢。底部を焼成後に大きく打ち欠く。甑として転用されたものか。

17・27～30は高杯。17は杯部の屈曲に段を形成しないタイプである。全体に胎土が良質で薄く作り上げる。屈曲部より上の残存であり、屈曲部からはほとんど直線的に広がる。内外面にハケメを施した後丁寧になでており、ナデ単位が明瞭な凹凸となっている。27は屈曲部に段を形成し口縁部は外反するタイプ、28・29は杯部が屈曲してやや直線的に伸びるタイプで、前者が古い様相を示す。また、28は脚部が屈曲するもので、30は直線的に伸びる。いずれも杯部外面はハケメ後横ナデ、28の脚部は内外面とも縦方向のヘラケズリを施し、外反部以下のみナデ仕上げ。30は外面ハケメ、内面はナデ。

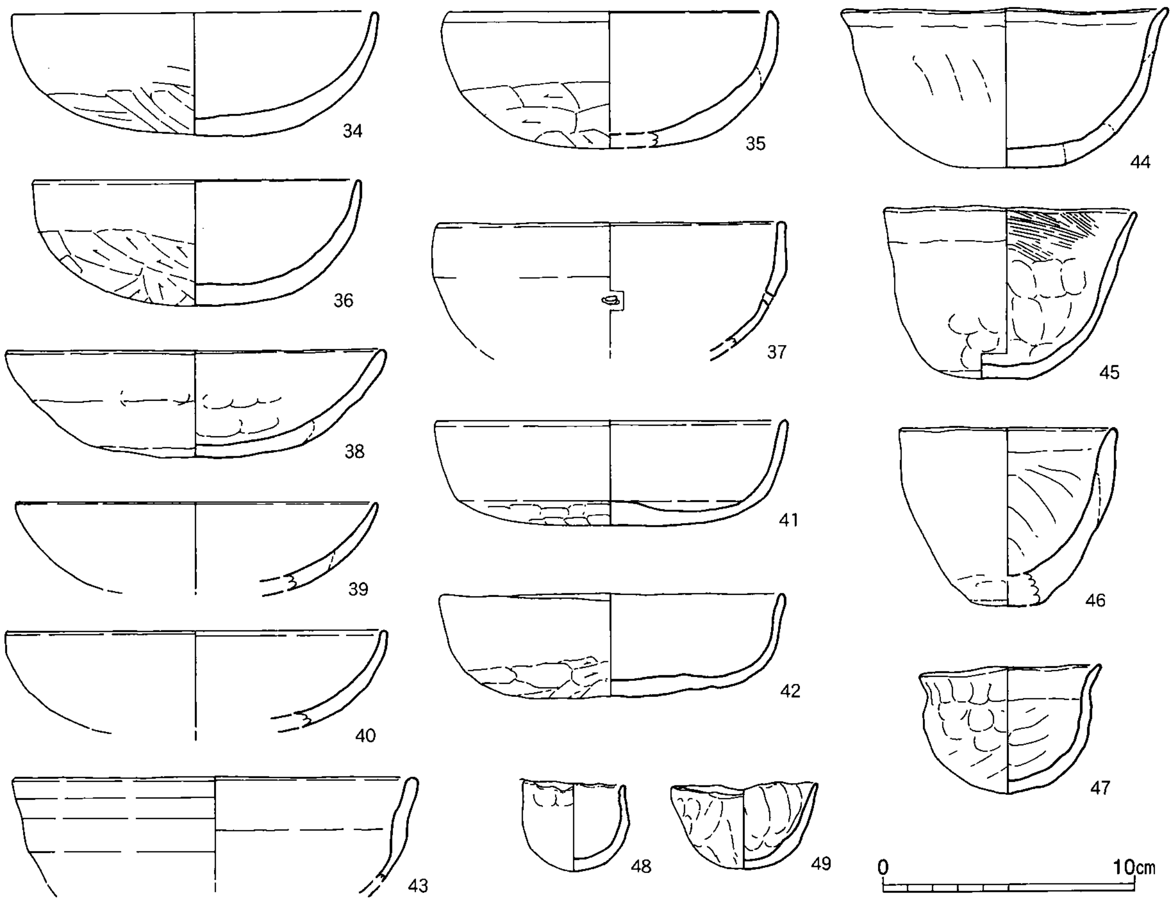
31～33は甑。31は底部のみの資料である。径1.5cmほどの円形穿孔を複数施すタイプである。32は口縁～胴部、33は全体の形状が判明する資料である。いずれも口縁部が直線的に伸びるタイプで、把手を持たない。32の底部穿孔は焼成前である。両者とも内外面に指頭圧痕がよく残り、それを内面ケズリ、外面ハケメ・板ナデによって消そうとしているが、凹凸が激しいためよく残る。

34～45は椀である。椀の形状は大きく、底部から直線的に伸びて浅い皿状を呈するもの（38～40）、立ち上がりが強く屈曲して口縁部が直立に近くなるもの（41・42）、両者の中間で緩く湾曲しながら立ち上がるもの（34～37）に分けられる。また、そのほかに口縁部が湾曲するもの（43）、口径が小さく深いもの（44・45）が見られる。

46も杯であるが、やや形状が異なり、盃のような形状を持つ。底部は尖底気味のレンズ状の形状を呈するものか。胴部はやや内湾しながら急激に立ち上がり、口縁部は急激に器壁を薄くさせながらわずかに外反する。



第13図　3号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第14図　３号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

47～49は手捏ねのミニチュア土器である。47が鉢、48・49は杯か。いずれも指頭圧痕や指ナデ痕が器壁全体に明瞭に残る。

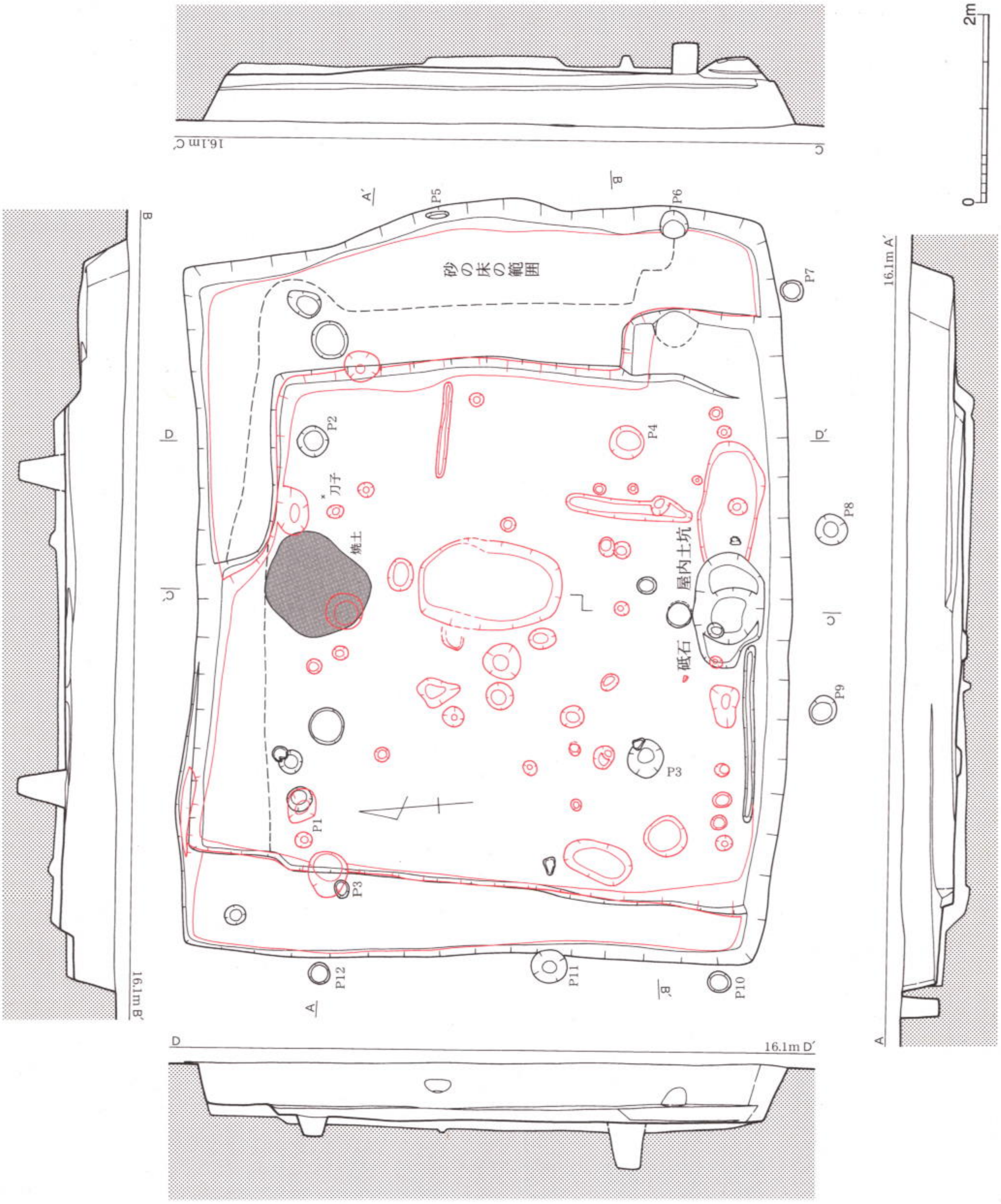
４号竪穴住居跡（図版８、第15図）

２号住居跡の西、３号住居跡の北西に位置する。プランは東西に長い隅円長方形を呈し、主軸は真北から東に5°程振れる。竪穴部の規模は、上端で東壁6.09m、南壁7.9m、西壁5.9m、北壁7.1m、深さは50cm前後である。竪穴部の昇降施設は確認していない。東壁体の中央付近は崩落している。

主柱穴は、Ｐ1～Ｐ4と考えられる。Ｐ1は床面で一部を検出し、床面下層で完全なプランを検出できたが、Ｐ4だけは床面下層で検出したものである。ほかにも主柱穴かと推定されるピットがあるが、この組合せが、柱配置と主柱の深さから見て最も可能性が高いと考える。各柱穴の心心距離は、Ｐ1～Ｐ2間3.9m、Ｐ2～Ｐ4間3.34m、Ｐ1～Ｐ3間3.64m、Ｐ2～Ｐ4間3.34mである。

東西壁と北壁寄りにベッド状遺構がある。幅は西側のベッド状遺構は0.4～0.9m、東及び北側のものは0.8～1.4mである。床面との比高差は10～15cmほどであり、３号住居跡Ａの半分ほどである。付設されたものではなく地山を削りだしたものである。東及び北側平坦面の壁側の半分は砂地である。

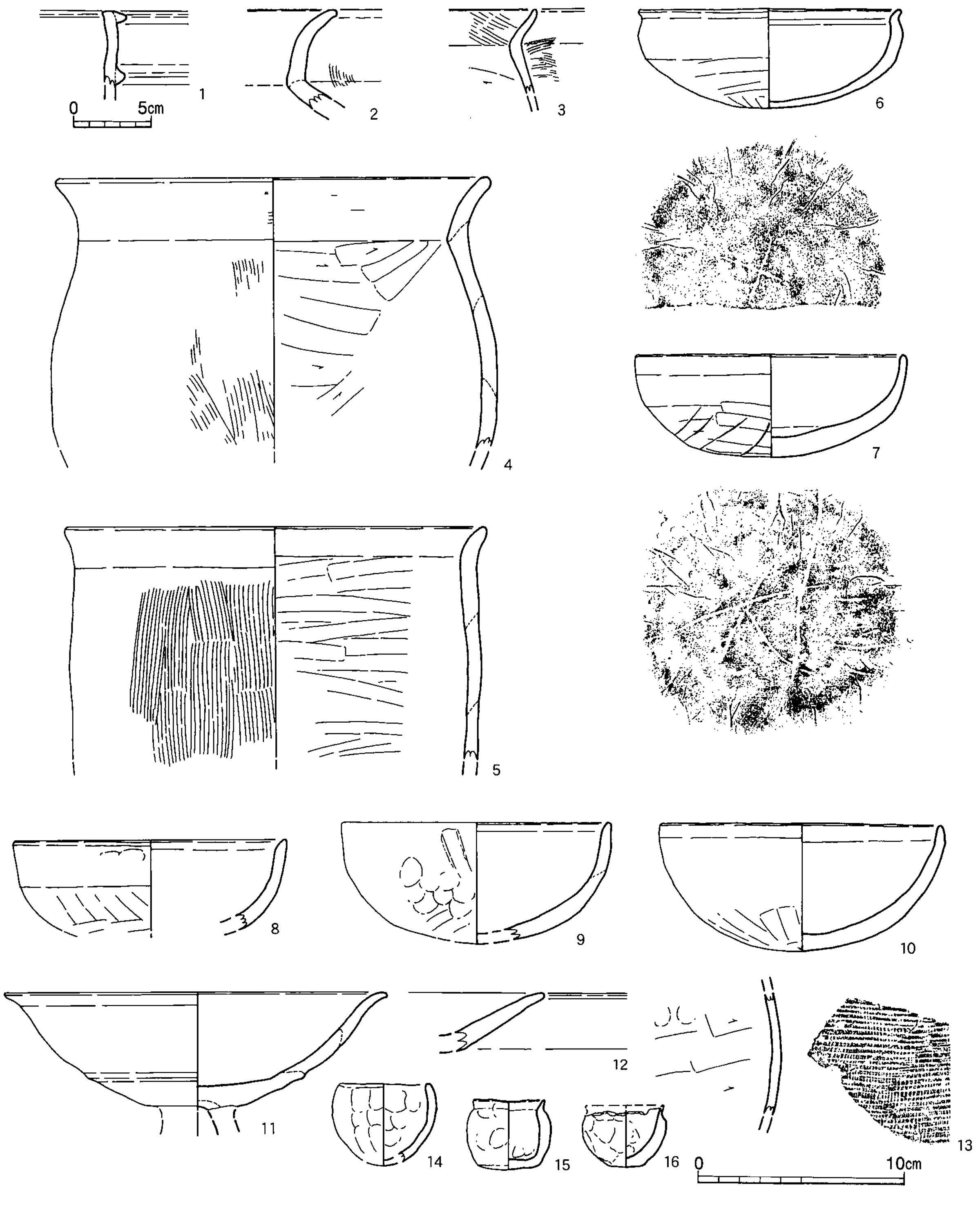
南壁中央付近に屋内土坑を検出した。プランは、上端で長径1.24m、短径0.8mを測る楕円形を呈し、二段掘りの底面の最深部で深さ18cmを測る。この土坑の西側に長さ1.8mほどの壁小溝がある。



第15図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）

北壁に沿うベッド状遺構の西端部の南側に、径１mほどの範囲にわたり焼土を検出した。その下に径40cm、深さ16cmのピットを検出した。炉跡の可能性がある。

床面下層の遺構として、竪穴部中央に土坑１基、東半部に東西方向の溝１、南北方向の溝２及びピットを検出した。中央土坑は、長径1.52m、短径0.95mの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。埋土には焼土・炭などは含まず、ほかの下層遺構と同様に暗褐色系のものであった。弥生時代後期



第16図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（１は1/4, 他は1/3）

以来の方形竪穴住居の床面中央にある炉を遺制として床面下に掘り込んだものであろうか。溝１・２は、床面に板材を打ち込んで区画したものと思われる。

竪穴部外の、北壁沿いを除く東・南・西壁際に、一定程度整然とピットが並んでいる。東壁のＰ５・Ｐ6は壁面に掘り込まれ、竪穴部外の遺構検出面からの深さはＰ５；30cm、Ｐ６；48cm、両者の心心距離は2.44mである。南壁際Ｐ７～Ｐ9の深さ及び相互の心心距離は、Ｐ７；13cm、Ｐ８；17.3cm、Ｐ９；26cm、Ｐ７～Ｐ８間2.57m、Ｐ８～Ｐ9間1.95mである。西壁際のＰ10～Ｐ12のそれは、Ｐ10；20.6cm、Ｐ11；21cm、Ｐ12；40.4cm、Ｐ10～Ｐ11間1.8m、Ｐ11～Ｐ12間2.45mである。これらのピットのうち、Ｐ5は東壁のほぼ中央にある。Ｐ８・9は屋内土坑の中心を通る竪穴部の南北軸線の東西に対称的な位置にある。Ｐ11・Ｐ12も竪穴部の東西中軸線の南北のほぼ対称的な位置にある。これらのピットは各壁の中央付近を意識して配されているように見受けられる。何らかの形で、本住居の屋根や壁体構造に関係していたものであろうと推測する。

出土遺物（図版19、第16図）

床面から１～２cm浮いて刀子（第49図３）が出土し、屋内土坑や竪穴部の埋土中から土師器とともに土製勾玉１点（第47図７）が出土している。後述の砥石や鉄製品は床面から浮いた状態で検出した破片資料でもあり、投棄されたか流入したものと推定され、本住居には伴わないと思われる。甕の口縁部２・３は屋内土坑から、杯６は屋内土坑の東側床面から、甑５、杯７、椀８・10、高杯11、手捏ね土器14・16は埋土下層からの出土品である。

弥生土器（１）　口縁部に二重に突帯をまわす亀の甲系の甕である。

土師器（２～16）　２～４は甕である。２は球胴、４は比較的長胴の甕である。いずれも外面ハケメ、内面口縁部はナデ、胴部はケズリ調整。

５は甑か。胴部は垂直に伸び、口縁部をごく短く外反させる。

６～10は椀。いずれも底部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がるタイプで、外面は板ナデ、内面を指ナデにて仕上げる点も共通する。６は口縁端部が短く外反する。６・７はヘラ記号を有する。いずれも外面ヘラナデの痕跡が明瞭に残る。

11・12は高杯である。いずれも杯部に段を有するが、11は段部が比較的直線的に伸びる一方、12は明瞭に屈曲する。

13は甕形土器の胴部片である。外面は緻密なハケメを施した後に平行タタキを行い、内面はよくケズリ込んで器壁を薄く仕上げている。古墳時代前期のものか。

14～16は手捏ねのミニチュア土器である。いずれも内外部に指頭圧痕が明瞭に残る。14は口縁部が立ち上がりからそのまま緩やかに内湾するが、15・16は短く外反する。

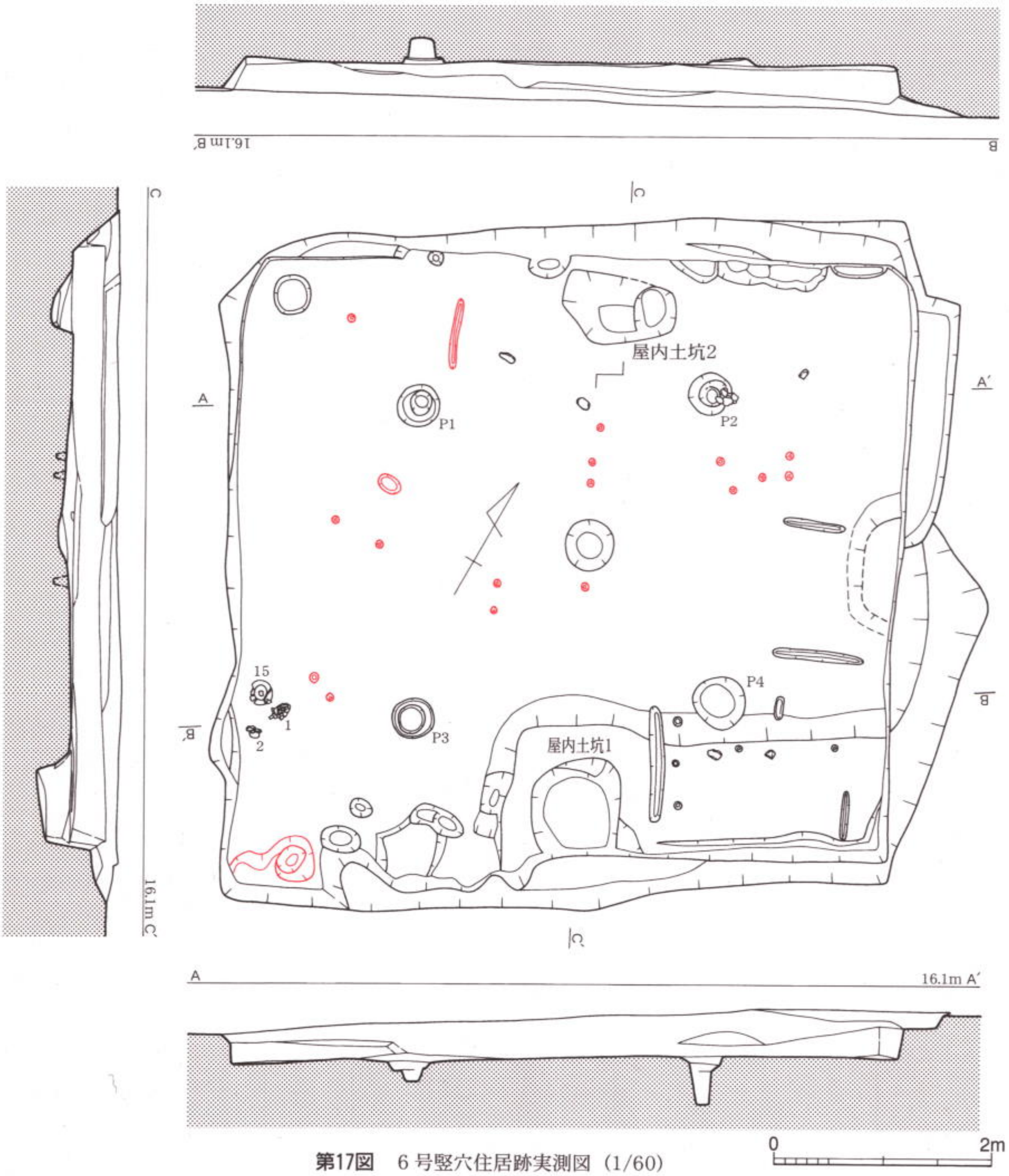
６号竪穴住居跡（図版９、第17図）

７号住居跡の北に位置する。プランはほぼ方形を呈し主軸は真北から西に28°振れる。竪穴部の規模は、北壁5.9m、東壁5.6m、南壁6.1m、西壁5.88mを測り、深さは55～60cmほどである。東壁北半部に幅2.0m、奥行き0.4mの張り出しがある。竪穴部床面から張り出し部床面までの高さは30cm前後である。また、この南側の壁体は大きく崩落している。

主柱穴はＰ１～Ｐ4で、各主柱穴間の距離はＰ１～Ｐ２間2.75m、Ｐ３～Ｐ4間2.85m、Ｐ１～Ｐ３間2.9m、Ｐ２～Ｐ4間2.8mである。床面中央部に、径50cm、深さ８cmを測るほぼ円形の炉跡があり、埋土に焼土や炭が含まれていた。

南壁の東半部に地山を削り出したベッド状遺構を検出した。上端で、幅１m～1.2m、長さ3.4mを測り、高さは１～３㎝で、きわめて低いものである。この平坦面の西、すなわち南壁中央付近に径80㎝前後、深さ30㎝の屋内土坑がある。この土坑の東に、南北方向に板材を打ち込んだ小溝があり、これを境にベッド状遺構を東西に大きく二分し（東側長２m、西側長1.4m）、屋内土坑が設置された西側部分の南北幅（1.2m）が広い。

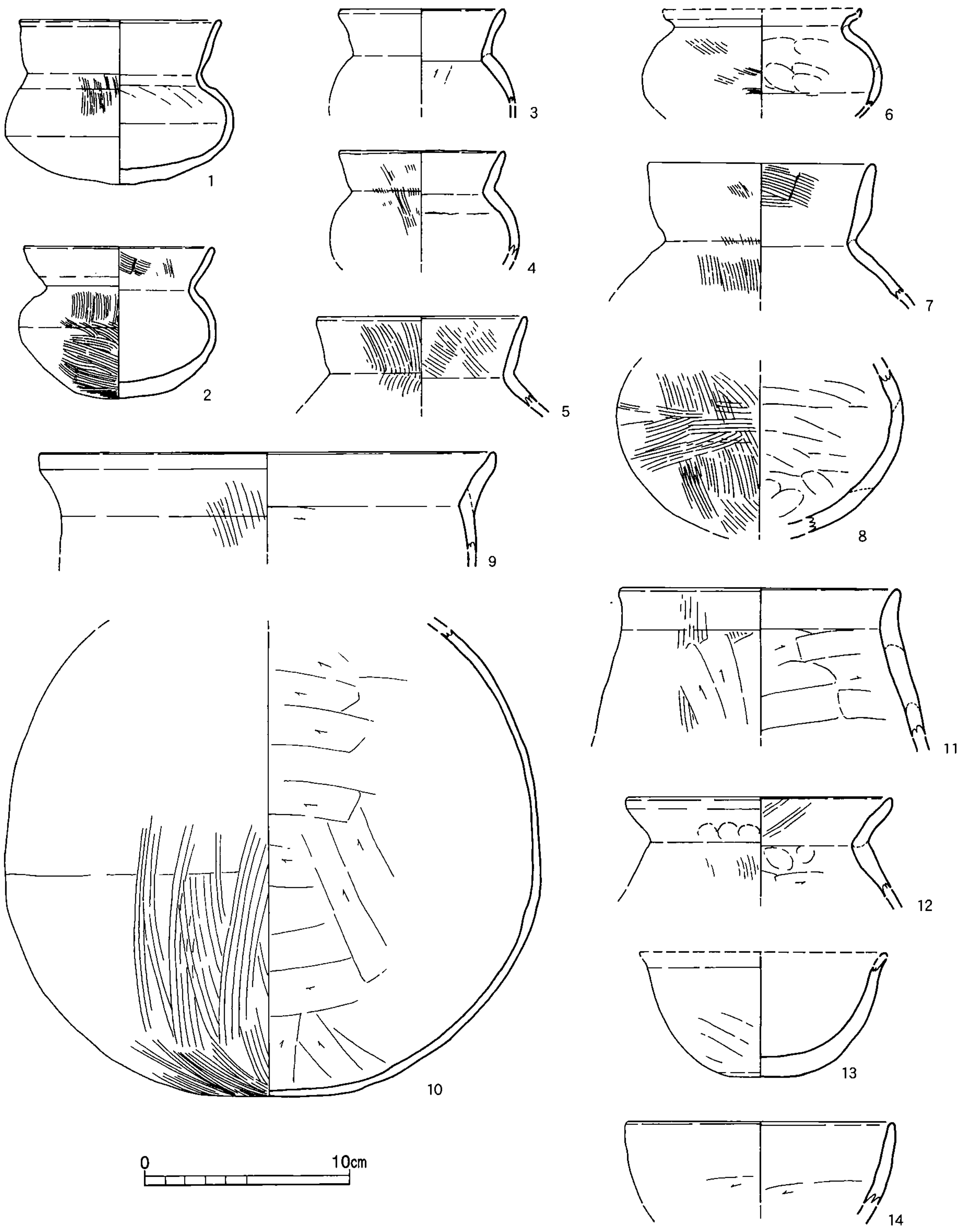
反対側の東側には手の込んだ仕掛けがなされたようである。上述の板材に併行して南北方向に等間隔に３本の杭を打ち込み、また、ベッド状遺構の肩に併行に２本の杭を打ち込んでいる。杭の高さは不明だが、杭相互には横に木や蔦などを渡して安定性を確保したと思われる。この部分は竪穴部の中では特に区画された空間であったろうと推測される。また、南東隅部にも長さ40㎝強の板材を打ち込み、小区画を造っている。なお、南壁際に壁小溝を検出した。壁小溝はこの区画された



第17図　６号竪穴住居跡実測図（1/60）

部分のみにしか存在しない。出土品は、砥石１点と２個の小石だけである。砥石は床面から２cm浮いて検出しているので必ずしも本住居跡に伴うものとは確言できないが、吊されていたものが落下した可能性も残る。いずれにせよ、この東区画部分は生活用具や道具類を保管する空間として主に機能したものではなかろうかと想定する。

東壁際の中央部分に小規模な高まりを検出した。それは、下端で南北幅1.3m、東西奥行0.45m、



第18図　６号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

上端で同じく0.95m、0.3mの階段状の遺構である。ただし、この遺構から上部～竪穴部の外へ導く痕跡は確認できなかったし、平面的に、この遺構と先述した張り出し遺構が壁体を挟んで存在し、多少ずれながらも立体的には互いに重なり合う関係にあることから、竪穴部の昇降施設の可能性は低いと思われる。ただ、平面的には相互の中心線が一致しないが、相互に何らかの関係があると思われる。現状では推測しがたい。

本住居跡の竪穴部床面には、杭を打ち込んだと推測される小ピットが、上記の説明以外にもある。しかし、合理的な整合性をもった配置をしておらず、これらは、床面を掘り下げた後に確認したものであり、住居を建設する過程で何らかの必要性のもとに打ち込まれた杭であろうと推測する。また、南北壁際の補強に材木を埋め込むか打ち込んだものかもしれない。南壁西半部のものは説明しきれない。

この竪穴住居跡の竪穴部の遺構は、以下のように、甘木市宮原２・３号住居跡(6)に酷似する。

①竪穴部はやや菱形に近いプランを呈する。

②屋内土坑の掘り込み面が床面よりもやや高い。

③板材を打ち込んだと推測される痕跡がある。

④カマドが付設されていない。

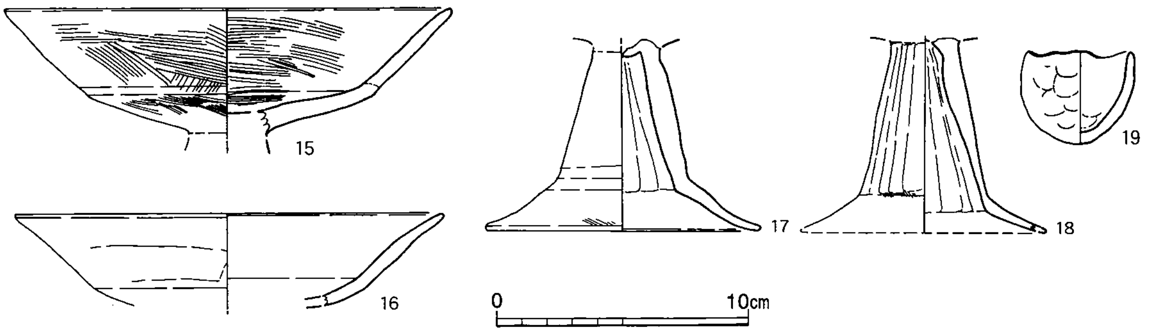
カマドが採用される時期に近い頃に、筑後川を挟む両遺跡において、竪穴部に酷似する細部遺構が存在することは、何かしら示唆的である。

出土遺物（図版19・20、第18・19図）

埋土や床面から土師器が出土している。小型丸底壷１・２、高杯の杯部15が竪穴部の南西隅の床面から出土している。15は脚部を欠くものの、これらはほぼ完型でつぶれたような状態で検出されている。本住居跡の廃棄時期を示す資料である。屋内土坑の埋土から出土した手捏ね土器19を含めてほかの土器は住居の埋土中から出土したものである。土器のほかに敲石（第48図４）が出土している。

土師器（１～19）　１～６は小形丸底壷である。１・２は胴部上半から口縁部にかけて非常に薄く仕上げた精製品である。全体を細かいハケメで薄くした後口縁部と胴部内面を丁寧なナデで仕上げており、布留式期のものである。一方、３～５は口縁部が短く直線的に外反し胴部を球形に仕上げるもので、やや新しいものである。いずれも外面ハケメ後ナデ、内面はナデ仕上げが多い。また、７は短頸の長胴壺、８はやや扁平な胴部を持つ壷の下半である。

９～12は甕である。11は口縁部が明瞭に外反しないが、そのほかはいずれも口縁部が短く直線



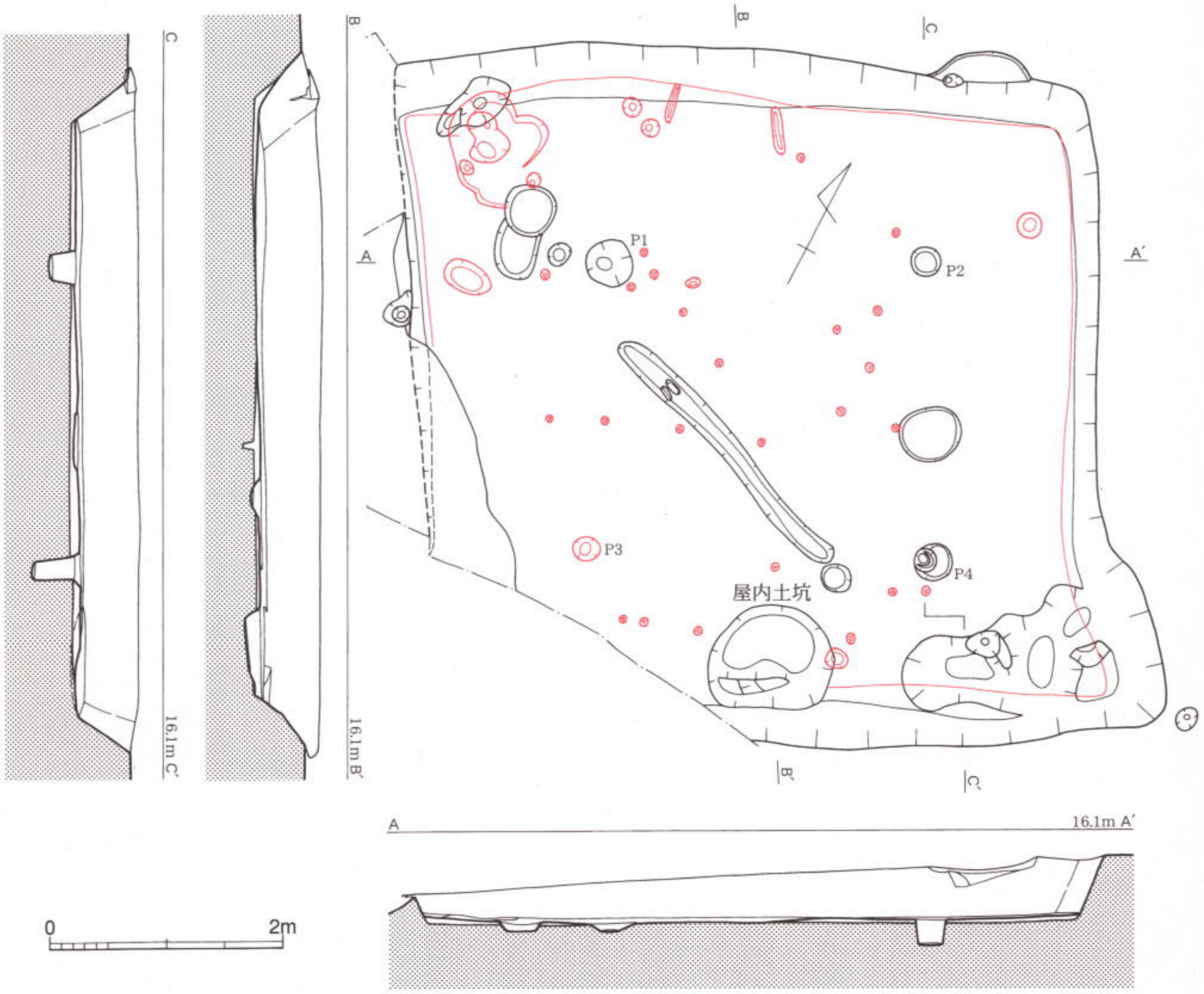
第19図　６号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

的に外反するものと思われ、9・11・12はやや長胴気味、10は球胴を有する。すべて外面はハケメ、内面にはケズリを施す。

13・14は椀である。いずれも口径が小さく深い。13は口縁部がわずかに外反するが、14は口縁部がそのまま立ち上がる。

15～18は高杯である。15・16は杯部が、17・18は脚部が残存する。杯部はいずれも屈曲部にほとんど段を形成せず、屈曲部以上は直線的に立ち上がる。調整は15が内外面ともにハケメ、16が外面ヘラナデ、内面指ナデ。脚部はいずれも上半は直線的に下方に向かって伸び、下半が屈曲して広がるタイプである。内面調整はいずれも縦方向のケズリであり、外面は17が横ナデ、18がヘラナデ仕上げを行う。これらはすべて古墳時代中期のものである。

19は手捏ねのミニチュア土器（椀形）である。内外面に明瞭に指頭圧痕を残す。



第20図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）

７号竪穴住居跡（図版11、第20図）

調査区の南西部、西側の谷の肩付近に検出した竪穴住居跡で、北に６号住居が存在する。竪穴部は、南西隅が谷にきられ、一部が調査区外にあるが、主柱穴が残るので全形を窺うには支障はない。プランは東西にやや広い隅丸円形を呈し、主軸は真北から西に約30°振れる。竪穴部の規模は上端で、北壁5.8m＋α、東壁5.5mを測り、南壁は6.0m、西壁は6m弱であろう。

主柱穴はＰ1～Ｐ4で、各主柱穴間の距離は、Ｐ1～Ｐ2間2.75m、Ｐ3～Ｐ4間2.88m、Ｐ1～Ｐ3間2.45m、Ｐ2～Ｐ4間2.6mである。なお、Ｐ3は床面を4cm掘り下げた面で確認した。

南壁際のほぼ中央に屋内土坑を検出した。プランは、上端で長径1.08m、短径0.88mを測る不正楕円形を呈し、深さは33cmである。

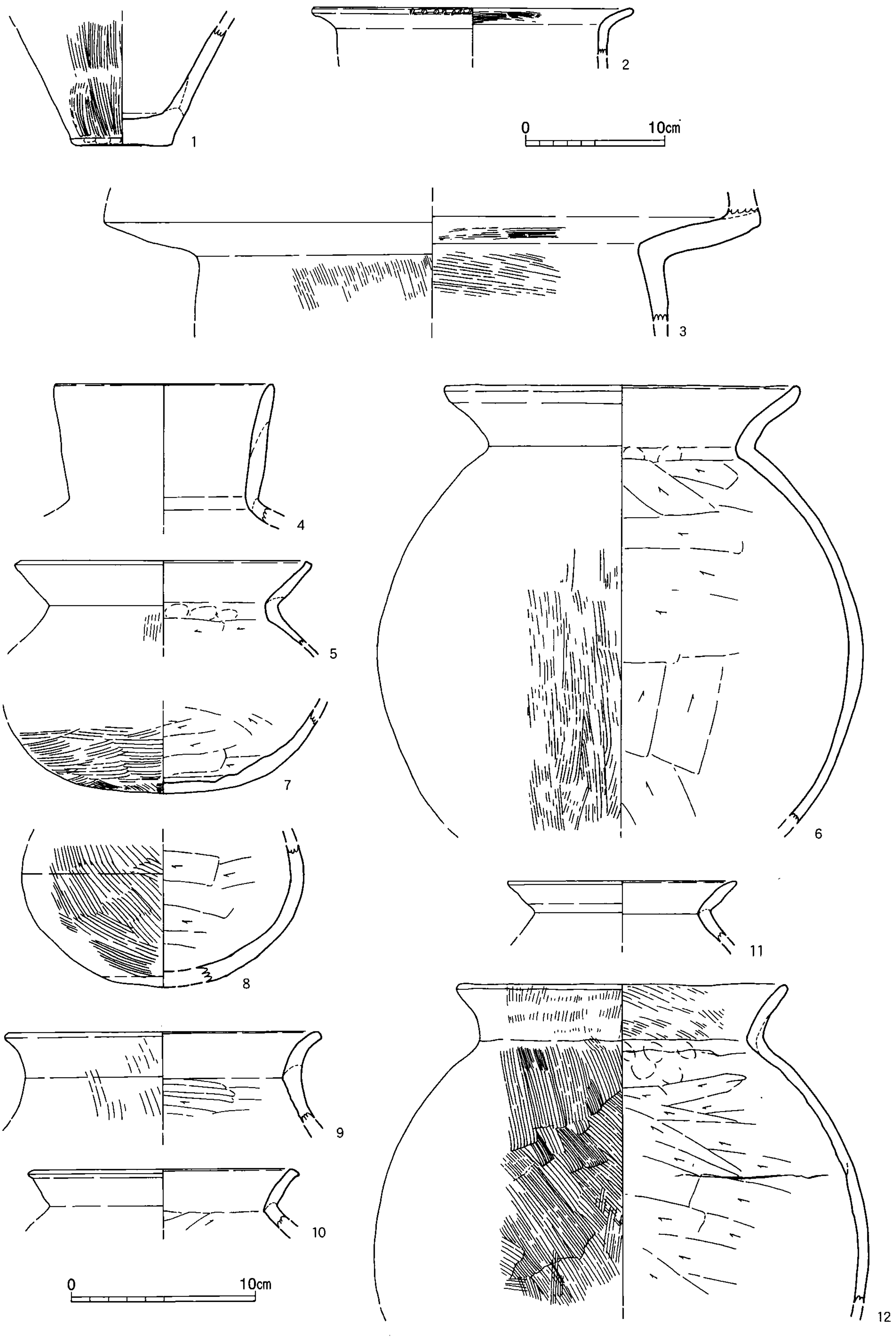
出土遺物（図版20・21、第21・22図）

弥生土器、土師器が出土しているが、すべて埋土中に含まれるものであり、本住居に直接伴うものではない。土器のほかに敲石、砥石（第48図３・５）が出土している。

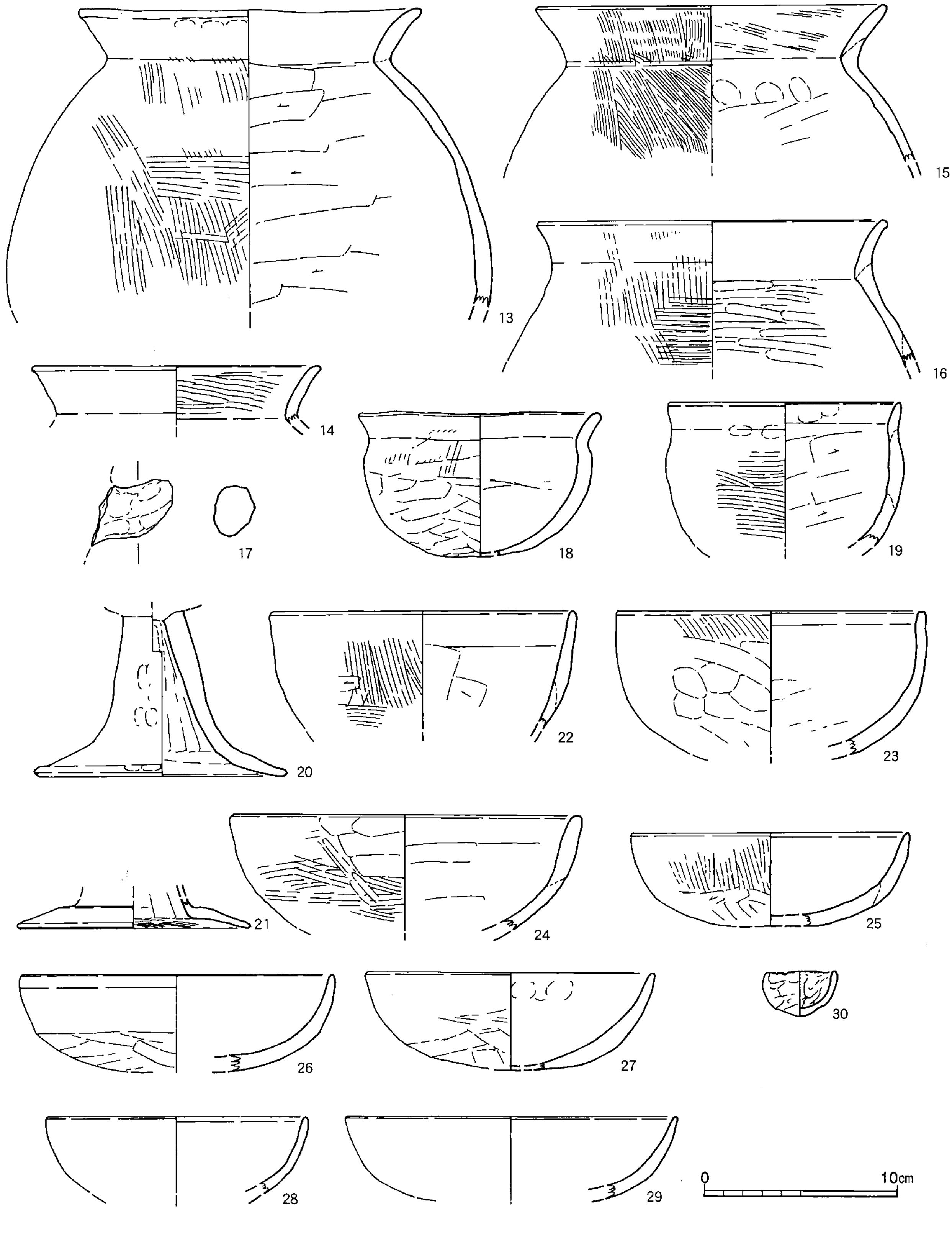
弥生土器（１・２）　いずれも甕である。１は底部、２は口縁部が残存する。１は平底の底部から直線的に広がる甕である。底部内側の平坦面は底部径からすれば広く、胴部の伸びも非常に直線的であることから、胴部がさほどふくらみを持たない、板付式でも比較的古い段階の甕となろう。外面下方には小形の指頭圧痕がよくのこり、上方はハケメ、内面・底部はナデ仕上げ。２は板付甕である。口縁部が強く外反するが、口縁端部全面に刻目を施す点から板付Ⅱ式の中でも比較的古相を呈するものであろう。口縁部内面にハケメ痕が残る。

土師器（３～30）　３～６は古墳時代前期の土器である。３は大型の二重口縁壺の頸～口縁部である。頸部がやや内湾しながら垂直に伸び、頸・胴部境の屈曲がほぼ直角に外反するやや特殊な形状を呈する。４は長胴壺の口縁部か。球状の胴部を有する短頸長胴壺となるだろうか。５・６は布留甕である。５は胴部をしっかりとしたケズリにより薄く仕上げ、端部は四角く収めてやや上方につまみ上げる。屈曲部の内面に指頭圧痕が残る。口縁部は内外ともにナデ、胴部外面は縦方向ハケメ。６は大型品で、全体にやや厚ぼったい作り。口縁端部は丸く収め、つまみ上げはシャープさを欠く。胴部外面にはタタキによる面が明瞭に残り、ハケメは雑である。また胴部内面のケズリもさほど丁寧ではなく、頸部の内面には指頭圧痕を残す。口縁部は内外ともにナデ。

７～30は古墳時代中期の土器であろう。７～16は甕形土器である。７・８は甕形土器の底部である。いずれも外面は粗いハケを施し、内面は胴部にケズリ、底部には指押さえ成形の後ナデを施すもので、内外面ともに成型時の指頭圧痕が凹凸となって残る。９～16は甕形土器の口縁部～胴部片である。９は、やや長胴気味の胴部からゆるく湾曲した頸部を経てそのまま湾曲しながら外反する口縁部へと至る形状を持ち、頸部の屈曲は不明瞭である。内面調整にやや特徴があり、胴部下半は通常のケズリを施すが、頸部に近い部分では、刃部が円形の、彫刻刀の丸刀のようなもので削ったような痕跡がある。外面は胴部縦ハケメ、口縁部はナデ。10は短く外反する口縁部を持つ甕である。口縁部はやや直線的に伸び、端部を四角く収めて下方につまみ出すというやや特徴的な形状を持つ。胴部内面ケズリ、外面横ナデ。口縁部内外面ともナデ。11～16はいずれも、やや湾曲しながら外反する短い口縁部を持つ甕である。頸・胴部の屈曲は明瞭で内外面に稜を形成し、口縁部はやや外湾して端部を丸く収めるという形状や、外面はハケメ調整後に口縁部のみ横ナデを施し、内面は胴部上方に指頭圧痕を残しつつ胴部全体にケズリ調整を施し、口縁部のみハケメのち横ナデを施すといった器面調整・成形技法に共通点が多く、共通性の高い一群である。



第21図　7号竪穴住居跡出土土器実測図①（1・2は1/4, 他は1/3）



第22図　７号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

17は甑の把手である。18・19は鉢である。18はやや浅い鉢形土器である。底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は短く外反する。胴部外面の上方にハケメが残り、下方はヘラナデを繰り返して器形を調整している。内面にもヘラナデを施して、胴頸部接合痕を消す。全体にやや雑な作りである。19は小形で深く、底部からほぼ半球状に立ち上がって口縁部のみ短く外反する。手捏ねに近い成形で凹凸が残り、これを外面ハケメ、内面ケズリによって消している。

20・21は高杯の脚部である。20は下部がゆるく外反するタイプで、21は下部を明瞭に外側に屈曲させるものである。両者とも外面をナデ、内面上部はケズリ、下部にナデ（20）あるいはハケメ（21）を施す。

22〜29は椀形土器である。22・23は深い杯部を持つもので、緩やかに内湾しながら立ち上がる。いずれも外面はハケメを施した後ヘラナデ、内面はケズリのちナデを施す。24〜27は緩やかに湾曲しながら立ち上がる、やや浅い杯の一群である。口縁端部を丸く収め、やや厚い器壁を持ち、外面調整はハケ後ヘラナデ、内面は指押さえ後ナデを施す、類似した一群である。28・29は底部が水平にのびてからやや強く内湾し、口縁部の立ち上がりが急になるものである。器壁を薄く仕上げ、内外面ともに丁寧なナデ仕上げを行う。

30は手捏ねのミニチュア土器（杯）である。全体に指頭圧痕が残り、粗い仕上げである。

掘立柱建物跡（第23図）

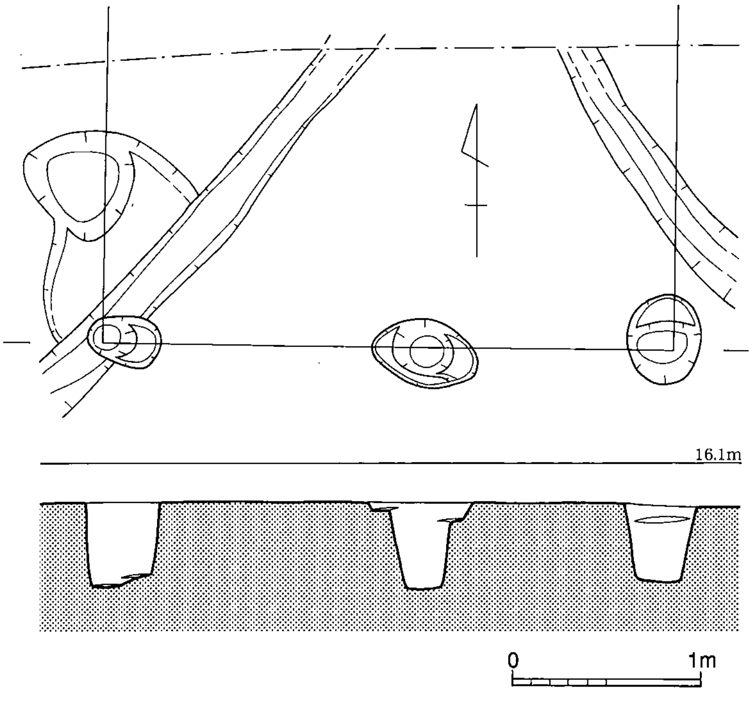
調査区北端ほぼ中央付近に位置する。梁行2間で、柱穴の心心距離は、Ｐ1〜Ｐ2間が4.5m、Ｐ2〜Ｐ3間が3.6mである。北端は調査区外へのび、桁行規模は不明。深さは、Ｐ1；47cm、Ｐ2；45cm、Ｐ3；41cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、Ｐ2、Ｐ3から土師器が出土したが、小片のため図示し得ない。

土坑

4号土坑（図版12・13、第24図）

調査区北壁中央付近、２号住居跡の北に検出した。当初は、そのプランから竪穴式住居跡として調査を行った。検出した時点では、北壁が調査区外に広がる、東西6.6m、南北5.5mほどの竪穴住居跡と考えていたが、掘り進むうちに土坑の可能性が高いと判断した。壁面・床面は砂層であり、埋土との分離が難解を極め、湧水も激しく、図示した形状は正確を期しがたいことをお断りしておく。

図化するにも大変であったが、この土坑は上端で東西長6.65m、



第23図　掘立柱建物跡実測図（1/40）

南北長5.2m、深さ70cmほどの廃棄土坑である。土器の出土量は埋土の上半部に集中し、同下半部は少量であった。

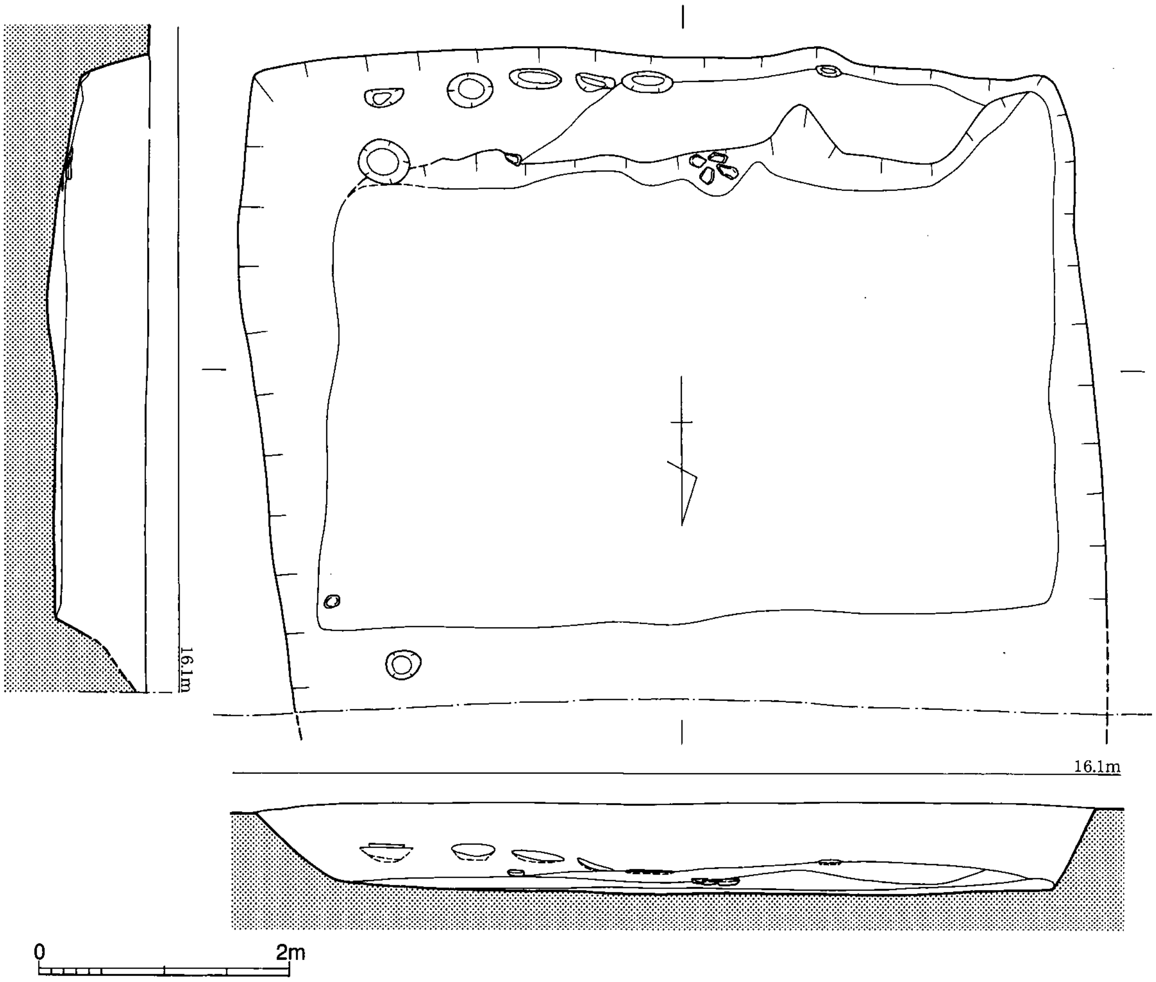
出土土器から、先に説明した住居の営まれた時期と重なり合うと思われる。住居跡からの出土土器は少量であり、住居を廃棄する際に、取り纏めてどこかに廃棄したと推測される。そのうちのひとつがこの廃棄土坑であろう。ただ、不思議なことに、鉄製品の検出例はきわめて少ない。土坑からも住居からも鉄製品の検出例はまれである。このことは、鉄製品（生産用具・武具・戦具等）の管理体制の存在を推測させる。

土器のほかに土製模造鏡、土製勾玉、小札（第47図6・8、第49図4）が出土している。

出土遺物（図版21・22、第25～27図）

弥生土器（1）　口縁端部に突帯をめぐらせる亀の甲系の甕の口縁部である。

土師器（2～31）　2～15は古墳時代前期の土師器である。2・3は小形丸底壺である。2は内外面ともに極めて細い工具で丁寧な横方向のヘラミガキを施すもので、器壁の薄さ、胎土などから極精製品である。一方3は内面・外面口縁部はナデ仕上げだが外面胴部にはハケメ痕が残り、器壁もやや厚い。



第24図　4号土坑実測図（1/60）

４は二重口縁壺である。口縁が残存しないので口縁形態は不明である。頸部には横方向に細かなヘラミガキを施し、胴部外面はハケメを施した後間隔をあけてヘラミガキ痕を残す。５は球形の胴部を持つ壺形土器の底部である。器壁外面はハケメ、内面を丁寧なハケメによって極めて薄く仕上げる一方、底部には弥生時代以来のレンズ底の影響をわずかに残す。６は二重口縁大型壺である。器高が50cm近くにも達するもので、胴部内面に丁寧なケズリを施して器壁を薄く仕上げる。７・８は短頸壺。いずれも口頸部～頸部のみの残存で、外反しながら直線的にのびるやや長めの口縁を持つ。７は口縁端部を四角く収め、８は丸く仕上げる。大きな球状の胴部を持つものであろう。９・10は布留甕である。９は胴部に平たい棒状工具による刺突文を施す。10はやや長胴気味の胴部を有するものか。

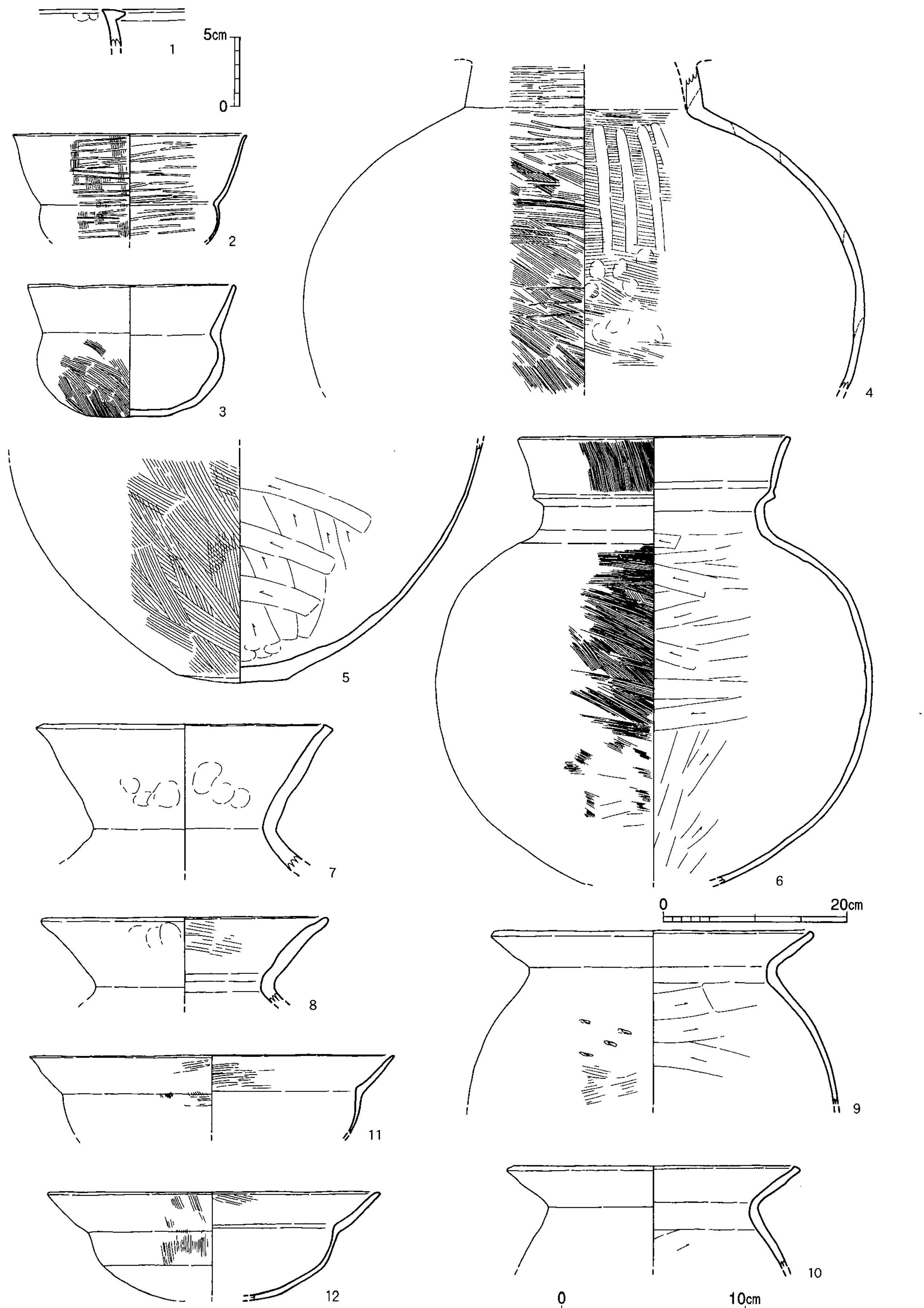
11・12は鉢である。いずれも頸部で屈曲して直線的に外反する口縁部を有するもので、器壁を極めて薄く作る精製品である。両者とも摩滅が著しく調整は不明な点が多いが、器壁外面と内面の口縁部にはミガキを施した痕跡が残る。13は山陰系の小形器台である。杯部は内外面に丁寧なナデを施し、直線的に広がる脚部には内外面とも上半にはやや指頭圧痕がのこるものの下半には規則正しい斜め方向のハケメが残る。脚部中央の対応する位置に二つの円形穿孔を行う（半乾燥時）。14は高杯の脚部である。下半が屈曲して外側に大きく広がるタイプで、屈曲部直下に円形の穿孔を行う。15は杯である。外面をヘラナデ、内面を指ナデにて整形後、内外面に細い工具で丁寧なミガキを施す精製品である。

16～31は古墳時代中期の土師器である。16～22は長胴の甕形土器である。17・18をのぞいていずれも、頸部に明確な屈曲を持たず、短く緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く収める。また外面に粗い縦方向のハケメ、内面に粗いケズリを施すが、器壁はかなり厚みを持つなどといった、多くの共通点を持つ一群である。17は口縁部は不明であるが、胴部の特徴は先の５点と共通する。18は口縁部径が小さく、頸部の屈曲がやや明瞭である。小型の甕形土器であろうか。

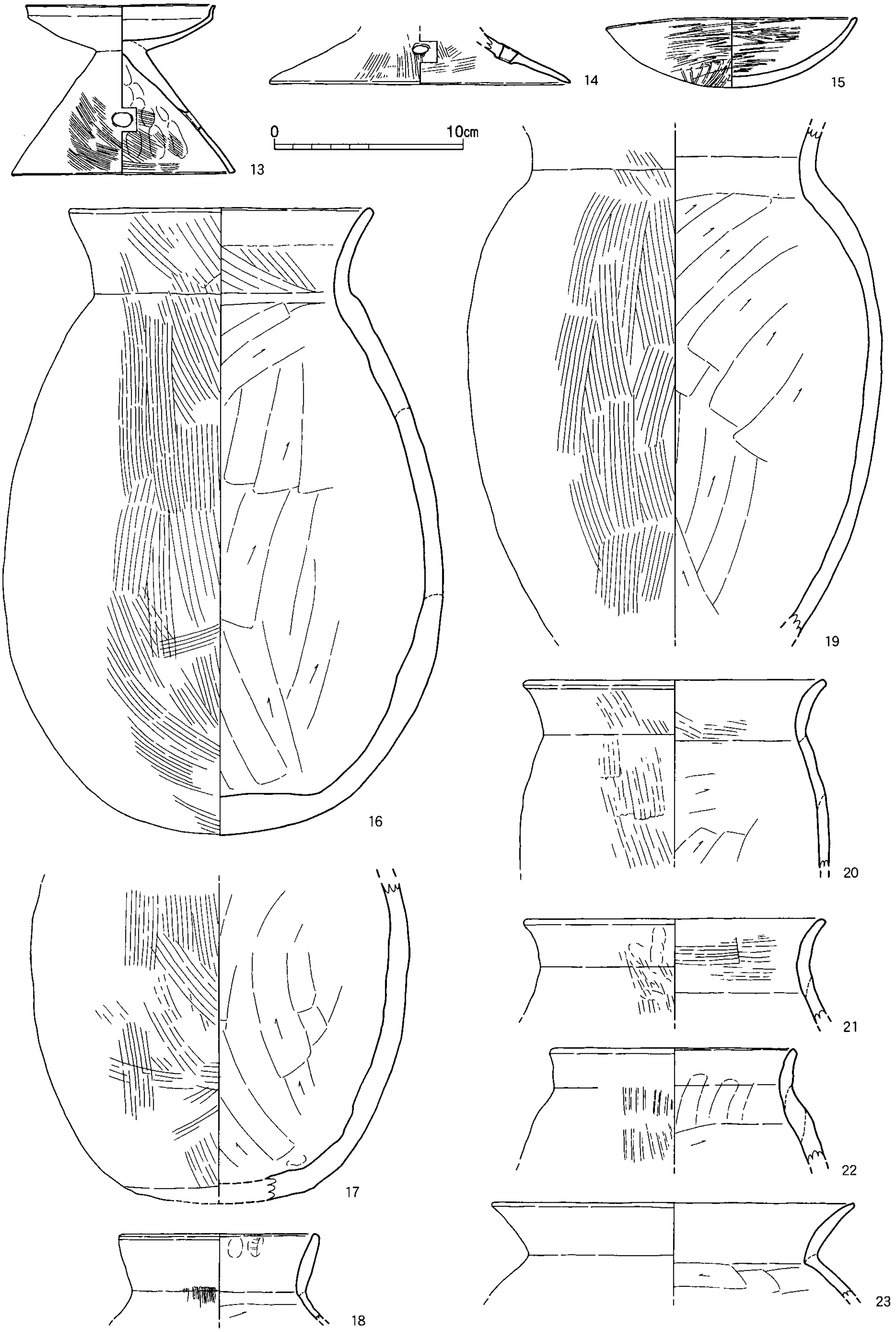
23は球胴の甕形土器である。頸部に明確な屈曲を持ち、口縁部はやや湾曲しながら短く外反する。胴部内面はケズリ込んで薄く仕上げている。

24～28は高杯である。24・25は杯部のみの残存である。いずれも杯部が屈曲した後直線的に外反しながら伸びるもので、特に25は屈曲部の外側に明瞭な段を形成する。26は脚部のみの残存である。下半で屈曲して短く外反する脚部を持つ。27は全形がわかる資料である。杯部の屈曲は明瞭ではなく杯底部と口縁端部との中位でわずかに内側に屈曲して伸び、先端はわずかに外側へと広がる。脚部は全体的に外に湾曲しながら広がるが、やはり中位でやや外側に屈曲する。28は杯部が明確な屈曲部を持たず、強く内湾しながら立ち上がるタイプの高杯である。口縁部は失われているが、おそらく口縁端部がわずかに外反するものであろう。脚部も失われており全体形は不明である。29～31は小形の鉢である。29は胴部がやや扁平で、30は胴部が球状を呈するが、両者の口縁部はよく似た形状をしており、いずれも頸部から口縁部にかけて短く外反するが、口縁端部は再び内湾しながら丸く収める。また、両者ともに胴中位に明瞭な粘土帯接合痕があり、接合部の上下を外面は強く指で押さえ、内面は強くナデ上げた痕跡が明瞭に残る。指頭による調整後は内外面ともハケメで仕上げる。成形方法に共通性が強い一群である。

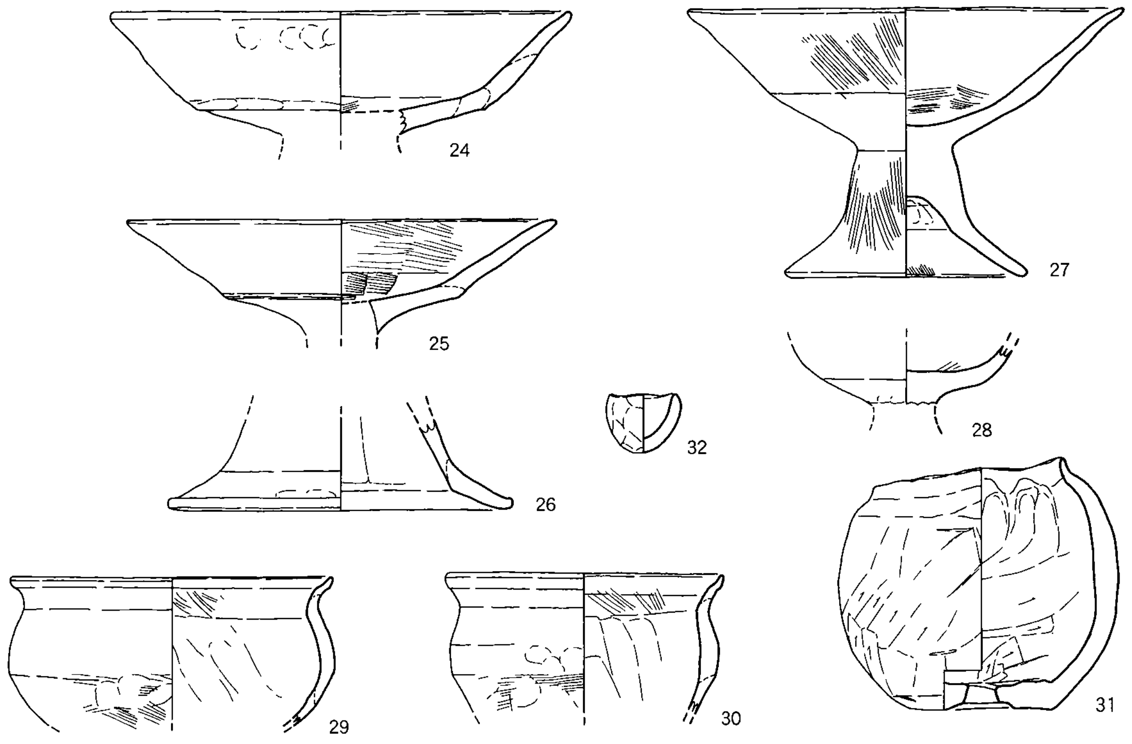
31は手捏ねの椀形土器である。内外面に指頭によるナデ痕が明瞭に残る。底部に焼成前穿孔を施しており、おそらく甑をかたどったミニチュア土器であろう。32も手捏ねのミニチュア土器である。椀をかたどったものである。



第25図　4号土坑出土土器実測図①（1は1/4, 6は1/6, 他は1/3）



第26図　４号土坑出土土器実測図②（1/3）



第27図　４号土坑出土土器実測図③（1/3）

５号土坑（図版13、第28図）

調査区中央から南より、４号住居跡の南、３号住居跡の西に位置し、６号土坑と近接する。長軸1.7m、短軸0.5mの楕円形を呈する。床面中央やや東よりが一段深くなり、最深部で約20cmを測る。刀子（第49図１）が出土している。

６号土坑（図版13、第28図）

５号土坑の東南に近接する。東西に長い溝状で、長さ3.25m、幅0.5m、深さ約40cmを測る。遺物は出土していない。

溝

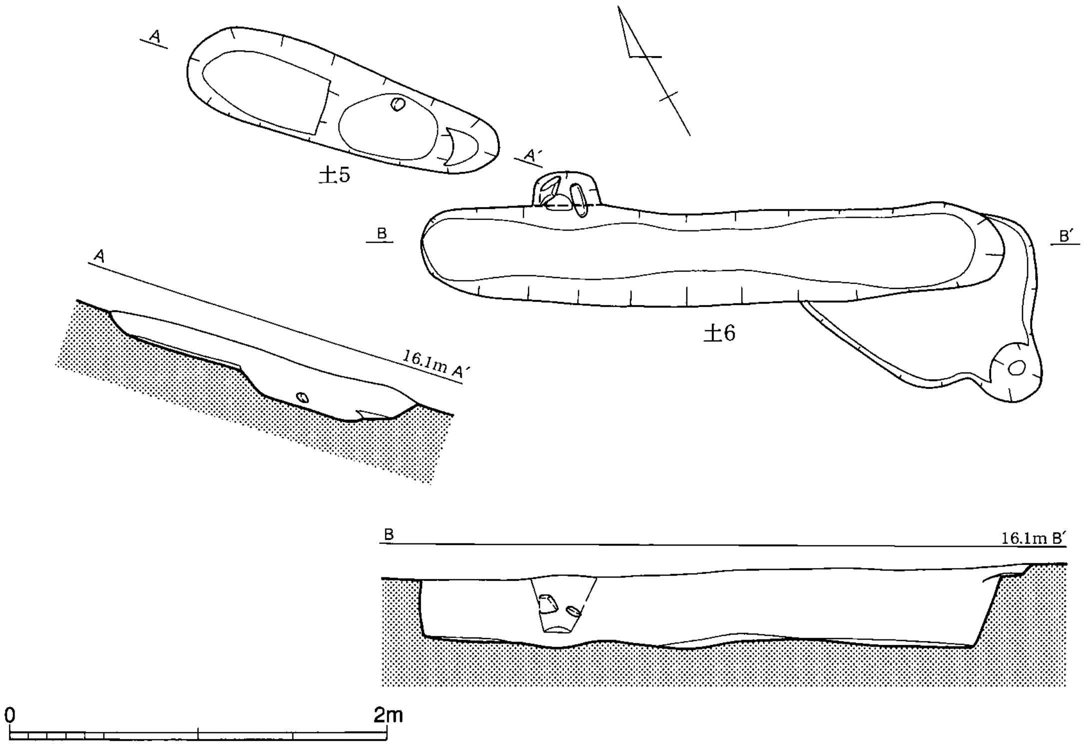
８号溝（第７図）

調査区東南隅に位置する東西溝で、３号住居跡にきられる。暗褐色土除去後に検出した。幅約1.3m、深さ4～15cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。土器のほかに土玉（第47図１）が出土している。

出土遺物（図版22、第29図）

土師器（１～３）　１・２は小形の丸底鉢である。両者ともに扁平な胴部を持つが、口縁部の形状は異なり、１が湾曲しながら外反するのに対し、２はまっすぐに上方に伸びる。端部がわずかに外反するものであろう。１の胴部外面は幅広のヘラミガキ、内面はハケメ調整。１の口縁部と２の全面がナデ調整。いずれも古墳時代前期のものであろう。器壁を薄く作っており、精製器種である。

３は小形丸底壺である。胴部がやや扁平気味の球状を呈し、口縁はやや湾曲しながら外反する。古墳時代中期のものか。



第28図　5・6号土坑実測図（1/40）

9号溝（第7図）

調査区北端西寄り付近に位置し、西南から東北へ伸びる溝。幅約50cm、深さ35cmを測る。埋土は暗褐色砂質土。出土土器は小片で図示し得るものはない。

10号溝（第7図）

調査区北西隅付近に位置する東西溝。更に東西に伸びるのであろうが、削平されている。長さ2.8m、幅約30cm、深さ約10cmを測る。出土土器は小片で図示し得ない。

11号溝（第7図）

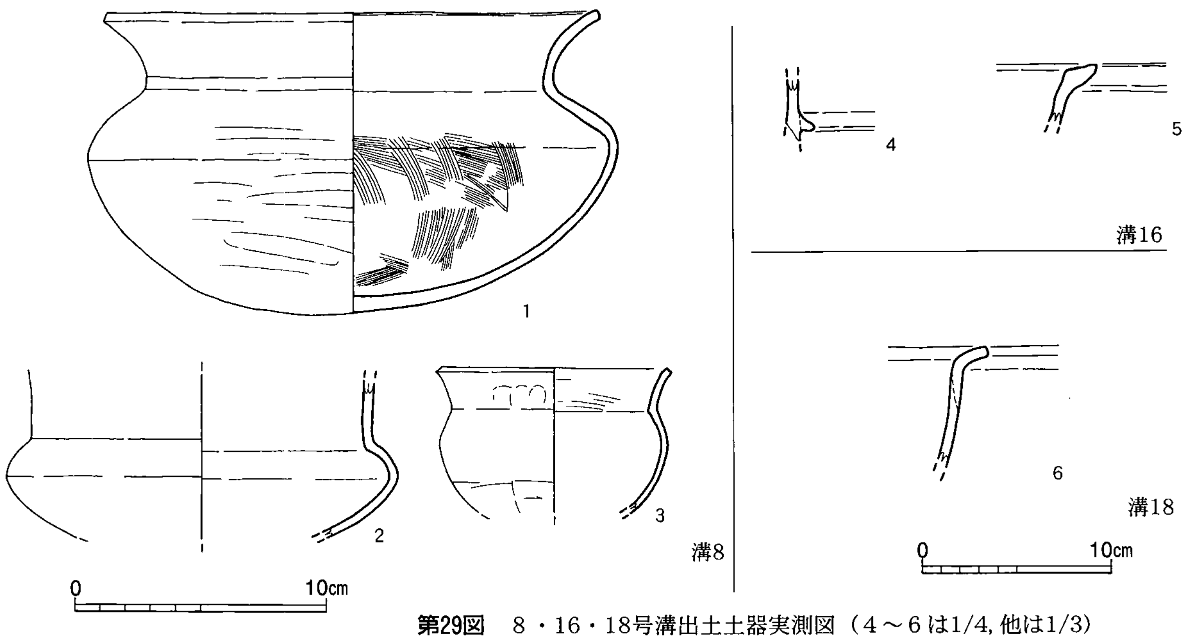
調査区北端中央付近に位置する。6号溝にきられる。ほぼ直角に折れ、調査区外へ伸びる。幅約25cm、深さ約30cmを測る。遺物は出土していない。

12号溝（第7図）

調査区東壁中央付近に位置する、ほぼ東西を向く溝。谷部に流れ込む溝と思われる。暗褐色土除去後に検出した。長さ5.7m、幅20～50cm、深さ約15cmを測る。遺物は出土していない。

13号溝（第7図）

調査区東南隅から谷部の落ち際に沿ってのびる溝。暗褐色土除去後に検出。第2遺構面調査時には、落ち際に沿う部分のみしか検出できなかったが、第3遺構面調査時に、北端が西へ曲がり、再び谷部の落ち際と平行に南へ伸びることが分かった。幅は12～22cm、西側南端が最も深く、深さ約30cmを測る。東側南端の深さ10cmである。遺物は出土していない。



第29図　8・16・18号溝出土土器実測図（4～6は1/4, 他は1/3）

14号溝（第7図）

第3遺構面調査時に、東側谷部の落ち際で検出した。落ち際に沿って北西から東南へ伸びる。幅は15～20cmで、深さは7～10cmを測る。埋土は暗灰褐色砂で、土師器が出土したが、小片で図示し得るものはない。

15号溝（第7図）

調査区東寄りに位置する南北溝で、2・3号住居跡、4号土坑にきられる。3号住居跡より南にはのびない。幅20cm、深さ13cmを測る。埋土は暗褐色粘質土。出土土器は小片で図示し得るものはない。

16号溝（第7図）

第3遺構面調査時に西側谷部落ち際で検出した。落ち際に沿って東南から北西へのびる。幅は60～70cm、深さは15cmを測る。遺構埋土は暗褐色砂質土。弥生土器が出土しているが、混入品である。

出土遺物（第29図）

弥生土器（4・5）　4は壺形土器の胴部か。下方に垂れ下がるような形状をした断面三角形の突帯を一条めぐらせている。壺にしては湾曲しておらず、甕の可能性もある。5は鉢形土器の口縁部か。断面三角形の突帯を口縁端部に一条めぐらせる。いずれも小片で全体形は不明である。

17号溝（第7図）

16号溝のすぐ西側を並行する溝。幅約20cm、深さ約10cmを測る。幅と位置から19号溝につながるものと思われる。埋土は暗褐色砂質土。遺物は出土していない。

18号溝（第7図）

16号溝の西側を並行する溝。幅は30～80cm、深さは約20cmを測る。埋土は暗褐色砂。弥生土器

が出土しているが、混入品である。

出土遺物（第29図）

弥生土器（6）　鉢形土器の口縁部である。口縁部が「く」の字状に外反するもので、須玖Ⅰ式の範疇に入るものであろう。口縁端部を四角く収めており、内外面ともにナデ仕上げである。

19号溝（第7図）

調査区西南隅、16号溝と18号溝の間に位置する。谷部の掘削をする際に削平したようで、切れ切れである。おそらく、17号溝と同一の溝であろう。幅は約10cm、深さは5cmを測る。埋土は暗褐色砂。遺物は出土していない。

（3）第3遺構面（図版14、第30図）

第2遺構面の調査終了間際になって、6号竪穴住居跡の床面下から弥生時代前期の壺がほぼ完形の状態で出土した。また、4号竪穴住居跡の西壁に炭化物を含む層がみとめられたが、これが円形住居の埋土となることが分かった。このため、年度を改めて第3遺構面の調査を実施した。

4号竪穴住居跡の西壁に見える炭化物層は遺構検出面から約20cmほどの部分の立ち上がりがなかなか確認できなかった。また、平面形もとらえることが出来なかった。そのため、トレンチを設定したが、25cmほど掘り下げたところでようやく円形住居跡であることを確認した。本来、第2遺構面と同レベルで遺構を検出できると思われる。

このように第3遺構面では遺構検出面と遺構埋土の識別が大変困難で、第2遺構面よりも約20cm下げて遺構検出を行った。しかし、第2遺構面の遺構の掘り残しは容易に検出できるのに対し、肝心の弥生時代前期の遺構は、検出が難しいうえに目安となる土器もなく、住居跡と考えて線引きしたものの、遺構ではなかったものがある。住居跡の床面の確認も困難を極め、また湧水が絶えず、主柱穴その他の住居内の遺構を検出し得なかった。

その一方で、調査終了後の埋め戻し作業の際、湧水を谷部に導くための排水路を掘削している途中で炉跡を2基発見したが、やはり床面の範囲と主柱穴は検出し得なかった。十分な調査結果を得ることが出来ず、残念でならない。

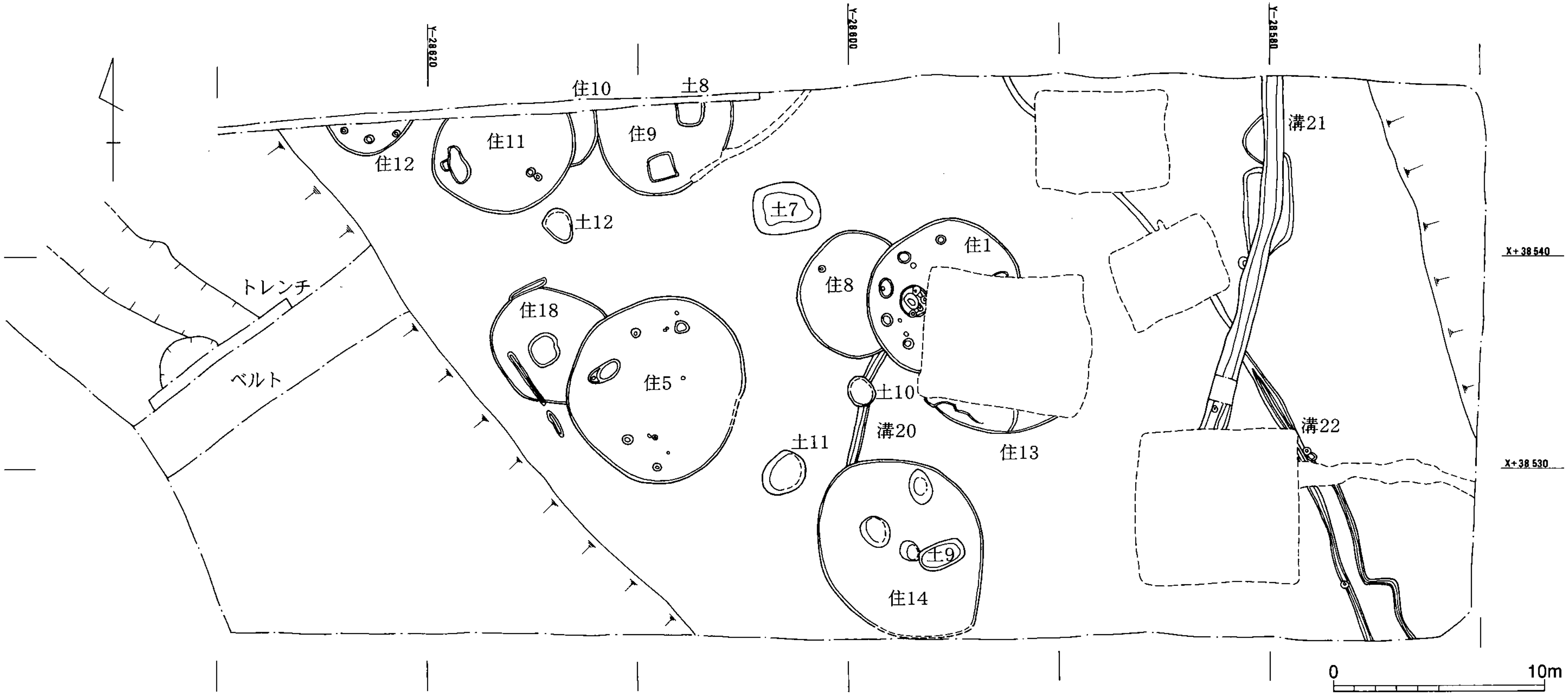
竪穴住居跡の遺構番号については、第2遺構面で欠番となった1・5号から用いている。また、掘削したものの最終的に遺構ではないと判断した住居跡の番号は、土器整理時の混乱を避けるため欠番としている。

竪穴住居跡

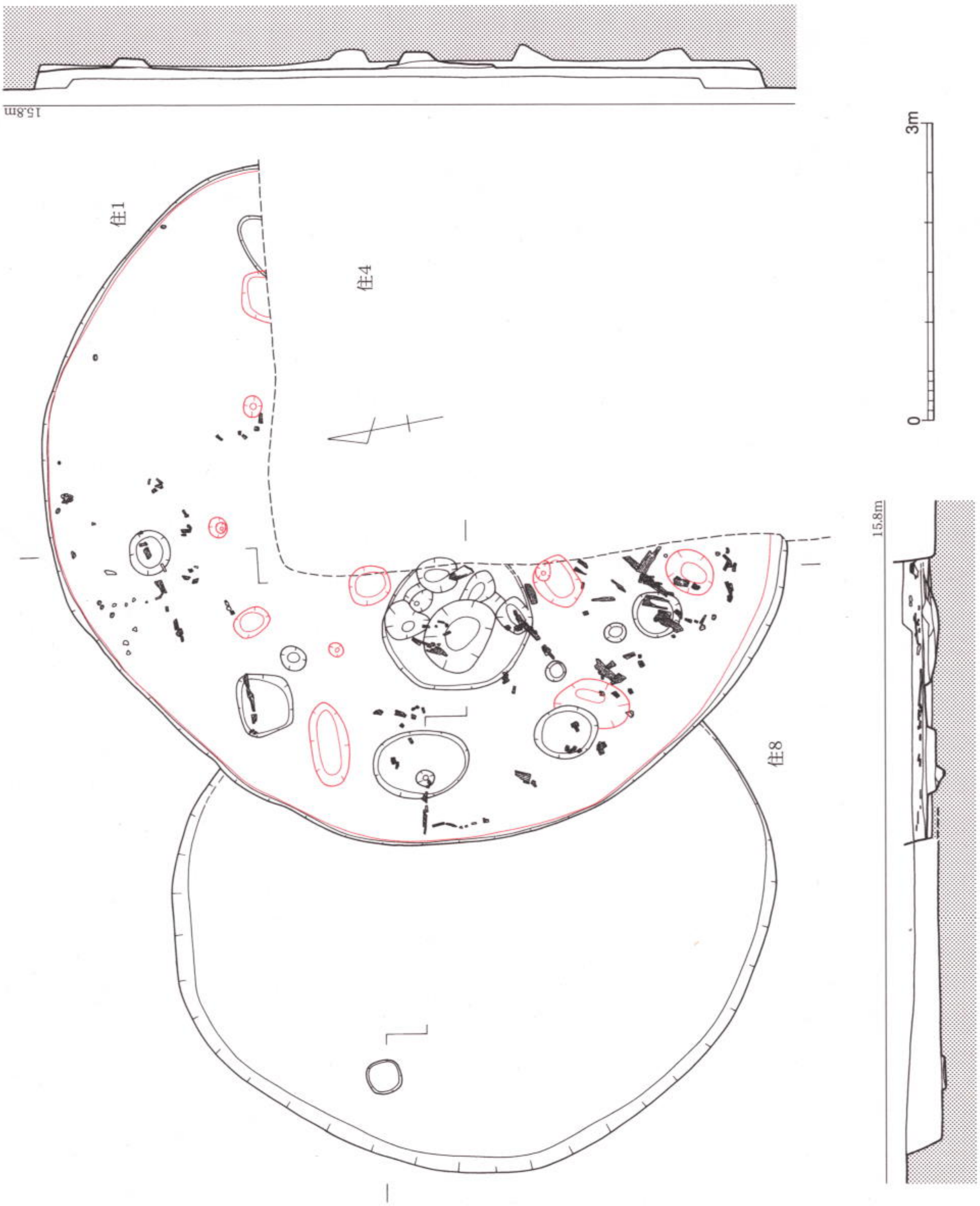
1号竪穴住居跡（図版15、第31図）

調査区ほぼ中央に位置し、8号住居跡より新しい。径は約7mで、床面までの深さは15cmを測る。遺構検出時に20cmほど下げたので、本来は35cm程度残存していたことになる。

4号住居跡の西壁面で確認できたように、炭化物と焼土を含む層が、床面から3～5cmほど高いところに広がっていた。炭化材も含まれていたが残りが悪く、樹種の判定などは出来なかった。焼土塊と炭化物を含む層はあるものの灰が含まれない、さらに炭化物層が床面より高い位置にある、といった点から、この住居跡自体が焼失したとは考えにくい。他から廃棄されたものであろう。



第30図　第３遺構面遺構配置図（1/300）



第31図 1・8号竪穴住居跡実測図（1/60）

埋土中からサヌカイトの剥片が10数点出土したが、これも製品製作後廃棄されたものであろう。

４号住居跡の床面が本住居跡の床面よりも低いために、湧水の影響を受けず床面は乾燥した状態であった。ピットを多数検出したものの、いずれも10～15cm程度と浅く、主柱穴と断定できるものはない。床面中央より1.2mほど西にずれた位置で炭化物を含む、径1.2mの浅い掘り込みを確認した。掘り込みの床面は凹凸である。

埋土は暗褐色砂質土である。分層が難しく、徐々に埋没したか、河川の氾濫などで一気に埋まったかは判断しかねる。

出土遺物（第32図）

弥生土器（１～３）　１は壺の底部である。広く薄い底部を持ち、直線的に外反しながら胴部へと続く。外反が顕著である点や底部の薄さなどから、須玖式に近い時期の資料と考えられる。内外部ともにやや指頭圧痕が残り、ナデ仕上げ。２・３は甕の底部である。２は内面にやや広い平坦部を持つのに対し、３はほとんど平坦面を持たず、湾曲しながら立ち上がる。また、３は底部の角がややつまみ出すように外側に突出する。両者とも内外面にナデ調整を施しており、いずれも板付式の資料である。

土師器（４）　４は小型の鉢形土器である。内外面ともに手捏ね整形の後にハケメとナデを施しているが、手捏ね成型時の指頭圧痕が明瞭に残り、器壁も厚い。口縁部は短く外反する。

５号竪穴住居跡（図版15・16、第33図）

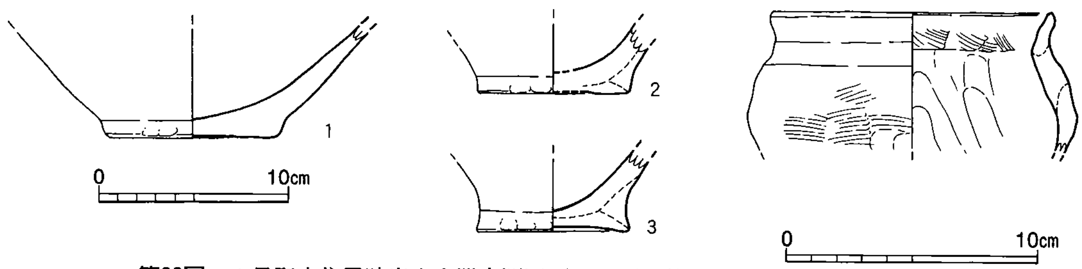
調査区中央西寄りに位置する。６号住居跡とほとんど重複している。６号住居跡の床面下から板付Ⅱ式の壺形土器が出土したことから存在が明らかになった。径は東西方向で8.8m、南北方向で8.6m、深さは20cmを測る。床面は比較的乾燥した状態で、ピットを数基検出したが、主柱穴は明らかでない。また、炉跡も検出できなかった。

出土遺物（図版22、第34図）

弥生土器（１）　小型の壺形土器である。底部を厚く作り、胴部は底部から直線的に開いて最大径が胴部上半にあり、頸胴部境は直線的につながって明確ではなく、口縁部は短く外反するが肥厚させない。頸胴部境に二条の平行沈線文を一周させる。口縁部から胴部最大径にかけてはやや細い原体による横方向のヘラミガキを施し、胴中位以下はやや太い原体による横～斜め方向のヘラミガキを施す。底部には再び細い原体による横方向のヘラミガキを施す。内部は、縦方向に指でナデ上げたあと細めの原体によるヘラミガキを間隔をあけて施す。板付Ⅱ式に属する。

８号竪穴住居跡（図版15、第31図）

調査区ほぼ中央に位置し、１号住居跡にきられる。径は南北方向で6.0mを測る。深さは35cmを測るが、遺構埋土と検出面の識別が難しく、地下水の影響もあって床面は定かではない。近接する

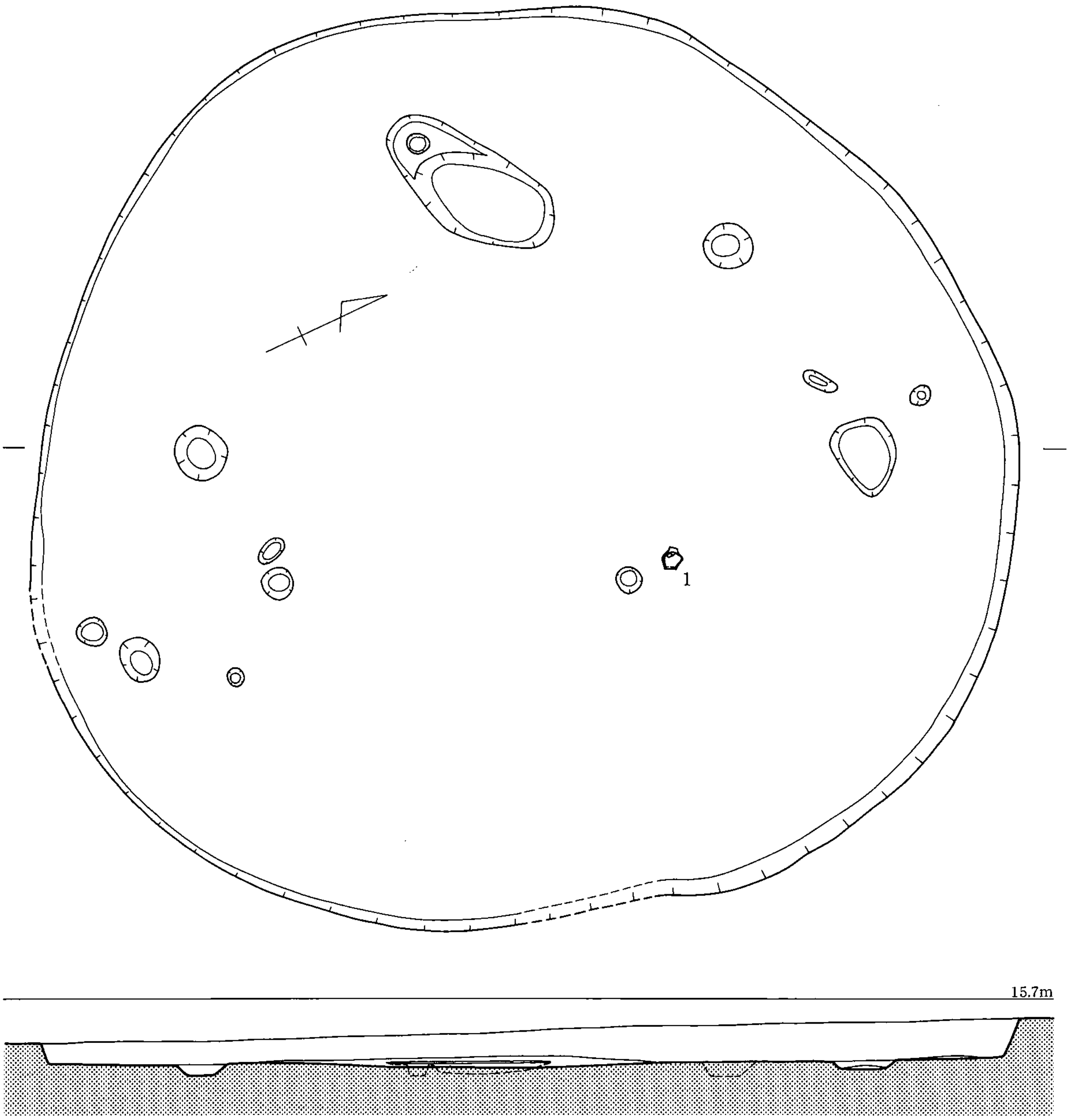


第32図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（４は1/3, 他は1/4）

14号住居跡や17号住居跡の床面から推測すると、掘りすぎてしまった感がある。床面にピット等も検出できなかった。遺物は出土していない。

９号竪穴住居跡（第35図）

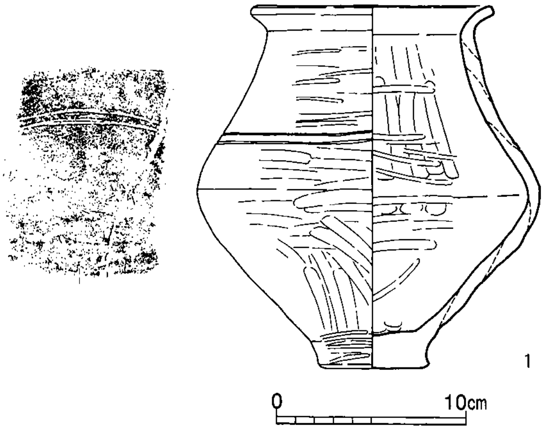
調査区北端やや西寄りに位置する。10号住居跡と８号土坑にきられる。径は調査区北壁で6.4m、深さは30cmを測る。調査区北壁に沿う排水溝をトレンチ替りに深堀りし、床直上あるいは貼床と思われる暗灰褐色砂質土層を確認した。この層を目指して掘り下げ、同レベルに達したところで、隅円方形の深さ５cmほどの掘り込みを検出した。主柱穴が明らかでないが、湧水量が多いため床面の精査はできなかった。



第33図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版22、第36図）

弥生土器（1・2）　1は壺形土器の底部である。立ち上がりが比較的急であり、胴部最大径が上半部に来るものであろう。内外面の底部付近に細かな指頭圧痕が多く残り、最終調整はナデ。前期～中期初頭の範疇に収まるものであろう。2は平底の底部から直線的に広がる甕である。底部内側の平坦面はやや広く、胴部の伸びも直線的で、板付式の甕である。調整は、外面を下方向に向かって強い板ナデを施す結果、粘土が下方に寄せられて、最下部をつまみ出したような形状を呈する。内面は指押さえ後ナデ。



第34図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

10号竪穴住居跡（第35図）

調査区北端に位置し、11号住居跡より古く、9号住居跡より新しい。ごく一部しか残存せず、規模は不明。深さは26cmを測る。調査区北壁で床面と思われる層を確認して掘り下げたが、残存部分が狭いこともあり、床面に遺構は検出できなかった。遺物は出土していない。

11号竪穴住居跡（第35図）

調査区北端西寄りに位置し、10号住居跡をきる。径は東西方向で6.6m、深さは30cmを測る。やはり、調査区北端で床面の目星をつけて掘り下げた。ピットと不整形の掘り込みを検出したが、湧水量が多く、精査することは出来なかった。

出土遺物（第36図）

弥生土器（3・4）　3・4はいずれも甕形土器である。3は口縁部が残る。口縁端部のやや下側に刻目を施す資料で、口縁部の外反が著しくない点から、板付Ⅱ式の中でも古相の範疇に収まる資料であろう。4は底部である。底部付近に内外面ともに細かい指頭圧痕が残る。外面はハケメ、内面はナデ調整である。全体的にやや厚みがあり、前期末前後の資料であろう。

12号竪穴住居跡（第37図）

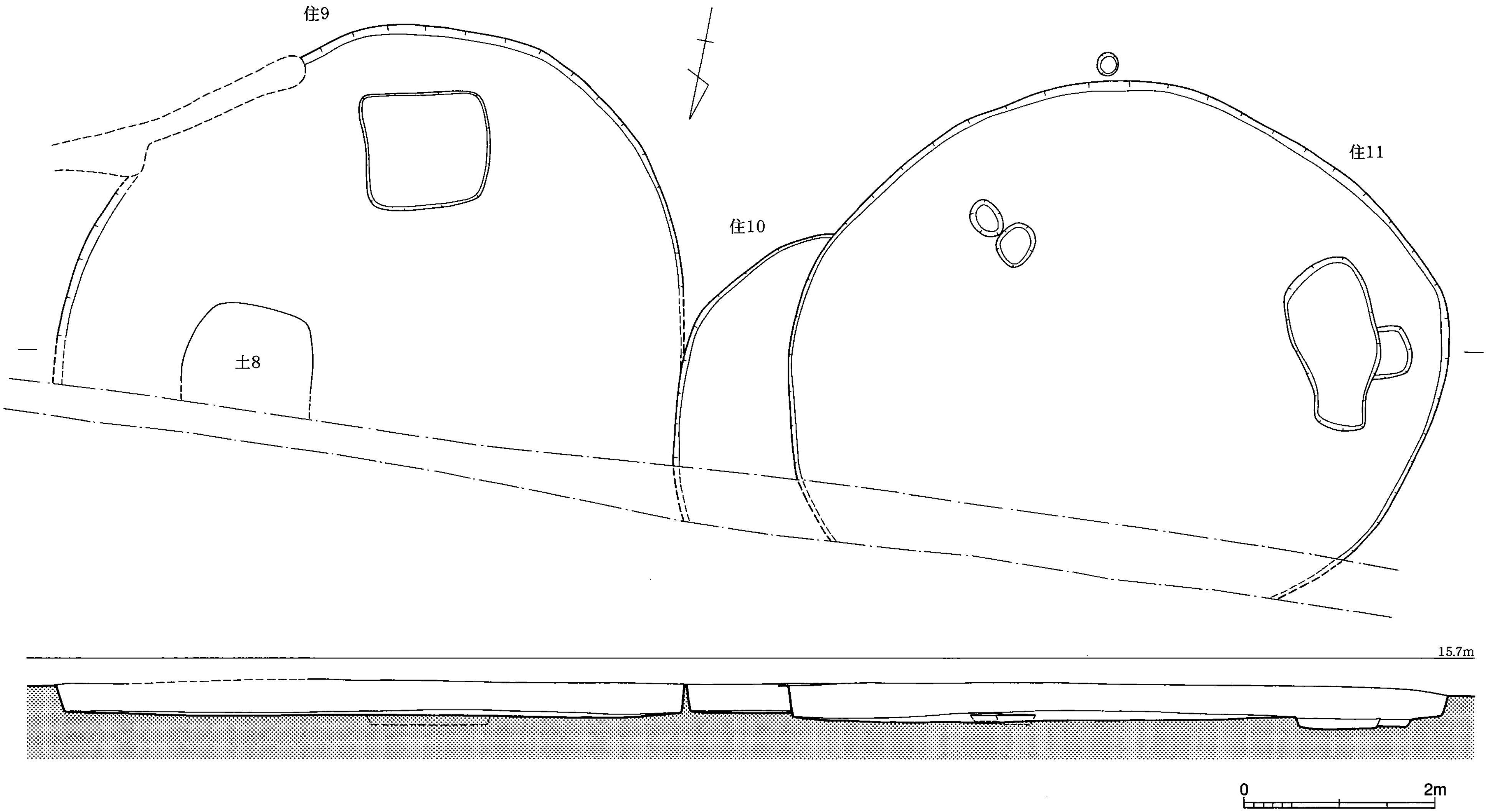
調査区北端、谷部の落ち際に位置する。大部分が調査区外になり正確な径は測れないが、4m前後であろう。深さは10cmを測る。徐々に掘り下げていき、ピットが検出できた時点で床面とした。ピットは主柱穴のように並ぶが10cm程度と浅く、掘り足りない可能性がある。遺物は出土していない。

13号竪穴住居跡（第37図）

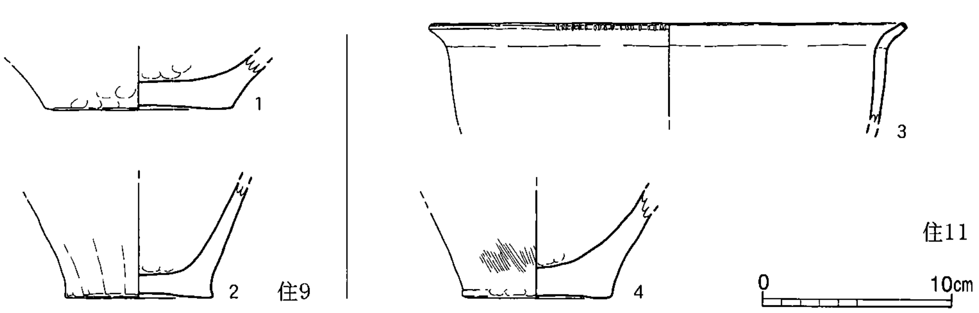
調査区ほぼ中央に位置し、1・4号住居跡にきられる。ごく一部しか残存しないため、規模は不明。深さは20cmを測る。

14号竪穴住居跡（第38図）

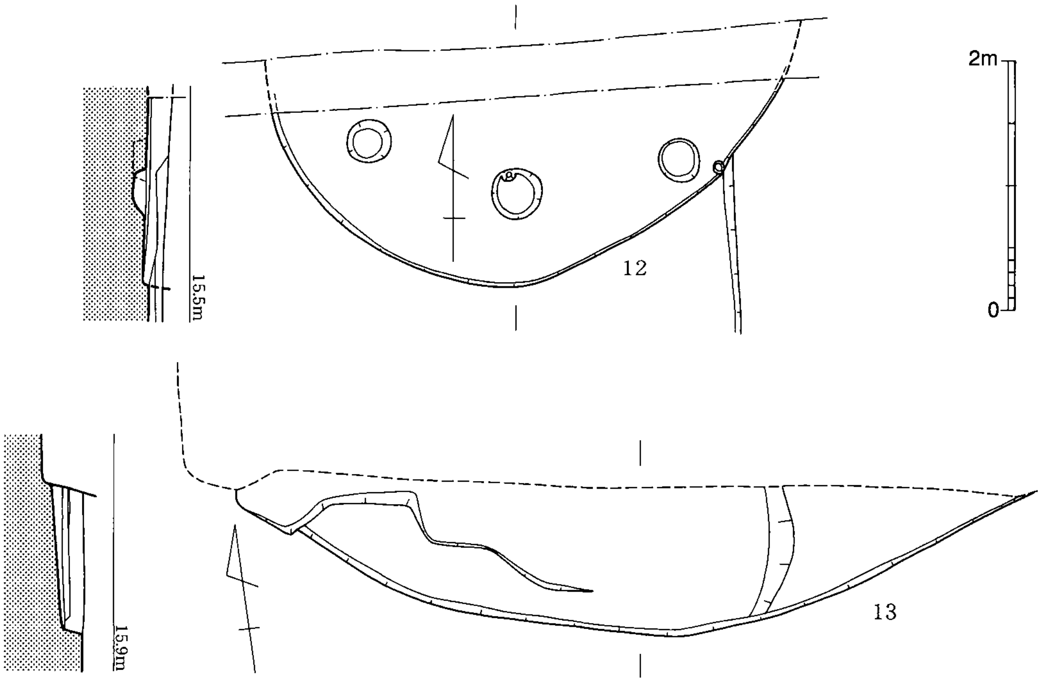
調査区南端中央、1・8号住居跡の南に位置する。遺構検出時に土色が異なるように感じ、トレ



第35図　9～11号竪穴住居跡実測図（1/60）



第36図　9・11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第37図　12・13号竪穴住居跡実測図（1/60）

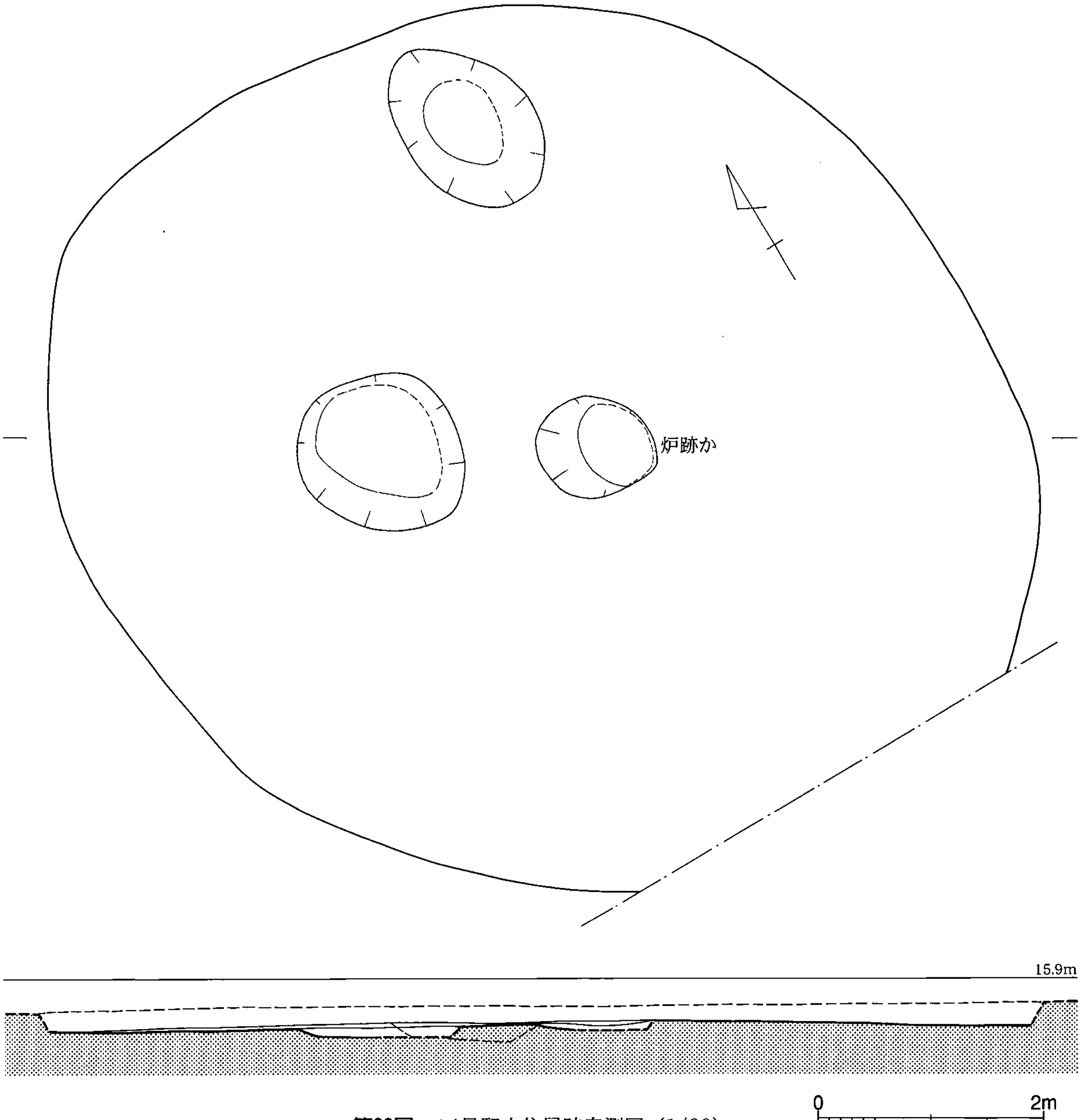
ンチを設定して床面の検出を試みても土層に変化が認められなかった。そのため、遺構ではないと考えて調査を進めたが、埋め戻し作業の際に炉跡と思われるピットが見つかり、住居跡であったことが分かった。深さは20cm前後に復元できる。上層の遺構ではなく、床面に掘り込まれたと考えられるピットを２基検出したが８～10cm程度と浅い。主柱穴は検出できなかった。炉跡と思われるピットの埋土は暗褐色砂質土で、焼土や炭化物は全く認められなかった。このピットから小型の壺型土器が、口縁部を上にして置いたような状態で出土した。

出土遺物（図版22、第40図）

弥生土器（1）　小型の壺である。底部から胴部へは強く湾曲するが胴部は球状に近く、頸部は外反しながら口縁部へとつながっているが、口縁部は失われている。肩部に二本の併行沈線をめぐらせる。内面特に頸胴部境の粘土帯接合部と外面下部に指頭圧痕が残り、器壁もやや厚い。また全体にややゆがみが見られるなど稚拙な作りである。内外面ともに最終調整はナデである。

18号竪穴住居跡（第39図）

調査区西寄りに位置し、５号竪穴住居跡にきられる。これも埋め戻し作業中に炉跡と思われるピッ

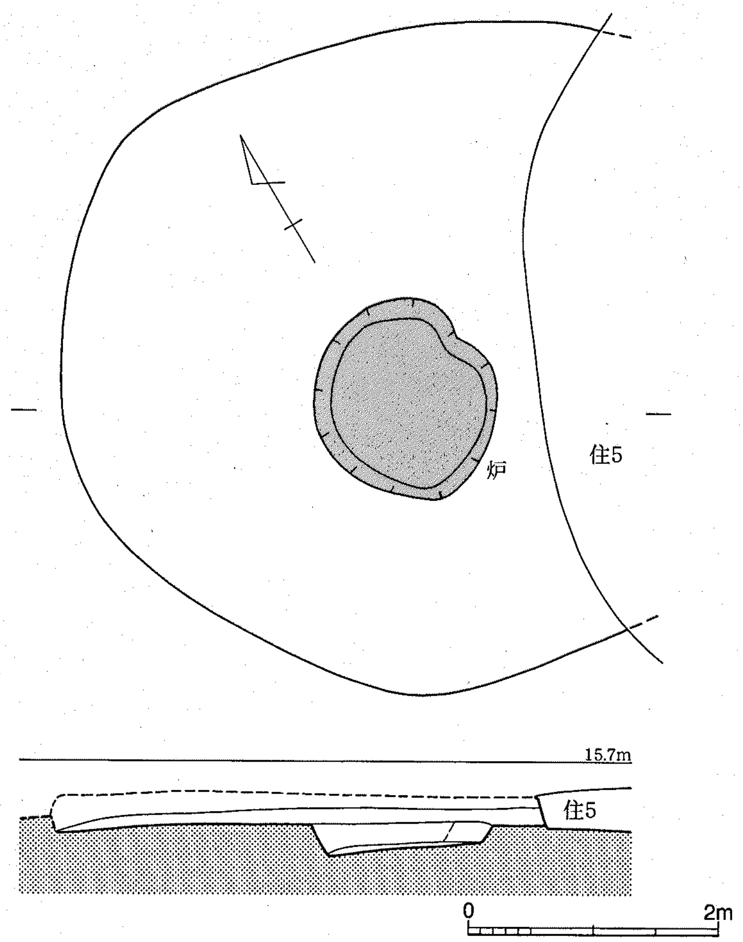


第38図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）

トを検出したことから、存在が判明した。床面の範囲は判然としないが、土色の観察から５～６ｍくらいに復元したが、ピットを炉跡とするならば、やや住居跡の径が狭い感じがする。深さは10㎝ほどに復元できる。炉跡と思われるピットは径約１ｍの不整円形で、埋土は茶褐色砂質土で、炭を少量含んでいる。出土した土器は全てこのピットからの出土である。

出土遺物（図版22、第40図）

弥生土器（２～６）　２・３は壺である。胴部上半から口縁・頸部境までが残存する。胴部最大径がかなり上部にあり、頸部との境にやや不明瞭な段を形成する。頸部は内傾しながら直線的に伸び、急激に屈曲して外反しながら口縁部へと続く。外面ミガキ、内面はナデ仕上げ。板付Ⅱ式に属する資料である。３は壺形土器の胴・底部か。胴部下半がややふくらみを有しており、立ち上がりがやや急であるが壺と判断した。外面に剥離・摩耗が顕著で外面ラインはやや旧状を反映しない部分があるが、底胴部境がよくくびれ、やや丸みを帯びながら立ち上がっており、胴部最大径が胴部の上方に来るものであろう。外面調整は不明であるが、内面はナデ仕上げであろう。４～６は甕形土器



第39図　18号竪穴住居跡実測図（1/60）

である。いずれも口縁部の資料であり、口縁部を外反させ端部を四角く収め、その全面に刻目を施す板付式の資料である。口縁部の外反度合いもそれほど顕著ではなく、古相を呈する。４は頸部に一条の沈線をめぐらせる。いずれも板付Ⅱ式の古相に収まるものであろう。すべて内外面ともにナデ仕上げである。

土坑

７号土坑（図版16、第42図）

調査区中央やや北寄りに位置する。不整方形で、長軸3.1m、短軸2.4m、深さ約30cmを測る。埋土は茶褐色砂質土で周囲の土との識別が困難なため、底や壁の検出がやや不正確なものとなっている。遺物は出土していない。

８号土坑（第42図）

調査区北端やや西寄りに位置し、９号竪穴住居跡をきる。北半が調査区外にのびるが、隅円長方形になると思われる。短軸1.3mを測り、長軸は1.1m以上になる。深さは35cmである。遺物は出土していない。

９号土坑（第42図）

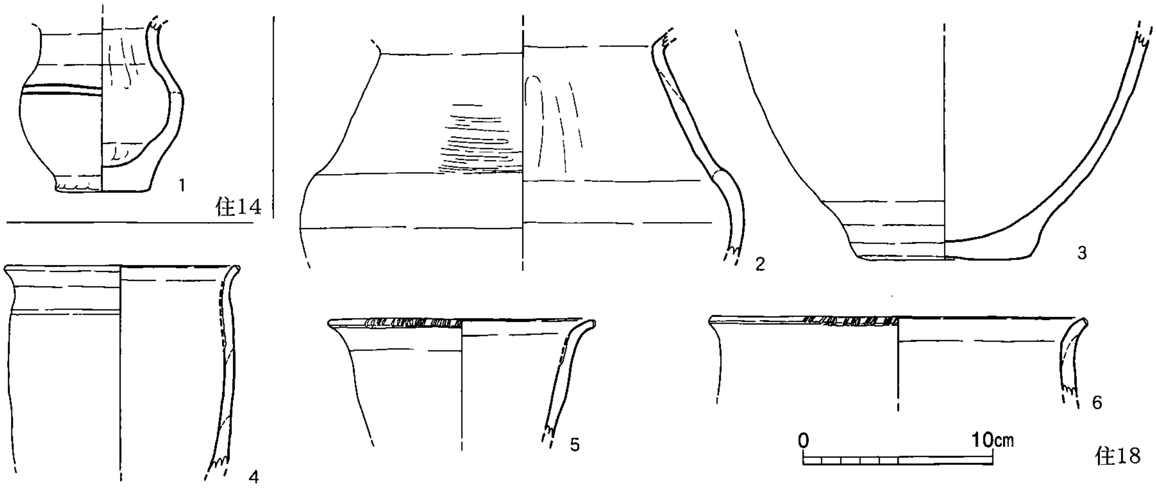
調査区中央南寄りに位置し、14号住居跡より新しい。隅円方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.2m、深さ18cmを測る。埋土は灰茶褐色砂質土であるが、14号住居跡の埋土の一部を土坑と認識した可能性がある。

出土遺物（第41図）

弥生土器（１）　甕の底部である。底部接合時の接合痕が明瞭に残る資料で、指頭圧痕が残るなど、全体に稚拙な作りである。胴部への立ち上がりが急であり、おそらく板付Ⅱ式でも古い段階の資料であろう。

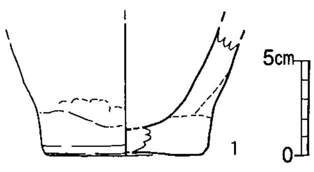
10号土坑（第42図）

調査区ほぼ中央、８号住居跡の南、14号住居跡の北に位置する。埋め戻し作業中に検出した。不整円形で、径は1.3～1.5mを測る。深さは30cmに復元できる。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。



第40図　14・18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

11号土坑（第42図）



第41図
8号土坑出土土器実測図（1/4）

調査区中央やや南寄り、14号住居跡の北西に位置する。埋め戻し作業中に検出した。不整形の土坑で、長軸2.2m、短軸1.8mを測る。深さは28cmほどに復元できる。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

12号土坑（第７図）

調査区北西寄り、11号住居跡の南、５号住居跡の北に位置する。埋め戻し作業中に検出した。不整円形の土坑で、長軸1.7m、短軸1.2mを測る。深さは6cmほどに復元できる。埋土は暗灰褐色砂質土で、遺物は出土していない。

溝

20号溝（第30図）

調査区ほぼ中央、8・14号住居跡にきられる南北溝。埋め戻し作業中に検出した。幅40cmを測り、深さは約20cmに復元できる。埋土は灰褐色砂質土。遺物は出土していない。

21号溝（第30図）

調査区東寄りを南北に通る溝。３号住居跡にきられる。幅は南端で1.1m、北端で1.0m、深さは南端で20cm、北端で32cmを測る。埋土は暗褐色砂質土。遺物は出土していない。

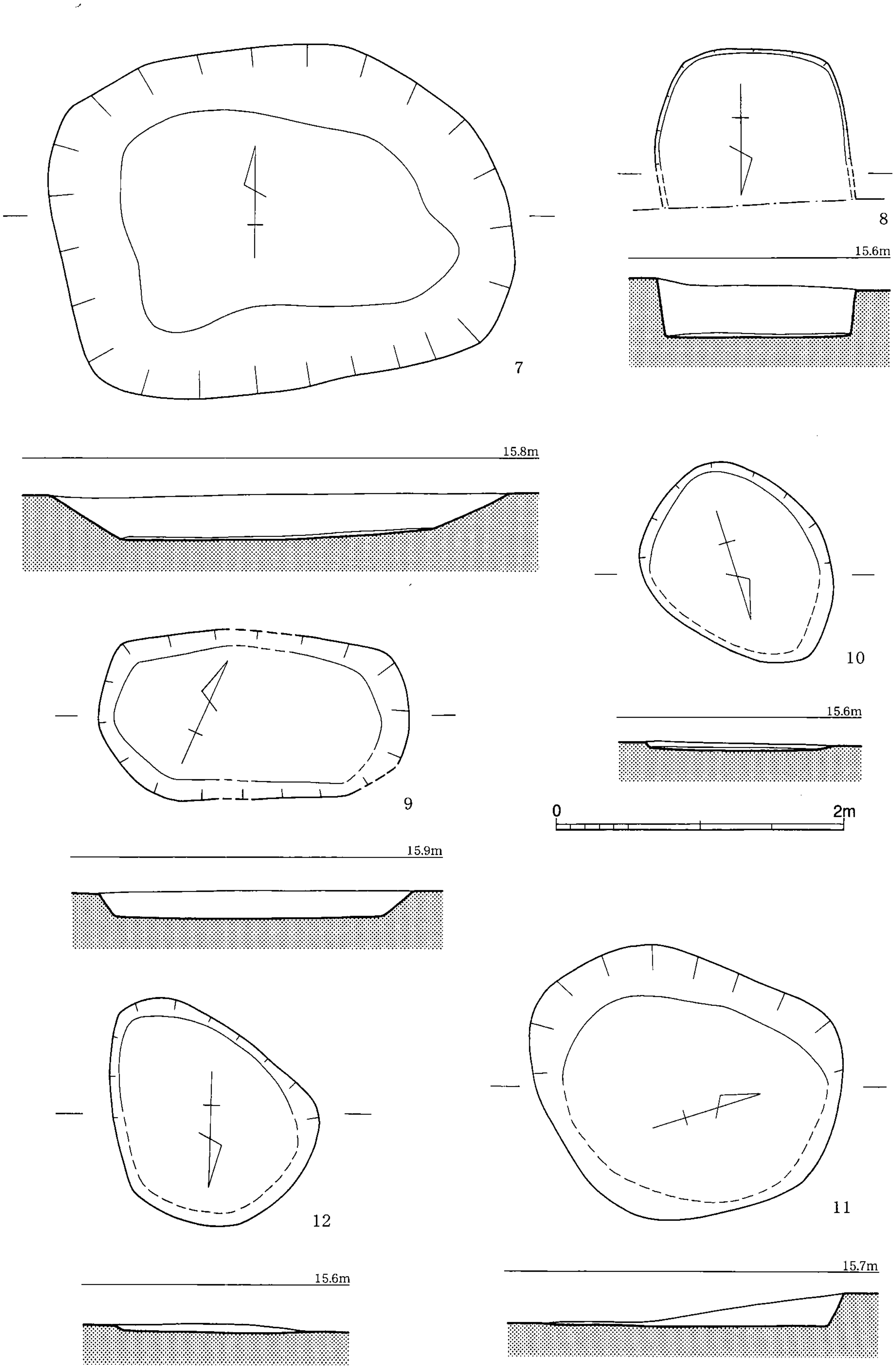
22号溝（第30図）

調査区東寄り東南から西北に通る溝。２・３号住居跡、４号土坑にきられる。幅は南端で22cm、北端で22cm、深さは南端で10cm、北端で15cmを測る。埋土は暗褐色砂質土。遺物は出土していない。

（４）その他の遺構と遺物

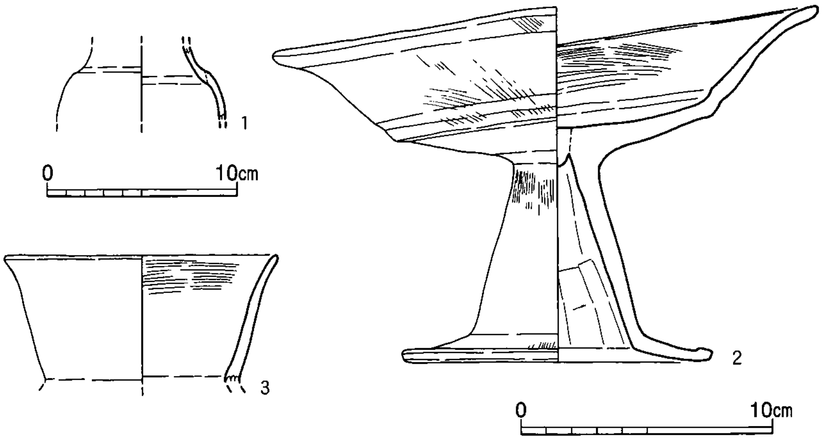
ピット出土遺物（図版22、第43図）

弥生土器（１）　胴部上半から頸部にかけて残存する。胴部上半は球状に近い形状をなし、頸胴部



第42図　7～12号土坑実測図（1/40）

に明確な段を形成する。この段は胴部上半を構成する粘土帯の内側に頸部の粘土帯を張り付けることによって形成しており、内面には明確な張り付け痕が一周する。頸部はやや外湾しながら内径しており、おそらく短く外反する口縁部へとつながるものと考えられる。板付式段階のミニチュア壺であろう。第二面P８から出土した。



第43図　ピット出土土器実測図（1は1/4, 他は1/3)

土師器（２・３）　２は古墳時代中期の高杯である。杯部は平坦な底部から明瞭に屈曲し、直線的に外反しながら立ち上がって口縁部を外側に湾曲させる。屈曲部の内外面には明瞭な段を形成する。脚部はやや内湾しながら筒状に伸び、ほとんど接地部に近い部分で急激に外側に屈曲する。屈曲後は直線的に伸び、端部はやや外側に肥厚させながら断面平行四辺形状に収める。調整は、杯部は内外面ともにハケメ、脚部は外面ハケメ後ナデ、内面ケズリ絞り、屈曲部以下はナデ。３は小形丸底壺である。口縁部のみの残存である。口縁部は軽くＳ字状に長く湾曲しながら外反し、端部をやや四角に収める。内外面ともにハケメ後ナデ。外面のナデは丁寧でハケメをほとんど消す。いずれも第二面Ｐ12からの出土であり、古墳時代中期のものであろう。

谷部出土遺物

調査区の東西はそれぞれ、浅い谷状地形になることは先述のとおりである。東側の谷の落ち際が調査区北東隅に僅かながらかかり、東南 - 北西方向を示す。西側の谷の落ち際も東南 - 北西方向で、微高地自体が東南 - 北西方向にのびることがわかる。

どちらも住居跡が近接することもあり、若干の土器が出土している。

東側谷部出土遺物（第44図）

弥生土器（１）　甕形土器の口縁部。口縁部を外反させ端部を四角く収め、その下端部に刻目を施す板付Ⅱ式（新相）の甕。外傾接合の接合面が断面に確認できる。内面に指ナデ痕が残り、外面はナデ。

土師器（２）　小形の甕の胴部か。タタキにより整形を行い、その後外面のみナデ仕上げ。内面は、上半部は強いナデにより薄く仕上げるが、下半部はタタキの当て具痕が明瞭に残り厚い。

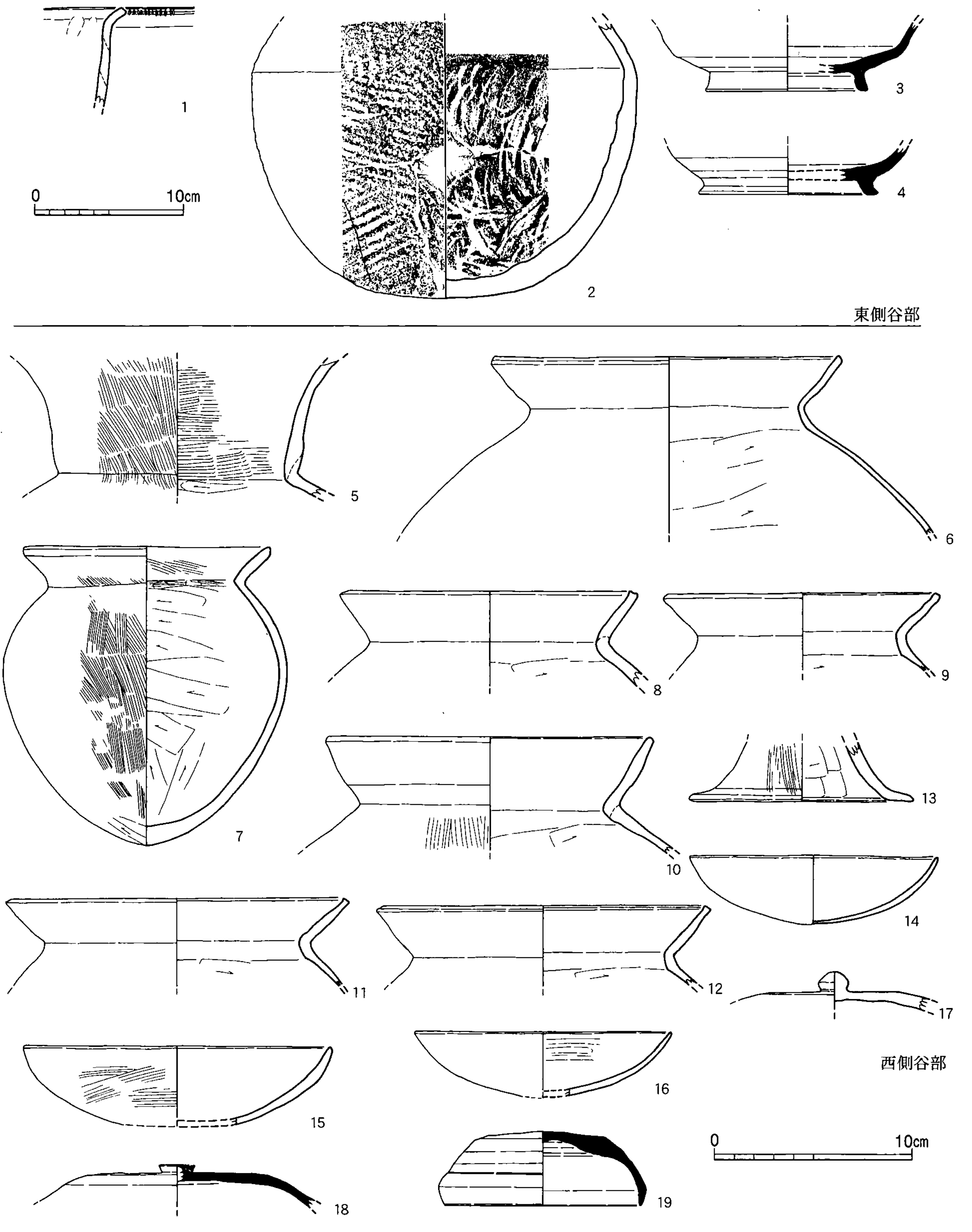
須恵器（３・４）　高台付きの杯。３は口縁部にかけてやや外反するものか。３の高台はやや華奢なのに対し、４は断面がしっかりとした平行四辺形で、杯部の器壁も厚い。ともに内面と高台は回転ナデ仕上げ、ほかは回転ヘラケズリ。いずれも７世紀後半～８世紀初頭に位置づけられるものである。

西側谷部出土遺物（図版23、第44図）

土師器（５～17）　５は壺である。やや外湾しながら広がる少し長めの頸部を持ち、胴部はおそ

らく球状に広がるものであろう。頸部のみの残存で、内外面ともにハケメ仕上げ。

6～12は甕である。6は大型の布留甕である。内面のケズリ調整が非常に丁寧に行われており、



第44図　東側谷部・西側谷部出土土器実測図（1は1/4, 他は1/3）

器壁が非常に薄い作りとなっている。７は畿内Ｖ様式系の甕か。底部がやや尖底状を呈し、球形の胴部を持つ。胴部最大径は胴中位よりやや高めにあり、口縁部はやや外湾しながら外反する。胴部の調整は外面はタタキ後ハケメ仕上げ、内面はケズリ。口縁部は内外面ともに丁寧なナデ仕上げで、このナデは胴部最上位にも及ぶ。外面下半にススが付着する。８～12も布留甕である。いずれも口縁部から頸部にかけてのみの資料である。いずれも外面は（ハケメ後）横ナデ、内面は口縁部ナデ、胴部ケズリ調整。

13は高杯の脚部である。脚部下半で屈曲して外反するが、屈曲部が脚端部にあって明瞭な屈曲線を持たない。

14～16は椀である。いずれも底部から緩やかに湾曲しながら比較的直線的に立ち上がるタイプで、器壁を薄く作る精製品である。摩耗が進んでいて調整は不明瞭だが、14は外面ヘラナデ、内面ナデ、15は外面がハケメ後ナデ、内面ナデ、16は外面ナデ、内面にミガキか。

17は須恵器を模倣した杯蓋である。上面はヘラ切り後ナデを施し、乳頭状のつまみをつける。以上のうち、13は古墳時代中期、17は７世紀後半～８世紀初頭、それ以外はいずれも古墳時代前期の資料である。

須恵器（18・19）　18・19は杯蓋である。18は頂部ヘラ切り後ボタン状のつまみをつける。内外面ともに回転ナデ調整。19は全体を回転ナデ調整仕上げ。18は７世紀後半～８世紀初頭、19は６世紀末～７世紀初頭の資料である。

包含層出土遺物（図版23、第45・46図）

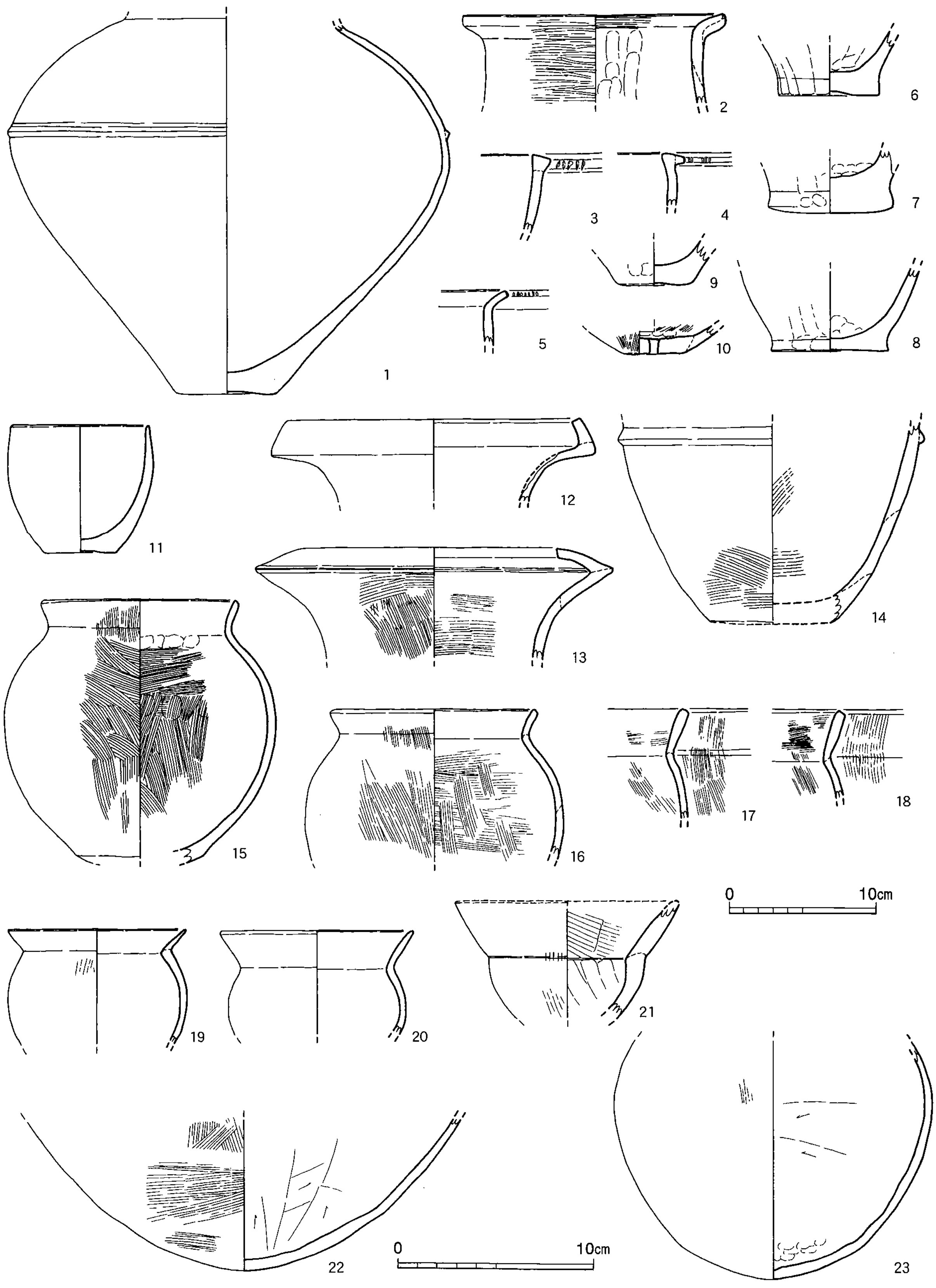
調査区東側に堆積していた暗褐色粘質土中から出土したものが主である。ほかに第２遺構面、第３遺構面検出時に出土した土器を含んでいる。

弥生土器（１～18）　１～11は前～中期の土器である。１は壺の胴底部である。底部から直線的に広がって胴部の上半に最大径があり、そこに一条の断面三角形の突帯をめぐらせる。全体に摩耗していて調整は判然としない。城ノ越式から須玖Ｉ式の早い段階の範疇に収まるものであろう。２は壺形土器の口縁部か。頸部以上の資料である。頸部は直線的に伸び、口縁部は屈曲して外反するが非常に短く、口縁端部下側に粘土帯を張り付けて肥厚させる。外面はやや幅が太く短いミガキ、内面は口縁部のみミガキ、それ以下はナデ仕上げ。内面には指頭圧痕がよく残る。城ノ越式か。

３～８は甕形土器である。３・４は口縁端部に断面三角形の突帯をめぐらせる城ノ越式期の甕の口縁部。いずれも突帯に刻目をめぐらせる。５も甕の口縁部である。如意状口縁を持ち、口縁端部はやや丸く仕上げ、下半部に刻目を施す。口縁の外反度から板付Ⅱ式の新段階。６～８は甕の底部。いずれも指頭圧痕や指ナデ痕が明瞭に残り、やや雑な作りで、胎土の特徴からも前期の資料であろう。特に７は底部が分厚く、前期末～中期初頭のものであろう。一方８は幅広で薄目の底を有し、前期後半の資料である。

９は壺の底部。全形は不明だが、やや立ち上がりが急である点や胎土の特徴等からおそらく城ノ越式から須玖Ｉ式期の、胴部最大径が上方に来る壺であろう。

11は椀形土器の一種であろうか。底部形状や色調、胎土等から考えて弥生時代中期のものであろう。平底で、底部からふくらみながら立ち上がり、口縁部まで直線的に伸びる。器高は8.8cm、底部径4.8cm、口径8.6cmと小型である。



第45図　包含層出土土器実測図①（1～17は1/4, 他は1/3）

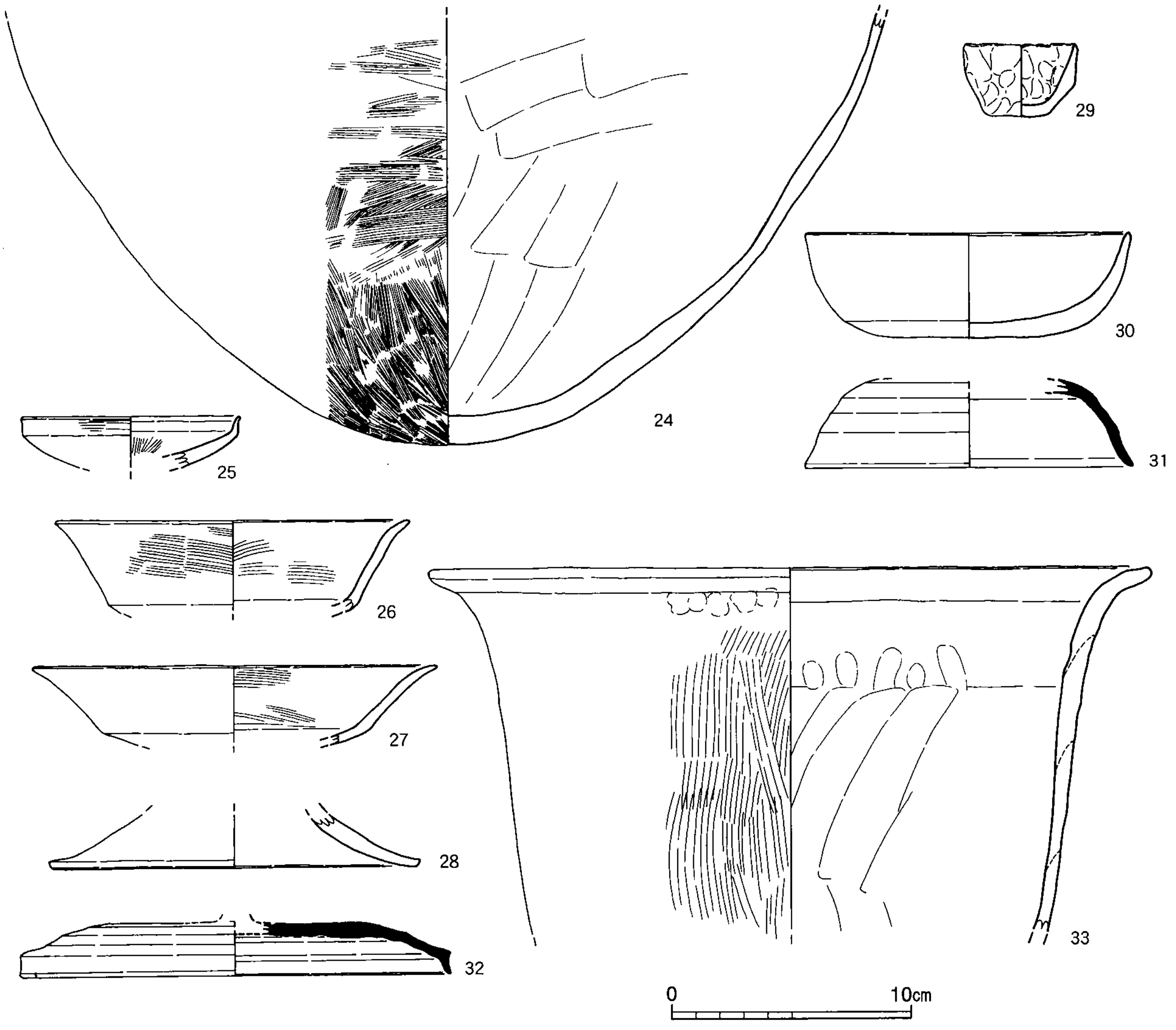
10・12〜17は後期の土器である。10は甕の底部。レンズ底から尖底に移行する過程にあり、後期後半の資料である。焼成前に外面から穿孔を施しており、甑として使われたものか。内・外面にハケメを施す。

12・13は複合口縁壺である。いずれも口頸部のみの資料で、頸部は外湾しながら広がり、明確な屈曲部を経て短い直線的な口縁部へと至る。口縁端部は四角く収める。12は口縁部の角度が比較的立ち上がるが、13は寝ている。口縁部の発達が顕著でなく、後期でも中葉を下るものではない。

14は甕か壺か判断が難しい。底部は失われているが、胴部は底部から比較的急に立ち上がり、やや内湾している。胴部上半以上も失われている。胴部の中程に断面三角形の突帯をめぐらせる。

15・16は短頸壺である。15はほぼ全形が判明する資料である。レンズ状の底部から球状の胴部を経て短く直線的に外反する口縁部へと至る。内面には指頭圧痕が残り、その上からハケメ、外面もハケメ調整。底部と胴部の境界は明瞭であり、後期中葉の資料である。16は胴部〜口縁部が残存するが、その形状は15とよく似ており、胴部下半以下もほぼ同様の形状を呈するであろう。内・外面ともに胴部は細かいハケメを施し、口縁部は横ナデ仕上げ。

17・18は甕の口縁部である。頸部に明瞭な屈曲部を有し、直線的で短く外反する口縁部へと続



第46図 包含層出土土器実測図② (1/3)

く。いずれも内外面ともにハケメ調整。後期後半以降の資料であろう。

土師器（19～30・33）　19～21は壺である。19・20は球形の胴部を持ち、やや湾曲しながら外反する短い口縁部を有する小型丸底壺である。いずれも端部を丸く収める。調整は摩耗により不明瞭だが、外面はハケメ後ナデ、内面はナデか。古墳時代前期のものか。21も小型の丸底壺である。半球形の胴部から口縁部が直線的に外反する。器壁が比較的厚く、内面調整に指ナデ痕が明瞭に残る。古墳時代前期。

22～24は布留甕の胴底部である。いずれも外面ナデ、内面はケズリによって器壁を薄く仕上げる。22は中型、23は小型、24は大型のものである。25は小型器台である。脚部は失われている。調整は摩耗により不明瞭だが、外面ミガキ、内面には同心円状に暗文状のミガキを施す。いずれも古墳時代前期のものである。

26～28は高杯である。26・27は杯部のみの残存で、胴部に明瞭な屈曲を有し、屈曲部から口縁部にかけてはやや外湾しながら伸び、端部を細く収める。調整は内外面ともに（ハケメ後）ナデ仕上げで、よく類似した資料である。28は高杯の脚部である。一部分のみの残存で全体形は復元し得ないが、残存部は外湾しながら広がり、脚端部を四角く成形する。

29は手捏ねのミニチュア土器である。内外面に指頭圧痕が多く残る杯形土器である。

30は椀である。底部は平坦で、比較的急な屈曲部を経て口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。全体にナデ仕上げか。

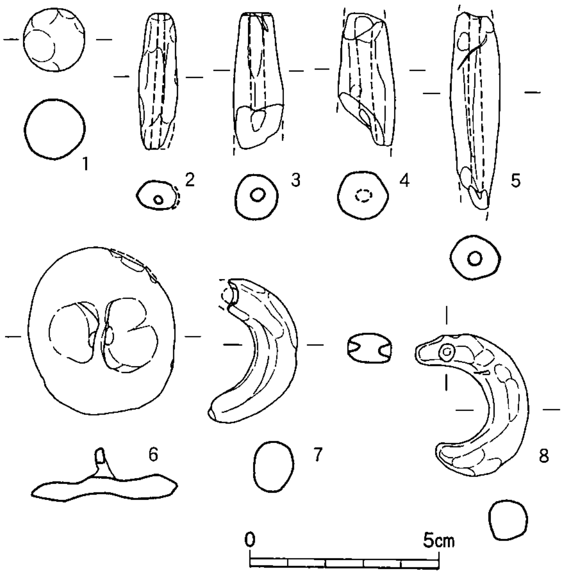
33は甑である。胴～口縁部の資料である。胴部は直線的に外反し、口縁部は強く外湾しながら広がるが短い。内面は指ナデ痕が強く残り、外面はハケメ調整。以上の資料はいずれも古墳時代中期～古代のものである。

須恵器（31・32）　31は蓋杯の蓋か。比較的平坦な頂部から湾曲しながら広がり、口縁部がわずかに外反する。６世紀末～７世紀初頭の資料である。32も蓋杯の杯である。上面はヘラ切りによる広い平坦部を持つ。おそらく宝珠形のつまみがつくものと思われる。肩部がやや屈曲しながら広がり、口縁端部は明確な陵を形成して下方に屈曲する。器高が比較的低く、７世紀後半～８世紀初頭のものである。

出土土製品（図版24、第47図）

土玉（1）　1は8号溝出土の土玉である。焼成は良好で、灰黄褐色を呈し、胎土は微細な砂粒を極めて少量含有する程度である。表面はやや摩滅が進むが、ナデ仕上げされている。径1.6cmで重さ3.1ｇである。

土錘（2～5）　2は包含層出土で、一部を欠失するがほぼ完形に近い。焼成は良好で、灰黄褐色を呈す。胎土は微細な砂粒及び赤色粒を少量含む。摩滅が著しく調整は不明であるが、ナデ仕上げさ

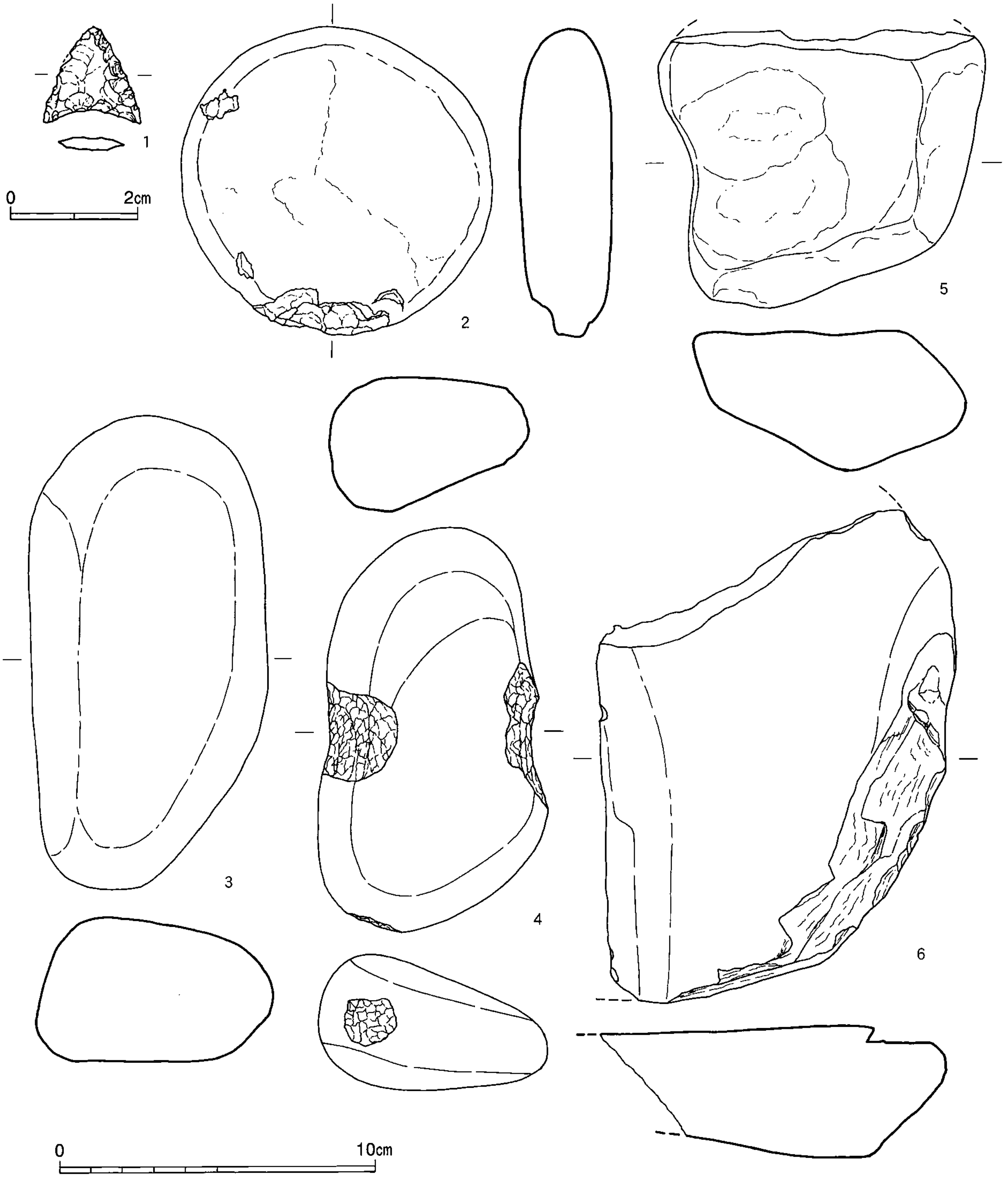


第47図　出土土製品実測図（1/2）

れていると考えられる。全長3.6cm、径1.1cm、孔径0.2cmである。

３は１号溝出土で、全体の半分程を欠失する。焼成は良好で、灰黄褐色～淡橙褐色を呈す。胎土はやや粗めの砂粒をごく少量含有する。全体に摩滅気味であるが、ナデ仕上げされている。現存長3.6cm、径1.3cm、孔径0.3cmである。

４は遺構面出土で、全体の半分以上を欠失する。焼成は良好で、灰黄褐色を呈す。胎土は微細な砂粒を少量と赤色粒を含有する。表面はナデ仕上げされる。現存長5.5cm、径1.5cm、孔径0.3cmである。



第48図　出土石製品実測図（１は1/1，他は1/2）

5は6号溝出土で、一部を欠失する。焼成は良好で灰黄褐色～淡橙褐色を呈す。胎土は微細な砂粒を極少量含む程度である。表面はナデ仕上げされる。現存長5.1cm、径1.3cm、孔径0.3cmである。

土製模造鏡（6）　6は4号土坑出土で、ほぼ完形に近い土製模造鏡である。焼成は良好で、暗橙茶褐色を呈す。胎土は径0.1～0.3cmの砂粒を非常に多量に含有し、またわずかながら角閃石を含有する。表面は全体的にナデ仕上げされている。縦4.5cm、横3.9cm、高さ1.4cm、重さ12.6ｇである。

土製勾玉（7・8）　7は4号竪穴住居跡出土で、完形に近いが、孔付近が一部欠失する。焼成は良好で、暗灰黄褐色から暗褐色を呈す。胎土は微細な砂粒を少量含有し、また雲母片を多量に含有する点が特徴的である。表面はナデ仕上げされている。現存長3.8cm、幅1.0cm、厚さ1.4cmである。

8は4号土坑出土で、完形である。焼成は良好で、暗茶褐色を呈す。胎土は微細な砂粒をやや多く含有する。表面はナデ仕上げされる。孔は表裏両側から穿孔されているが、貫通していない点が特徴的である。全長3.8cm、幅1.0cm、厚さ1.1cm、重さ9.2ｇである。

出土石製品（図版25・26、第48図）

石鏃（1）　1は3号竪穴住居跡出土で、ほぼ完形で小型の凹基式石鏃である。全体的に細かな調整剥離が施されている。全長1.6cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.4ｇである。サヌカイト製。

磨石（2）　2は3号竪穴住居跡出土で、ほぼ完形の磨石である。全体的に若干ながら平滑となっているが、顕著に使用された痕跡は窺えない。一部欠損しているが、故意に打ち欠いた可能性も考えられる。全長9.8cm、幅9.8cm、厚さ2.8cm、重さ375.6ｇで玄武岩製。

敲石（3・4）　3は7号竪穴住居跡溝出土で、完形である。顕著なものではないが端部に敲打に使用されたと考えられる痕跡が残存する。また、表裏面と左側面が研磨により若干平滑となっている。全長15.1cm、幅7.5cm、厚さ4.6cm、重さ912.9ｇで玄武岩製。

4は6号竪穴住居跡出土で、完形である。両側面に著しく敲打を施した部位があり、下端部には敲打に使用した部位がわずかながら認められる。また、表裏面は研磨に使用したと考えられ、若干平滑となる。全長12.8cm、幅7.3cm、厚さ4.3cm、重さ584.5ｇで玄武岩製。

砥石（5・6）　5は7号竪穴住居跡溝出土で、一部を欠失する。全体的に平滑で稜は緩く丸みをもった形態となっているが、風化の影響が強く、明確な使用は表面のみと考えられる。また、左側面には抉りを施した可能性がある。現存長8.8cm、幅10.2cm、厚さ4.4cm、重さ586.9ｇで安山岩製。

第49図　出土鉄製品実測図（1/2）

６は２号竪穴住居跡出土で、大きく欠損している。表面のみが使用により非常に平滑となっている。現存長15.7㎝、厚さ4.3㎝、重さ1001.7ｇで片岩製。

出土鉄製品（図版24、第49図）

刀子（１～３）　１は５号土坑出土で、大部分を欠失しており、関部付近の身部および茎部がわずかに残存するのみである。現存長2.3㎝、幅1.2㎝、厚さ0.15㎝である。２は３号竪穴住居跡出土で、大部分を欠失している。断面円形に復元できる部位が茎部を包み込むような形で残存しているが、その径は非常に小さい。したがって、そのままその部位が柄部となっているかは明確ではない。残存長3.75㎝、幅1.1㎝、厚さ0.1㎝、着柄部の径1.2㎝である。３は４号竪穴住居跡出土で、身部は大部分が残存するが、柄部はほとんどが欠失している。着柄部に木質が残存するほか、身部の表裏にも木質が銹着しているため、鞘に納めていた可能性も考えられる。現存長8.1㎝、身部幅1.3㎝、身部の厚さ0.2㎝である。

小札（４）　４号土坑出土で、小札と考えられ３ヶ所に円形の孔が残存する。現存長5.7㎝、厚さ0.1㎝である。

銛（５）　３号住居跡出土で、銛と考えられるが、大型の鏃である可能性もある。身部は大部分が断面レンズ状で、茎部は銹化が進んでいるが、断面は方形と考えられる。また、逆刺部の断面はやや形の崩れた菱形を呈す。現存長6.5㎝、厚さ0.5㎝である。

鉄滓（６）　遺構面出土の含鉄鉄滓である。表面は全面酸化物に覆われているが、ところどころに滓がのぞく。新しい破面部から黒色で光沢がある点が観察される。また、気泡が多い。メタル度は銹化（△）で、磁着度なしである。現存長5.2㎝、幅4.9㎝、厚さ2.3㎝、重さ98.5ｇである。

第２表　大的遺跡出土　土製品・石製品・鉄製品一覧表

挿図番号	種類	出土場所	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
47－1	土玉	8号溝		1.6		3.1		
47－2	土錘	包含層(暗褐色土)	3.6	1.1				
47－3	土錘	1号溝	(3.6)	1.3				
47－4	土錘	遺構面	(5.5)	1.5				
47－5	土錘	6号溝	(5.1)	1.3				
47－6	土製模造鏡	4号土坑	4.5	3.9	1.4	12.6		
47－7	土製勾玉	4号竪穴住居跡	(3.8)	1.0	1.4			穿孔は貫通しない
47－8	土製勾玉	4号土坑	3.8	1.0	1.1	9.2		
48－1	石鏃	3号竪穴住居跡	1.6	1.5	0.2	0.4	サヌカイト	
48－2	磨石	3号竪穴住居跡	9.8	9.8	2.8	375.6	玄武岩	故意の打ち欠きの可能性あり
48－3	敲石	7号竪穴住居跡	15.1	7.5	4.6	912.9	玄武岩	研磨にも使用
48－4	敲石	6号竪穴住居跡	12.8	7.3	4.3	584.5	玄武岩	研磨にも使用
48－5	砥石	7号竪穴住居跡	(8.8)	10.2	4.4	586.9	安山岩	
48－6	砥石	2号竪穴住居跡	(15.7)		4.3	1001.7	片岩	
49－1	刀子	5号土坑	(2.3)	1.2	0.15			
49－2	刀子	3号竪穴住居跡	(3.75)	1.1	0.1			着柄部一部残存
49－3	刀子	4号竪穴住居跡	(8.1)	1.3	0.2			着柄部一部残存
49－4	小札	4号土坑	(5.7)		0.1			3ヶ所に円形孔残存
49－5	銛	3号竪穴住居跡	(6.5)		0.5			大型鏃の可能性もあり
49－6	鉄滓	Ⅱ区遺構面	(5.2)	4.9	2.3	98.5		メタル度は銹化（△）

Ⅳ　おわりに

遺構面ごとに遺構相互の関係や状況について整理していく。

まず第１遺構面だが、６号溝以外は出土遺物もなく、はっきりとした時期や機能を特定するのは難しい。また、６号溝との関係も今ひとつはっきりしない。

６号溝は遺物が少量ではあるが出土しており、８世紀の前半にはその機能を停止していたと考えてよいと思われる。遺跡が存する微高地が東南 - 北西に伸びるのに対して６号溝はほぼ南北に通っている。調査区外の状況が全くわからないが、調査区内では地形の制約を受けているようには見受けられず、なんらかの意図が働いているように感じられる。律令期における条里制と関係があるかもしれない。

第２遺構面の遺構の時期は、住居跡の構造と出土土器から古墳時代中期である。

住居跡は、その主軸の方向から２群に分けられる。主軸を南北にとる群（3A・3B・４号住居跡＝Ａ群）と、主軸が西にふれる群（2・6・7住居跡＝Ｂ群）である。

Ａ群の住居跡であるが、近接しているため同時並存はしていない。Ｂ群の住居跡については、やはり近接しているため６号住居跡と７号住居跡は並存していない。２号住居跡は位置が離れており、同時に建っていた可能性はあるが、どちらと並存していたかははっきりしない。また、２号住居跡と４号住居跡も近接するため、並存していたとは考えられない。住居跡同士の切りあい関係はなく、Ａ群とＢ群の関係、各群内の住居跡の先後関係も、今回の調査区内の状況からはなんともいえない。

出土土器は、住居跡に確実に伴うものがほとんどないが、住居跡の埋没時期を反映してはいるであろう。出土土器を比較してみると、2・3・4・7号住居跡出土土器はいずれも６期（古墳時代中期中葉）(7)に相当する時期を示している。これらの住居跡出土土器の間に特に時期差は認められない。あえていえば、３号住居跡に投げ込まれた土器の中に小型丸底壷が多く含まれており、他の住居跡出土土器よりもやや古い様相を示している感がある。６号住居跡出土土器は杯を含んでいないため５期に相当するとおもわれる。他の住居跡からは、杯は量の多少はあっても出土しており、同時期であったとするならば、全く出土していない６号住居跡の状況は説明しにくい。他の住居跡よりも若干早い時期に埋没したと考えるべきであろう。

４号土坑は古墳時代前期の土器も出土するが、住居跡と同時期の土器も多くみられる。埋没の時期は住居跡と同時期であろうが、掘削された時期は住居跡よりも早い時期であった可能性がある。規模、平面形ともＡ群の住居跡に似通っている。壁の立ち上がりがゆるい、床面が平らにならない、床面にピット等の遺構がない、との理由で住居跡ではなく、土坑と判断した。また、埋土の状況も他の住居跡と異なり、住居跡が粘質土、砂質土を中心とした埋土であるのに対して、砂、砂質土が中心である。

５・６号土坑は土器の出土が見られず、正確な時期は不明だが、埋土の状況などから住居跡と同時期と考えてよいと思われる。

掘立柱建物についても土器が小片のため正確な時期は決めにくいが、埋土の状況から住居跡とほぼ同時期と考えてよいだろう。ただし、４号土坑と近接するため並存していたとは考えにくく、４号土坑埋没後に建てられたと考えられる。

以上、不明な点も多いが、カマド出現期の集落の一様相を示す資料として貴重な事例である。東側谷部の東岸（大的遺跡２次調査区）にも同時期の住居跡が調査されており、また、日詰遺跡も２

次調査が実施されている。本遺跡が立地する微高地周辺の集落の展開、変遷の様子が明らかになるものと思われる。

また、近隣の報告された遺跡の中では、仁右衛門畑遺跡（吉井町）[8]に同時期の住居跡が多くみられ、塚堂遺跡（吉井町）[9]、鷹取五反田遺跡（吉井町）[10]でも数軒確認されている。筑後川南岸の集落展開や土地利用の状況などを明らかにしていく手がかりの一つとすることが出来るだろう。

さて、第３遺構面の遺構は弥生時代前期後半のものである。土器の出土量が極端に少なく、住居跡の正確な時期を知る手がかりに乏しい。また、遺構そのものが確実性に欠ける面をもつため、残念ながら具体的な検討が出来ない。ただ、南側に隣接する水分遺跡よりも若干先行する集落である可能性があること、板付Ⅱ式の段階で既に低地に住居跡が存在すること、を指摘できる。

しかし、隣接する水分遺跡、大的遺跡２次調査区には城ノ越式期の遺構が確認されるが、本調査区内では包含層中や谷部から少量の須玖式土器が出土するものの、中期の遺構は見られない。本遺跡の第３遺構面の標高は約16m、水分遺跡の遺構面は約18mで、その比高差は2mである。砂地に展開した住居跡は定着することができず、高台の集落だけが存続したのであろうか。

近隣の遺跡で同時期の遺物が出土する遺跡は少なく、遺構が調査されたものは更に少ない。その中にあって、住居跡が多数存在する本遺跡は大変貴重な事例である。地下水の影響とはいえ、不十分な調査に終わったことが残念でならない。

本遺跡は古墳時代中期、弥生時代前記後半の集落だが、どちらの時期も何かが新しくこの土地に根付き始めた時期にあたる。あるいはカマド、あるいは水稲耕作と、人々の生活のあり方に直接関わってくるものである。決して居住条件がよいとはいえない低地に集落を営んでいることとも考え合わせ、興味深い示唆に富んだ遺跡であると思う。今後の調査の進展により、筑後川南岸の集落の様相が明らかになることを期待する。

註

(1)児玉真一編1988『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-14-』甘木市所在宮原遺跡の調査Ⅰ（Ｂ・Ｃ地区）福岡県教育委員会

(2)三輪町教育委員会編1985『犬竹遺跡』三輪町文化財調査報告書第４集　三輪町教育委員会

(3)児玉真一・佐々木隆彦編1996『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-38-』小郡市大字井上所在の井上薬師堂遺跡の調査２　福岡県教育委員会

(4)筆者実査。板材を打ち込んだと思われる痕跡を検出後、北筑後教育事務所に転出したため、記録を残すことができなかった。上記の痕跡は、東台地１号住居の西側ベッド状遺構に沿う小溝の土層断面に検出した。

(5)緒方泉編1993『日永遺跡Ⅰ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集　福岡県教育委員会

この報告書の巻頭図版３、及び巻尾図版52には、４本柱のうち南東に位置する柱穴の上に一個の石を置いている状態の写真が掲載されている。ただ、第88図として示された52号住居跡実測図には、この石は図示されていないが、両図版と図面とを勘案すれば、柱を引き抜いた後、柱穴の上に石をおいたもののようである。

(6)註(1)に同じ。

(7)重藤輝行「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」

吉田東明編2000『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係文化財調査報告第12集　福岡県教育委員会
(8)吉田東明編2000『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係文化財調査報告第12集　福岡県教育委員会
(9)馬田弘稔編1983『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集　福岡県教育委員会
副島邦弘編1984『塚堂遺跡Ⅱ　A地区』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集　福岡県教育委員会
佐々木隆彦編1984『塚堂遺跡Ⅲ　E地区』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集　福岡県教育委員会
馬田弘稔編1984『塚堂遺跡Ⅳ　D地区』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集　福岡県教育委員会
馬田弘稔編1988『塚堂遺跡Ⅴ　E地区（1・3～6地点)』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集　福岡県教育委員会
(10)水ノ江和同編1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集　福岡県教育委員会

大的遺跡Ⅰ
図　版

浮羽バイパス建設予定地を望む（東から　手前が1次調査区　空中写真）

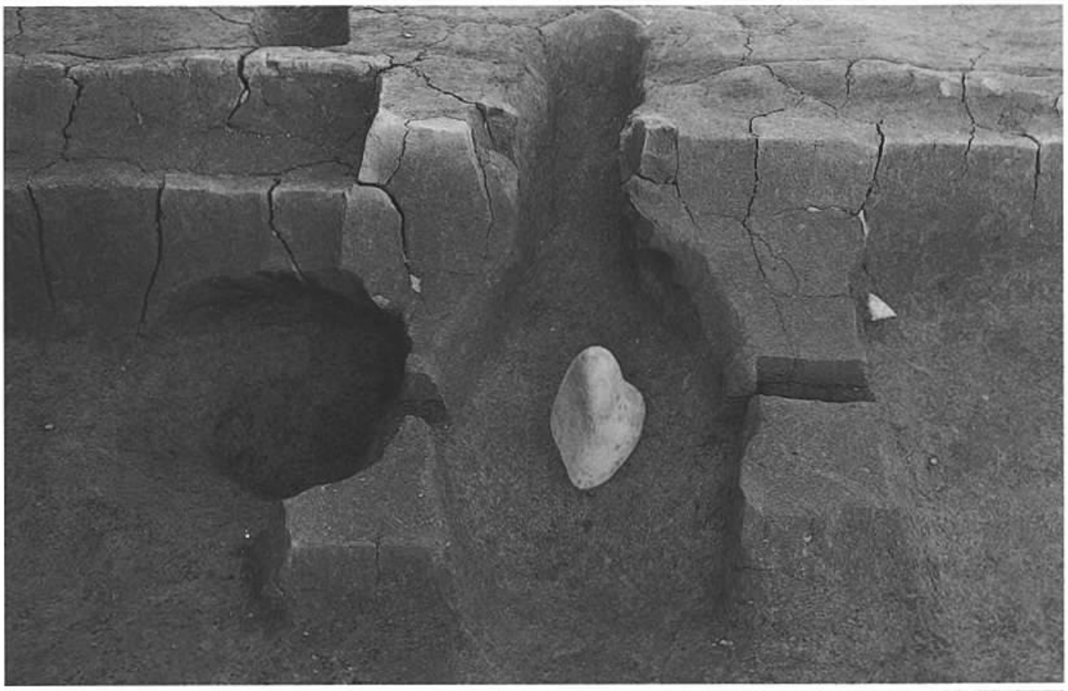
大的遺跡1次調査区第2遺構面全景（上が北　空中写真）

6号溝土層断面（北から）

2号竪穴住居跡（南東から）

2号竪穴住居跡カマド
（南東から）

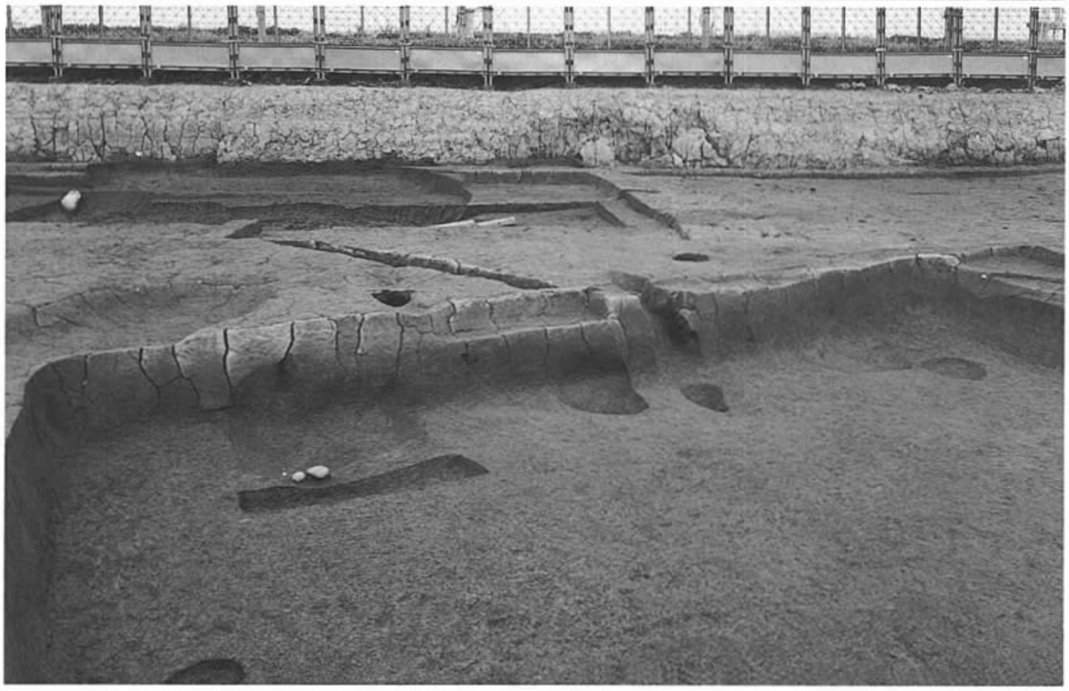
2号竪穴住居跡カマド
（南東から）



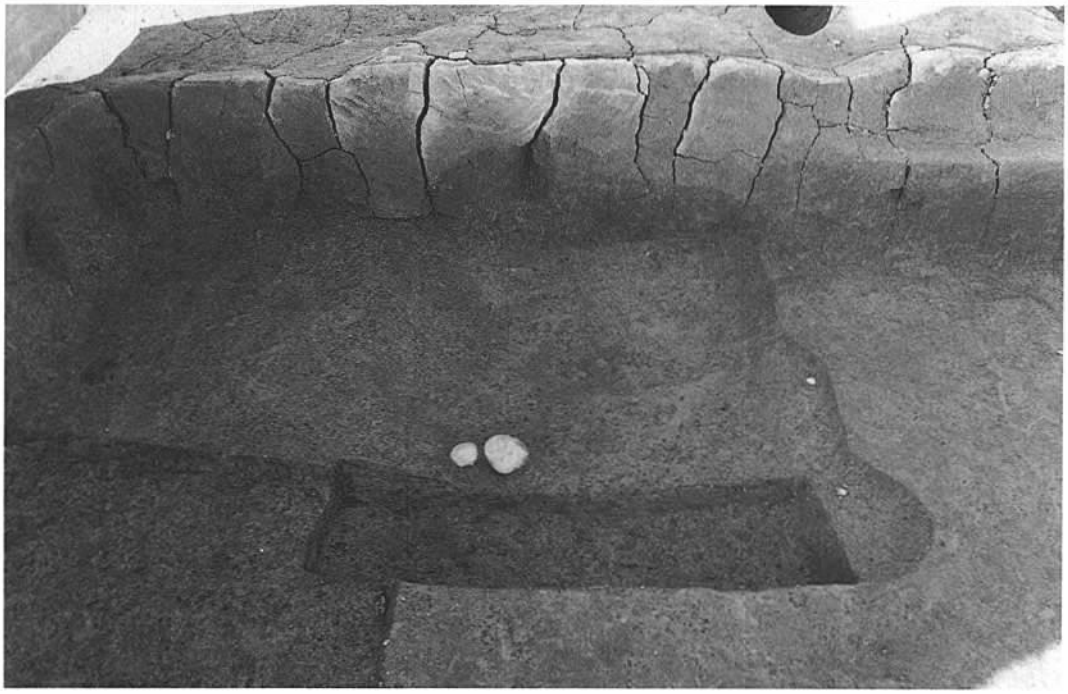
2号竪穴住居跡カマド
完掘状況（南東から）

2号竪穴住居跡カマド
土層（南東から）

2号竪穴住居跡カマド
土層（南西から）



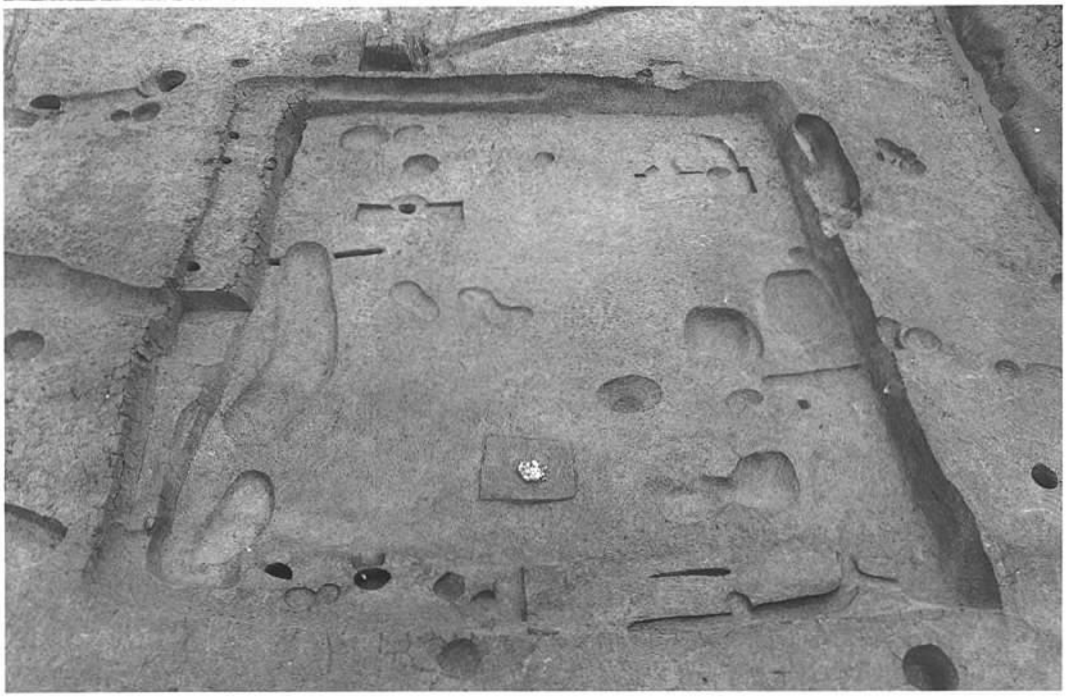
2号竪穴住居跡
壁際土坑（南西から）



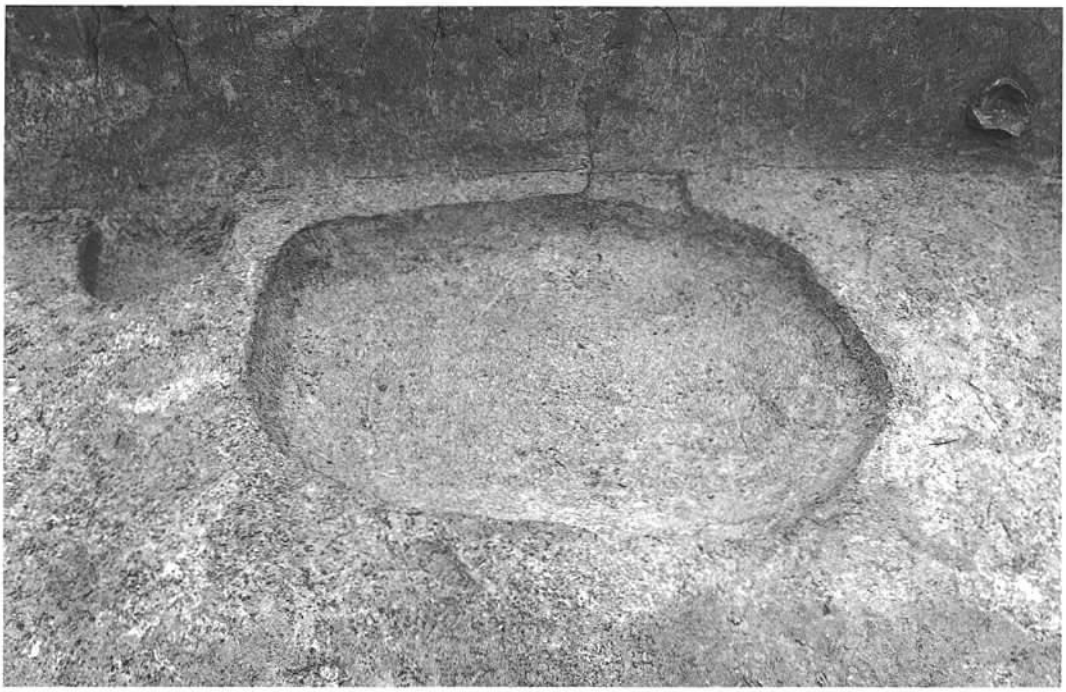
2号竪穴住居跡
壁際土坑1（南東から）

2号竪穴住居跡
壁際土坑2
（南東から）

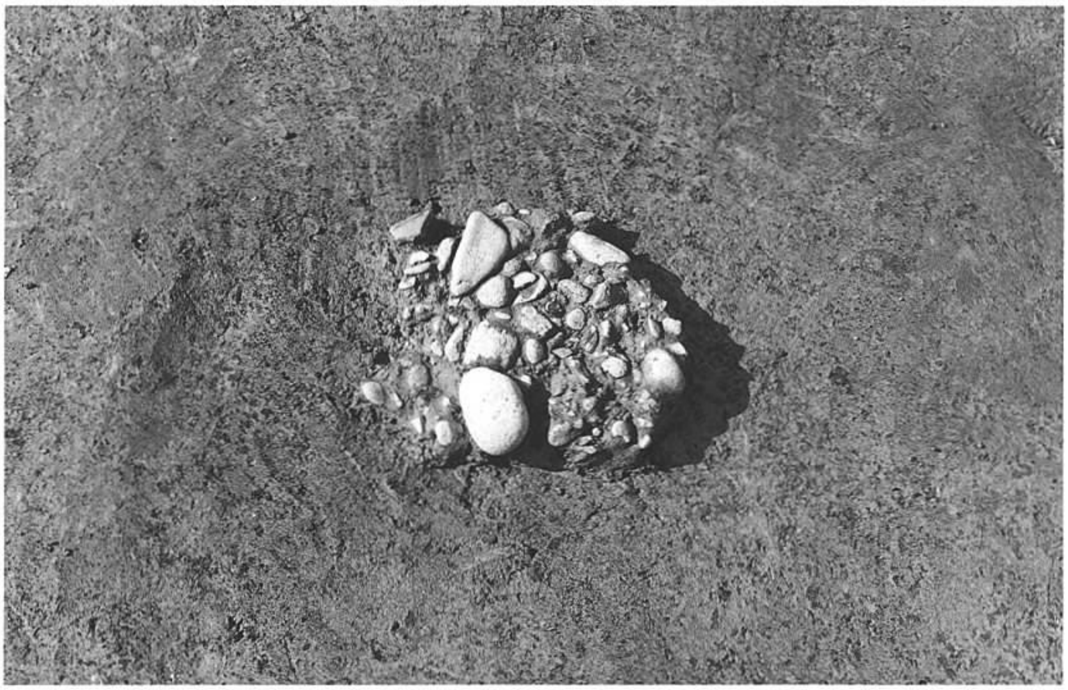
2号竪穴住居跡
土器出土状況
（西から）



3号竪穴住居跡
（西から）



3号竪穴住居跡
屋内土坑（北から）



3号竪穴住居跡
小石集積状態（東から）

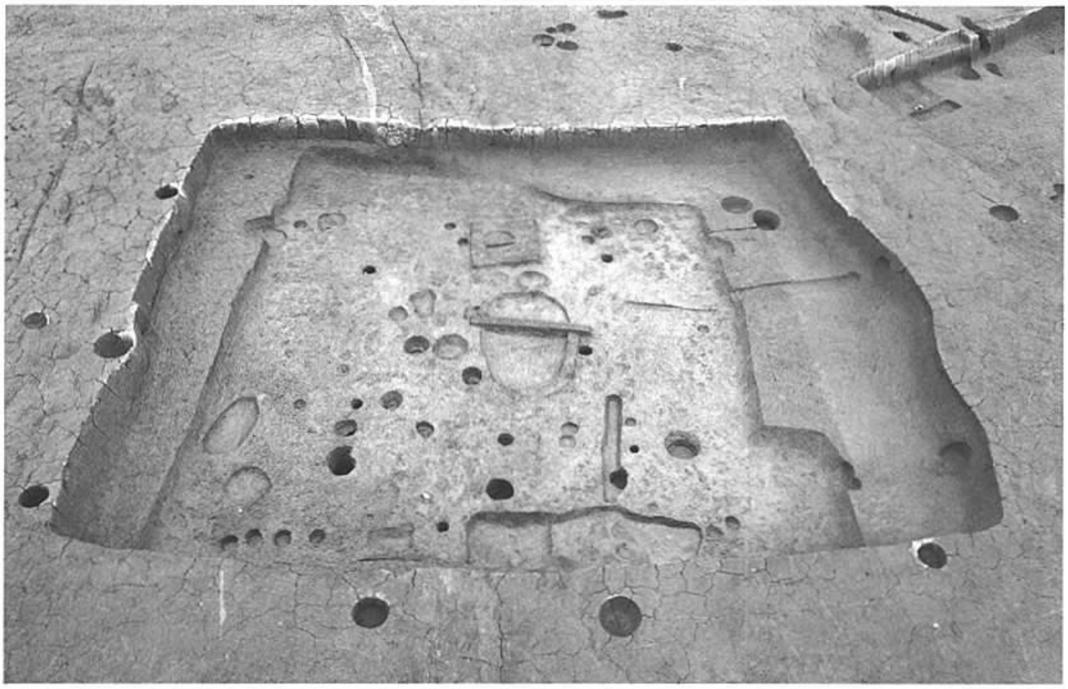
3号竪穴住居跡
壁小溝（南から）

3号竪穴住居跡壁小溝
土層断面
（北西から）

3号竪穴住居跡壁小溝
土層断面
（北から）

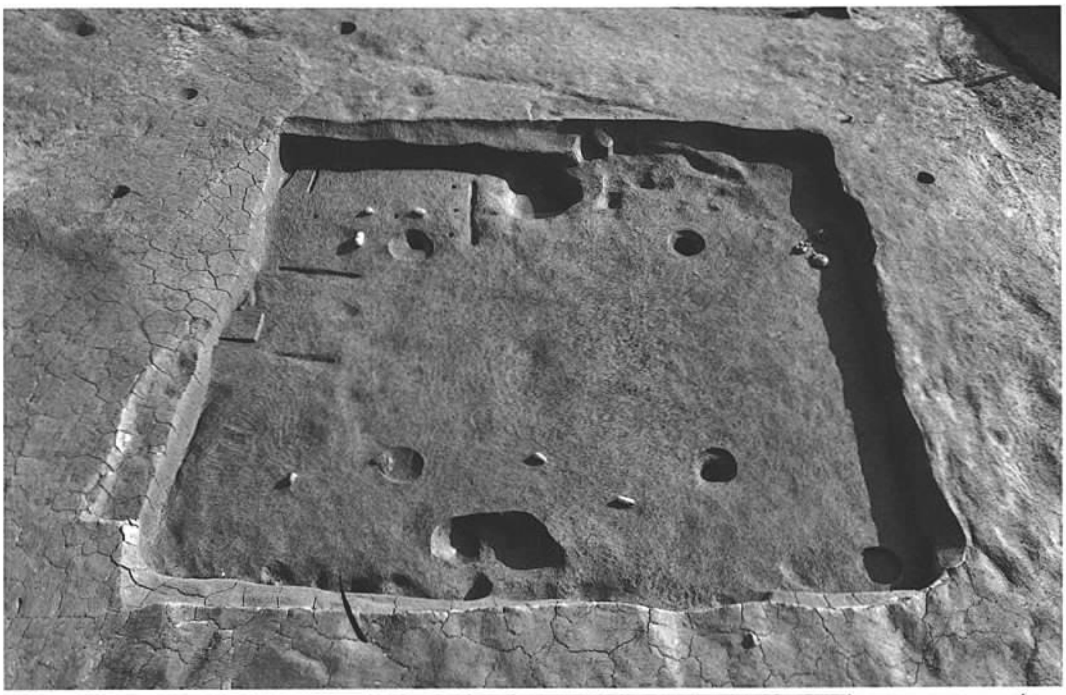
3号竪穴住居跡壁小溝
土層断面
（北から）

4号竪穴住居跡（南から）



4号竪穴住居跡
完掘状況（南から）

4号竪穴住居跡
屋内土坑（北から）



6号竪穴住居跡
（北西から）

6号竪穴住居跡
屋内土坑1
（南から）

6号竪穴住居跡
屋内土坑2
（北から）

6号竪穴住居跡
小ピット、区画小溝
（北西から）

6号竪穴住居跡
土器出土状況（北から）

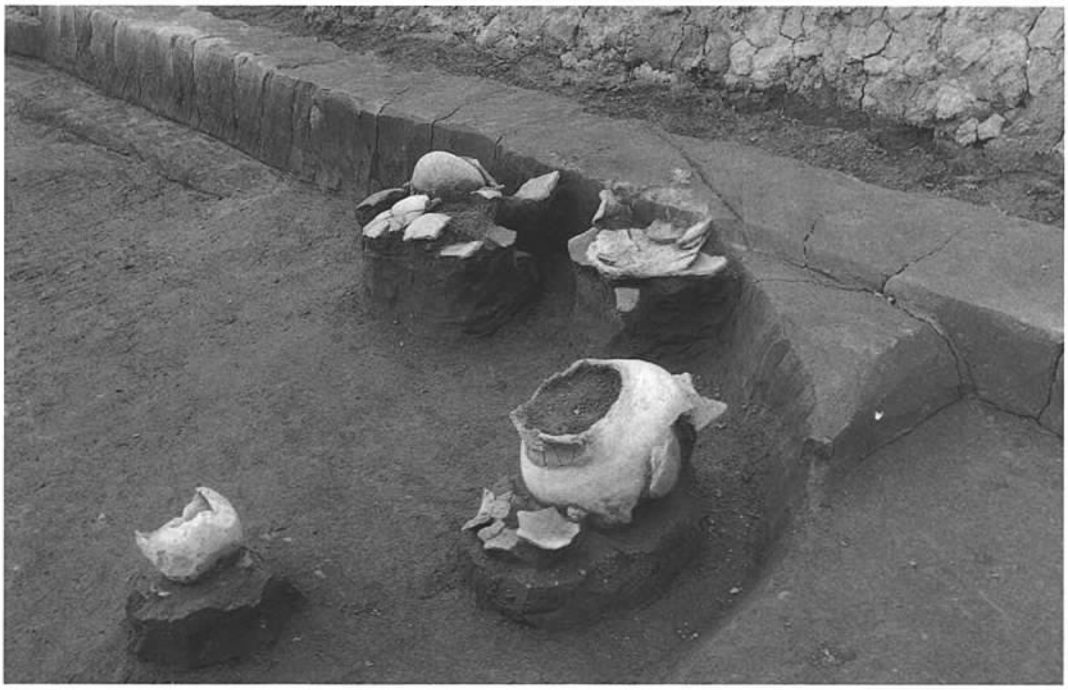
6号竪穴住居跡
土器出土状況（北から）

7号竪穴住居跡
（北東から）

7号竪穴住居跡
完掘状況
（南東から）

7号竪穴住居跡
屋内土坑
（北西から）

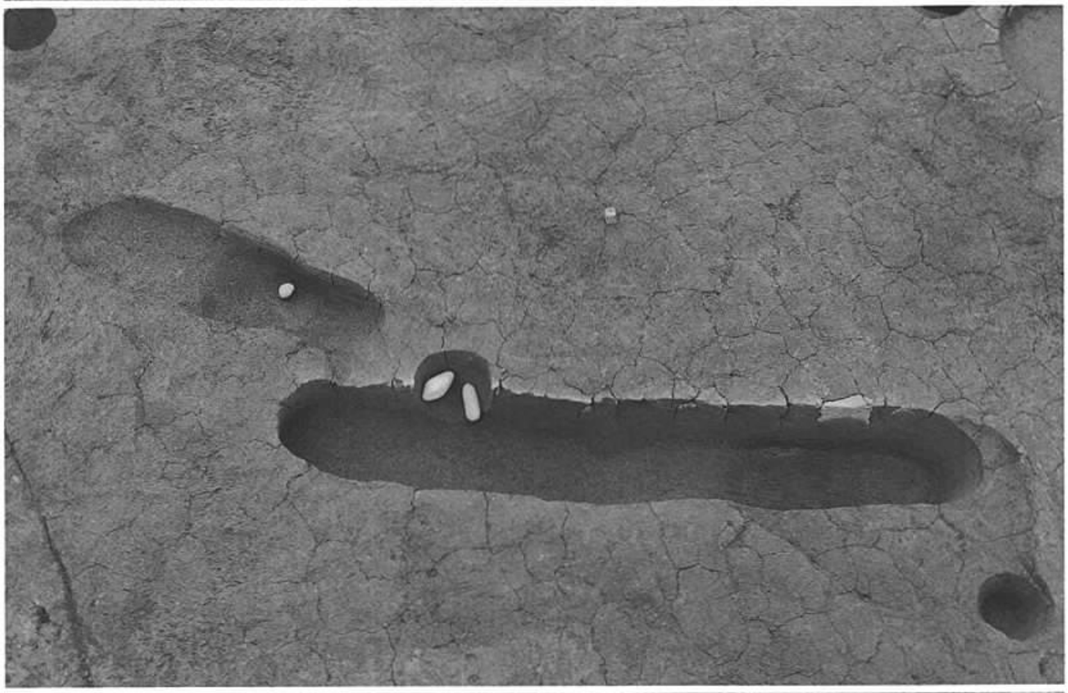
4号土坑（北から）



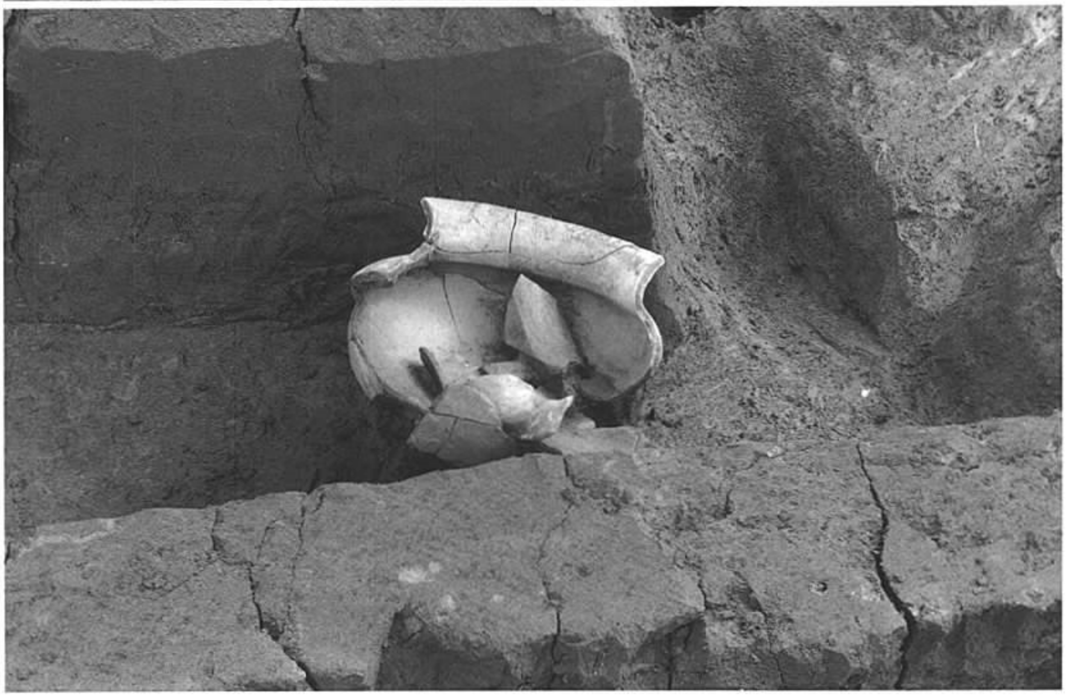
4号土坑
土器出土状況（南東から）

4号土坑
土器出土状況（南から）

4号土坑
土器出土状況
（南東から）



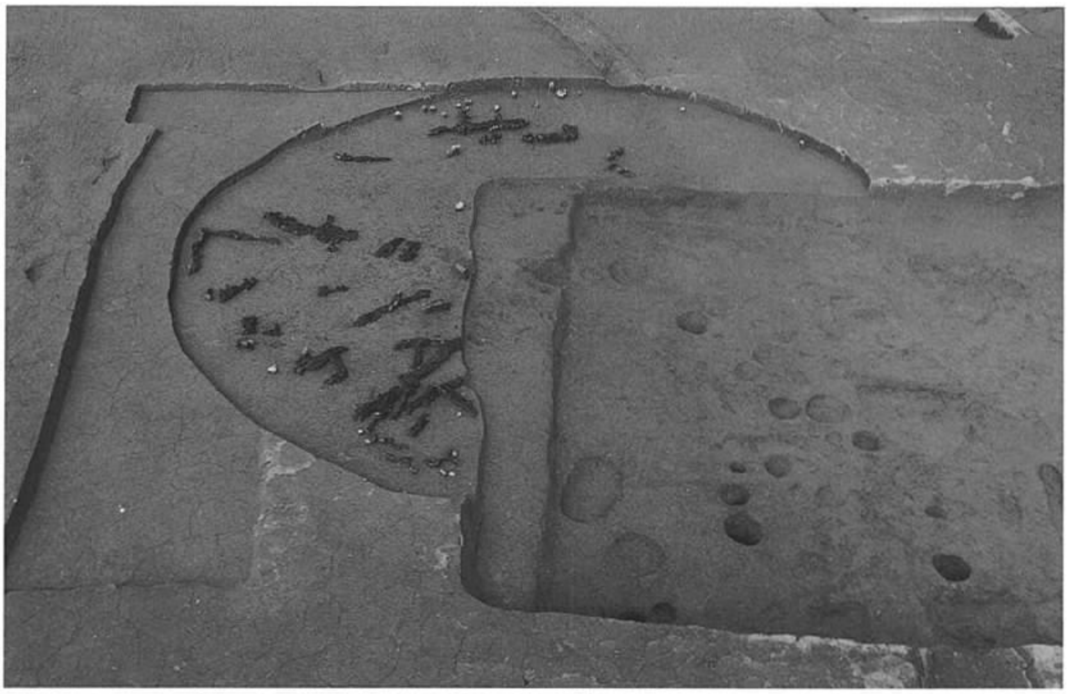
5・6号土坑（南から）



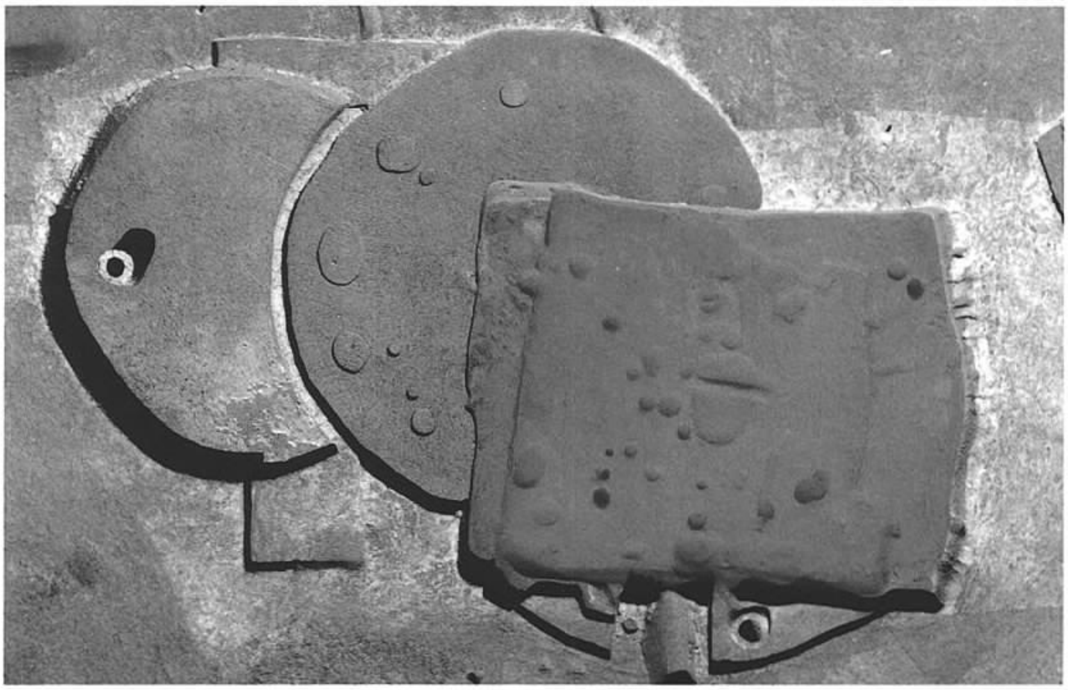
8号溝土器出土状況
（西から）

浮羽バイパス建設予定地を望む（西から　空中写真）

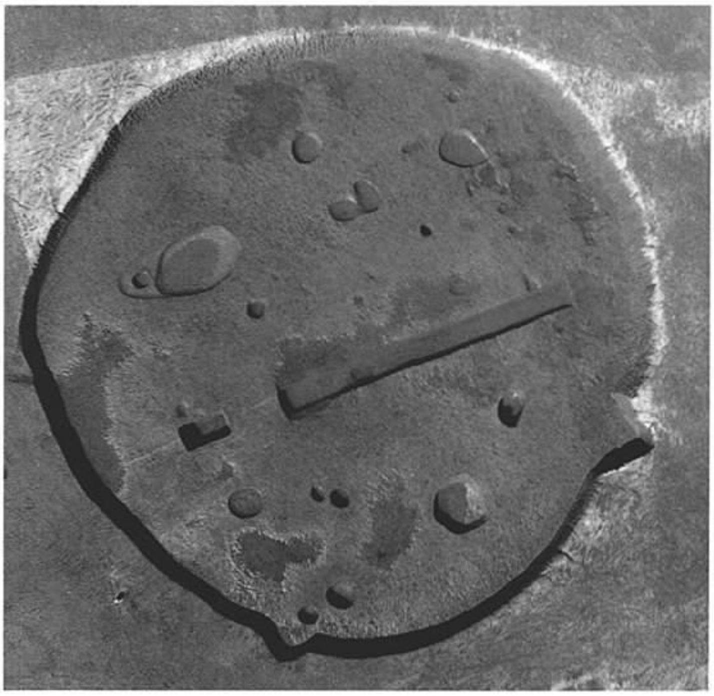
1次調査区第3遺構面全景（上が北　空中写真）



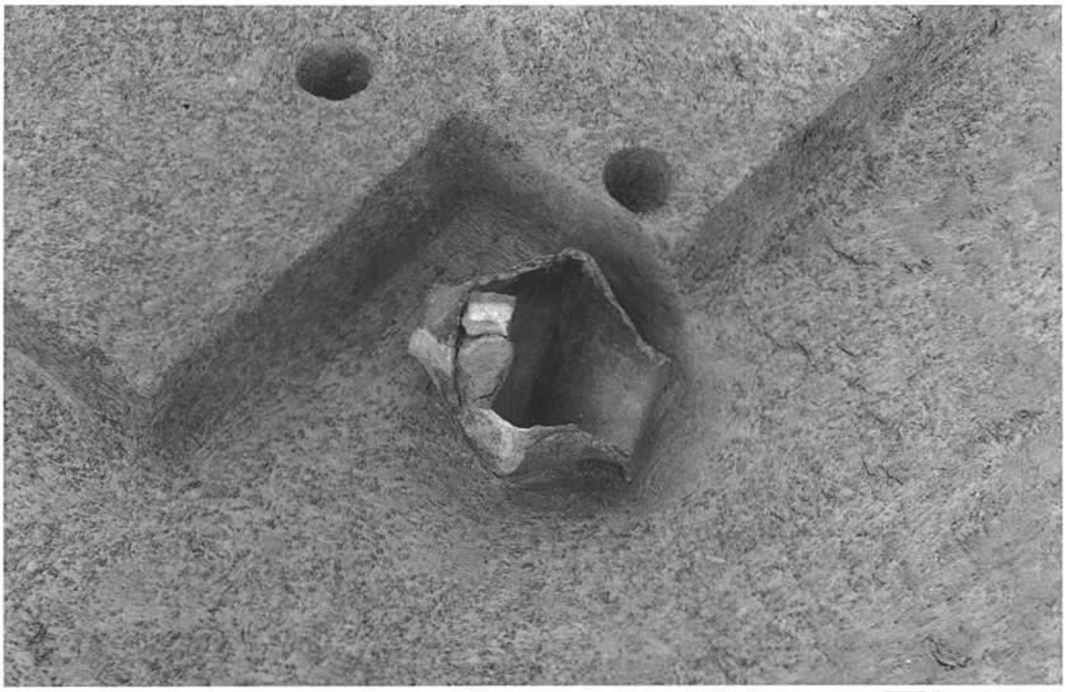
1号竪穴住居跡（南から）



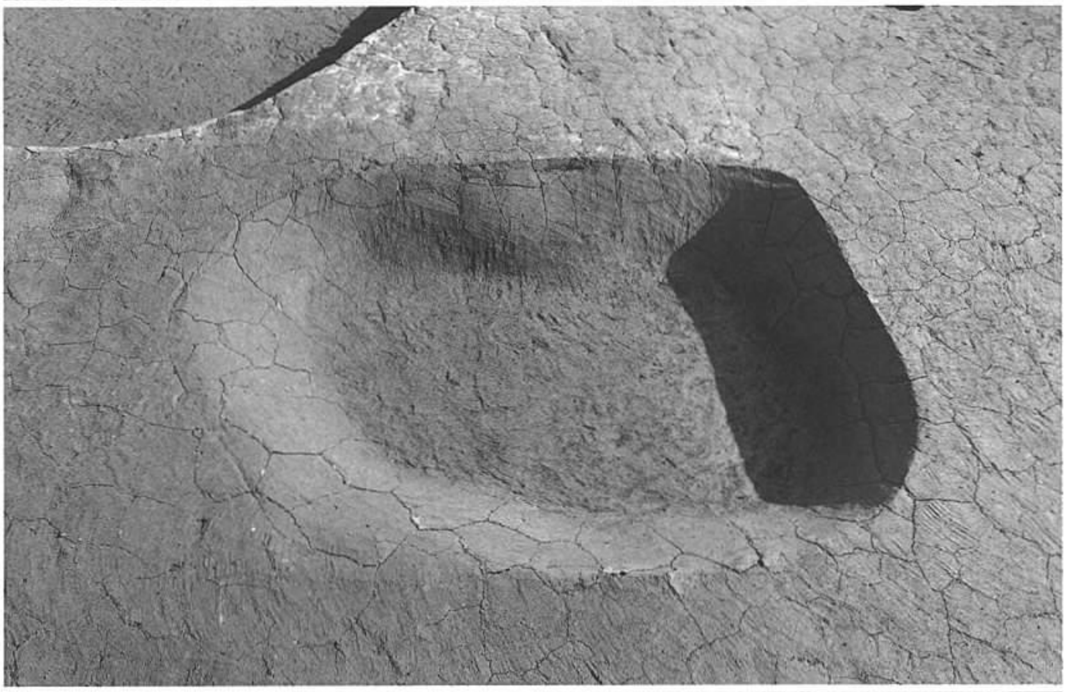
1号竪穴住居跡完掘状況
8・13号竪穴住居跡
（上が北　空中写真）



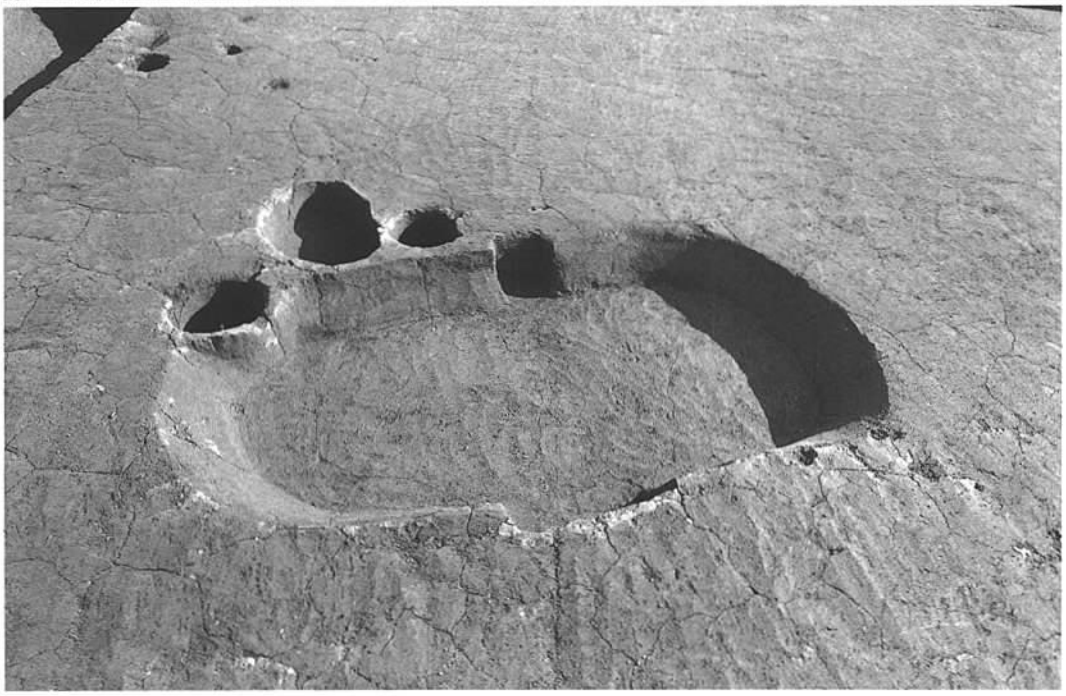
5号竪穴住居跡
（上が北　空中写真）



5号竪穴住居跡
弥生土器出土状況（南から）

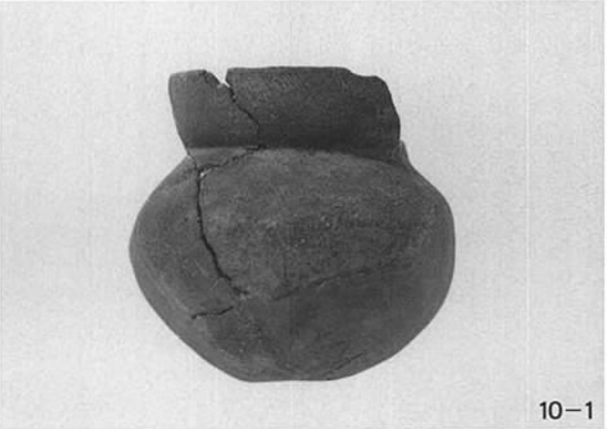


7号土坑（北から）

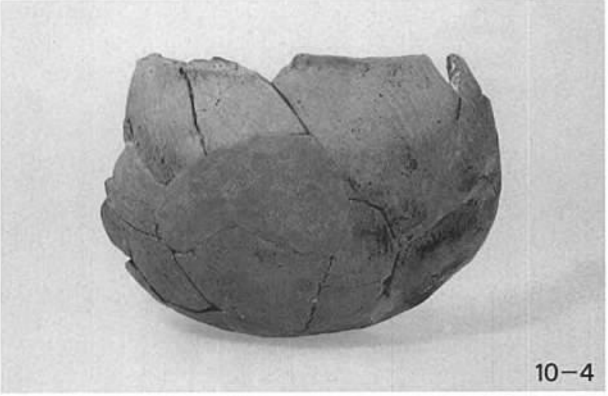


9号土坑（北から）

6－1


10－1

10－3


10－4

10－6

10－7

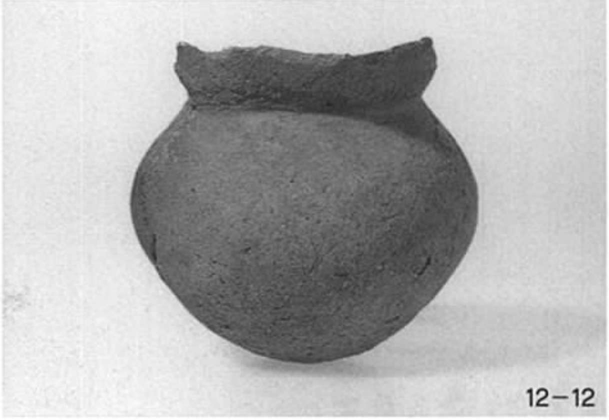
12－5

12－6

12－8

12－10

12－11


12－12

6号溝、2・3号住居跡出土土器

12−16

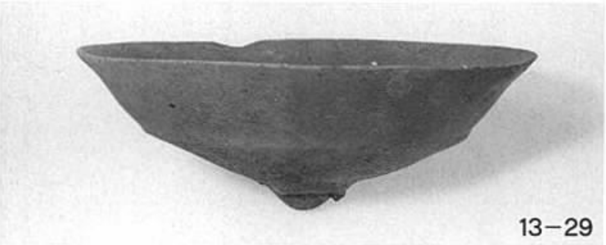
12−19

12−20

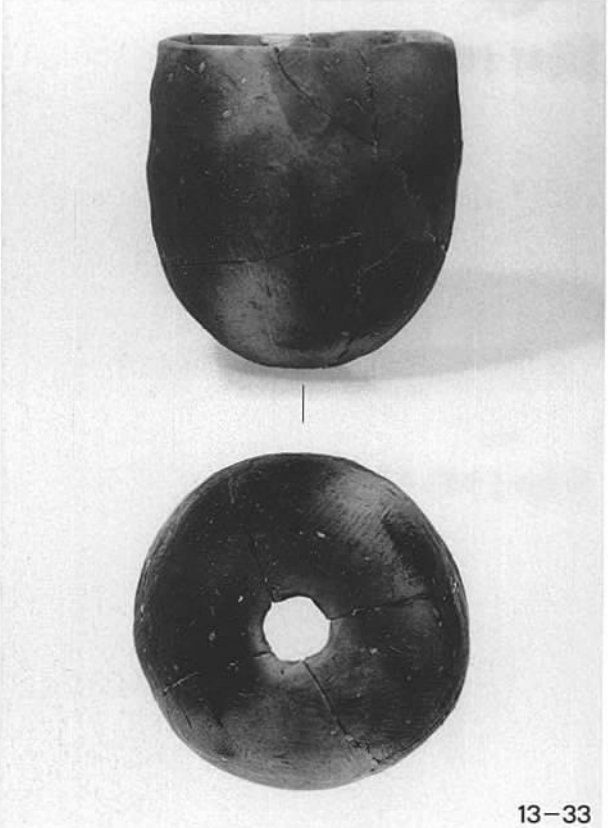
13−22

13−26

13−28

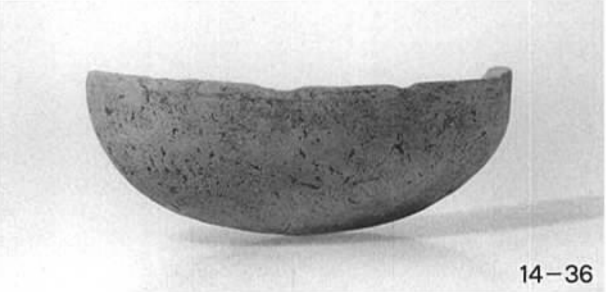

13−29

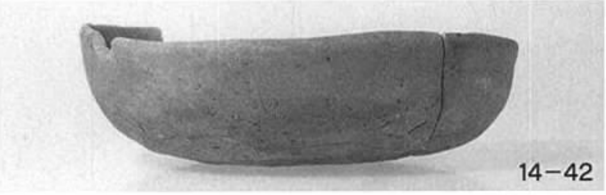
13−30


13−33

3号住居跡出土土器

14－34


14－36

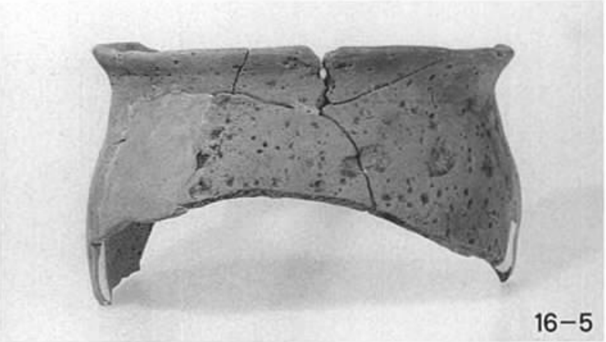

14－42

14－45

14－47

14－48

14－49


16－5

16－6

16－7

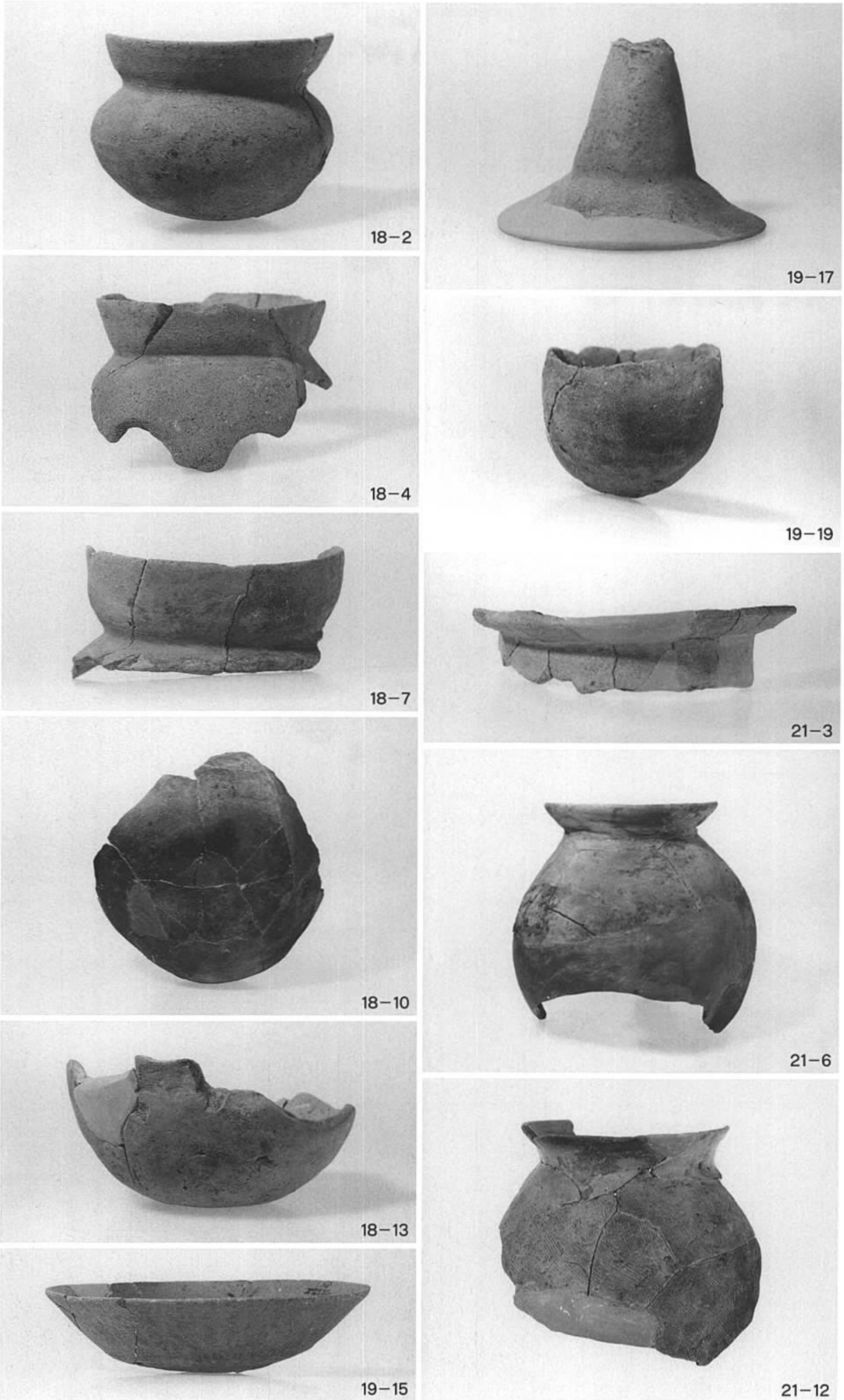
16－10

16－11

16－16

18－1

3・4・6号住居跡出土土器



6・7号住居跡出土土器

22−20

22−18

22−27

22−30

25−2

25−3

25−5

25−6

25−12

26−13

26−15

26−16

7号住居跡、4号土坑出土土器

26−17

34

27−27

36−2

27−31

40−1

27−32

40−3

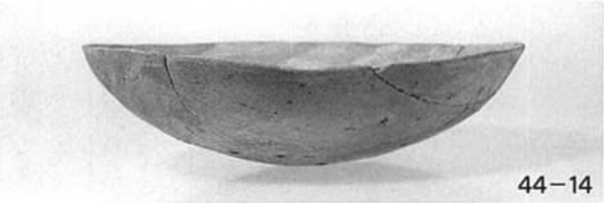
29−1

43−2

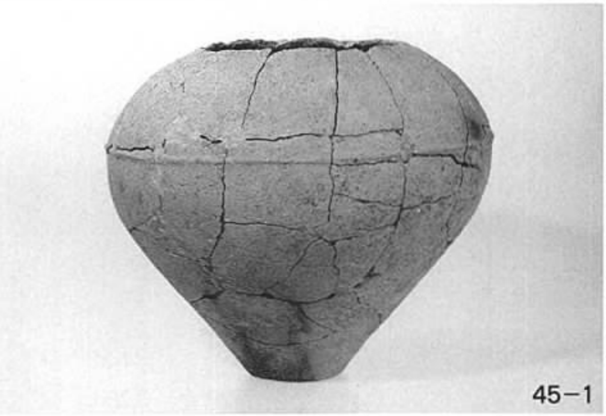
4号土坑、8号溝、5・9・14・18号住居跡、ピット出土土器

44−6

44−7


44−14

44−19


45−1

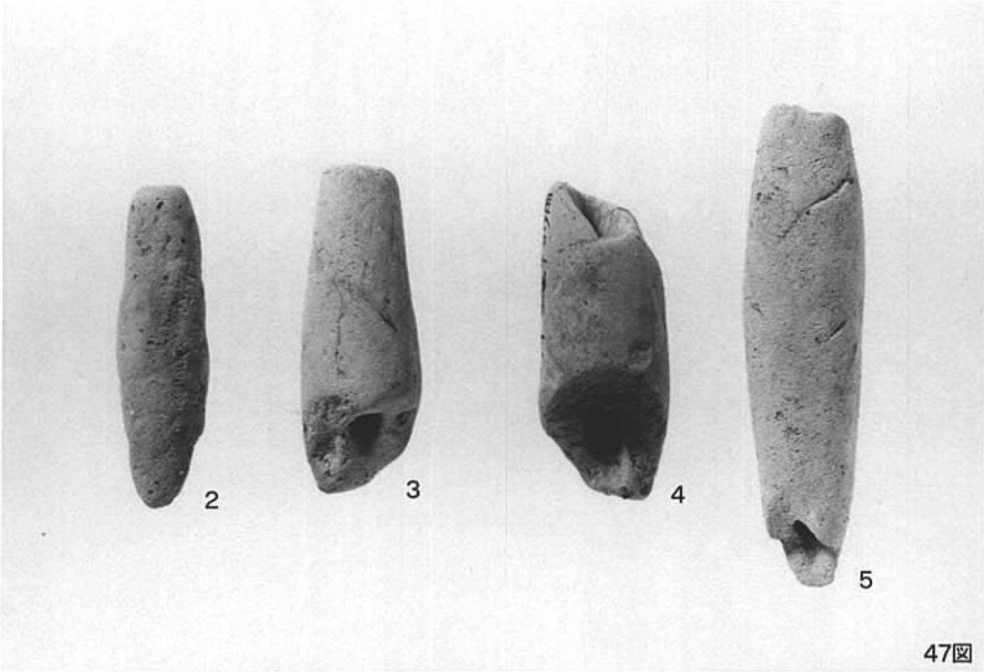
45−11

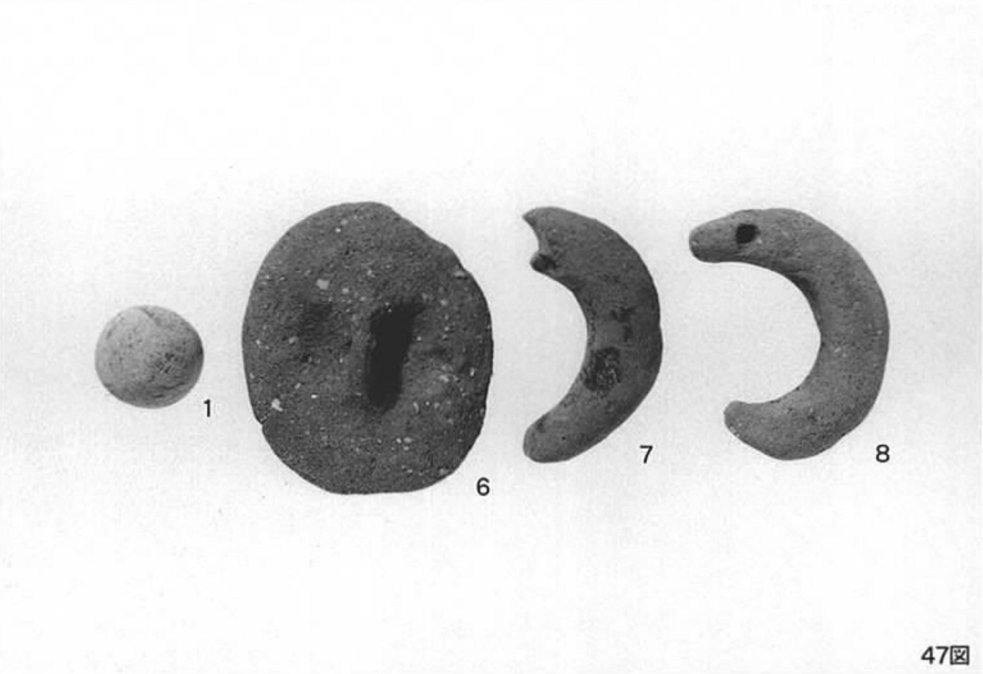
45−15

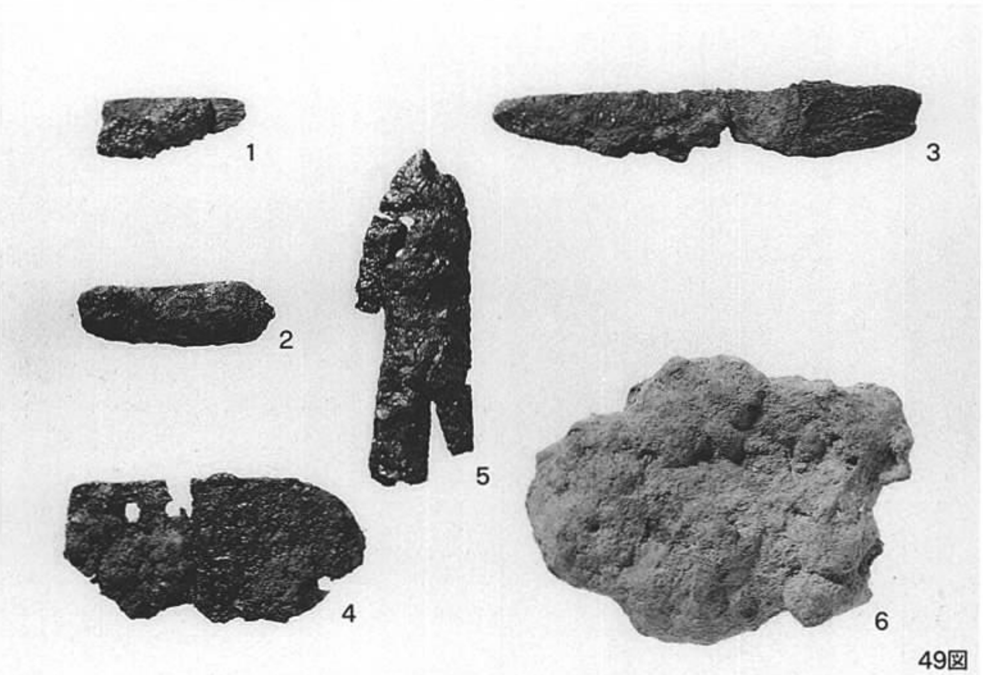
46−24

46−29

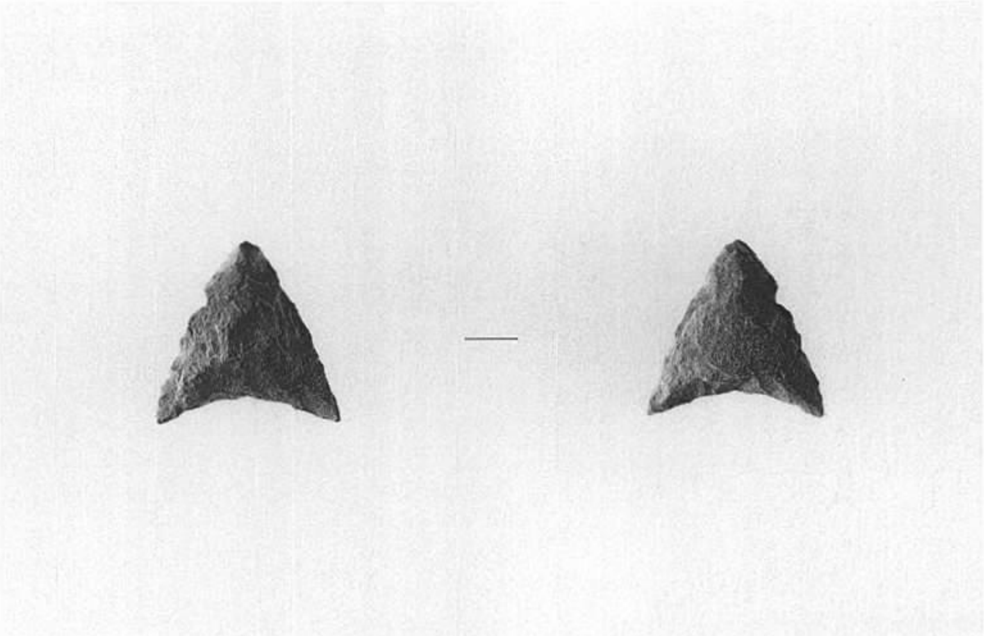
西側谷部、包含層出土土器、調査風景



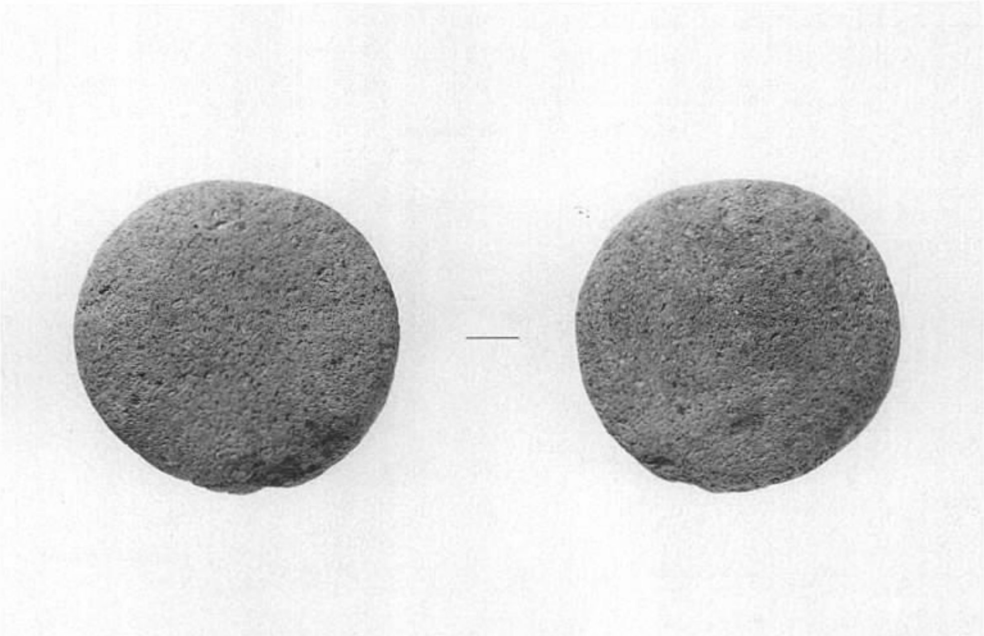




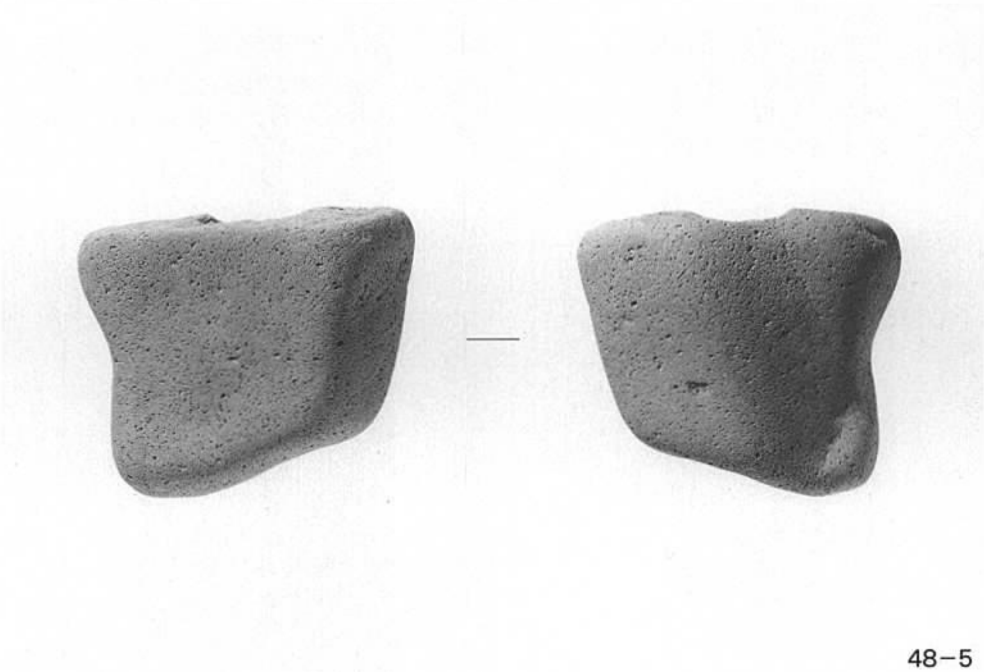
出土土製品、鉄製品



48−1

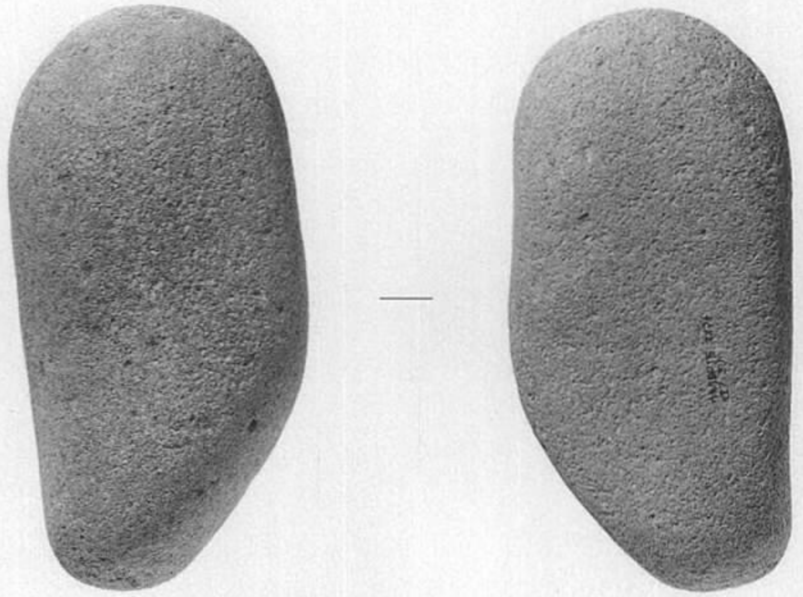


48−2

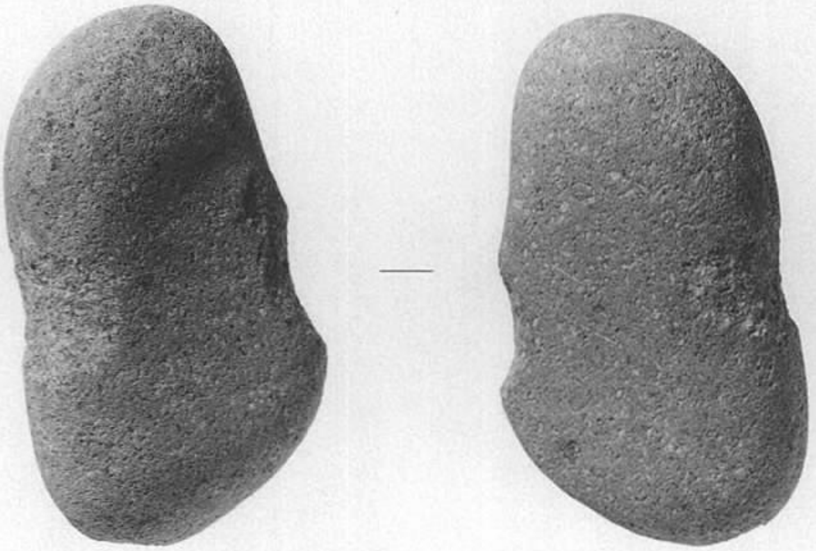


48−5

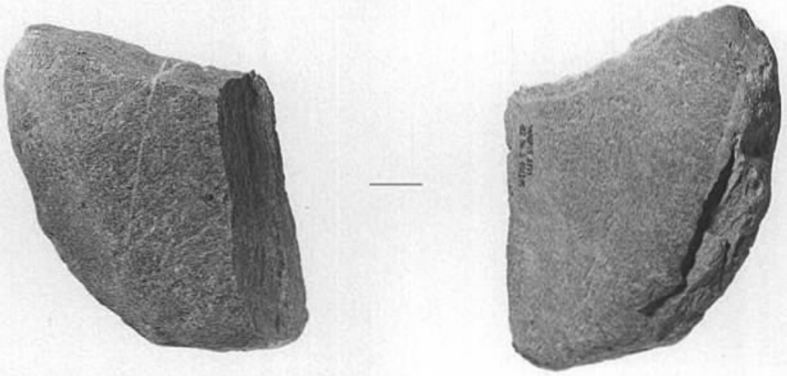
出土石製品①



48−3



48−4



48−6

出土石製品②

日詰遺跡Ⅰ

第４章　日詰遺跡の調査の記録

Ⅰ　調査の概要

日詰遺跡は筑後川左岸から約500m南、田主丸町市街を流れる雲雀川から約300m北に離れた河岸段丘上に立地する。現地表は標高17.5m前後であり、第１遺構面は最も高い南西部で16.8m、最も低い北東部で15.9m、第２遺構面で最も高い南西部で16.2m、最も低い北東部で15.3mを測る。第１・２遺構面とも南西から北東に緩やかに傾斜する旧地形が復元でき、遺構は調査区南西部を中心に分布する。

調査区東側は試掘調査の結果、西から東へ緩やかに傾斜する谷状地形で、遺構・遺物とも確認できなかったため調査対象から外したが、第２遺構面11号溝は調査区北東側に伸びることが調査で確認されたが、試掘調査で調査対象外としたことと、調査期間の関係で調査を断念した。しかし、調査の結果から遺構密度が低いと考えられる。

調査では地山と遺構埋土の区別が非常に分かりづらく、住居跡と考え調査したが、自信がないものは包含層として報告する遺構も存在する。調査区北西隅で第１遺構面下から約20㎝下に黒色土の地山に埋土に灰白色土のピット群が切り込むもう一つの遺構面を確認したが、調査期間の制約から面の存在を確認するのみにとどまったが、遺構検出の結果掘立柱建物跡等は存在しなかった。第２遺構面の地山の黄褐色砂は弥生時代前期の包含層で、下にもう一面遺構面がある可能性もあったが、地表から2.5mまで下げたところ、水が湧いたため調査を断念させざるを得なかった。このことから調査区北側では３面以上の遺構面の存在が予想される。このように不十分な調査となってしまい、調査の時期と方法に今後多くの問題を残すことになった。

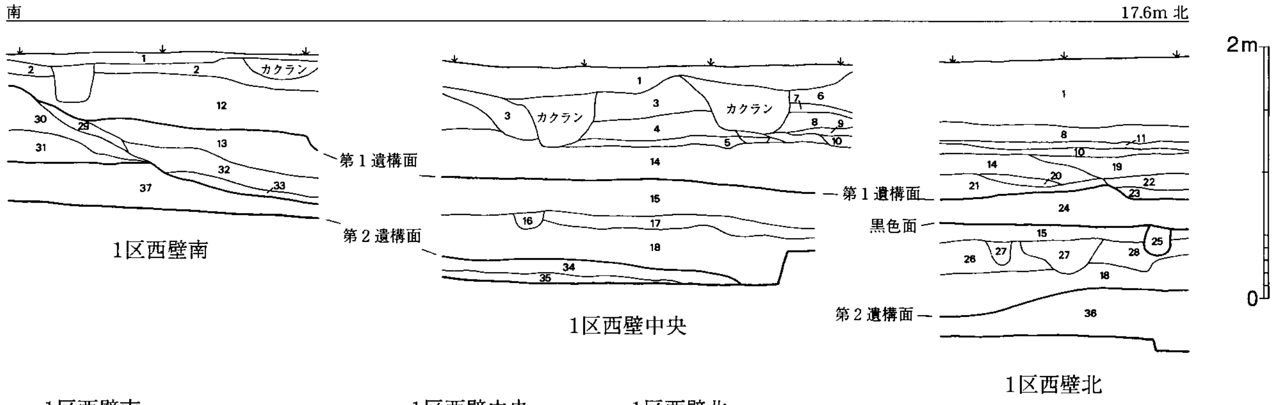
調査を実施するにあたり、便宜上ここを日詰遺跡１次調査とし、今回の調査区を１区とする。調査面積は1170㎡×２面であり、遺構は第１遺構面から順に付した。平成14年度には県道甘木田主丸線を挟んで西側部分の発掘調査（２区・２次調査）を行い、さらに遺跡が西に広がることが確認されている。

検出した主な遺構は、第１遺構面で竪穴住居跡11棟・土坑６基・溝７条・ピット等で、第２遺構面は、竪穴住居跡１棟・掘立柱建物跡１棟・土坑２基・溝４条・道路状遺構・ピット等である。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器・金属器が出土した。

Ⅱ　基本層序（図版３、第１図）

日詰遺跡は筑後川が形成した東西にのびる自然堤防上に立地する。土壌は河川の氾濫や侵食を受けており、粘質土とシルトの堆積土からなる。調査区は先述したように南西隅から北東に緩やかに傾斜する地形で、２面の遺構面と北西隅ではさらにもう１面の遺構面を確認した。第１図は１区西壁及び東壁の土層実測図である。調査区の壁という制約上、土層ポイントが南北からやや東に振れ、また地形の傾斜にも沿っていないが、傾向はつかむことができる。

まず西壁土層図からは、上層に撹乱が多くみられるのは、以前家が建っていたためである。第１・２遺構面とも南から北にゆるやかに傾斜する地形であり、南側の土層図から第１・２遺構面の傾斜が強くなることがわかる。第12・13・22・23層を中心に土器が多く確認されることから南側に密に遺構が存在することを予想させる。第１遺構面は暗褐色粘質土の面に暗灰茶褐色土の遺構が切り



1区西壁南

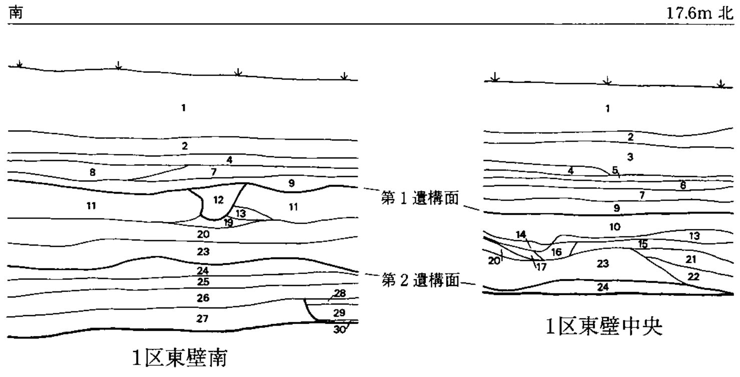
①表土
②淡褐色微砂
③淡褐色土
④灰茶褐色土
⑤灰褐色粘質土
⑥灰褐色土
⑦淡灰褐色土
⑧暗灰色土
⑨灰色砂質土
⑩橙褐色土
⑪淡灰色土
⑫暗褐色土
⑬茶褐色土
⑭暗灰茶褐色土
⑮暗褐色粘質土
⑯明灰褐色粘質土
⑰黄褐色粘質土+暗褐色粘質土+灰褐色粘質土
⑱黄茶褐色粘質土
⑲暗灰褐色土
⑳黄茶色土

1区西壁中央

㉑茶褐色土
㉒黄灰褐色土
㉓黄茶色土
㉔暗灰褐色粘質土
㉕灰茶褐色土＝ピット
㉖灰茶褐色粘質土
㉗暗灰茶褐色粘質土
㉘灰茶褐色粘質土
㉙暗褐色土層粗砂
㉚黄茶褐色土+黄褐色土+茶褐色粗砂

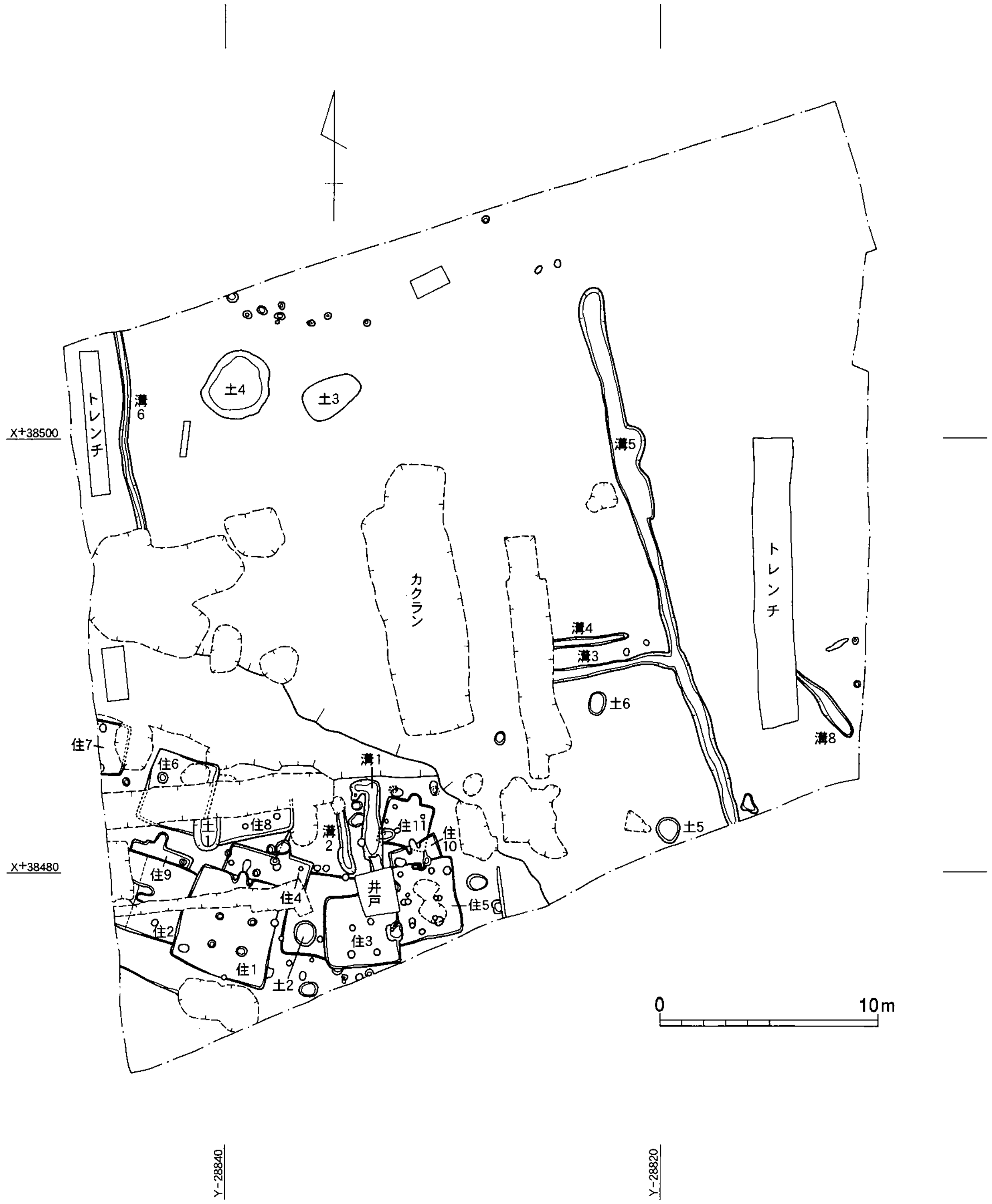
1区西壁北

㉛茶褐色粗砂
㉜黄褐色微砂
㉝黄褐色微砂+粗砂
㉞黄茶褐色微砂（砂が細かい）
㉟　〃　（砂が粗い）
㊱黄茶褐色微砂
㊲砂礫層（地山）

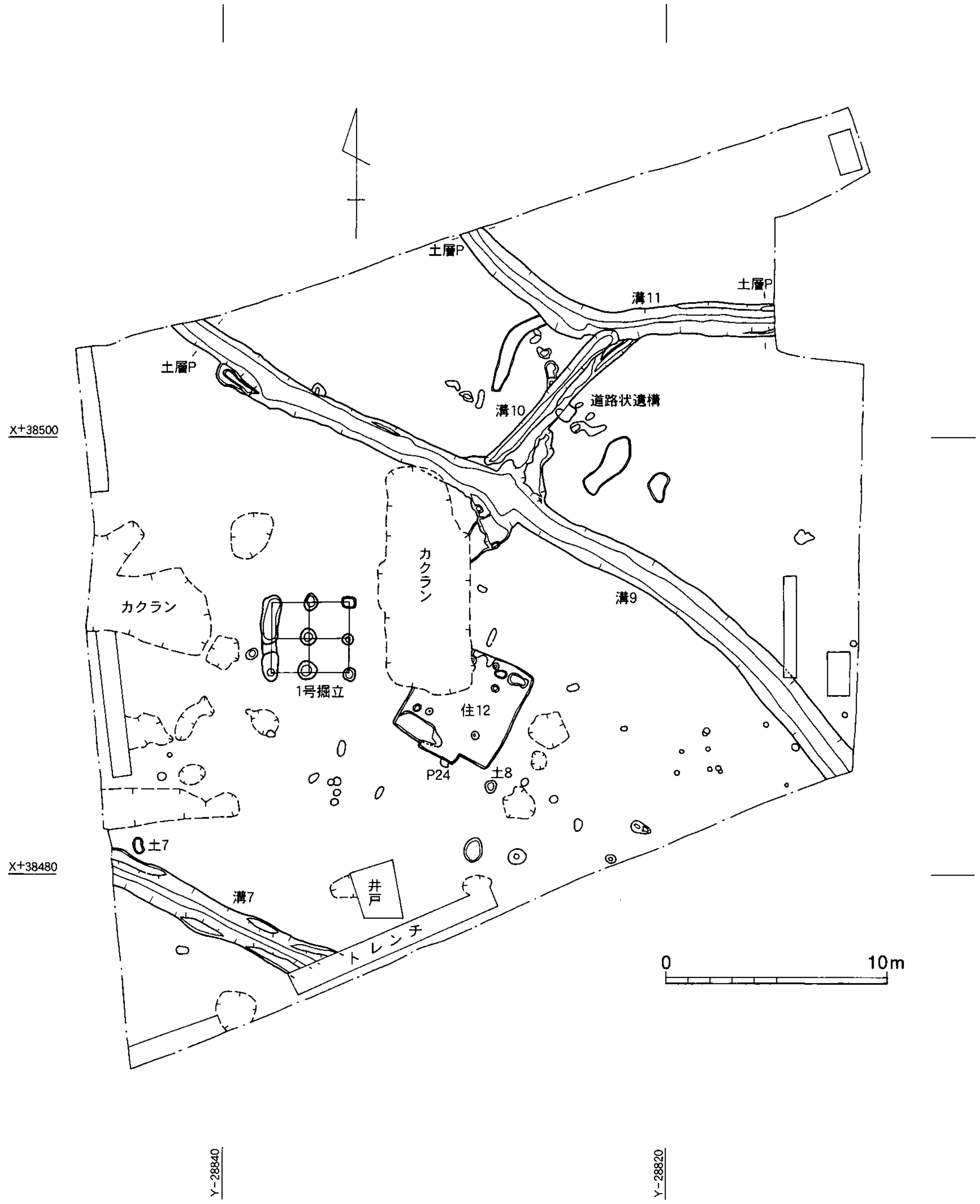


<土層名>
①表土
②暗青灰色土
③黄灰色土
④灰褐色土
⑤淡灰色土
⑥橙褐色土
⑦灰茶色土
⑧淡灰茶色土
⑨暗茶灰色土
⑩灰茶色粘質土
⑪明灰茶色土
⑫明灰黄褐色土＝ピット
⑬橙褐色土
⑭灰色粘土
⑮暗灰褐色微砂
⑯暗褐色土+灰色粘土
⑰暗褐色土+灰褐色土
⑱茶褐色土
⑲暗茶褐色粘質土
⑳暗褐色土（やや砂っぽい）
㉑暗灰茶色砂
㉒灰茶色砂（やや粘性あり）
㉓茶褐色微砂
㉔黄茶色微砂（砂が細かい）
㉕　〃　（砂が粗い）
㉖　〃　（粘性あり）
㉗暗黄茶色微砂（粘性あり）
㉘暗褐色微砂
㉙明黄茶色微砂
㉚炭

第１図　１区西・東壁土層実測図（1/60）



第2図　１区第１遺構面遺構配置図（1/300）



第3図　１区第２遺構面遺構配置図（1/300）

込み、第２遺構面は黄茶色砂に同色のやや粘質の土が切り込むが、そのいずれの面も遺構と地山の区別が非常に難しく、誤って遺構として下げたものもある。また北側の土層図から15層上に黒色の遺構面が確認でき、25層の埋土とするピットがこの層に切り込むが、この面は時間の制約で確認するにとどまった。

東壁土層からは第１・２遺構面が若干北に傾斜する地形であることがわかるが、いずれの層からも西壁に比べて土器の出土は少ない。第１遺構面の地山である第10・11層は西のものに比べてやや明るい色を呈し、第２遺構面は西側と同様の土である。第12層は第１遺構面に切り込むピットである。東壁南側の土層図から第27層を切り込んでいる第28～30層はピット状になっており、第27層上で遺構面の存在が予想されたため、トレンチを掘ったが遺構の広がりは確認できなかった。第27層も弥生時代前期の土器が出土する包含層であり、地山はさらに下に存在すると考えられたため、重機により下げたが、湧水のため調査を断念した。しかし、トレンチ断面で標高15m付近までは黄茶色の砂層が続くことを確認した。

Ⅲ　遺構と遺物

竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版４、第４図）

１号竪穴住居跡は、調査区南西隅の第１遺構面住居跡集中区中央に位置し、２・４号竪穴住居跡を切る。住居跡西壁中央から北東隅にかけて近代の排水溝により攪乱を受ける。住居跡は南北4.7m×東西4.5m、面積19.1㎡のやや南北に長い長方形を呈し、覆土は黄褐色～灰褐色の砂質土で北にカマドを敷設する。主柱穴は4本確認し、柱穴間が１m程度とやや近接する場所に位置する。床面掘り込みは全面に存在する。出土土器から時期は7世紀後半と考えられる。

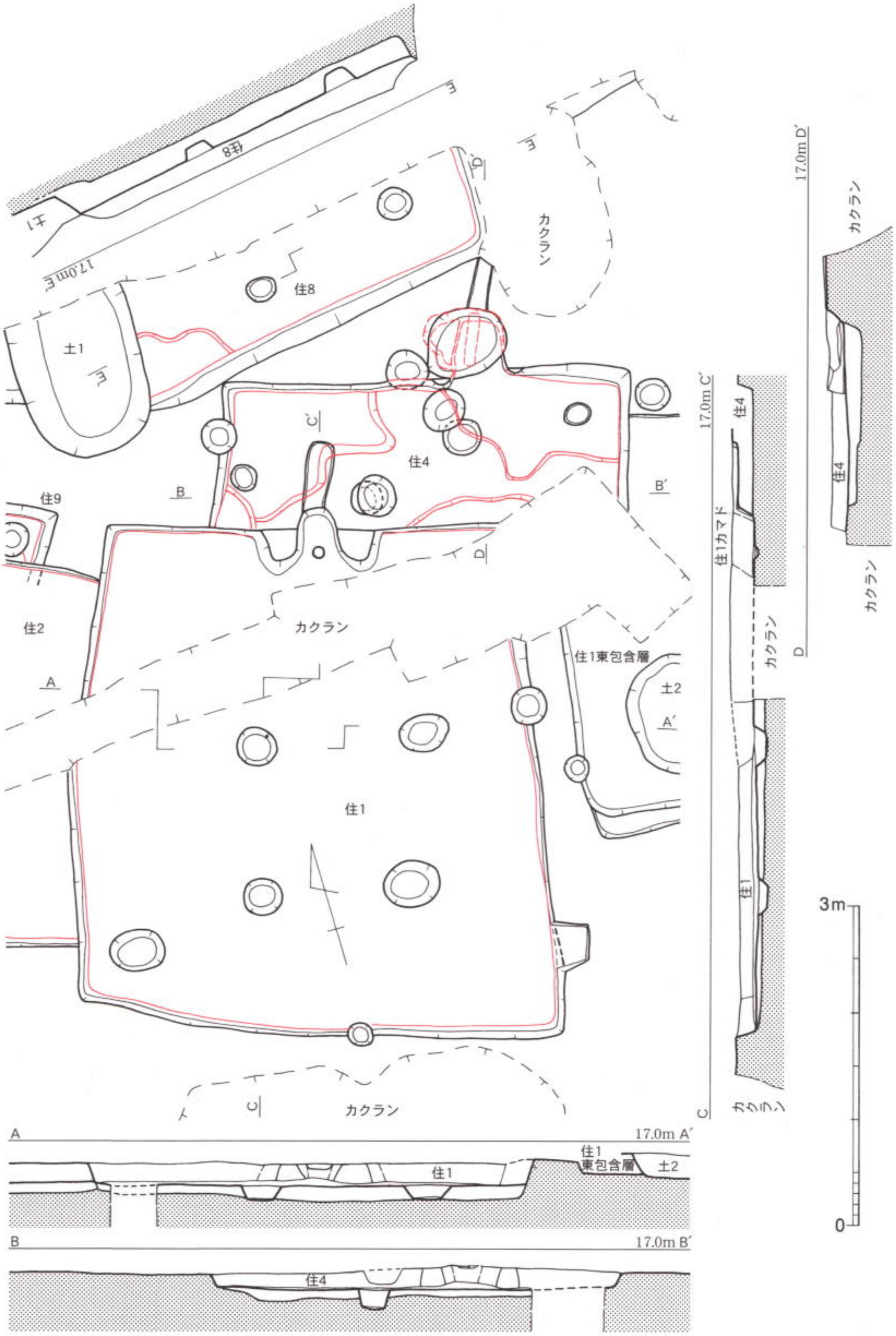
カマド（図版４、第５図）

住居跡北壁中央に位置し、壁から23㎝カマドが突出し、やや主軸線から東に振れる奥壁から長さ63㎝の煙道が伸びる。袖は下端の最大幅で45㎝と幅太く、約40㎝程度壁から造られるが、調査の際、左袖先端部を若干掘りすぎてしまった。奥壁から39㎝の所には、支脚抜き取り跡と考えられる穴を確認したが、深さが浅く自信がない。カマド内から須恵器１点（第６図９）、土錘が多く出土した（第44図１・２・４～８）。

出土遺物（図版16、第６図）

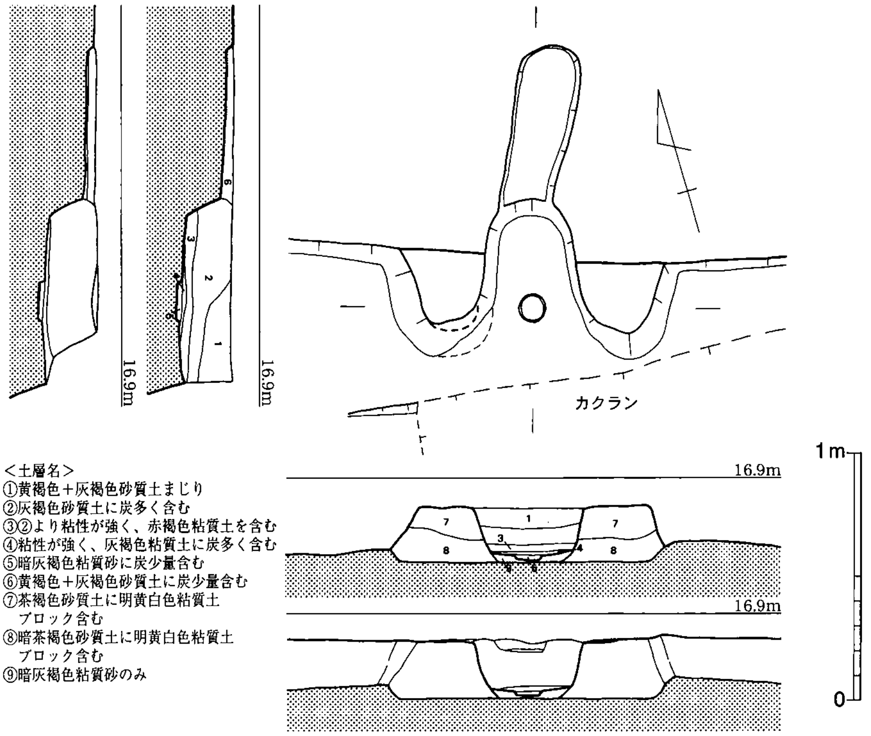
弥生土器（１・８）　１は甕口縁部である。口縁下にナデにより稜を作り出す。内外面は横ナデを施し、色は黄褐色。８は甕底部で、内外面はナデ調整。やや上げ底の底部で、色は淡褐色。１・２号住居跡上面出土。

土師器（２～７）　２・３は甕口縁部である。２は口唇部に向かって外反度が増し、口唇部を下方につまみ出し、器壁は９㎜と薄い。内面は頸部まで横方向のケズリを施す。口縁部内外面には黒斑があり、色は橙褐色。３はゆるやかに外反する口縁部で、口唇部に向かって外反度が増す。口縁部は胴部外面は縦ハケ、内面は斜め方向のケズリで調整する。口唇部外面にはススが付着し、内面には炭化物の痕跡がある。色は暗黄褐色。



第4図　1・4・8号竪穴住居跡実測図（1/60）

4～7は甕の把手である。4は断面はほぼ正円である。把手は凸状に差し込むものか。色は橙褐色。5は把手部分のみで、上方への屈曲度は弱い。断面はほぼ正円で、色は橙褐色。6は把手の上方への屈曲度が強く、断面は台形状を呈する。色は橙褐色。7は1・2号住居跡上面出土。7は厚さが2.5㎝の太い把手であり、断面は楕円形を呈す。色は橙褐色。



第5図　1号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

須恵器（9）　カマド内出土の高台付杯身で、高さがあり、端部を外につまみだす高台をもつ。底部にはヘラ切り痕が残り、外面全体に自然釉が付着する。色は灰褐色。

2号竪穴住居跡（図版4、第7図）

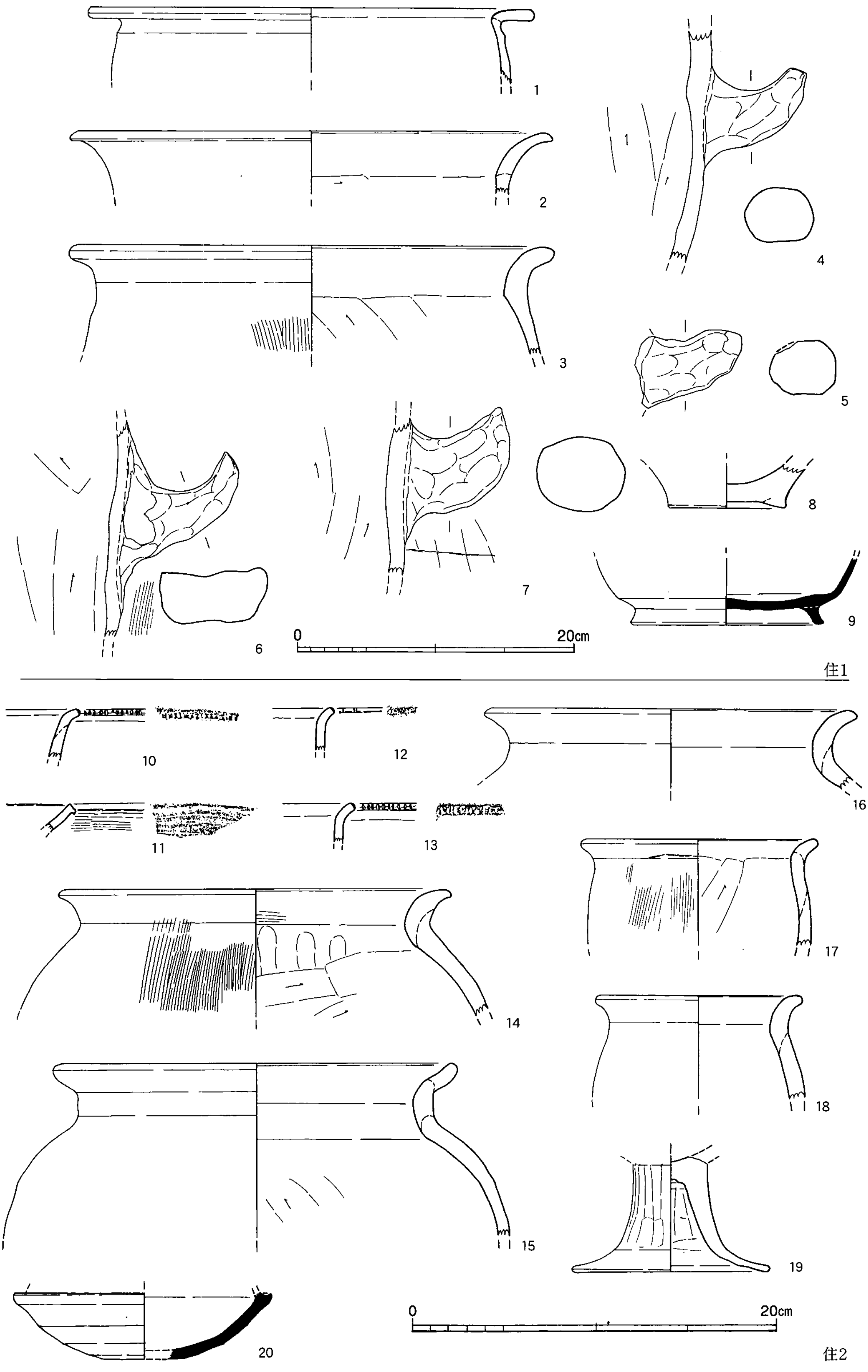
2号竪穴住居跡は調査区東南に位置し、1号竪穴住居跡に切られ、9号住居跡を切る。住居南西隅から東中央部にかけて近代の排水路で撹乱され、西壁は当初住居跡がさらに東に広がると考えたため、下げてしまい壁がとんでしまった。推定ラインは破線で示す。覆土は黄褐色砂質土で、南北3.6m×東西2.2m以上の住居跡で、西壁にカマドを付設する。床面でピット1個存在するが、明確な主柱穴は確認できなかった。床面掘り込みは全面で確認できた。第6図19・20は床面下出土。時期は6世紀末の土器も出土するが、突出するカマドを持つ住9を切ることから7世紀代と考えられる。

カマド（図版5、第8図）

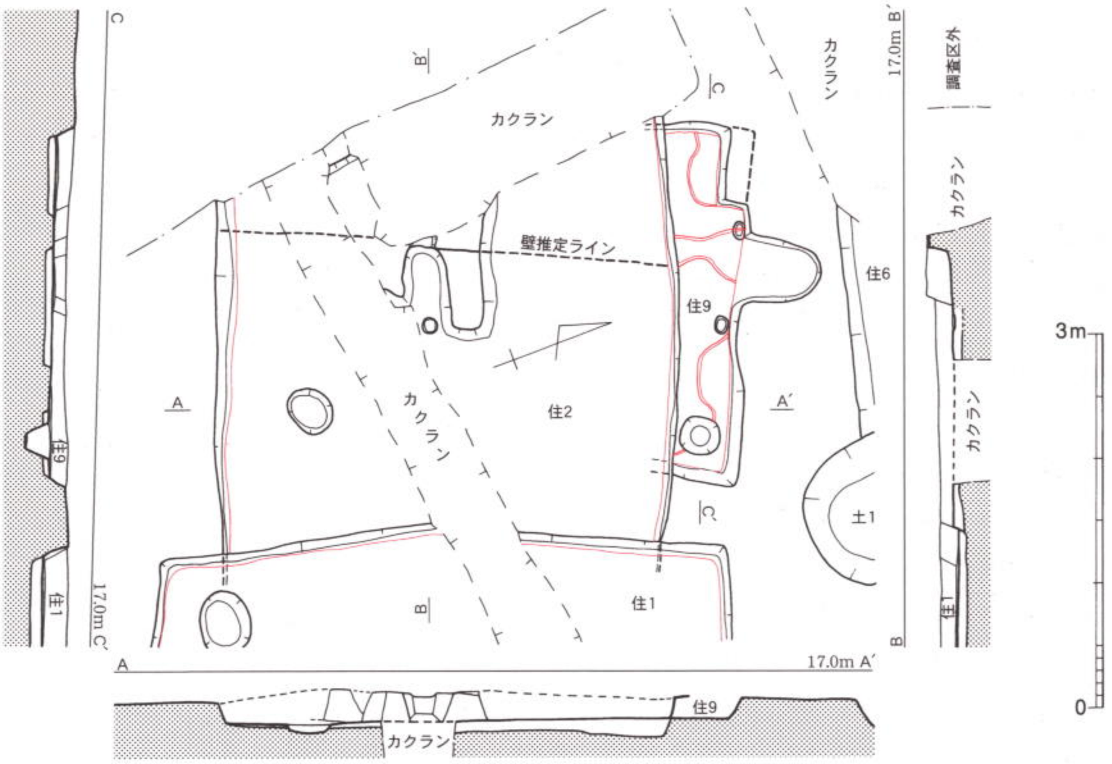
住居跡西壁のほぼ中央に位置し、左袖は大きく撹乱を受け、ほどんど残っていない。カマドは西壁を確認できなかったため、本来は右袖部で70㎝程度の長さであったと考えられる。この西壁推定ラインから煙道がのびるが、ほどんど撹乱を受け不明。カマド奥壁から50㎝の所には、焼面を確認し、その中央で支脚抜き取り痕と考えられるピットを検出したが、深さが2㎝と浅いため自信がない。第6図14はカマド右袖上出土。

出土遺物（図版16、第6図）

弥生土器（10～13）　10～13は前期の甕口縁部片で、胎土はいずれも細粒を多く含む。10は緩やかに外反する口縁部で、口唇部には工具による浅い刻目を密に施す。色は暗橙褐色。11はかなり外傾する口縁部で下方に口唇部をつまみ出し、その下端をナデで押さえ、突帯が波状をなす形態。外面は横方向の板による擦過で、内面はナデ調整。色は黄褐色。12は直立する胴部に口縁部がく

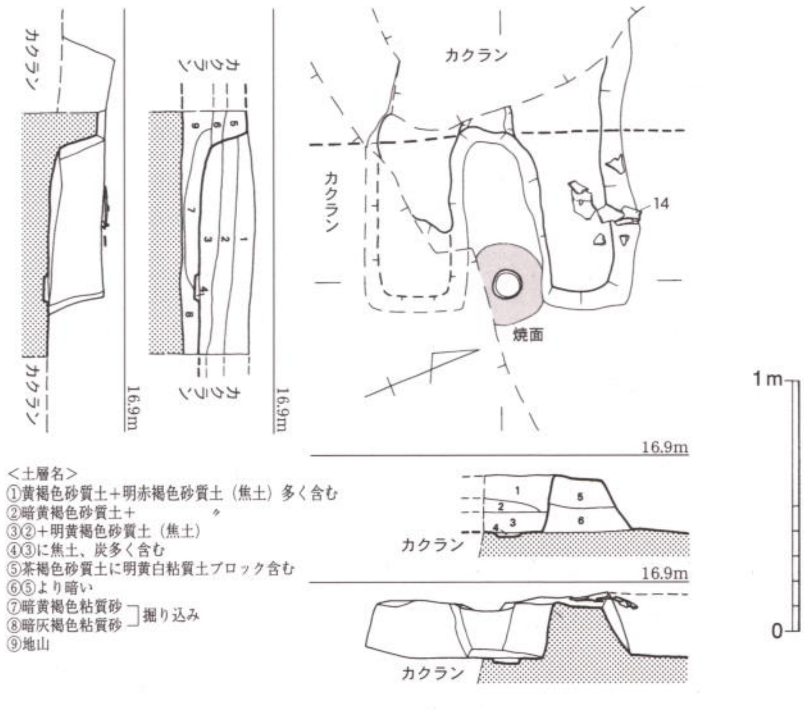


第6図　1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1・8・10～13は1/4, 他は1/3）



第7図　2・9号竪穴住居跡実測図（1/60）

の字状に外反する。口縁端部に浅い刻みを施す。色は暗黄褐色～黄褐色。13は強く外反する口縁部で、口縁端部は工具による刻目をもつ。外面は二次加熱を受ける。色は黄褐色。



第8図　2号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

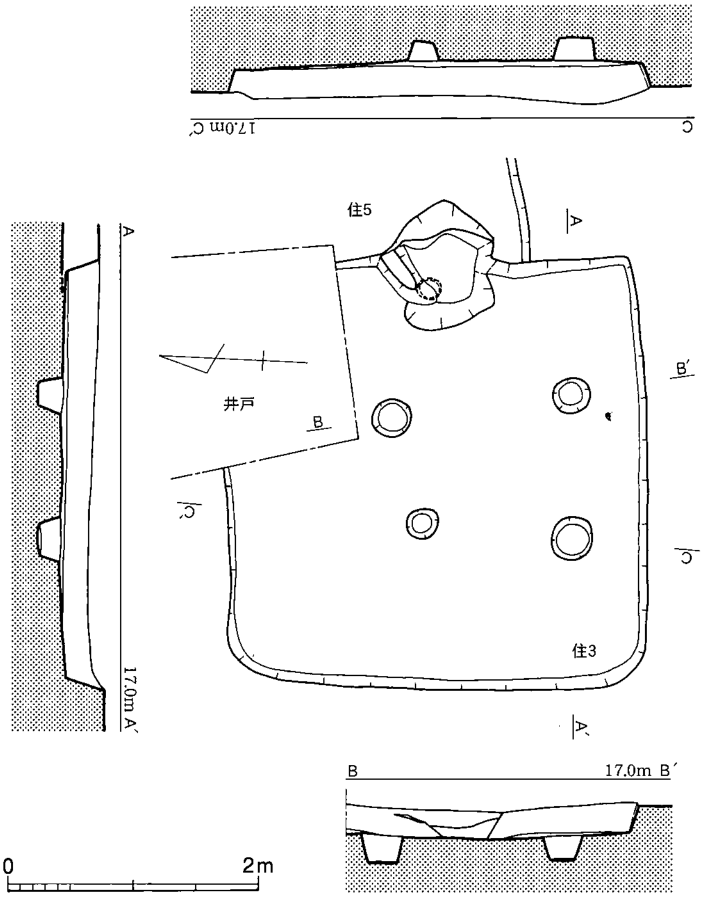
土師器（14～19）　14～18は甕の口縁部である。14はカマド右袖上から出土。口縁部は短く外反し、端部を外につまみ出す。胴部外面は縦ハケ、内面は頸部から下がった位置に横方向のケズリが、口縁部内面の一部には横ハケが残る。色は黄橙褐色。15の口頸部は直立し、口縁部は端部に向かってやや内湾しながら強く外反し、口縁端部は丸く収める。色は黄橙褐色。16は外湾する口縁部で、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色。17・18は小型の土師器甕である。17は短く外反する口縁部で、頸部まで外面は縦ハケ、内面は粗いヘラケズリで調整。胴部外面には二次加熱痕が、内面には炭化物が付着する。色は暗橙褐色。18は緩やかに外湾する口縁部で、内外面はナデで調整、外面には二次加熱痕がある。色は暗褐色～黄褐色を呈す。

19は高杯脚部で、底径は10.0cm。外面は幅太い縦ミガキ、内面は工具による絞り痕が残る。色は黄褐色。

須恵器（20）杯身の受部まで残存し、口縁部は短く内傾するものと考えられる。ヘラケズリは外面中位まで施す。焼成は悪く、色は灰白色を呈す。

3号竪穴住居跡（図版5、第9図）

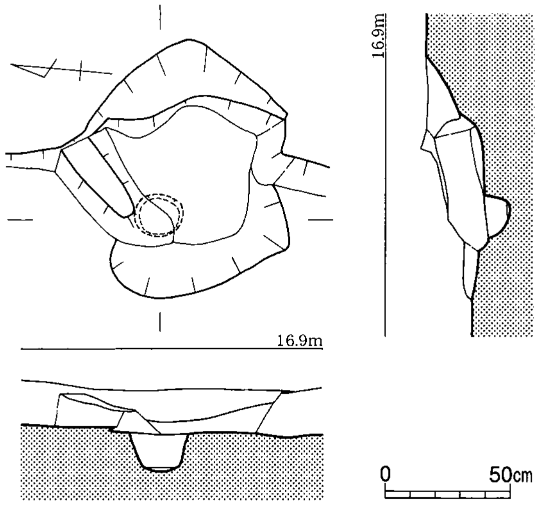
3号竪穴住居跡は調査区南西、住居跡集中区中央南端に位置し、5号竪穴住居跡を切る。住居跡北東部分は井戸のため調査できなかったが、住居跡は南北3.4m×東西3.5mのほぼ正方形の住居跡である。覆土は茶褐色砂質土で、東壁中央にカマドを付設する。床面にはピットを4個検出できたが、北側のピット2個は、主柱穴と断定するには位置が中央に寄りすぎになるため自信がない。出土遺物で図示できるものは2点のみである。



第9図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド（図版5、第10図）

住居跡東壁中央に付設される、数少ないものである。調査時に右袖を誤って掘ってしまったが、左袖の状況から焼面を円形に取り囲むようなタイプのカマドになると考えられる。カマドは壁から20cm突出し、さらに24cm東に緩やかに傾斜する面があるが、幅が広いことから、煙道とは考えられない。カマド覆土は黄灰褐色砂質土に炭・焼土が混じる土で、袖は暗黄褐色土で構成される。左袖先端部と接するピットを検出し、袖との関係は気になるが、支脚 抜き取り痕と思われる。カマド床面のほぼ全面で掘り込みを確認した。

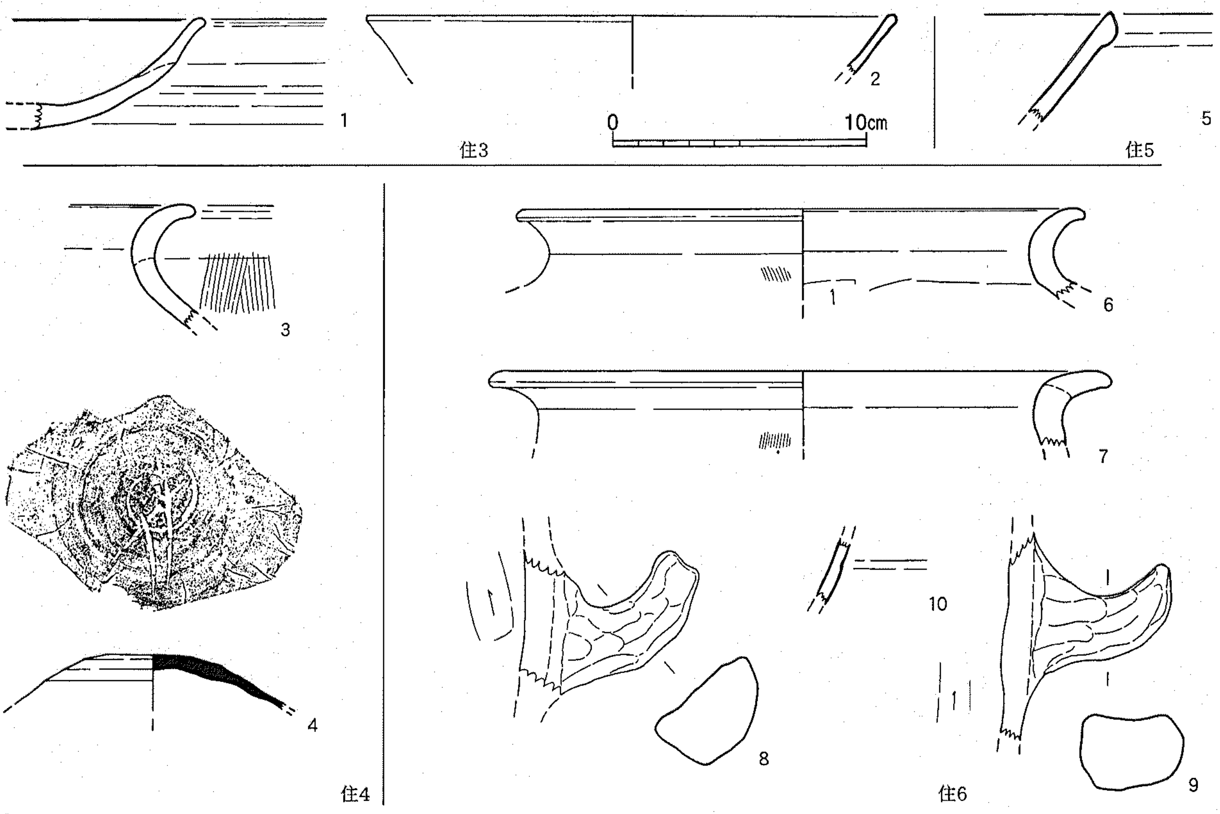


第10図　3号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第11図）

土師器（1）　杯ａでやや深さが浅いもの。内湾する体部で口縁端部をやや外反させ、底部から体部中位までヘラケズリを施す。内面～口縁部外面は黒化するが、黒色土器とするには形・調整から疑問を感じる。色は外面黄褐色、内面灰褐色。

白磁（2）　白磁椀口縁部。釉の発色はよく、淡青白色。

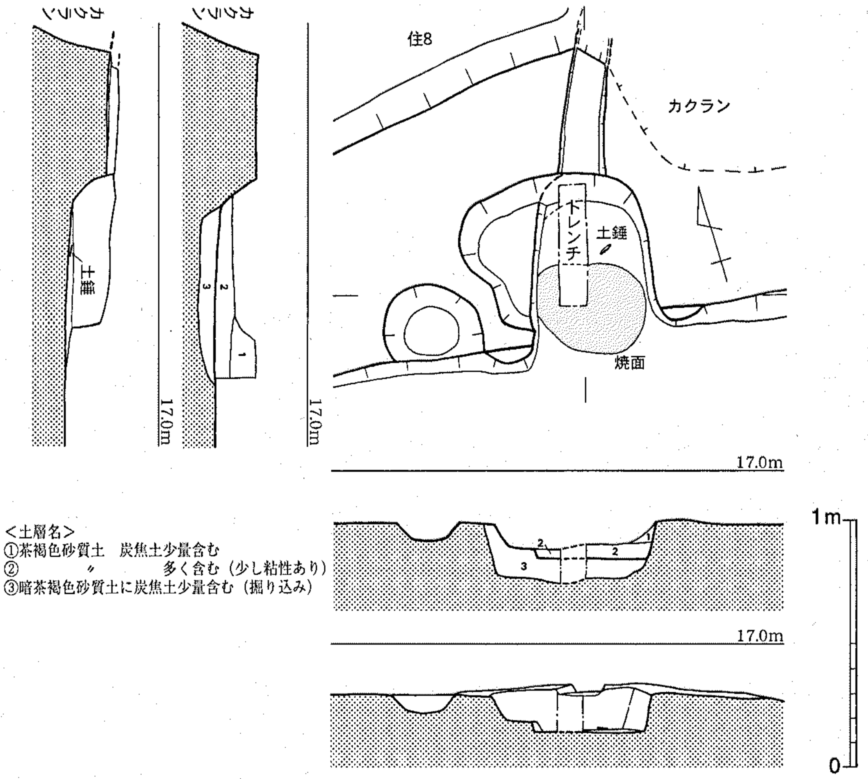


第11図　3～6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

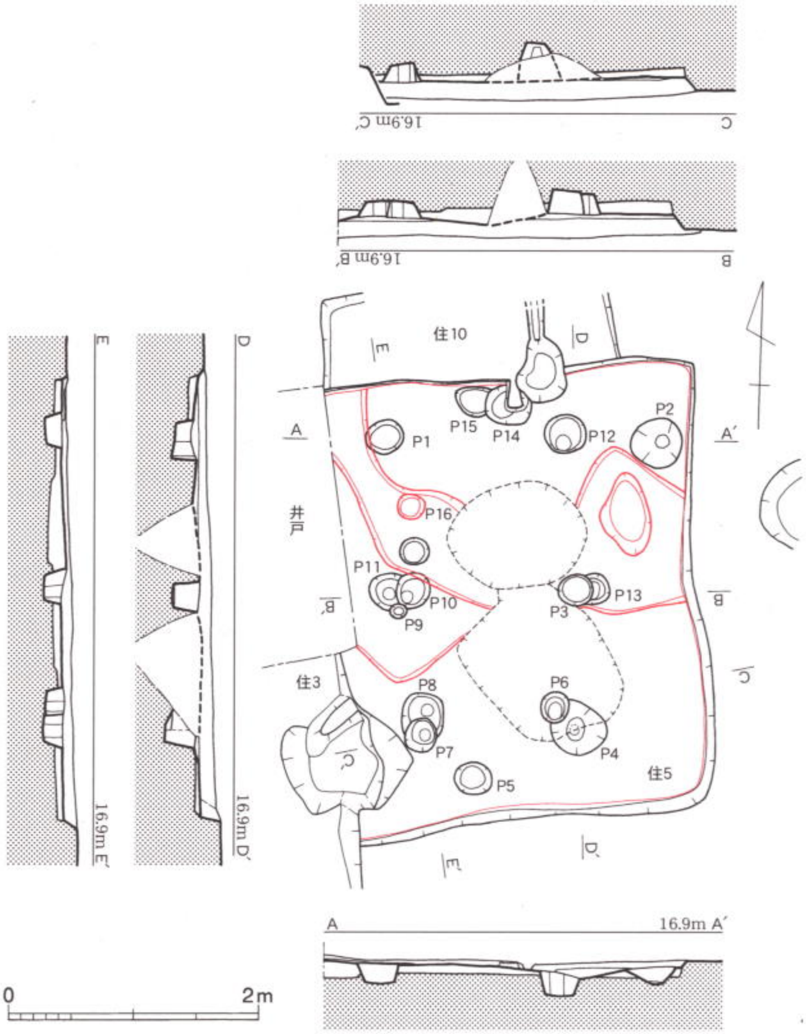
４号竪穴住居跡

（図版６、第４図）

４号竪穴住居跡は、第１遺構面住居跡集中区中央に位置し、住居跡南側を１号竪穴住居跡に切られる、南北1.4m以上×東西3.9mの住居跡である。東壁は一部撹乱を受け、南壁は１号住居跡東側に住居跡が存在すると考え先行して下げてしまい、結果南壁を確認できないことになった。覆土は茶褐色砂質土で、北壁のやや東寄りにカマドをもつ。床面にはピットが存在するが、主柱穴は確認できなかった。



第12図　４号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第13図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

床面掘り込みはほぼ全面で確認できた。出土土器で図示できるのは２点のみであるが、カマドの形態から７世紀代の住居跡になるか。

カマド（図版６、第12図）

住居跡北壁中央よりやや東側に付設されるカマドであるが、上層からのピットや住居跡北壁中央に位置せず、トレンチを先に掘って確認したため、本来の形態が分かりにくくなってしまった。カマドは壁から60cm突出し、煙道が現状で51cmのびるが、先端部は撹乱され、正確な長さは不明である。袖は壁からわずかに突出し、奥壁から35cmの所に焼面の広がりを確認した。カマド内から土錘１点（第44図９）が出土した。

出土遺物（第11図）

土師器（３）　住居貼り床内出土の甕口縁部。強く外湾し、端部を丸く収める。外面は頸部より下は縦ハケで調整し、色は橙褐色を呈す。

須恵器（４）　住居貼り床内出土。杯蓋片で、ケズリが天井部しか施されない。また天井部には「ǂ」というヘラ記号が書かれる。横長い線→縦の短い線→縦の長い線という順番で刻んだもの。胎土は細粒を多く含み、色は灰褐色。

５号竪穴住居跡（図版６・７、第13図）

５号竪穴住居跡は調査区南西、住居跡集中区中央南やや東寄りに位置し、３号竪穴住居跡に切られ、10号住居跡を切る。住居跡北西部分は井戸のため未掘であり、西壁は3号住居跡に切られるため全く検出できなかった。また中央には大きな撹乱が存在するが、南北3.5m×東西3.0m以上の長方形の住居跡になるか。住居跡覆土は灰黄褐色砂質土である。住居床面ではピットが14個検出され、Ｐ４・６・７・８・10・11～13で柱痕跡が確認できた。北側のピット２個（Ｐ１・12）がカマドに近すぎることには疑問があるが、中央ピット４個（Ｐ３・10・11・13）がやや浅いことから、北・南側４個（Ｐ４・６・７・８）のピットは主柱穴、中央は補助的な柱であったとの想定もできるが、６個とも主柱穴であった可能性もある。また中央、南の柱穴の切りあいから少なくとも

１回の建て替えが行われていたことがわかる。北壁やや東側にカマドが付設され、住居跡北側で床面掘り込みを確認した。

カマド（図版７、第14図）

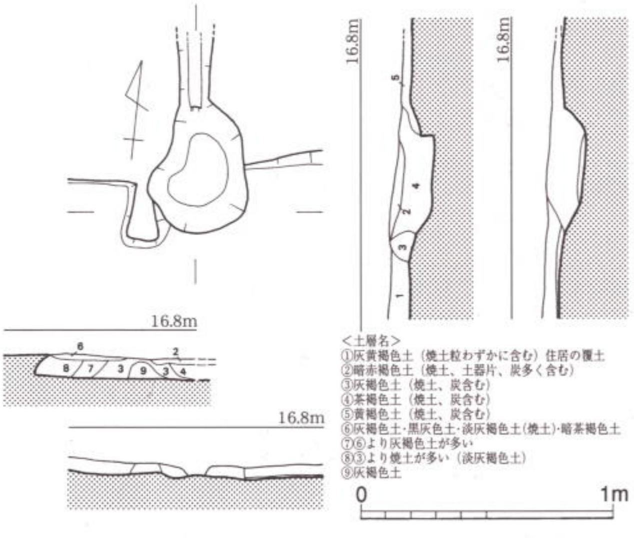
住居跡北壁やや東よりに付設されるカマドである。カマドは壁から30cm突出し、北側に煙道がのびるが、煙道部先端は誤って下げてしまい25cmのみ残る。左袖は調査時に掘りすぎて検出できなかったが、カマド床面の掘り込みから袖間が約30cm程度の間隔であったことが推定できる。また床面掘り込みが袖を切っている図面になっているが、炭・焦土層を先行して掘り下げて調査してしまったために、このような図面になってしまったが、本来は逆である。

出土遺物（第11図）

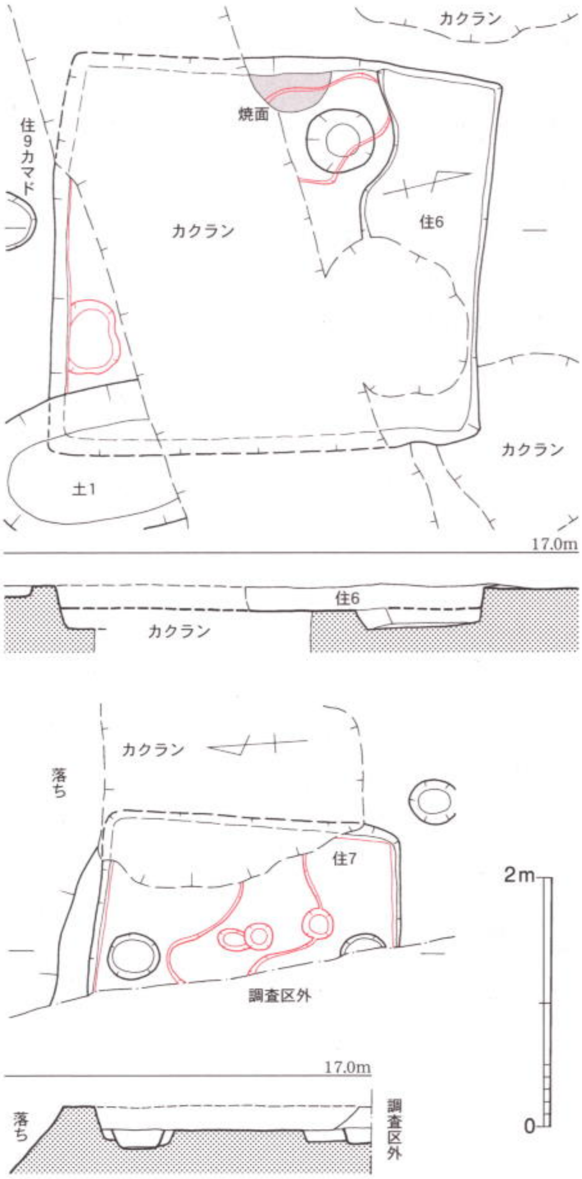
白磁（５）　玉縁口縁の白磁椀で、やや厚めの釉を施す。釉の発色はよく、淡緑白色を呈す。時期が異なるため、上層からの混入と考えられる。

６号竪穴住居跡（図版７、第15図）

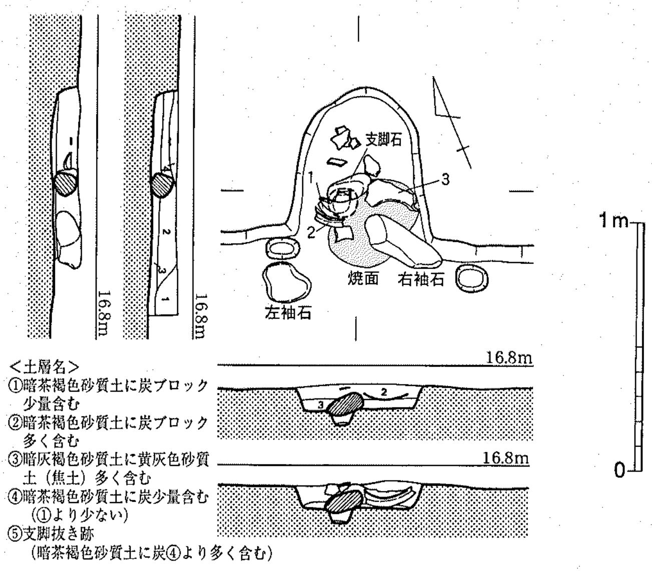
６号竪穴住居跡は、調査区住居跡集中区北西、２号竪穴住居跡北に位置する。住居跡南西隅から東壁まで撹乱を大きく受け、東南隅は１号土坑に切られる、残りの悪い住居跡である。覆土は黄褐茶色の南北3.4m×東西3.1mの正方形の住居である。住居跡西壁中央には焼面を確認し、カマドであった可能性もある。住居跡北側は調査時に床面掘り込みの高さまで掘ってしまい、10cm以上下げすぎてしまった。床面からピット１個、床面下から南壁に沿いピットを確認した。土器以外で覆土から土錘１点（第44図10）が出土。



第14図　５号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第15図　６・７号竪穴住居跡実測図（1/60）



第16図　９号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第16図）

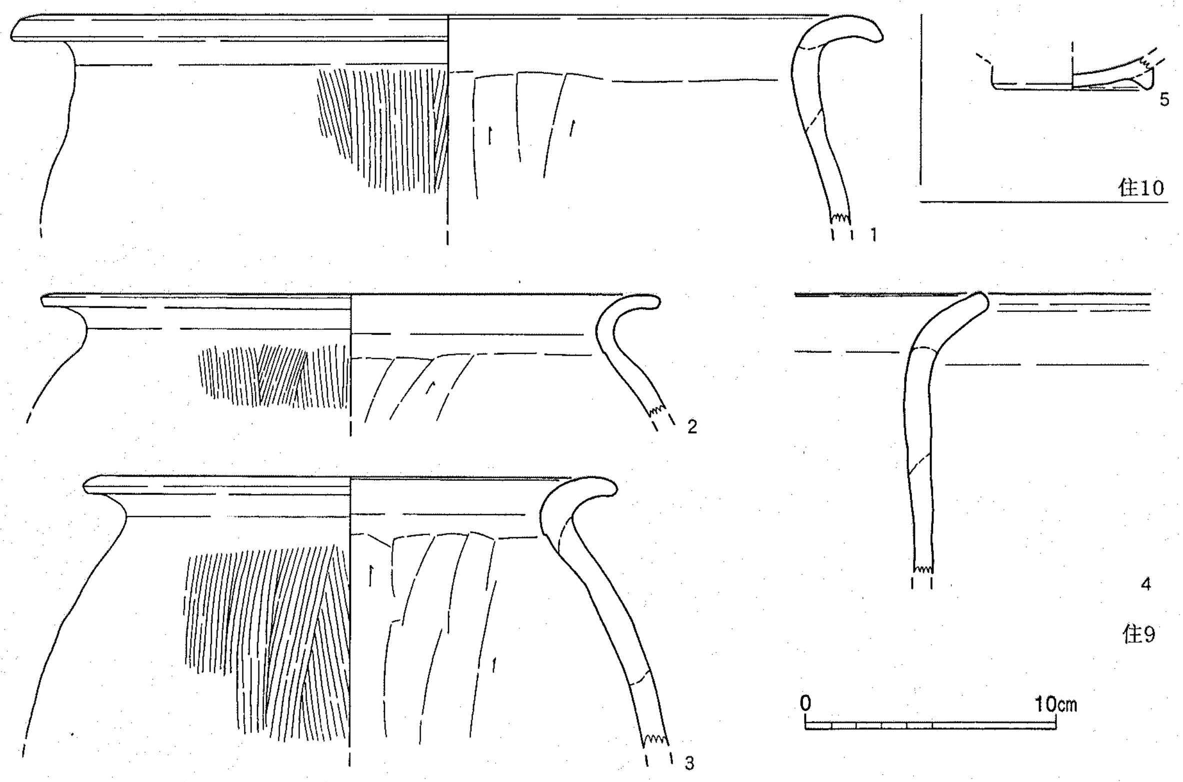
土師器（６～９）　６・７は甕の口縁部。６は強く外湾し、端部をやや下方につまみ出す。胴部は縦ハケ、内面は頸部近くまで縦方向のケズリを施す。内面には炭化物が付着する。色は黄橙褐色。７はかなり強く外傾する口縁部で、端部付近はほぼ水平になる形態。頸部外面には炭化物が付着する。色は橙褐色。

８・９は甕の把手である。８はかなり上方に屈曲する把手であり、断面は扁平である。色は暗黄褐色。９は住居貼り床内出土で、断面は楕円形を呈す。色は黄褐色。

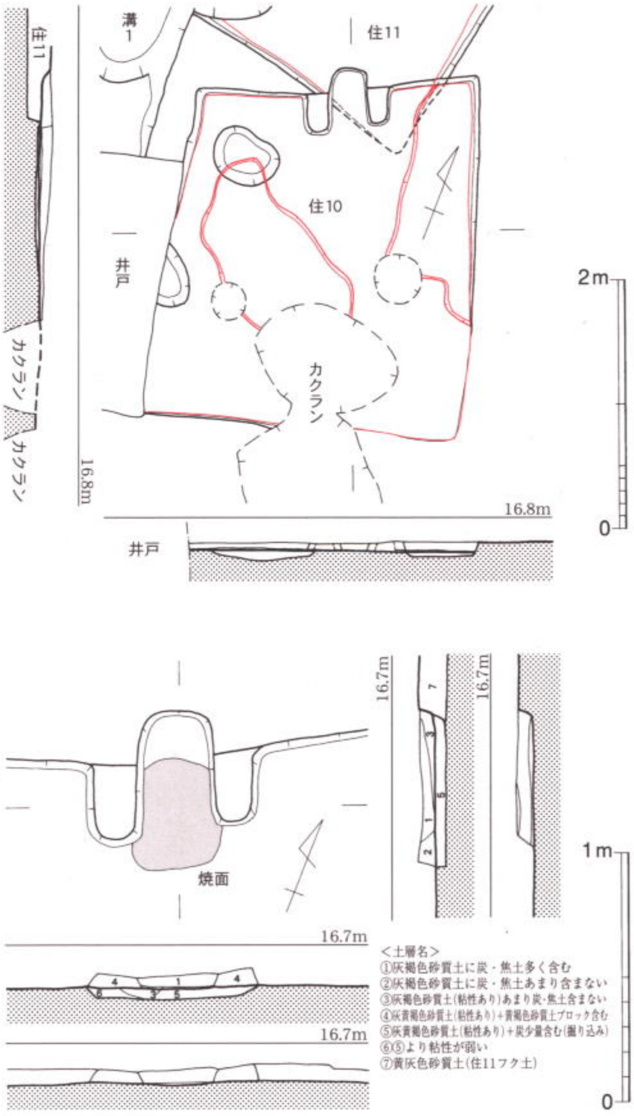
青磁（10）　青磁椀の体部であり、外面には浅い沈線が巡る。釉は緑灰色。

７号竪穴住居跡（図版７、第15図）

７号竪穴住居跡は調査区中央西壁際、第１遺構面住居跡集中区北西に位置する。西半分は調査区外であり、また東壁の大部分は撹乱を受ける。覆土は黄茶褐色で、南北2.5m×東西1.1m以上の小型の住居跡である。床面は主柱穴を２個確認し、床面下からピット３個と掘り込みを確認した。出土遺物は図示できるものはない。



第17図　９・10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第18図　10号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

8号竪穴住居跡（図版8、第4図）

8号竪穴住居跡は第1遺構面住居跡集中区中央北、4号竪穴住居跡北に位置する。住居跡西壁は1号土坑に切られ、東壁上端と住居跡北側の大部分は撹乱を受ける。住居跡は現状で南北1.3m以上×東西3.6m以上を測る。住居跡北の撹乱を挟んだ箇所で北壁を確認できなかったため、やや東西に長い寸詰り状の住居跡となることから、住居跡としての確信が持てない。床面にピット2個を確認し、全面に床面掘り込みが見られた。出土土器で図示できるものはないが、土錘1点（第44図11）が出土。

9号竪穴住居跡（図版8・9、第7図）

9号竪穴住居跡は1号竪穴住居跡西に位置し、2号竪穴住居跡に大半が切られる。住居跡北東隅がやや突出する形態の住居跡で、南北0.5m以上×東西2.9mを測る。覆土は暗茶褐色砂質土である。住居跡北壁中央やや西寄りにカマドを付設し、床面にはピット1個と全面にわたる床面掘り込みを確認した。

カマド（図版8・9、第16図）

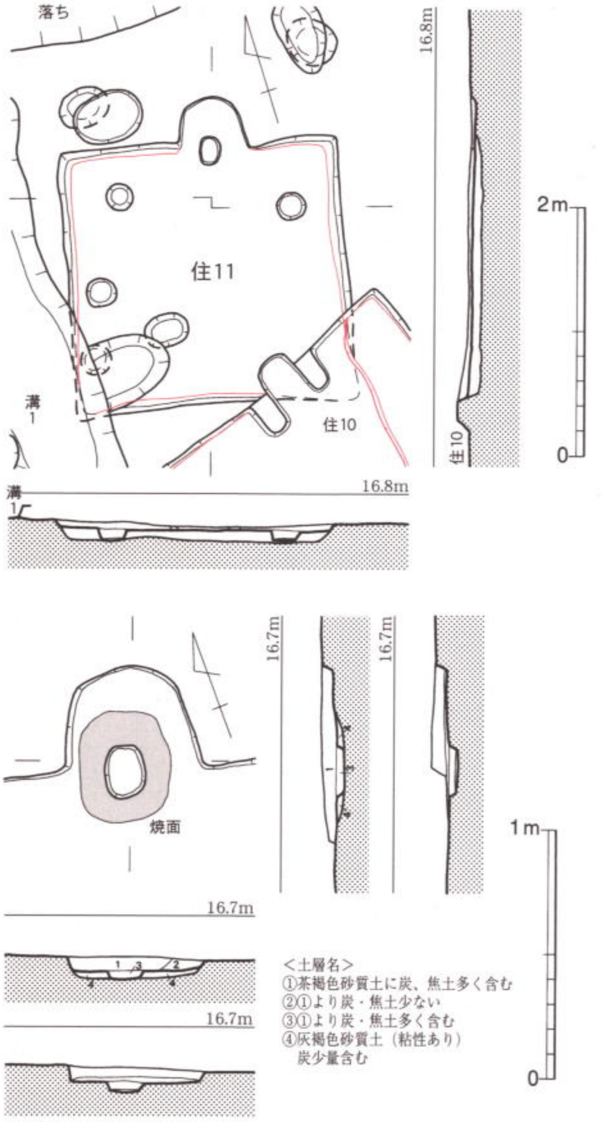
住居北壁から56cm突出するカマドで、奥壁から40cmの所に深さ7cmの支脚抜き取り痕があり、その前面で焼面を確認した。袖は確認できなかったが、壁沿いに袖石抜き取り痕が存在することから比較的短い袖であったことがわかる。袖石・支脚とも抜かれた状態で出土し、甕がまとまった状態で検出した(第17図1～3)。支脚は主軸からやや西にずれ、住居跡西の張り出しはカマドの設置と関係があるのかもしれない。

出土遺物（図版16、第17図）

土師器（1～4）　1～4は甕口縁部で、4以外はカマド内出土。1は口径が31cmになることから、口径に自信がない。口縁部はほぼ水平に外湾し、端部は下方につまみ出す。胴部外面は縦ハケ、内面は浅いヘラケズリで調整。色は淡橙色。2は強く外湾する口縁部で、端部は面取りする。器壁は薄く、焼成はやや不良である。色は淡橙色。3は短く外反する口縁部で、器壁はやや厚い。胴部中央には二次加熱痕が残る。色は橙色。4は緩やかに外反する口縁部で、端部を丸く収める。口縁部内面には黒斑が残る。色は橙褐色～黄褐色。

10号竪穴住居跡（図版9、第18図）

10号竪穴住居跡は調査区中央南、住居跡集中区東端に位置する。上層には5号竪穴住居跡が存



第19図　11号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

在し、11号住居跡を切る。南壁中央には撹乱があり、西壁の大部分は井戸のため未掘である。住居跡は南北2.5m×東西2.6mのやや南北に延びる正方形で、深さは５cm前後と浅く、残りは悪い。覆土は灰褐色砂質土である。住居跡北壁中央にはカマドが付設され、床面にはピット２個存在するが、主柱穴は確認できなかった。

カマド（図版９、第18図）

住居跡北壁中央に位置し、壁から20cm突出する。袖は壁から30cm程度構築しており、袖間は27cmと狭い形態である。また広い範囲で焼面を確認した。出土遺物で図示できるものは土師器１点のみである。

出土遺物（第17図）

土師器（５）　高台付杯身で、底径は6.0cm、内外面とも横ナデ、色は淡黄褐色を呈す。

11号竪穴住居跡（図版９・10、第19図）

11号竪穴住居跡は住居跡集中区北東に位置する。住居跡南西部は１号溝、南東部は10号竪穴住居跡に切られる。南北2.1m×東西2.3m、面積14.6㎡のやや東西に長い正方形であり、深さは５cm前後と残りは非常に悪い。覆土は茶褐色砂質土である。住居跡北壁中央にはカマドが存在する。床面にはピット４個確認し、北側２個は主柱穴と考えられるが、南側２個は不明である。出土土器は図示できるものはない。土器以外で鉄釘４点（第46図１～４）が出土したが、調査で検出できなかった後の時期の遺構のものであった可能性がある。

カマド（図版10、第19図）

住居跡北壁中央に位置し、壁から40cm突出する。住居跡の残りが悪いため、袖は確認できなかった。カマド中央に焼面とその真ん中に南北20cm、深さ３cmと浅い穴を確認した。支脚抜き取り痕と考えられるが、大きさと深さが浅いため自信がない。

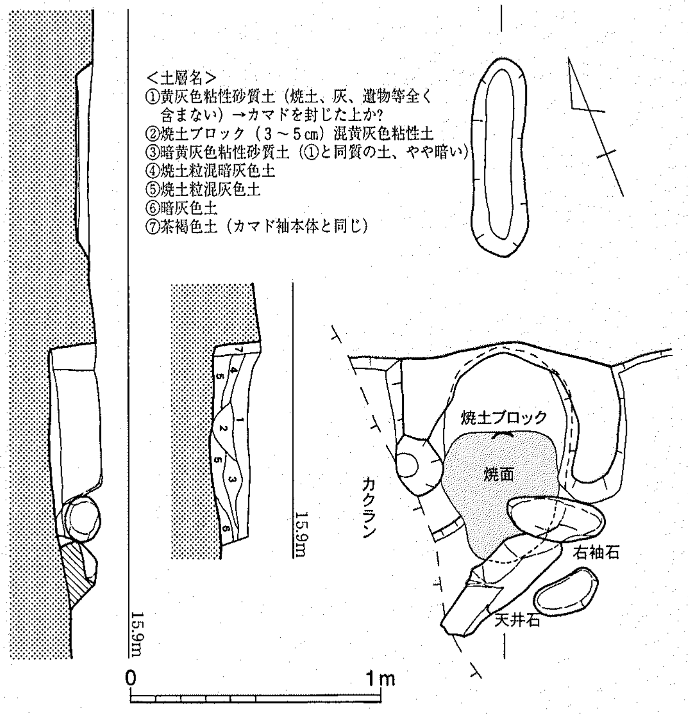
12号竪穴住居跡（図版10・11、第21図）

12号竪穴住居跡は調査区中央に位置し、第２遺構面で唯一検出された竪穴住居跡である。住居跡は北壁と西壁半分は大きく撹乱を受けるが、南北4.7m×東西4.8mの正方形の住居跡になる。深さは、北壁で11cm、南壁で24cmを測り、南側の方が残りがよい。

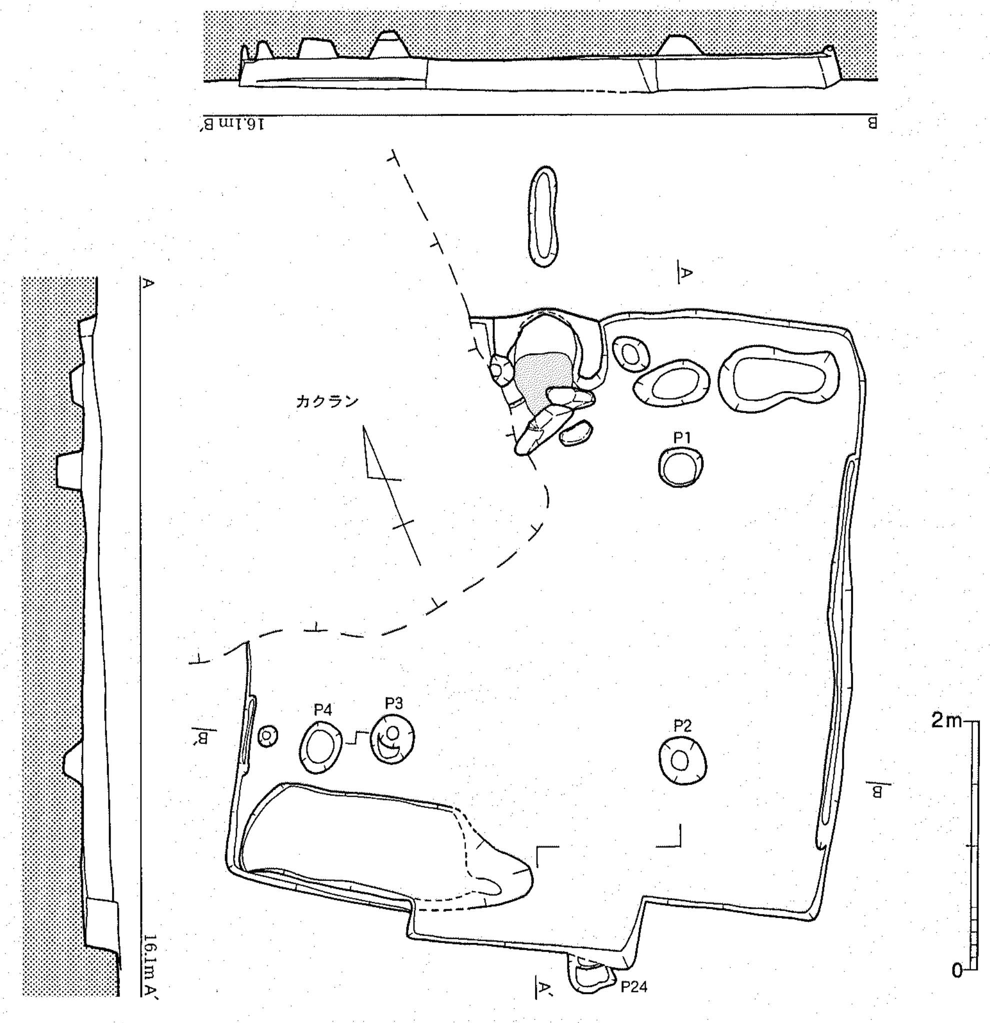
覆土は上層が黒褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の混じった層で、カマドが付設

される北壁に沿って混じりけのない黄褐色粘質土の広がりが見られた。南壁に突出部があり、検出当初はカマドを持つ住居跡と覆土が黒褐色粘質土の住居跡２軒の、計３軒の住居跡の切り合いととらえた。しかし、黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の境が、カマド袖石と天井石の真上を通ることからカマドを持つ住居跡と、覆土が黒褐色粘質土の住居跡の２軒の切り合いと認識を改めた。

撹乱をトレンチ替りに土層観察を行いながら掘り下げ、床面を検出した。床面はにぶい黄褐色土で、南壁とP2、P3の間が硬化していた。この硬化面が２軒の住居跡にまたがって広がること、床面に２軒分の主柱穴が確認できないことから、１軒の住居跡であるとの結論に至った。



第20図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第21図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）

住居跡南壁の突出部は土層の確認を丁寧に行わなかったので確実性に欠けるが、階段状の昇降施設であった可能性がある。東・西壁には壁周溝を確認した。床面ではピット９個を確認し、主柱穴はＰ１、Ｐ２は確実であるが、Ｐ３、Ｐ４のどちらが主柱穴になるのかは北西側が撹乱を受けるため不明である。住居跡北壁中央にはカマドが付設される。北壁に沿って見られた黄褐色粘質土はカマドの上面を覆っていた。

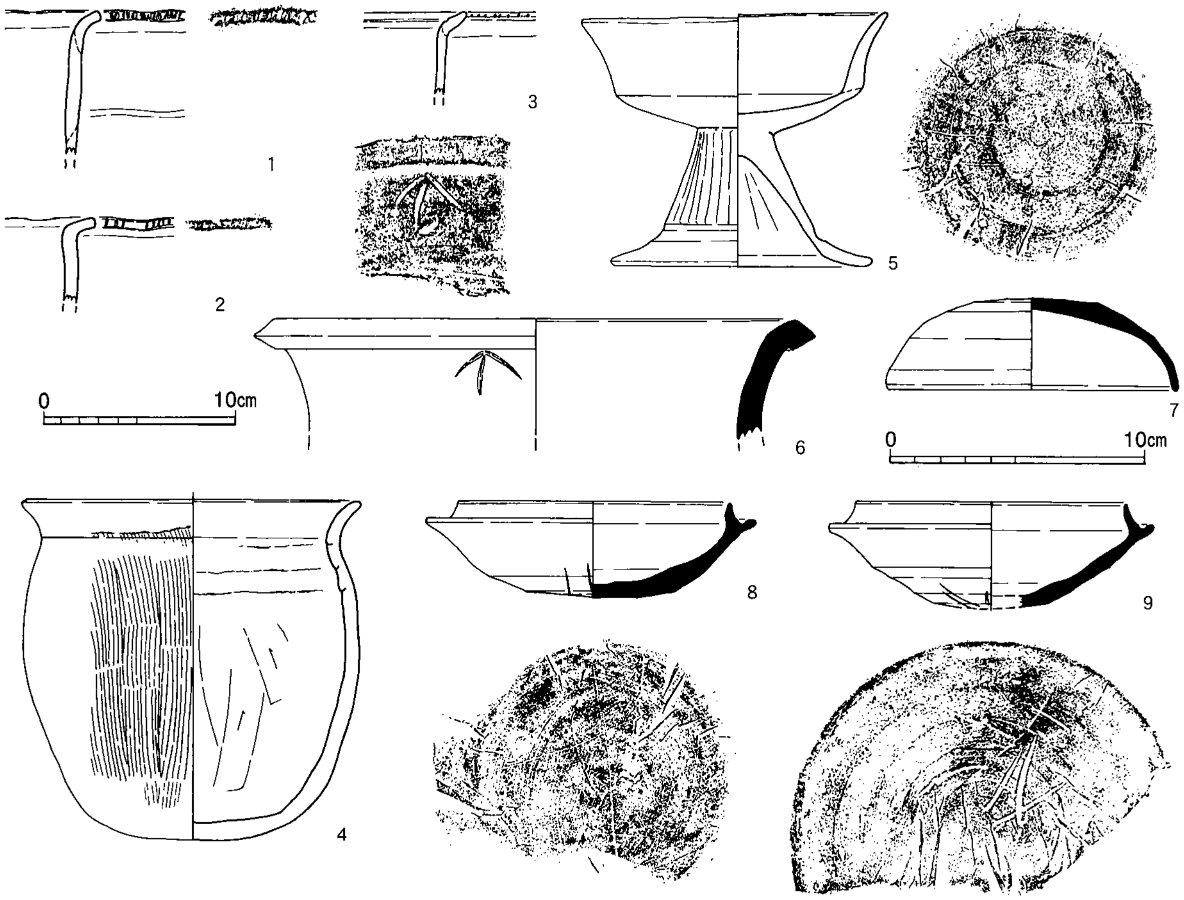
土器以外で加工痕のある軽石２点が出土した（第45図５・６）。住居の時期は出土土器から６世紀末である。

カマド（図版10・11、第20図）

住居跡北壁中央で検出した。カマドは壁からわずかに突出し、北側に煙道がのびるが、削平のため一部のみ検出したにとどまる。カマドはやや円形状に袖が焼面を囲む形態である。袖は茶褐色粘質土で構築され、壁から55cm突出し、袖間は46cmを測る。袖先端部には広く焼面が検出され、その北端では焼土ブロックが存在し、甕などを使用した支脚を固定するものであった可能性がある。カマド前面には右袖石、天井石が倒された状態で検出され、左袖先端部では袖石掘り方を検出した。

出土遺物（図版16、第22図）

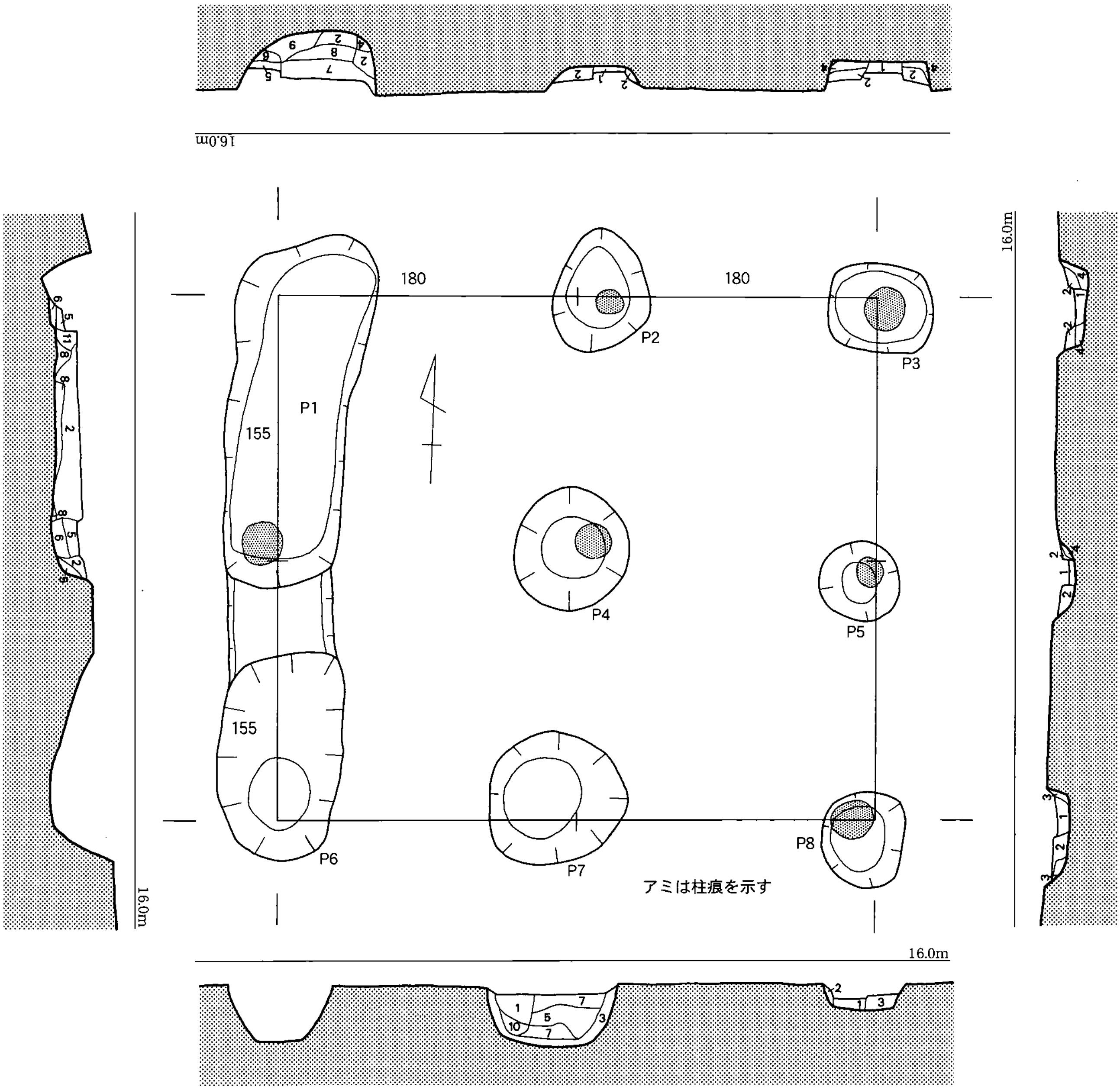
弥生土器（１～３）　１～３は前期の甕口縁部で、いずれも細粒を多く含む。１は体部上部にヘラによる凹線が巡る。口縁端部は工具による刻目を密に施し、口縁部内面には黒斑をもつ。色は暗黄褐色。２は強く外反する口縁部で、端部にはヘラ状工具による浅い刻目を密に施す。色は淡橙褐色。３は丸い形態の口縁端部で、浅い刻目を密に施す。外面にはススが付着する。色は黄褐色。



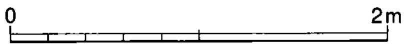
第22図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（１～３は1/4, 他は1/3）

土師器（４・５）　４は口径13.0cm、器高13.5cmの完形の小型甕である。内湾する体部内面には粘土継ぎ目痕が残り、外面にはススと二次加熱痕あり。色は暗黄褐色。５は口径11.4cm、底径10.0cm、器高9.8cmの完形の高杯。ゆるやかに内湾する口縁部で、杯部内外面とも摩滅のため調整不明。脚部は外面縦ミガキ、内面はヘラケズリのち横ナデを施す。色は橙色。

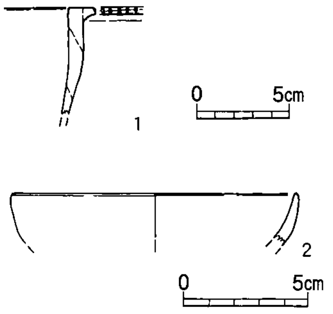
須恵器（６～９）　６は甕口縁部で、端部の面を明瞭に回転ナデで仕上げる。外面にはヘラによる



<土層名>
①灰白色粘質土（多）＋黒褐色粘質土（少）
②黒褐色粘質土（多）＋灰白色粘質土（少）
③黄灰褐色砂質土（地山）
④黄灰褐色微砂（地山）
⑤暗褐色粘質土（多）＋灰白色粘質土（少）＋黄褐色粘質土（少）
⑥黄褐色粘質土（多）＋黒褐色粘質土（少）＋灰白色粘質土（少）
⑦⑤より黄褐色粘質土が多い
⑧⑥より黄褐色粘質土が多い
⑨⑧より黄褐色粘質土が多い
⑩灰白色土＋黄褐色土
⑪⑤より暗褐色粘質土が多い



第23図　１号掘立柱建物跡実測図（1/40）



第24図　1号掘立柱建物跡出土土器実測図
（1は1/4，2は1/3）

線刻を施す。内外面には自然釉が付着する。色は灰色。

7は口径11.3cm、器高3.7cmの完形の須恵器杯蓋で、口縁端部を丸く収め、天井部のみヘラケズリを施す。内面には×のヘラ記号あり。色は灰褐色。8・9は杯身である。8は口径10.6cm、器高3.8cmの完形で口縁部はやや内湾気味の直立につまみ出す。底部のみヘラケズリし、外面にはヘラ記号あり。色は灰褐色。9は内傾する口縁部をもち、体部は直線的で中位までヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号あり。色は灰褐色。

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版11、第23図）

第2遺構面調査区中央よりやや西側、12号竪穴住居跡西に位置する。2間×2間の総柱建物で、主軸方位は北に対して2°西をむくほぼ真北方向となり、面積は11.1㎡である。P1～5・8で確実に柱痕を確認できたことから、柱間寸法は東西方向が6尺（180cm）、南北方向が5尺（155cm）となり、南北方向に桁が掛けられているようである。柱掘り方は50～80cm前後の楕円形で、深さは15～40cmとばらつきがある。P1・6は掘り方が連続し、長さ210cm、幅85cmの布掘り状になる。柱痕は15～20cm前後と小さいもので、灰白色粘質土と黒褐色粘質土が堆積していた。掘り方から土器が少量出土したが、時期を確定できるものではない。12号住居跡と同一面で近接しているが、主軸がそろわず、時期も住居跡とは建物規格からも異なると考えられる。

出土遺物（第24図）

弥生土器（1）　1は前期の甕口縁部でP1出土。貼り付け突帯上に工具による刻目を密に施す。口縁端部は平らに面取りする。外面にはススが付着する。色は黄褐色。

土師器（2）　2は小型の杯の口縁部でP7出土。内外面とも摩滅のため調整不明。色は橙褐色。

土坑

1号土坑（図版12、第25図）

1号竪穴住居跡北に位置し、6・8号竪穴住居跡を切る。北半分は撹乱を受けるが、長軸1.4m以上×短軸1.3m、深さ48cmを測る。

出土遺物（第26図）

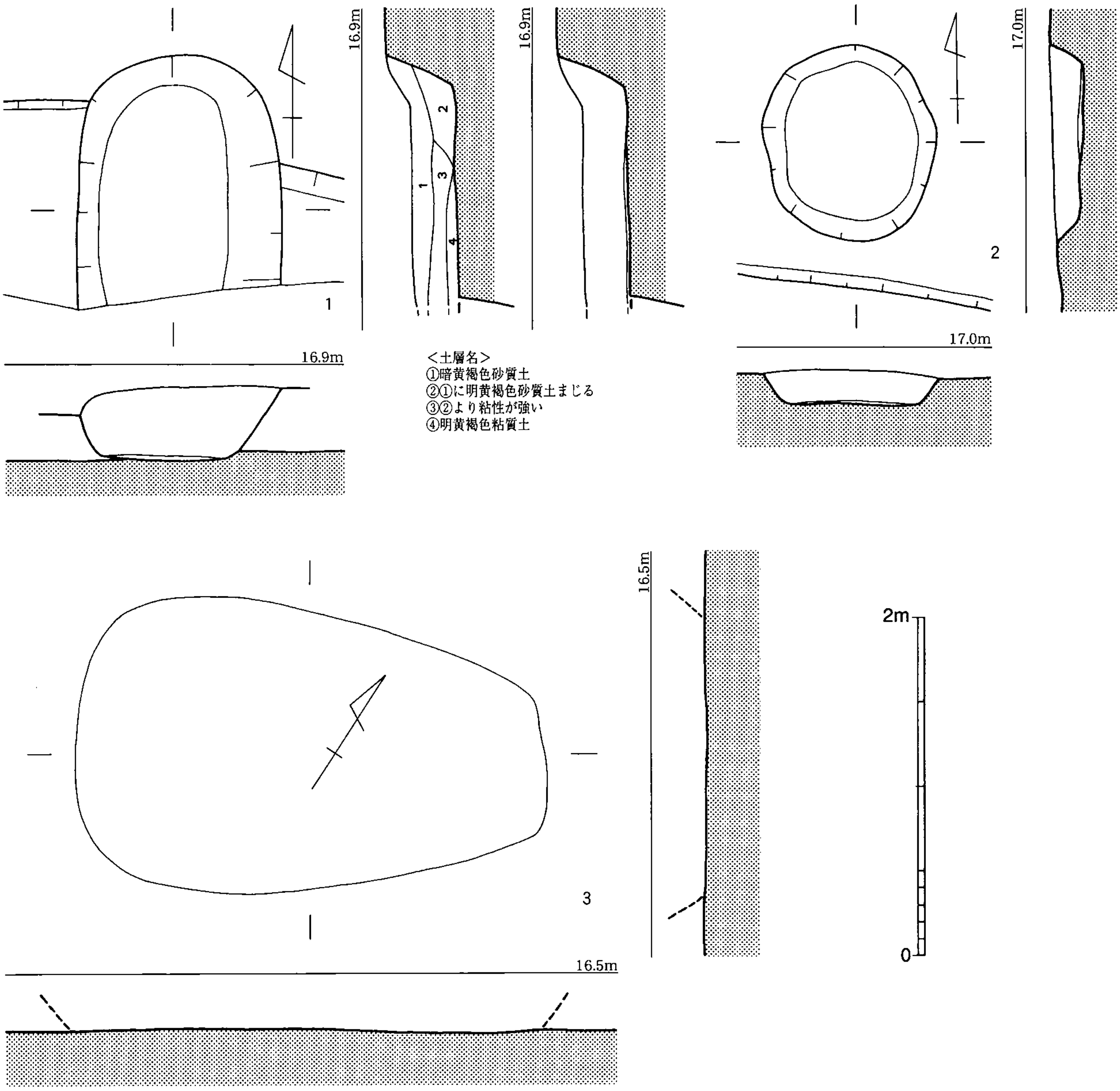
土師器（1）　図示できるのは、土師器甕口縁部1点のみ。口径16.2cmと小さく、口縁部は強く外反する。色は橙色を呈す。

2号土坑（第25図）

1号竪穴住居跡東に位置する。長軸1.2m×短軸1m、深さ15cmで、埋土は暗黄褐色土。出土遺物は図示できるものはない。

3号土坑（第25図）

調査区中央北側のやや西寄りに位置する。土坑大半は削平され、下端のみ確認した。この下端で



第25図　１～３号土坑実測図（1/40）

長軸2.7m×短軸1.8mを測り、埋土は灰茶色土である。覆土から削平されていたものの多くの土器が出土した。時期は土器から８世紀末～９世紀前半と考えられる。

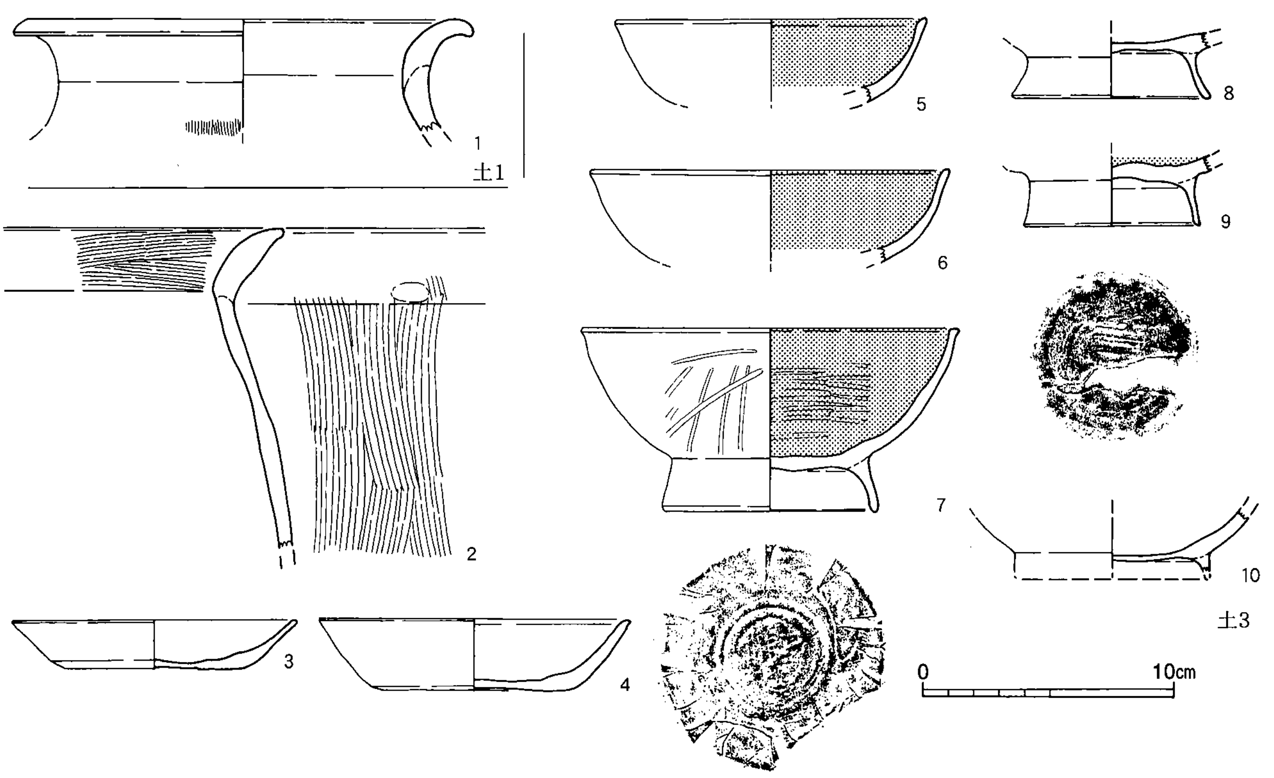
出土遺物（図版16、第26図）

土師器（２～４・８・10）　２は甕口縁部で、頸部から鋭角に屈曲し、端部を外につまみ出す。外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケで調整する。外面には黒斑あり。色は黄褐色。

３・４は土師皿である。３は口径10.8㎝、やや内湾する口縁部で、底部はヘラ切りを行う。色は淡橙色。４は口径12.0㎝、口縁端部を上方につまみ出し、底部はヘラ切りを行う。色は橙色。

８はやや外湾する椀の高台で、中央部が薄い形態。色は淡橙色。10は低い高台の椀で、摩滅のため調整不明。色は橙色。

黒色土器（５～７・９）　いずれも黒色土器Ａ類。５は内湾する体部で、内外面は横ナデで調整する。外面は橙色。６は口縁端部をわずかに外反させ、調整は摩滅のため不明。外面は黄褐色を呈す。７は内湾する体部に口縁端部を外方にわずかにつまみ出し、上方を面取りする。高台は内湾気味に直立す



第26図　1・3号土坑出土土器実測図（1/3）

る。体部外面は手持ちによる粗い縦ミガキを施し、体部の底部は板状圧痕が残る。外面は橙褐色を呈す。９は高台の厚さが薄く、高台内面には板状圧痕が残る。椀内面は炭素を吸着させる。外面は橙色。

４号土坑（第27図）

調査区北西、３号土坑西に位置する。土坑上部はすでに削平されていたが、壁の立ち上がりが緩やかな浅い土坑となると考えられる。長軸3.3m×短軸2.7m、深さ20cmで土器が多く出土した。出土土器から８世紀末～９世紀前半の時期のものと考えられる。土器以外で滑石製石鍋片２点（第45図２・３）出土。

出土遺物（図版17、第28図）

土師器（１～14）　１は甕口縁部で、直立する胴部に緩やかに外反する口縁部をもち、端部はすぼまる形態。内面は頸部までヘラケズリで調整。色は暗黄褐色。２は小型の甕で、口縁端部を外方につまみ出す。内面は頸部までヘラケズリを行う。色は暗黄褐色。

３～９は土師皿である。底部はいずれもヘラ切りを行い、色は淡橙色～黄褐色を呈す。法量は、３・４は11cm前後、５～６は13cm前後である。８の底部には板状圧痕が残る。５の外面にはススが付着する。

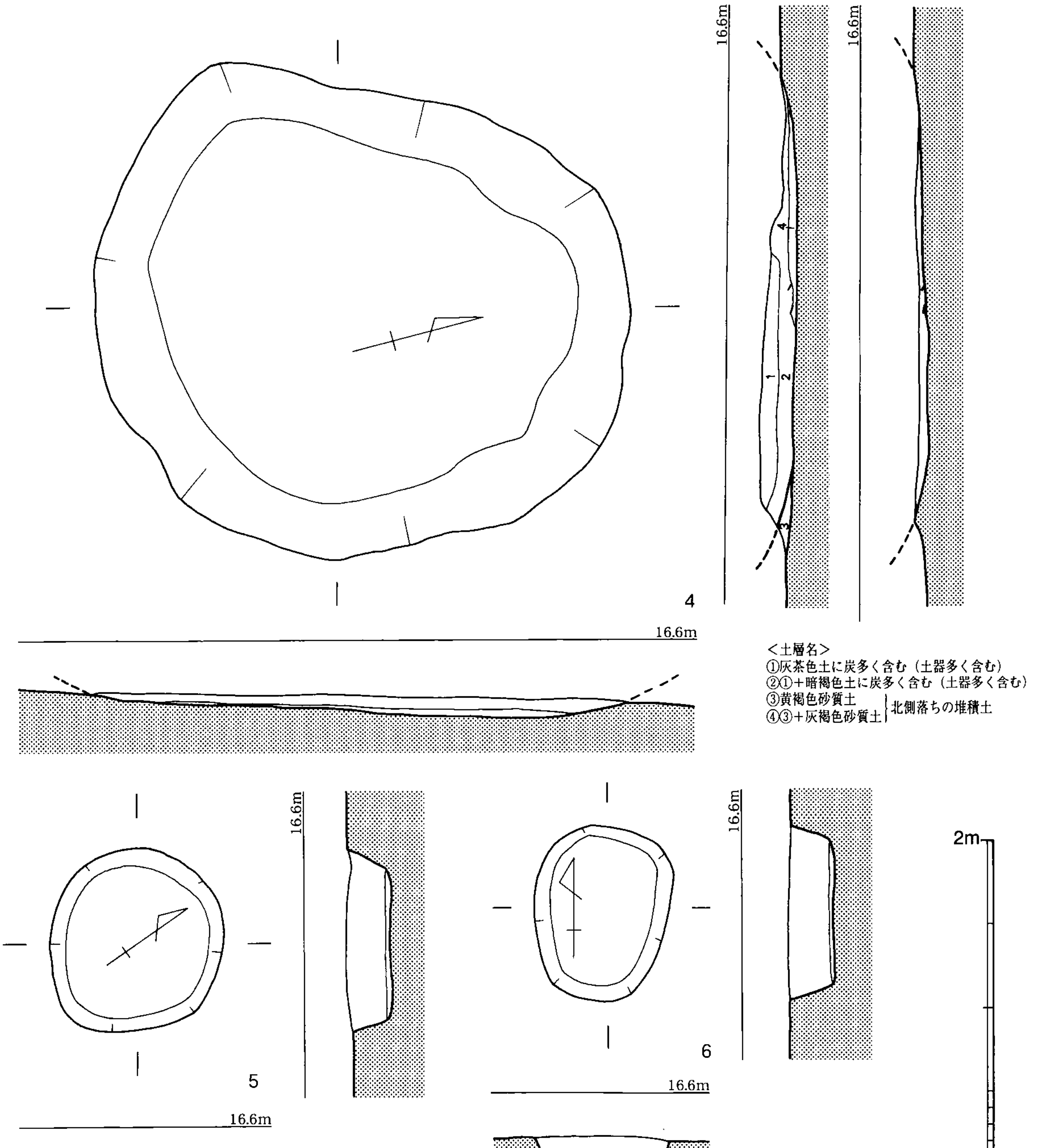
10～14は高台付の椀である。10は口縁端部をわずかに外反させる。11・12は高い高台を持つが、13・14は低い高台である。いずれもナデ調整で、色は橙色～黄褐色を呈す。

黒色土器（15～21）　18がB類、その他はA類である。16・20の椀内面はミガキが残るが、その他は摩滅のため調整不明。15・16は口縁端部をわずかに外反させる。17～20は低い高台部で、19は体部と高台の境が凹線状になる。21は高い高台部をもち、底径は7.0cmと小型である。外面はいずれも橙色～黄橙褐色を呈す。

瓦器（22）　22は口径18.2cm、器高6.9cmの完形品である。口縁端部をわずかに外反させ、内外面に丁寧な横ミガキを施す。高台内面は高台部を張りつける前に回転を利用した、渦巻状の沈線状の工具痕が残る。

5号土坑（第27図）

調査区南東、5号溝西に位置する。長軸1.2cm×短軸1.1cm、深さ25cmで埋土は灰黄褐色粘質土で、炭を多く含む。出土遺物は図示できるものはない。



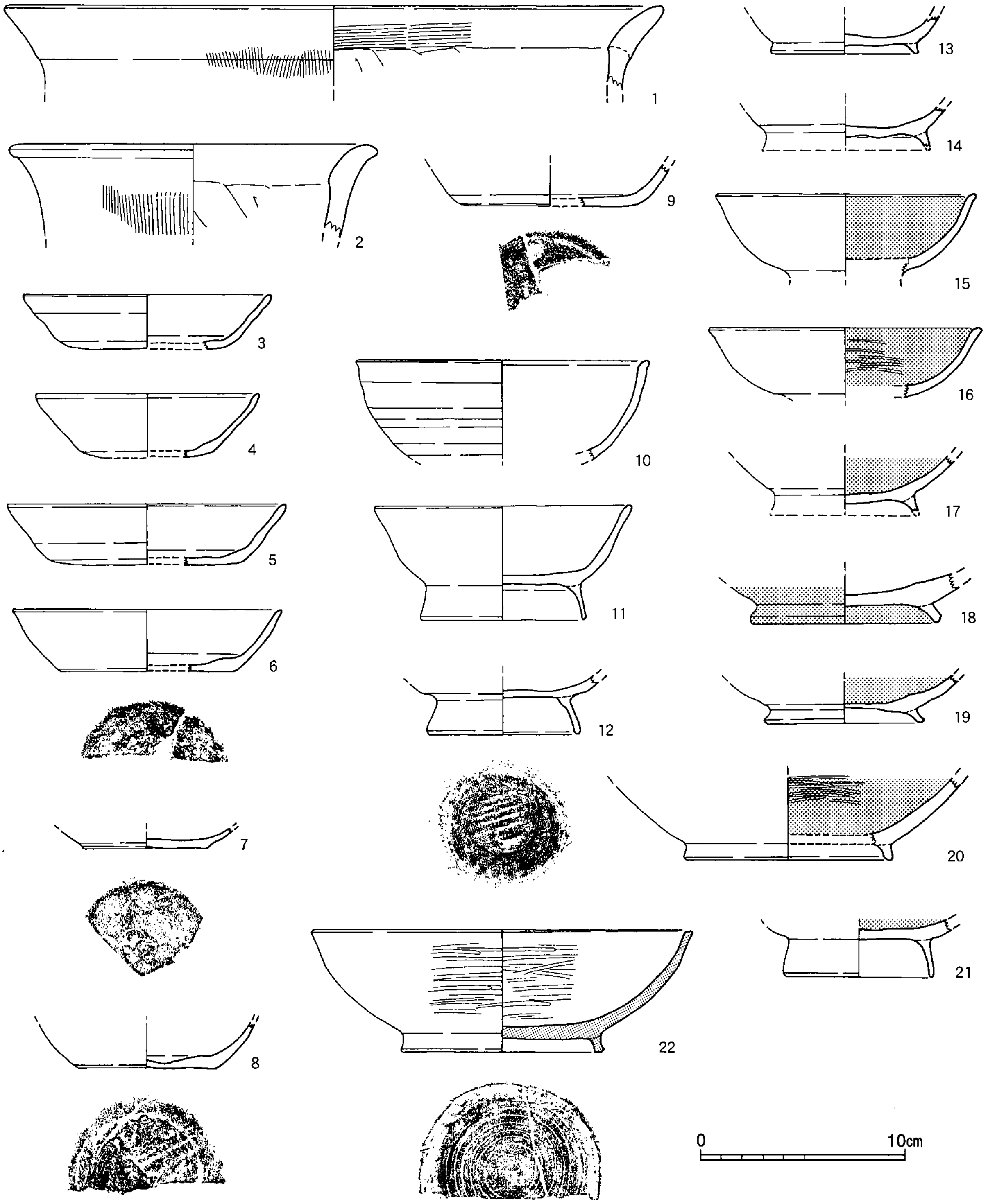
第27図　4～6号土坑実測図（1/40）

6号土坑（第27図）

調査区中央南よりやや東、3号溝南に位置する。長軸1.1m×0.8m、深さ25cmで、埋土は暗黄褐色粘質土。出土遺物は図示できるものはない。

7号土坑（図版12、第29図）

調査区南西隅、7号溝北に位置する。長軸65cm×短軸50cm、深さ8cmの小さな土坑であり、埋



第28図　4号土坑出土土器実測図（1/3）

土は暗黄灰色。土坑内から甕２点出土した（第30図１・２）。

出土遺物（図版17、第30図）

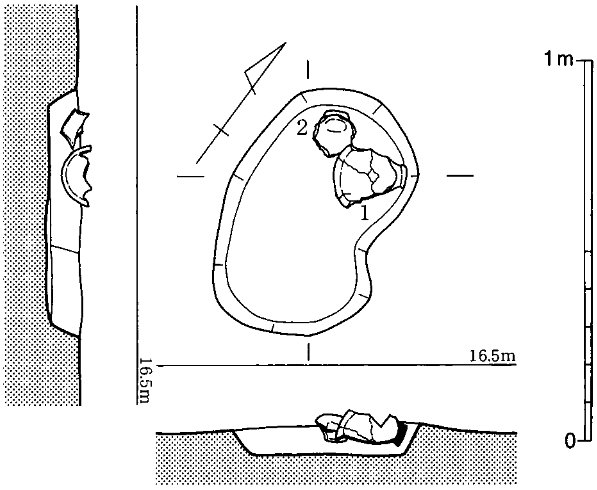
弥生土器（１・２）　前期の甕である。１は小型で内湾する胴部に、強く外反する口縁部をもつ。底部は厚く、やや新しい傾向を示す。外面には二次加熱痕が残る。胎土は石英を多く含み、色は橙褐色。２は底部で、底部には籾殻痕が付く。外面底部近くには工具痕、内面にはナデ上げ痕が、また外面には二次加熱痕が残る。胎土は石英を多く含み、色は黄褐色。

８号土坑（図版12、第31図）

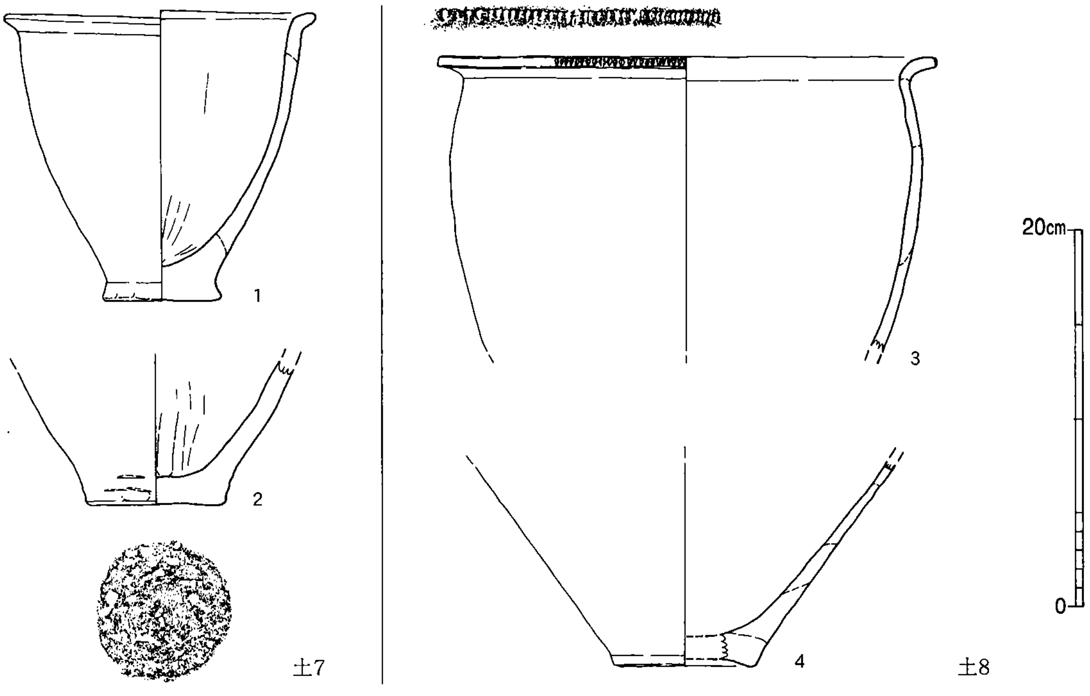
調査区中央南、９号竪穴住居跡南に位置する。長軸1.1m×短軸0.8m、深さ12cmの土坑で、埋土は暗黄灰色。

出土遺物（図版17、第30図）

弥生土器（３・４）　前期の甕である。３は胴部中位よりやや上部が張る新しい傾向の甕で、口縁部は端部ではほぼ水平になるまで強く外反する。口縁端部には木の板による刻目を密に施し、外面にはススが、内面には黒斑がある。胎土は細粒を多く含み、色は黄褐色。４は底部であるが、底径が小さく、傾きが直線的に傾き、底部がやや上げ底になる形態を示す。胎土は細粒を多く含み、色は黄褐色。



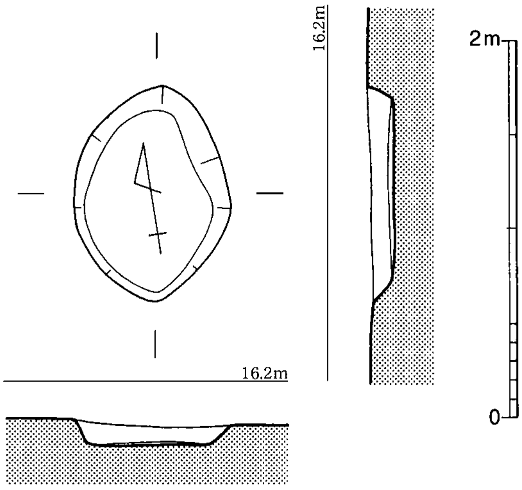
第29図　７号土坑実測図（1/20）



第30図　７・８号土坑出土土器実測図（1/4）

道路状遺構（図版15、第32・37図）

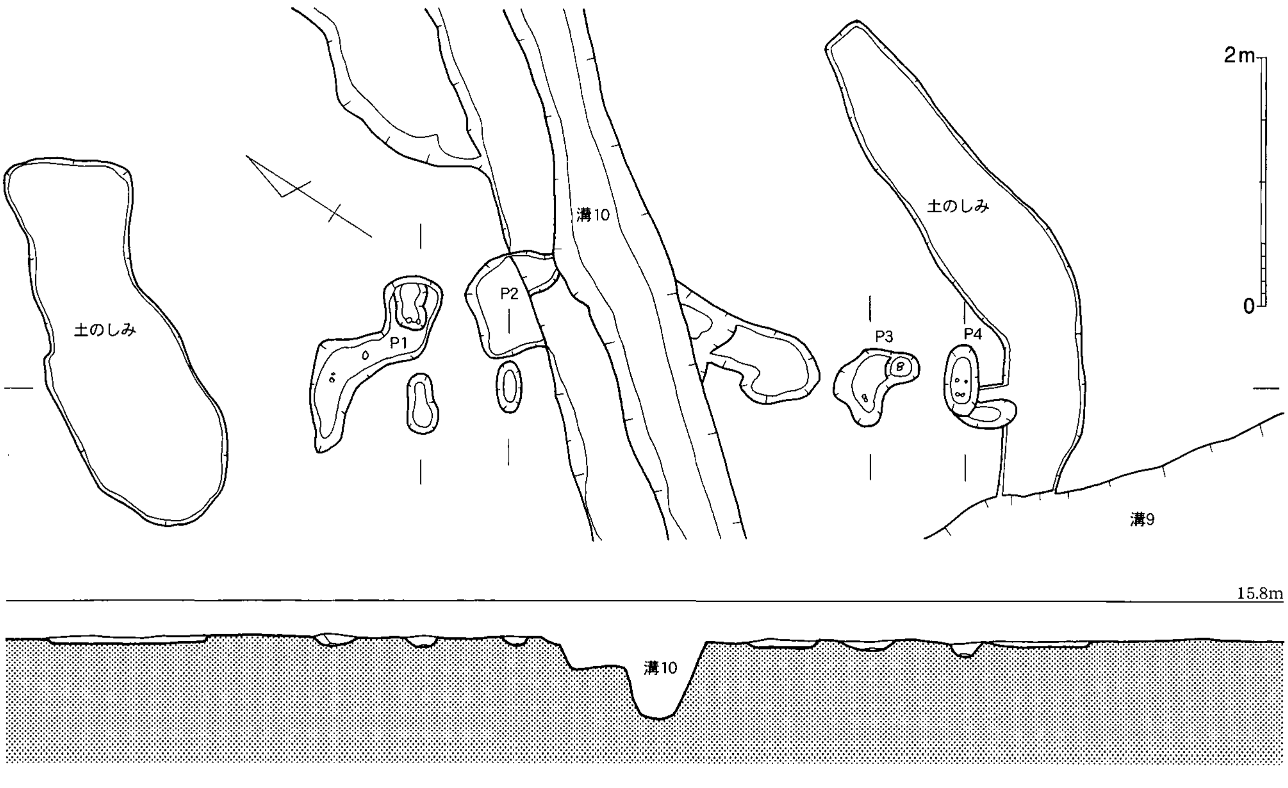
調査区北東、９・11号溝に挟まれた場所に位置し、10号溝に切られる。８つの楕円形を基本とするピット列が北西から南東にかけて並び、北西と南東の浅いくぼみは土のしみを間違えて掘ってしまった。ピット埋土は灰褐色砂質土が最上層に、その下に黄灰褐色・橙褐色・暗赤褐色砂質土が１～２cm、順によく締めながら埋めている状態が確認された。またＰ１・３・４下端には小さな河原石が数個、橙褐色・暗赤褐色砂質土に埋め込んでいた。また10号溝は９・10号溝を切るが、溝の機能という面から考えるとこの道路状遺構に伴う排水用の溝の可能性がある。



第31図　８号土坑実測図（1/40）

出土遺物はないため時期は不明であるが、溝９・11の間の低湿地に道路を作る際に軟弱な地盤を改良するために作られたものと考えられることから、ほぼ同時期の８世紀後半と思われる。

道路状遺構については、吉井町船越高原遺跡で橋脚状遺構とともに３列のピット列からなる同様の遺構を検出している。この報告の中で、浮羽郡内には他に吉井町生葉地区遺跡群や塚堂遺跡でも道路状遺構が検出されており、機能としては低湿地に道路を作る際に、排水用と考えられる溝を掘削して排水し、また道路下には小石などをピットにいれ補強したものと指摘する。このことから当遺跡の道路状遺構においても同様のことが言えるであろう。



第32図　道路状遺構実測図（1/60）

溝

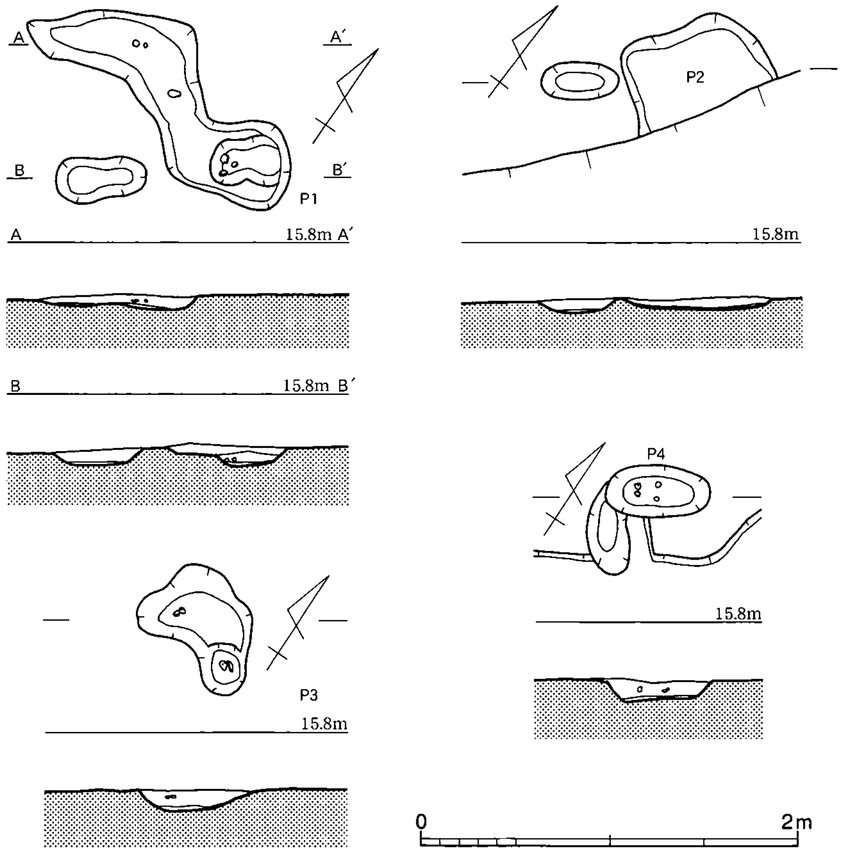
１号溝

調査区中央南で検出した南北に延びる小溝で、11号竪穴住居跡を切る。溝南端は井戸により未掘であるが、現状で長さ4.2m、幅最大1.5m、深さ70㎝で、埋土は暗黄褐色粘質土。土器以外で滑石製石鍋片１点（第45図４）出土。

出土遺物（図版17、第34図）

黒色土器（１）　椀で器壁が厚く、内外面を斜め方向に丁寧に磨く。外面は上部まで炭素を吸着しているように見えるが、摩滅のため断定できない。

土師器（２）　椀の底部で、短い高台をもつ。色は灰白色。



第33図　道路状遺構ピット個別実測図（1/40）

２号溝

調査区中央南の南北に延びる小溝で、１号溝西に位置し、１号溝とほぼ並列する。溝北端は撹乱を受けており、現状で長さ2.8m、幅0.6m、深さ10㎝で、埋土は暗黄褐色粘質土。

出土遺物（図版17、第34図）

土師器（３・４）　３は甕の口縁部で、口縁部をやや外反させる。外面には黒斑、内面には炭化物が付着する。４は土師皿で、短い口縁部をもつ。色は淡橙色～黄褐色。

３号溝

調査区中央やや東よりに位置する。深さが浅いため、５号溝と切り合い関係は確認できなかった。溝西側は撹乱を受け、現状で長さ5.5m以上、幅0.4m、深さ５㎝。埋土は黄褐色粘質土。出土遺物で図示できるものはない。

４号溝

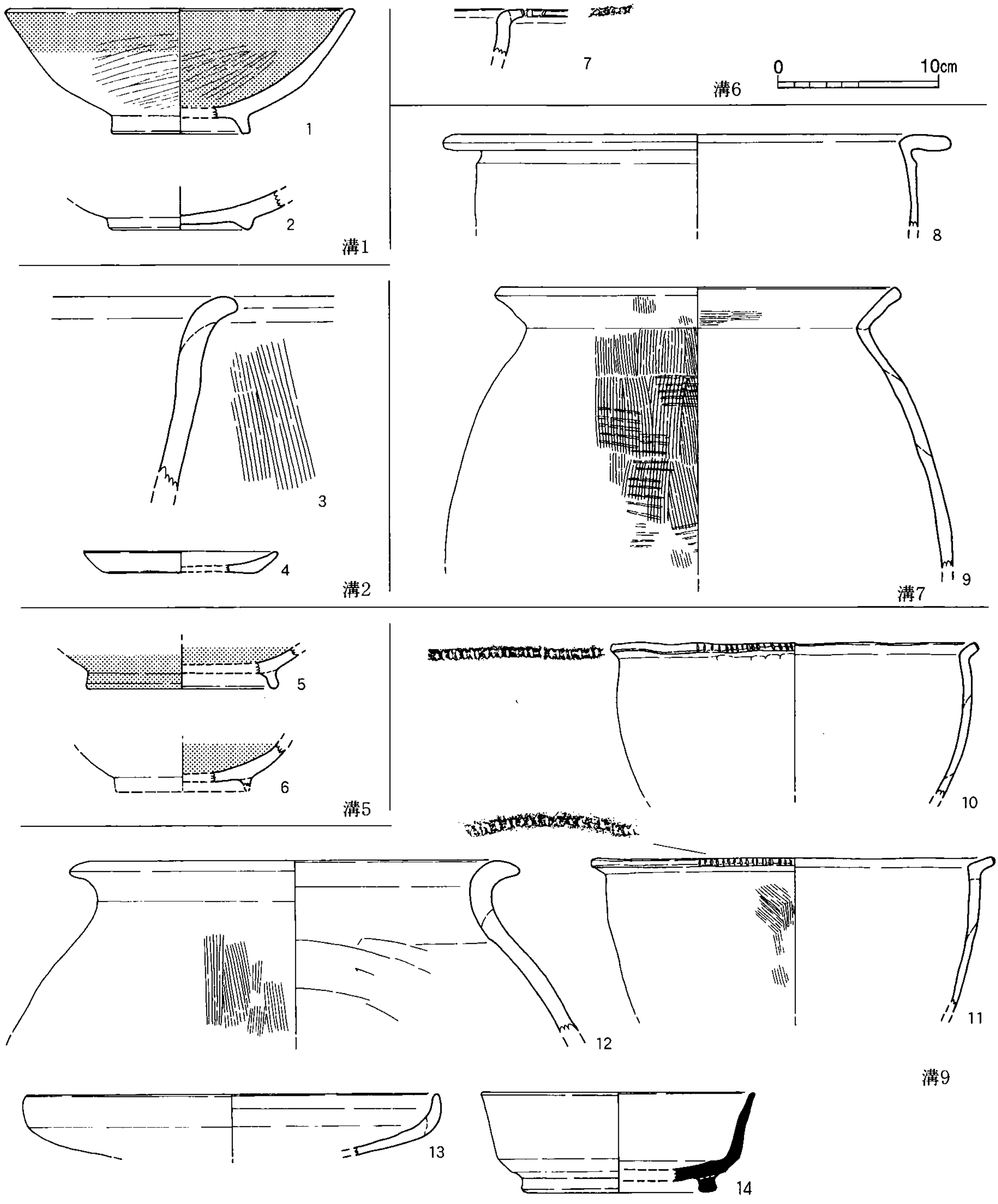
調査区中央やや東より、３号溝北に位置する小溝である。溝西端は撹乱を受ける。現状で長さ3.5m以上、幅0.4m、深さ７㎝で、埋土は黄褐色粘質土。出土遺物で図示できるものはない。

５号溝

調査区南東の南北にのびる溝で、３号溝と切り合うが深さが浅いため、切り合いの前後関係は確認できなかった。南端は調査区外までのびる。現状で長さ25.5m以上、北端で幅1.1m、深さ20cm、中央で幅0.6m、深さ10cm、南端で幅0.6m、深さ10cmを測る。埋土は黄褐色粘質土を呈す。

出土遺物（第34図）

黒色土器（５・６）　いずれも高台付の椀である。５はB類でやや内湾する高台をもつ。６はA類で、短い高台をもつ。外面は橙褐色を呈す。



第34図　１・２・５～７・９号溝出土土器実測図（７～11は1/4, 他は1/3）

６号溝

調査区北西隅の南北にのびる小溝で、南側は撹乱を受けている。長さは現状で9.0m以上、北側で幅0.3m、深さ５cm、南側で幅0.3m、深さ７cmと浅い。埋土は暗黄褐色粘質土。出土土器で図示できるものは１点であるが、溝の時期を示すものではない。土器以外で軽石１点出土（第45図８）。

出土遺物（第34図）

弥生土器（７）　前期の甕口縁部である。強く短く外反する口縁部で、端部には浅い刻目を施す。胎土は細粒を多く含み、色は淡橙色。

７号溝（図版13、第35・36図）

調査区南西隅の南東から北西に直線的な溝で、溝両端とも調査区外までのびる。溝の傾斜は緩く、一部２段掘り状を呈する。溝全体現状で長さ11.9m、南東隅で幅1.6m、深さ54cm、北西隅で幅1.7m、深さ60cmを測る。溝上層から弥生時代後期の甕が出土した。

出土遺物（図版16、第34図）

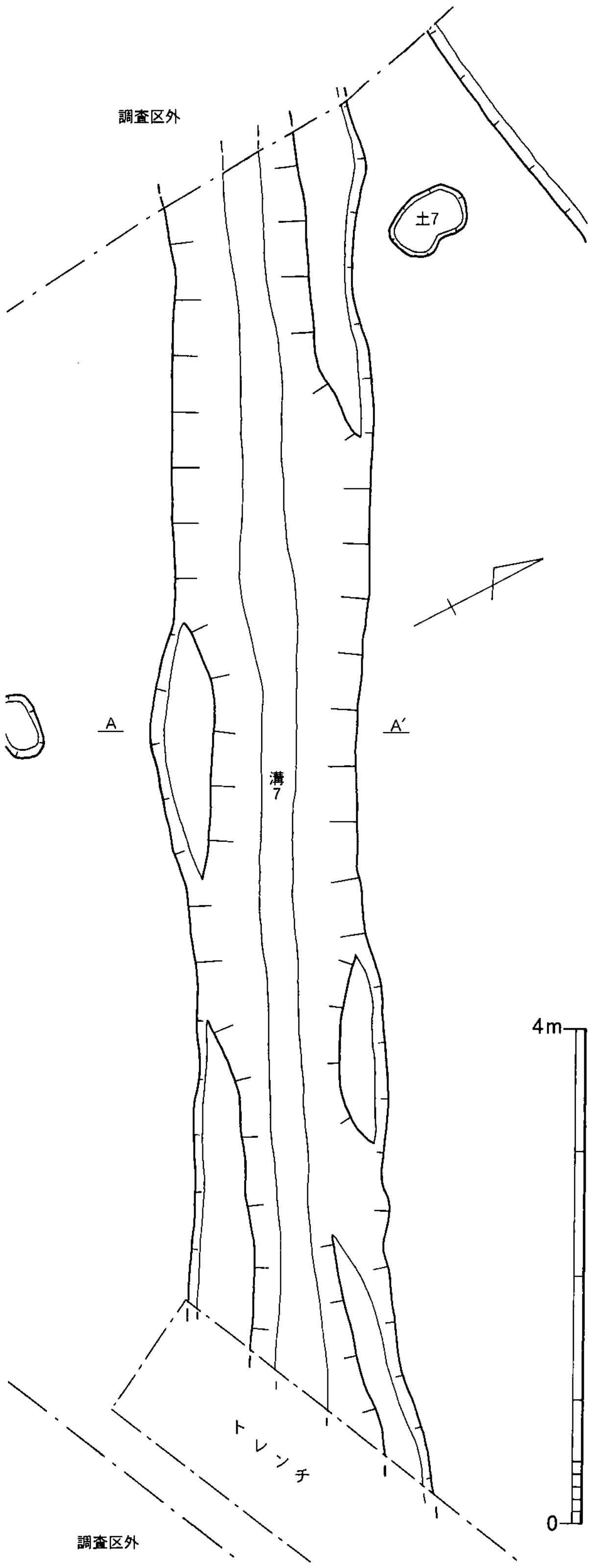
弥生土器（８・９）　８は中期の甕口縁部。口縁下にはナデにより突帯状になる。色は淡橙色。９は弥生終末の甕で、くの字状の口縁部をもつ。口縁端部はナデで面取りし、胴部は横方向のタタキのち縦ハケを施す。外面には黒斑があり、内面は黒化する。暗黄褐色を呈す。

８号溝

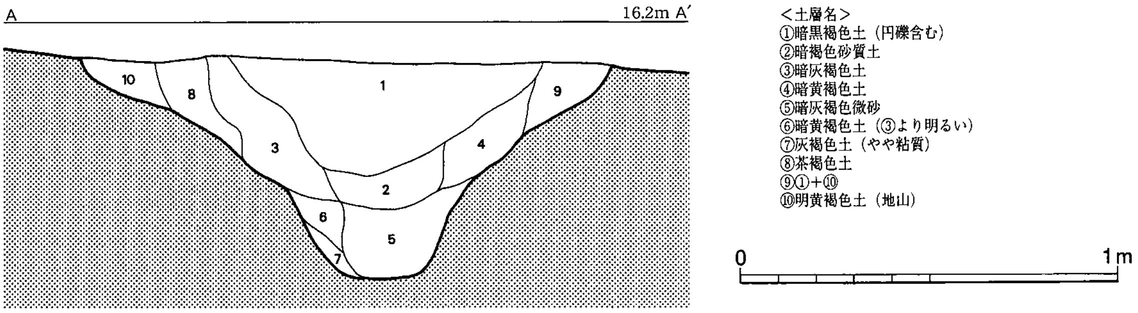
調査区南東隅、南東から北西に直線的にのびる小溝で、溝北西端は試掘トレンチにより切られる。現状で長さ3.9m以上、幅0.7m、深さ13cmで、埋土は黄褐色粘質土。出土遺物は図示できるものはない。

９号溝（図版13、第38図）

調査区南東から北西にかけて横断する溝で、



第35図　７号溝実測図（1/60）



第36図　7号溝断面実測図（1/20）

やや湾曲はあるものの、ほぼ直線で両端は調査区外まで延びる。溝中央部で10号溝に切られるが、切りあう部分は浅い数段の掘り込みが溝を挟んで東西に存在することから、10号溝に関わるものと考えられる。溝は北西部分で表土剥ぎ段階で約30cm下げすぎてしまったため、北西部隅の土層を見ると、溝の西側の立ち上がりは東側に比べ緩やかで、溝西側は2段掘りになる。また、西側には浅い溝状のくぼみが存在し、このくぼみにも水が流れた痕跡が確認できた。このくぼみの広がりは下げすぎたためか土層でしか検出できなかったが、深さから推定すると北側の一部のみ存在したものと考えられる。

また土層から一度溝が埋没した後掘り直したことがわかるが、出土遺物から時期差は分からなかった。溝は南東部で幅1.7m、深さ75cm、中央部で幅1.3m、深さ78cm、北西部で幅1.1m、深さ53cmを測る。遺物は8世紀後半の土器が出土した。土器以外で土錘1点（第44図12）が出土。

出土遺物（図版17、第34図）

弥生土器（10・11）　10・11は前期の甕である。10は内湾する丸い新しい傾向の胴部に、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部には浅い刻目を密に施し、外面にはススが付着する。胎土は細粒を多く含み、色は黄褐色。11はやや内湾する胴部に、くの字状に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部には浅い刻目を密に施し、胴部は短い単位のハケで調整。外面全体にはススが付着する。胎土は細粒を多く含み、色は黄褐色。

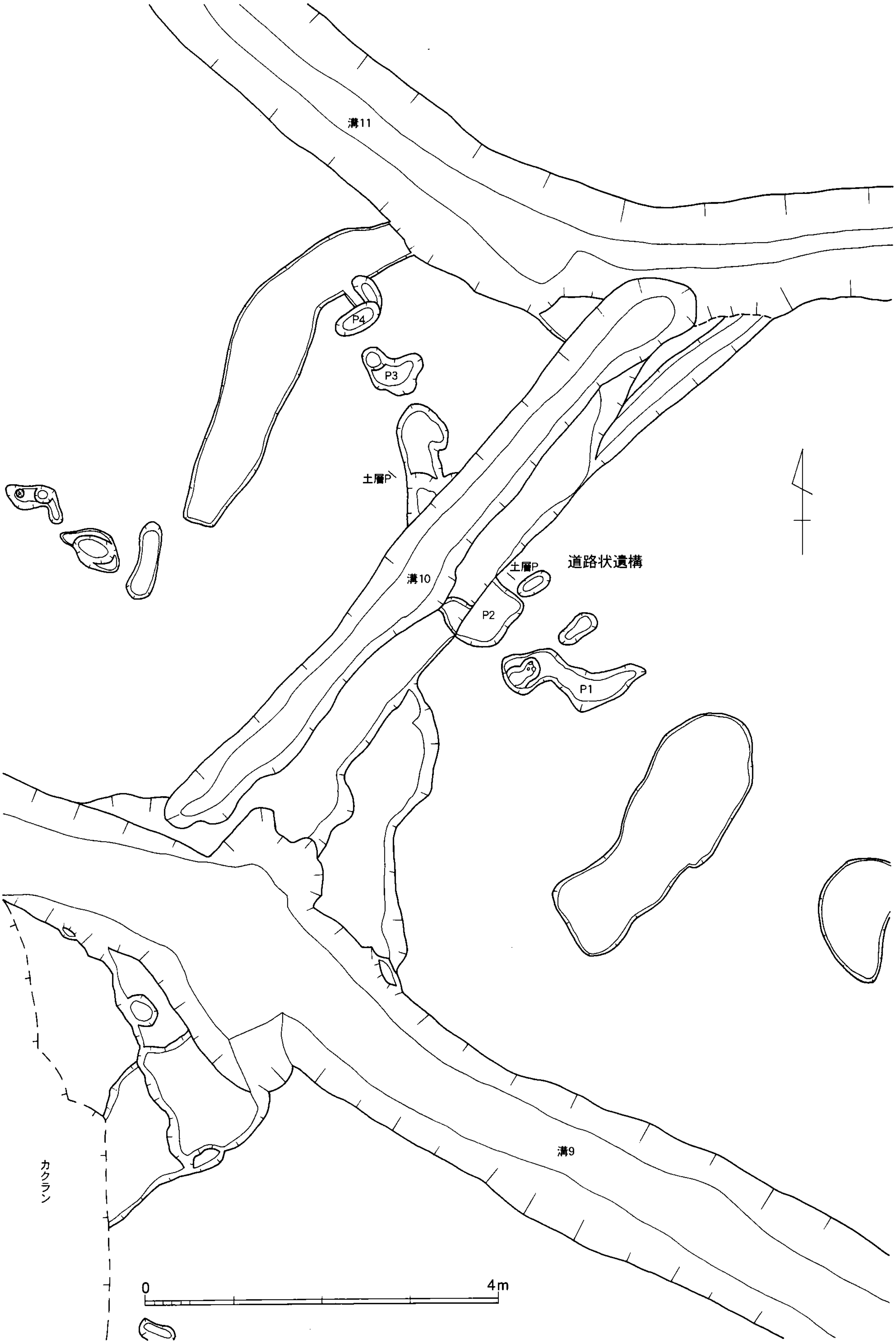
土師器（12）　12は短く外湾する口縁部をもつ甕であり、端部は外方につまみ出す。胴部外面は縦ハケ、内面はケズリで調整し、頸部内外面には炭化物が付着する。色は橙褐色。13は土師器杯Aで、短く直立する口縁部をもつ。口径は18.8cm、色は暗橙褐色を呈す。

須恵器（14）　杯身で、低い高台をもつ。胎土は細粒を含み、色は灰褐色。

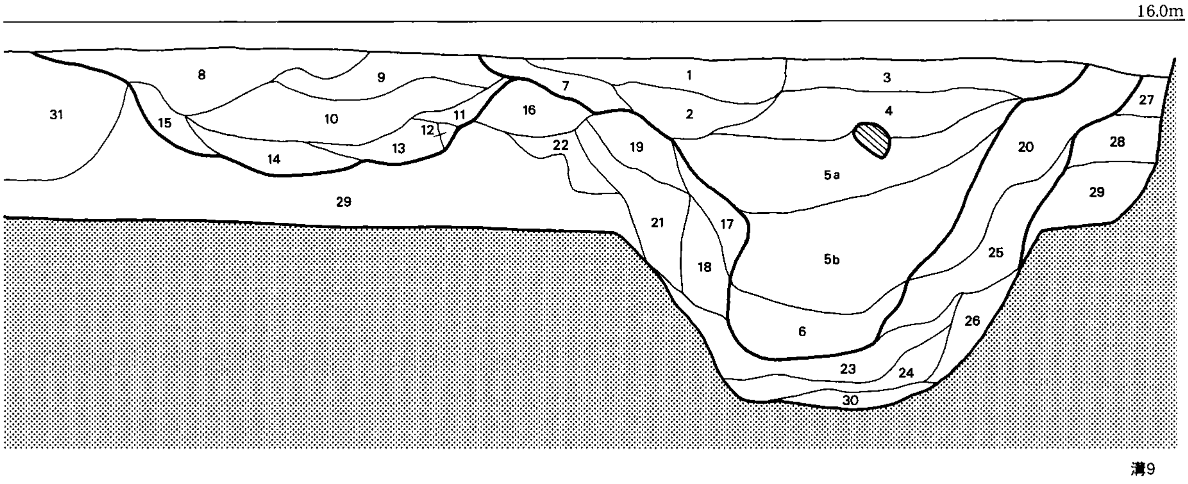
10号溝（図版13、第37・38図）

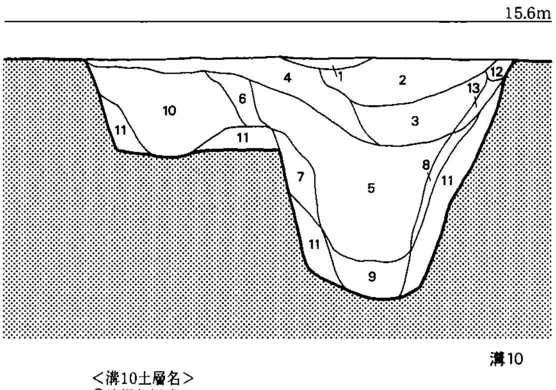
調査区中央よりやや北東、9・11号溝、道路状遺構を切る。溝は長さ8.3m、幅1.2m、深さ64cmを測る。溝は北東部で一段下がり、その南もテラスをもつ2段掘りとなり、溝状の浅いくぼみも存在する。9号溝と切り合う溝南西部は3段掘り状を呈し、9号溝を挟んで反対側にも同様の浅い掘り込みが確認できたことから、10号溝の機能と何からの関わりがあるものと考えられる。

当初から溝として水が9・11号溝に抜けないことから道路状遺構と関わる排水溝のような機能を考え、調査した。調査結果は土層からは水が流れた痕跡は確認できず、上層では粘土と砂の互層



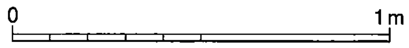
第37図　9～11号溝実測図（1/60）

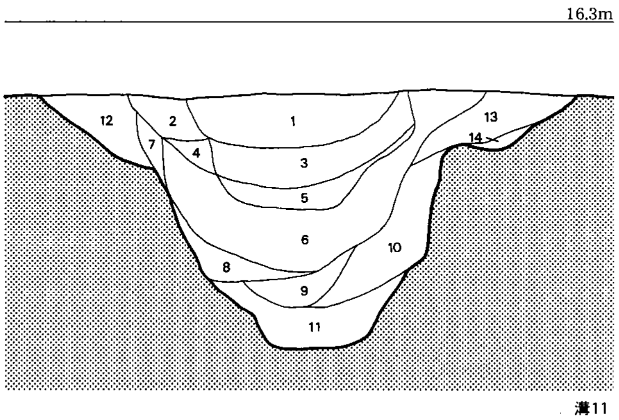




<溝10土層名>
①淡褐色細砂
②淡灰色微砂と灰色粘土の互層
③淡灰色微砂と暗灰色粘土の互層に淡灰色粘土ブロック混
④暗灰色粘土と淡灰色粘土の互層
⑤暗灰色粘土、淡灰色微砂、灰白色粘土の互層
⑥④＋粗砂
⑦灰褐色砂質粘土
⑧灰褐色粘土
⑨淡灰色粘土
⑩黒灰色粘質土
⑪黄褐色砂質土（地山）黒い粒状の鉄分まじる
⑫淡灰色微砂
⑬灰白色微砂

<溝９土層名>
①暗灰褐色粘質土
②灰褐色粘質土＋灰白色微砂
③茶灰色微砂
④灰茶色微砂（⑤との境近くは粗砂がまじる）
⑤a灰色粘質土＋淡灰色微砂
⑤b灰色粘質土
⑥灰色粘土＋淡灰白粘土
⑦灰色粘土＋淡褐色微砂
⑧暗灰褐色粘質土（粒状の暗灰色粘土含む）
⑨暗灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック含む）
⑩暗灰色粘質土（黒灰色粘土小ブロック、
灰褐色粘質土（粒状）含む）
⑪⑩＋黒灰色粘土（粒状）＋淡灰色微砂
⑫暗褐色粘質土
⑬淡灰色粘質土
⑭淡黄灰褐色粘質土（鉄分で黄色っぽい）
⑮暗灰褐色粘質土＋黒灰色粘質土
⑯⑦＋⑪
⑰暗灰色粘質土（粒状の鉄分含）と灰白色微砂の互層
⑱灰色粘土＋淡灰色粘土（⑥より鉄分多）
⑲茶灰色粘質土（鉄分含）
⑳淡褐色粘質土＋茶灰色粘質土
（粒状の鉄分含）
㉑淡灰褐色粘質土（粒状の鉄分含）
㉒暗褐色粘質土（粒状の鉄分含）
㉓灰色粘土と暗灰色粘土互層
㉔暗灰色粘土
㉕暗褐色粘質土（粒状の鉄分含）
㉖暗褐色粘質土＋暗灰色粘質土
㉗暗褐色粘質土
㉘黒褐色粘質土
㉙黄褐色砂質土（地山）黒い粒状の鉄分まじる
㉚灰白色粘土（地山）
㉛黒褐色粘質土＋灰白色砂質土
（２面目の遺構）





<溝11土層名>
①灰色砂質土（黒ぽい鉄分粒含む）
②暗褐色砂質土と灰色粗砂の互層
③灰色粘土と灰白色微砂の互層（黒っぽい鉄分粒含む）
④灰白色粘土（黒っぽい鉄分粒含む）
⑤④と⑥の互層
⑥灰色粒土（黒っぽい鉄分粒含む）
⑦⑥＋灰色粗砂
⑧灰茶褐色粘質土（黒っぽい鉄分粒含む）
⑨暗灰色粘土
⑩暗灰褐色粘質土
⑪⑨に白色粘土と黒灰色粘土のブロック混
⑫暗灰褐色微砂
⑬暗褐色微砂
⑭⑫と黄褐色微砂の互層（地山）

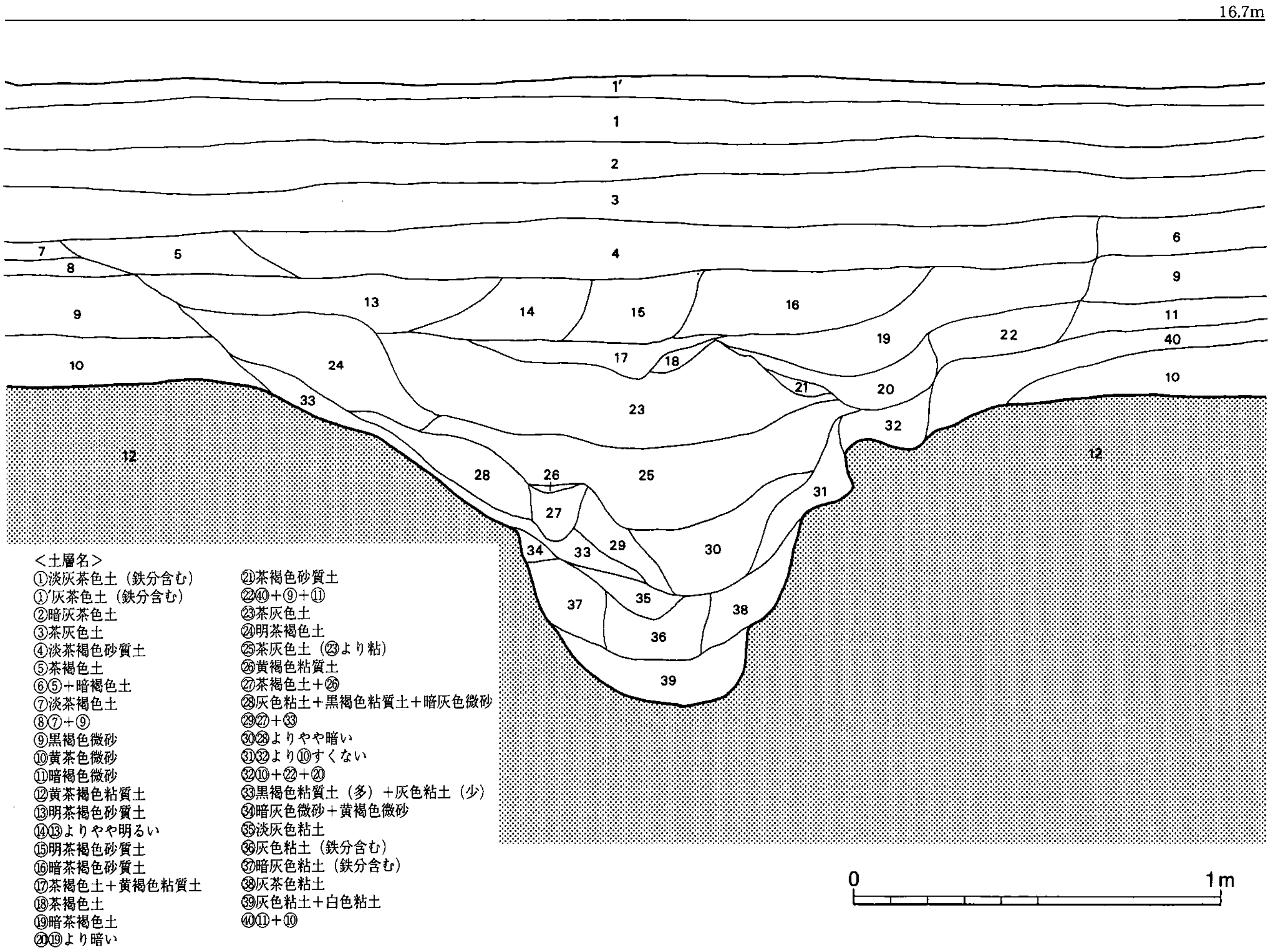
第38図　９～11号溝断面実測図（1/20）

を行うが粘土の割合が高く、中層では粘土と砂の互層、下層には粘土のみ存在するという状況が確認できた。このことは10号溝付近が最もレベルが低いことも合わせて考えると、中層では粘土と砂の互層という状況から排水用、上層は粘土を多く使用した地盤を固めるためというように10号溝は地盤改良用の溝であった可能性があるが、土層を１ヶ所のみしか残さなかったため、断定はできない。また10号溝は道路状遺構を切ることから、小石を中に入れるピット列を作った程度の地盤改良では対応できなかったため溝を新たに掘ったものかという問題も出てくる。今後このような類例が出てくるまで判断は保留したい。

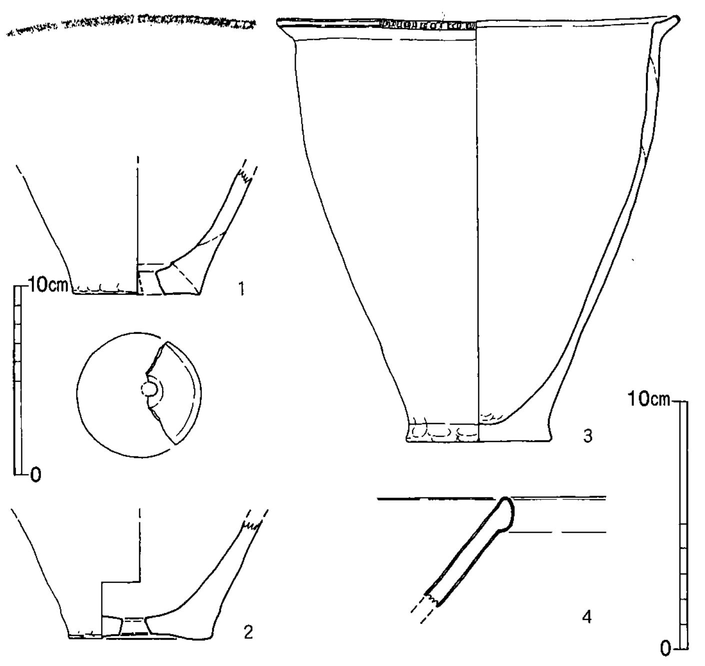
出土遺物で図示できるものはないが、９号溝よりは確実に新しいが、この時期はあまり下ることはないであろう。

11号溝（図版14、第38・39図）

調査区北東に位置し、溝東側はほぼ東西方向に走るが、中央で北西部に湾曲する。湾曲部分で10号溝に切られ、溝両端は調査区外までのびる。溝東端で幅1.5m、深さ69cm、中央で幅1.5m、深さ68cm、北端で幅1.1m、深さ86cmを測る。溝北西部では溝西側の立ち上がりが、東側よりゆるやかであったことが土層図からわかる。出土遺物で図示できるものはないが、９号溝と並行し10号溝に切られることから、９号溝と同時期と考えられる。



第39図　11号溝断面実測図（1/20）



第40図　ピット出土土器実測図（4は1/3, 他は1/4）

ピット出土遺物（図版18、第40図）

弥生土器（1～3）　1～3は調査区南西、第2遺構面ピットから出土。1・2はP23出土で、前期の甕底部。1は底部中心よりずれた位置に、焼成後に外側から穿孔する。胎土は細粒を多く含み、色は橙色。2は1と同じ方法で底部穿孔を行い、外面底部付近には黒斑がある。色は暗黄褐色。3はP24出土の前期の甕。内湾する胴部にくの字状に強く外反する口縁部で、上部はややくぼんだ形態となる。口縁端部には浅く、密な刻目を施し、底部には指頭圧痕が残る。外面上部にはスス、下部には二次加熱痕、内面上部には炭化物が付着する。胎土は石英を多く含み、色は黄褐色。

白磁（4）　調査区南西、第1遺構面P3出土の玉縁口縁の白磁椀で、釉は乳白色。

第1遺構面・包含層出土遺物（図版18、第41・42図）

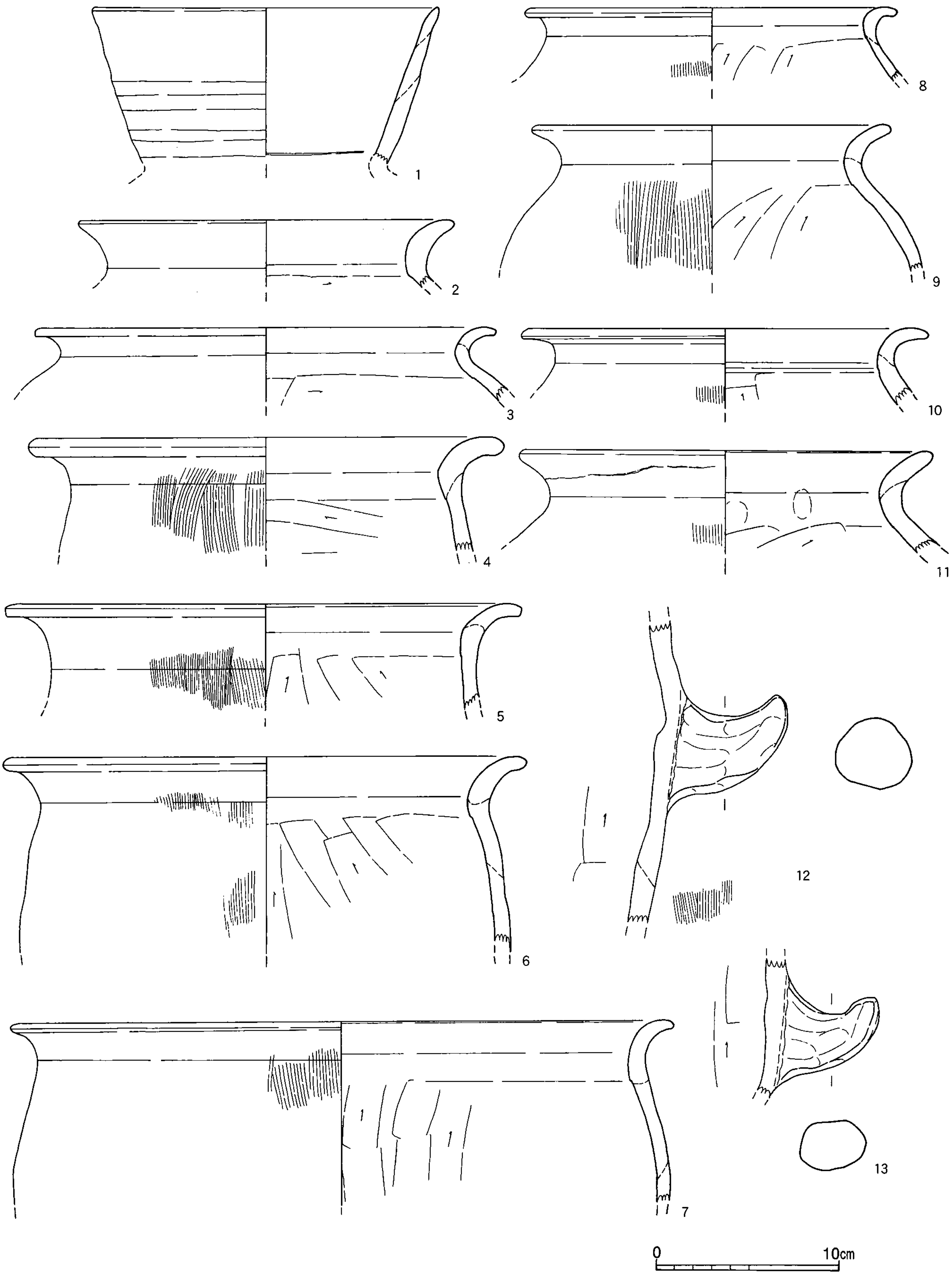
土師器（1～18）　1は壷口縁部か。口縁端部をわずかに外反させる。口縁部と頸部の境で破片となっており、頸部近くは横ナデにより凹線状になる。色は橙褐色。

2～11は甕口縁部である。2は口縁端部を外につまみ出し、内面頸部までヘラケズリを施す。色は橙褐色。3は強く外湾する口縁部で、器壁は薄い。外面頸部まで縦ハケ後横ナデを施す。色は黄褐色。4は強く外湾する口縁部で、端部はほぼ水平になる。端部は丸く収め、内面は横方向の浅いケズリを施す。口縁部内面はやや黒く変色する。色は黄橙褐色。5は直立する胴部から外湾する口縁部をもち、内面は縦方向のヘラケズリで調整。色は橙色。6は外湾する口縁部で、端部を丸く収める。色は橙褐色。7は口縁端部を外方につまみ出す。頸部は縦ハケのち横ナデ。内面全体と口縁部外面は炭化物の付着あり。色は淡橙色。8の口縁部は強く外湾し、口縁端部を下方につまみ出す。色は淡橙色。9は口縁端部を丸く収める。色は淡橙色。10は内面頸部にナデにより凹線状になる。色は黄褐色。11は口縁部外面に粘土継ぎ目痕が、内面頸部には指頭圧痕あり。色は橙色。12・13は土師器甕の把手である。12は断面がほぼ円形で、色は淡橙色～黄褐色。13の断面は楕円形を呈し、色は橙色。

14は土師器高杯の脚部で、脚柱部外面は縦方向のケズリ、内面は工具による絞り痕が残る。色は黄褐色。

15～18は土師皿である。色はいずれも橙色。17の底部はヘラ切りを行う。18は口径8.7cm、器高1.0cmの小型品であり、やや外反する口縁部をもつ。

瓦器（19～22）　19～21はいずれも摩滅がひどく調整不明の椀である。19の内面のみ黒化し、20・21は内外面とも黒化する。22は内外面とも丁寧なやや幅太いミガキを施し、底部には高台が



第41図　第１遺構面・包含層出土土器実測図①（1/3）

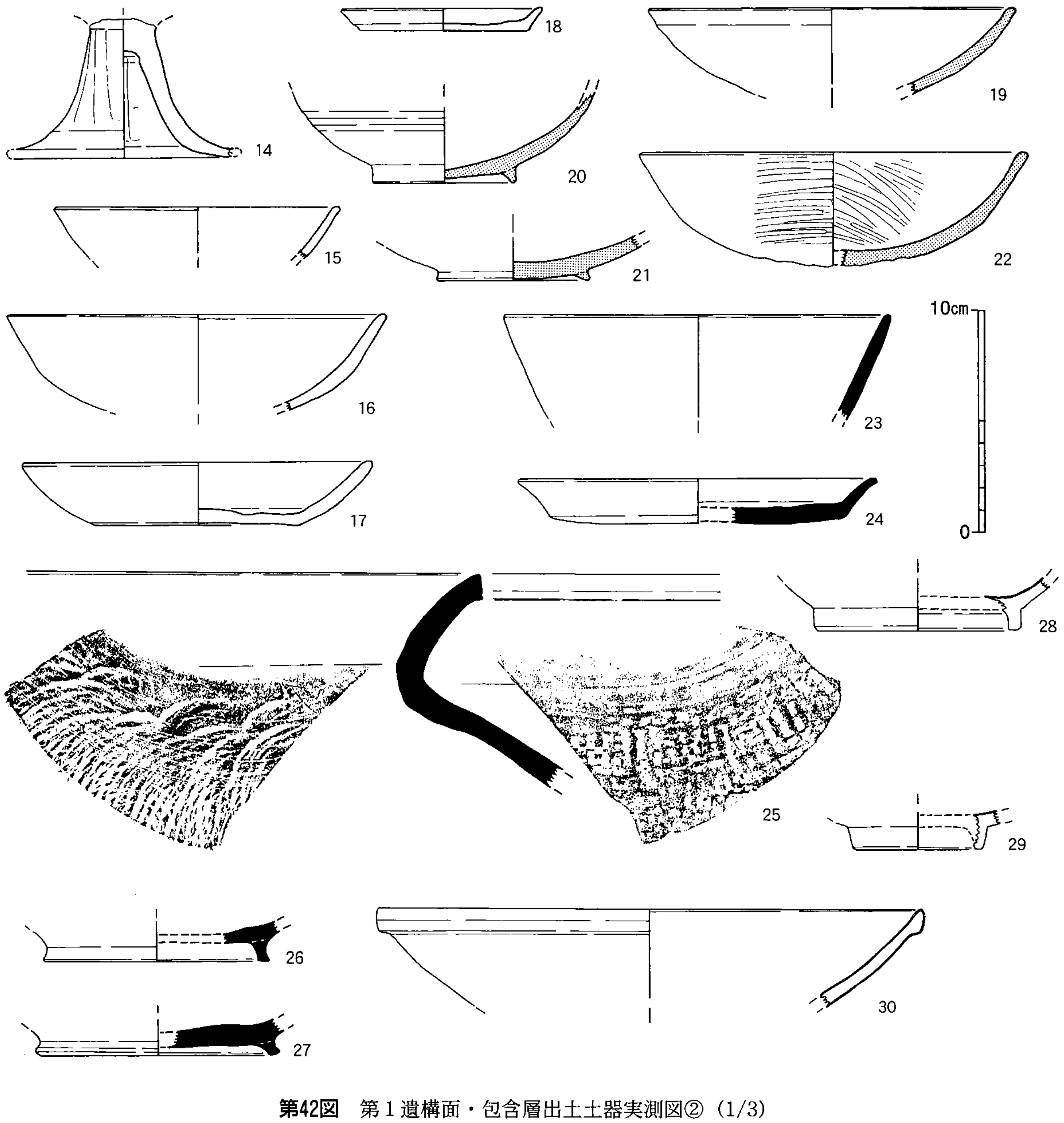
剥がれ落ちた痕跡がある。

須恵器（23～27）　23は須恵器杯口縁部である。色は灰色。24は須恵器小皿である。口径15.5cmで、口縁部は外湾し、底部はヘラ切り痕が残る。25は須恵器大甕の口縁部で、口縁端部はナデにより凹線状になる。胴部外面は格子目タタキ、内面は当て具痕が残る。26～27は須恵器杯身の底部片。いずれも色は灰褐色。

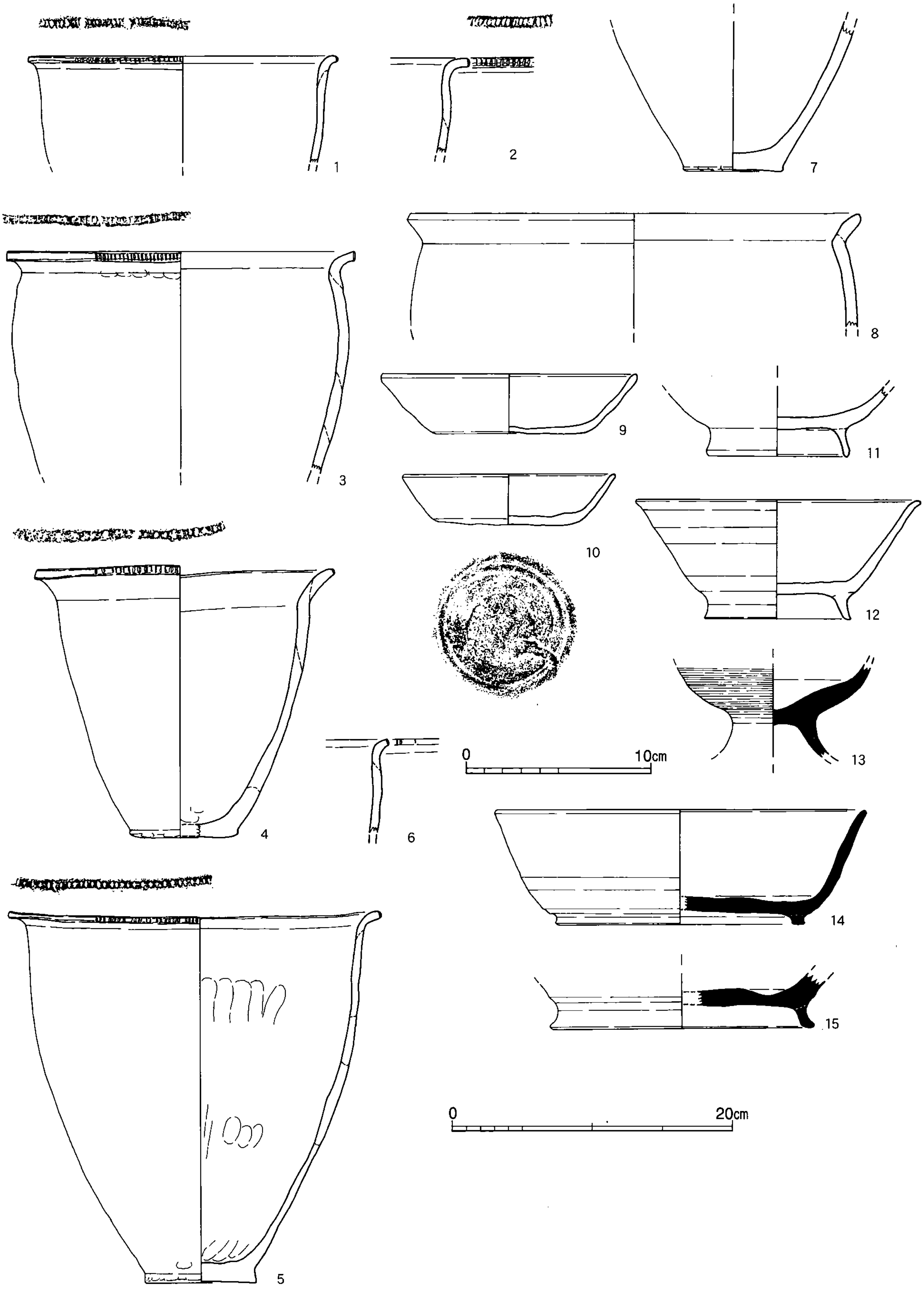
青磁（28）　釉が淡緑灰色と発色の良くない青磁椀で、内面見込みまで施釉する。外面高台と体部の境には削りによる凹線が巡り、内面には横沈線がある。

白磁（29・30）　29は底径が5.0cmの小椀か皿で、高台畳付を施釉後削るもの。内面には横沈線が巡る。30は玉縁口縁が三角形を呈する椀で、口径は23.8cmである。釉は灰白色に発色する。

第２遺構面出土遺物（図版18・19、第43図）



第42図　第１遺構面・包含層出土土器実測図②（1/3）



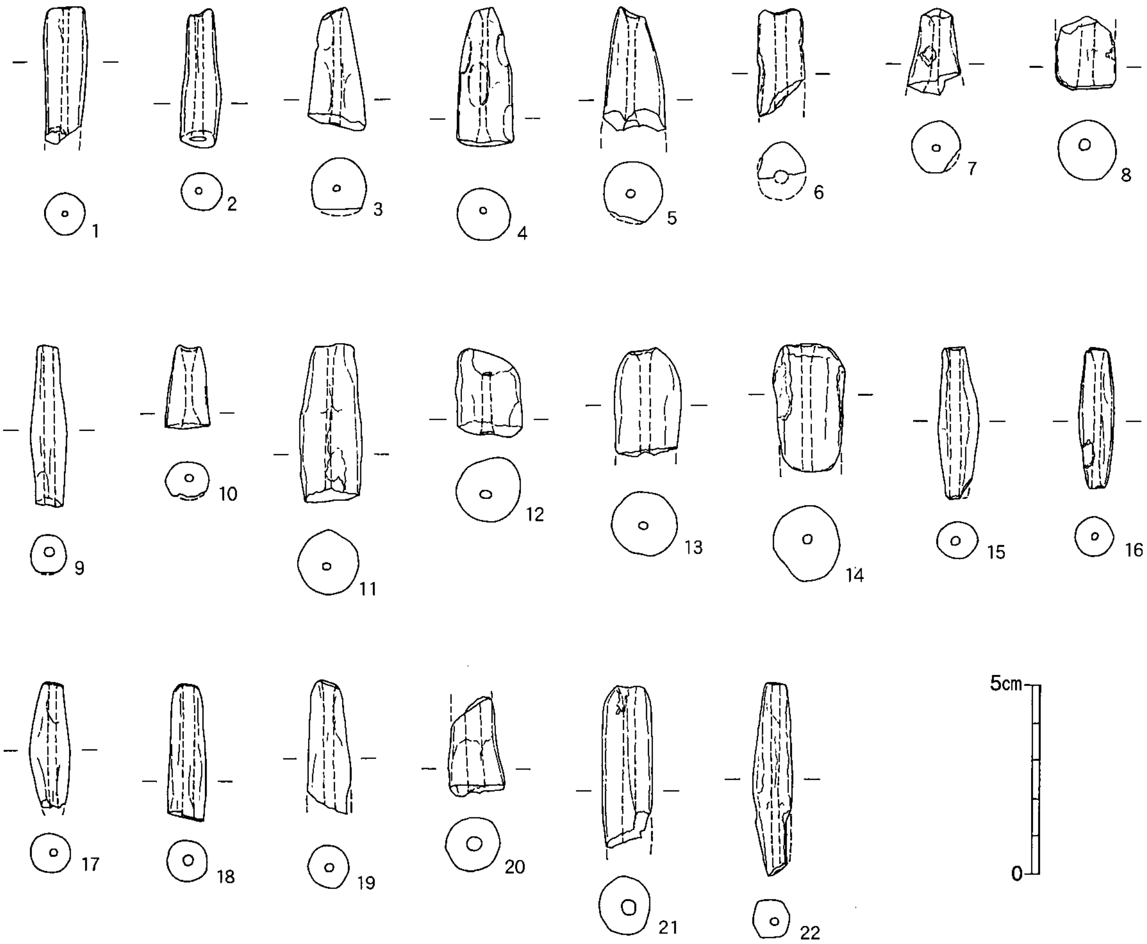
第43図　第２遺構面・包含層出土土器実測図（１～８は1/4，他は1/3）

弥生土器（1～8）　1～7は前期の甕で、いずれも胎土には細粒を多く含む。1は口縁部を外反させ、丸く収める端部に浅い刻目を密に入れる。外面にはススが付着。色は橙色。2は端部がほぼ水平に屈曲する口縁部で、口縁端部には刻目を密に施す。色は黄褐色。3はやや胴部上位が張る新しい傾向であり、口縁部が強く外反する。面取りした口縁端部には工具により、非常に浅く、密な刻目を施す。色は灰黄褐色。4は外傾する胴部に、そのまま外反する口縁部をもち、底部はやや上げ底になる。口縁端部には浅い密な刻目を入れ、底部内外面には指頭圧痕が残る。外面は二次加熱痕、内面には炭化物が付着する。色は暗橙褐色。5はやや内湾する胴部に、くの字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部にはやや深めの刻目を密に入れ、内面胴部中位には工具痕が残る。外面全体は二次加熱痕、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色。6は撹乱出土。短く外反する口縁部で、端部に浅い刻目を施す。色は淡褐色。7は甕底部で、外面には二次加熱痕が残る。色は黄褐色。

8は後期の甕で、内湾する胴部に短く、くの字状に屈曲する口縁部をもち、端部は面取りする。外面は二次加熱痕が、口縁部内面には炭化物が付着する。色は褐色。

土師器（9～12）　9・10は土師皿で、いずれも底部にはヘラ切り痕が残る。色はいずれも橙色。11・12は高台付椀である。11はほぼまっすぐにのびる高台部で、色は橙色。12は口径14.8cm、器高6.3cmで、口縁端部をわずかに外反させ、高台端部もわずかに外につまみ出す。色は灰黄褐色～淡橙色を呈す。

須恵器（13～15）　13は高杯で、杯部外面にはカキ目が残る。色は灰色。14・15は杯身である。



第44図　出土土錘実測図（1/2）

14は低い高台で杯部下半はケズリで調整。色は灰色。15は高い高台で、端部を外につまみ出す。色は灰色。

Ⅲ　その他の遺物

土錘（図版20、第44図）

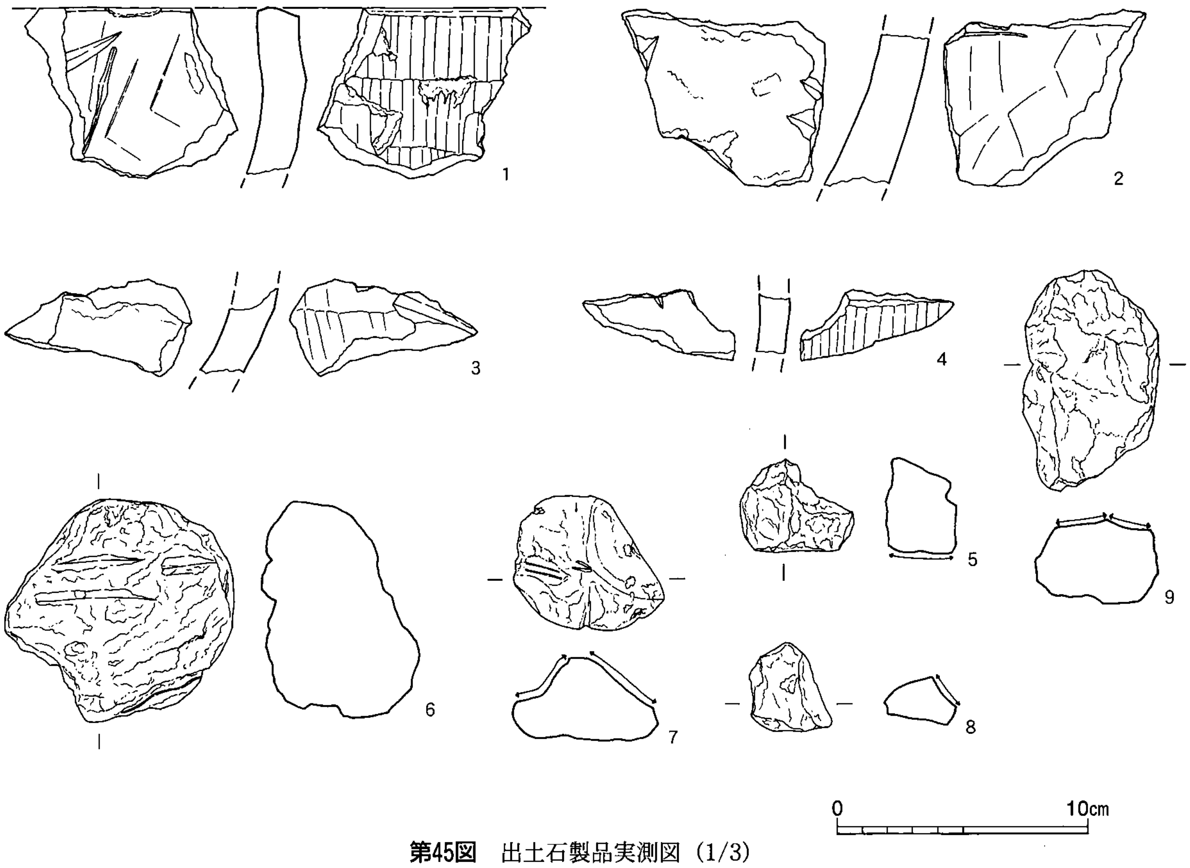
1～22は管状土錘である。長さ4～5㎝、幅1㎝程度の細長いタイプと、長さ4㎝、幅1.5㎝程度の幅太いタイプ、長さ4㎝程度で、上端と下端の長さが異なる砲弾形のタイプに大きく分かれる。重量については、4～6gのものが主流であり、10gを超えるものもあるが、完形品が少なく、正確な傾向はつかむことが難しい。いずれも色は橙色～黄褐色を呈す。

石鍋（図版20、第45図1～4）

1～4は滑石製の石鍋片で、2以外は外面にススが付着している。いずれもやや赤みを帯びた滑石を使用。1は石鍋口縁部で、外面には幅5㎜程度の縦方向のケズリがよく残る。2～4は石鍋体部片。2は加工痕があまり残らず、丁寧にあとで磨いたものか。3・4は稜がよく残る。

軽石（図版20、第45図5～9）

加工痕の明確なもののみ図示する。5・6は9号住居跡出土。5は一面に加工痕？と考えられる平らな面がある。6は9号住居内P1出土で、工具で抉りを入れた所が3ヶ所確認できる。7は幅細の工具痕と加工痕が残る。8は側面に加工痕、9は抉りを入れるために加工したと考えられる痕



第45図　出土石製品実測図（1/3）

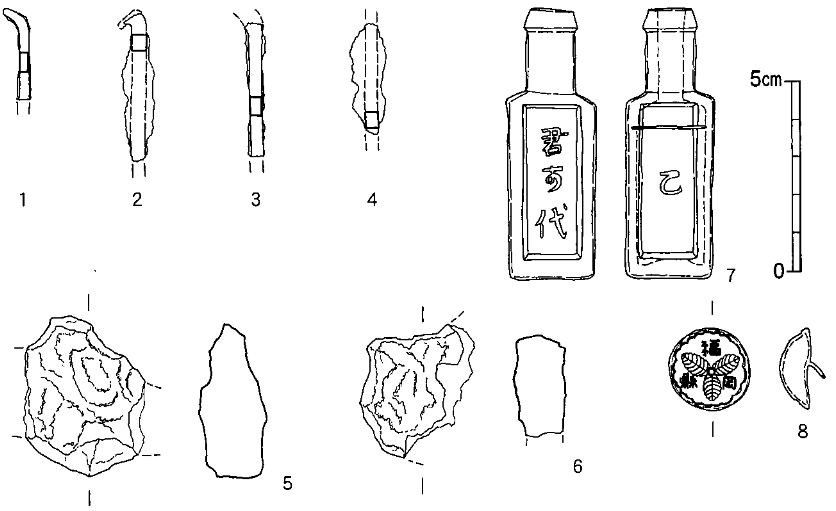
がある。いずれも漁撈に使用されたものか。

鉄釘（図版20、第46図1～4）

11号住居跡から4点出土。いずれも住居覆土を切り込んだ後の遺構に属するものか。1は幅が3㎜なのに対し、厚さが5㎜と断面が長方形なのが特徴。

鉄滓（図版20、第46図5・6）

5・6いずれも第1遺構面から出土。いずれも大きめの鉄滓を破砕して使用したものか。



第46図　出土金属器・ガラス実測図（1/2）

ガラス瓶（第46図7）

表面に「君ヶ代」、裏面に「乙」と陽刻される。大正から昭和にかけて目薬用の瓶で使用されたもの。

青銅製ボタン（図版20、第46図8）

青銅製のボタンで、表に「福岡縣」と陽刻される。

挿図番号	種　類	出　土　場　所	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚・孔径(cm)	重量(g)	材　質	備　　　考
44－1	管状土錘	住1カマド内	3.7	1.2	1.1	5.2		
2	管状土錘	住1カマド内	3.8	1	0.2	3.9		
3	管状土錘	住1覆土	3.3	1.5	0.25	5		
4	管状土錘	住1カマド内	3.7	1.5	0.2	6		
5	管状土錘	住1カマド内	3.3	1.7	0.25	6.1		
6	管状土錘	住1カマド内	2.8	1	0.3	5.3		
7	管状土錘	住1カマド内	2.3	1.5	0.2	2.5		
8	管状土錘	住1カマド内	2	1.6	0.4	4.2		
9	管状土錘	住4カマド内	5.3	1	0.25	3.8		
10	管状土錘	住6覆土	2.2	1.2	0.2	2.2		
11	管状土錘	住8覆土	4.1	1.6	0.2	10		
12	管状土錘	溝9	2.3	1.7	0.25	4.8		
13	管状土錘	第1遺構面	2.9	1.8	0.25	7.9		
14	管状土錘	第1遺構面	4.5	1.9	0.25	10.6		
15	管状土錘	第1遺構面	5.1	1.1	0.25	3.7		
16	管状土錘	第1遺構面	4.7	1	0.2	4.1		
17	管状土錘	第1遺構面	3.3	1.1	0.2	3.3		
18	管状土錘	第1遺構面	4.6	1.1	0.3	4.2		
19	管状土錘	第1遺構面	3.6	1	0.25	4.1		
20	管状土錘	第1遺構面	2.6	1.4	0.4	3.6		
21	管状土錘	第1遺構面	4.4	1.3	0.35	7.2		
22	管状土錘	第1遺構面	5.1	1.1	0.2	4.1		
45－1	石鍋	第1遺構面	9.6	6.7	1.5	158.4	滑石	
2	石鍋	土4	6	7.4	2.1	165.9	滑石	
3	石鍋	土4	3.7	7	1.4	62.1	滑石	
4	石鍋	溝1	2.3	4.4	1.1	23.3	滑石	
5	軽石	住12覆土	3.7	4.5	2.77	9.2		
6	軽石	住12覆土	8.5	9	6	87.5		
7	軽石	第2面包含層	5.3	5.9	3.1	15.7		
8	軽石	溝6	3.5	3.2	2	4.1		
9	軽石	第2面包含層	8.7	5.2	3.2	45		
46－1	鉄釘	住11覆土	2.5	0.3	0.5			覆土に混入か
2	鉄釘	住11覆土	3.9	0.4	0.4			覆土に混入か
3	鉄釘	住11覆土	3.6	0.3	0.5			覆土に混入か
4	鉄釘	住11覆土	2.9	0.4	0.4			覆土に混入か
5	鉄滓	第1遺構面	4.1	3.2	1.7	27		
6	鉄滓	第1遺構面	3.2	2.8	1.3	17.3		
7	ガラス瓶	撹乱	7.2	2.4	2.4	29.5		
8	青銅製ボタン	撹乱	2.2	2.2	0.7	2.9		

第3表　日詰遺跡出土　土製品・石製品・金属品・ガラス一覧表

Ⅳ　おわりに

1．集落の変遷について

検出した遺構の変遷から見て行く。まずこの地点においては、第１遺構面については包含層に遺構が切り込んだ状態であり、地山と遺構埋土との区別が非常に困難であったため、遺物は存在するが古代末から中世の遺構や奈良時代の遺構も、すべて検出できなかったり、誤って調査したものもある可能性があることをまずお断りしておきたい。

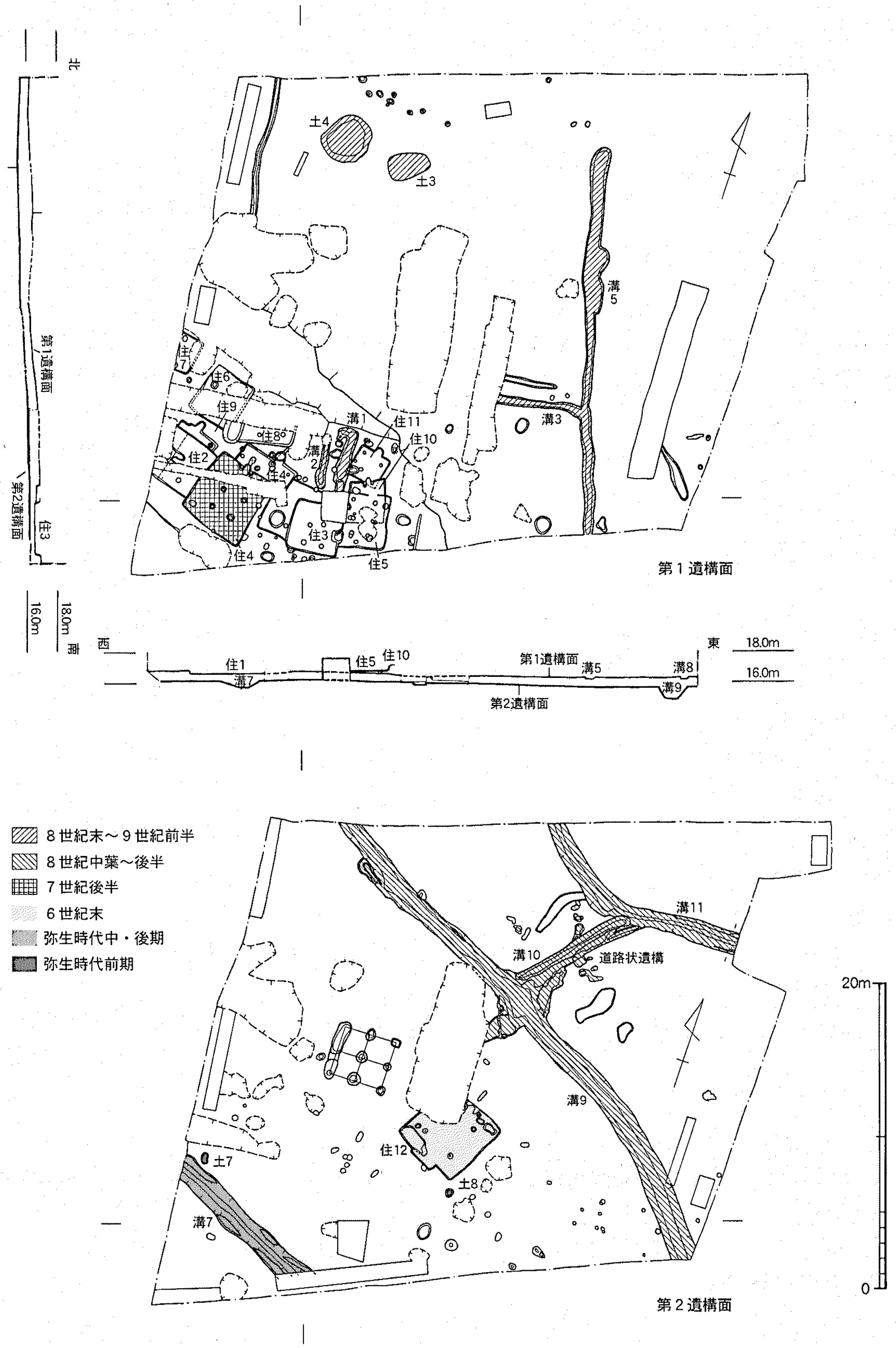
今回検出した遺構からは出土遺物が少なく、時期を特定できる遺構は少ない。時期が確実なものと土器で時期を判断できないが、ある程度時期を推測できる遺構を含めて、時期別に色を変えて示したのか第100図である。第１遺構面の住居跡群は、切り合い関係で最も新しい１号住居跡から７世紀後半の須恵器が出土しており下限はおさえられる。その他の住居跡は２・４号住居跡から７世紀初頭の須恵器が各１点出土している。しかし２号住居跡は突出するカマドを持つ９号住居跡を切ることと、４号住居跡も突出するカマドであることなどから、７世紀初頭とするには他の遺跡のカマドの形態との相違や１点の出土土器のみであることから言い切るには躊躇する。これ以外の住居群も住居が密集して切りあう状況や７・10・11号住居跡のような小規模な住居の存在から７世紀代に属する可能性が高い。その後、８世紀末～９世紀前半に３・４号土坑がある。この段階には浮羽郡では竪穴住居跡は作られなくなることがこれまでの調査で確認されているが、今回の成果もこのことを裏付けているが、調査区外の南側にも引き続いて集落を営んでいた可能性がある。５号溝から８世紀後半～９世紀前半を示す土器が出土しているが、下層の第２遺構面の9号溝は８世紀中葉～後半の土器が出土していることから、５号溝の時期にはやや疑問が残る。

第２遺構面では調査区中央に６世紀後半に12号住居跡が作られる。１号掘立柱建物跡から時期が特定できるものは出土していないが、近接する12号住居跡とは主軸方位や柱間から考えて同時期ではなく、７世紀代の第１遺構面の住居跡との関係を考える必要がある。また９号溝から８世紀後半の土器が出土しており、10・11号溝や道路状遺構も同時期かやや遅れるものの同時併存していたものと考えられる。弥生時代の遺構としては、弥生時代中・後期の土器が出土した７号溝と弥生時代前期の土器が出土した７・８号土坑がある。いずれも調査区南西で検出していることから弥生時代の集落の主体は調査区外の南西部に広がると予想される。なお、北東側は湧水で調査できなかったが、残りのよい弥生時代前期の甕が数点出土していることから下層に何らかの遺構が存在する可能性がある。

2．日詰遺跡出土の弥生時代前期の土器について

今回の調査では、明確な弥生時代前期に属する遺構は土坑２基とピットのみであり、多くは遺構面・包含層から出土しているため、遺構からの一括性のある資料とは言い難い。

今回出土した土器は、器種は甕のみである。この甕の特徴として、やや内湾気味に直線的に立ち上がる胴部に、如意形口縁端部は刻みを施す。また亀の甲タイプや口縁部下に突帯をもつ甕が全く出土していない。日詰遺跡出土土器と浮羽郡内の他の遺跡出土土器とを比較すると、吉井町大碇遺跡56号土壙出土土器が同じ特徴をもつ。この56号土壙について、水ノ江和同氏は大碇遺跡Ⅰ期に位置づけ、板付Ⅱa式に併行するとする（水ノ江1994)。日詰遺跡出土土器は先述したように一括性がある資料ではなく、８号土坑（第83図）など胴部が張るやや新しい傾向の甕も存在するが、



第47図　1区時期別遺構配置図（1/400）

大碇遺跡Ⅱ期以降の口縁部下に突帯をもつ甕は全くないことから、Ⅰ期に併行すると考えられるが、一部は板付Ⅱb式に併行する様相の甕もあると思われる。

また日詰遺跡から東に200mの場所に位置する水分遺跡からは、如意形口縁下に突帯が付くタイプや粘土の接合による段をもつタイプ、口縁下に沈線を施すものなど様々なタイプの甕が出土し、時間差を持ちながら弥生時代中期前半まで継続して集落が営まれる遺跡である（栗原1985)。しかし、甕を比較すると日詰遺跡と同時期のものも存在するが全体的に新しい様相をもつ。今回この水分遺跡の北側に位置する大的遺跡で検出した弥生時代前期の出土遺物と相互に比較し、同じ段丘上の近接する３つの遺跡の関連について今後検討して行きたい。

浮羽郡内で弥生時代前期前半～後半の土器が出土した遺跡は、浮羽郡浮羽町田島南遺跡、吉井町塚堂遺跡・大碇遺跡、田主丸町水分遺跡・大的遺跡・日詰遺跡・豊城中ツブロ遺跡がある。当該期の遺跡数は少なく、詳しい様相を把握できないが、縄文時代晩期後半には筑後川流域の河岸段丘に集落の形成が始まることが指摘されており（片岡1996)、弥生時代中期以降も集落の断絶・移動はありながらもこの段丘上を主な生活空間とすることがこれまでの調査で判明している。今後、調査の進展で縄文時代から継続する耳納山麓の遺跡と縄文時代晩期以降の河岸段丘上の遺跡の在り方を比較できることを期待したい。

以上、日詰遺跡は河岸段丘に形成された集落の北端にあたり、弥生時代前期～中世の複合遺跡で、過去の調査もあわせると大規模な集落であった可能性がある。この段丘は、道路を挟んで約50m西で段落ちが存在することから西端は推定でき、ここから田主丸中学校、水分小学校付近までの自然堤防上東西約300m近く、集落が展開していたと考えられる。日詰遺跡から西に約200m離れた大的遺跡（２次調査）では、集落と集落の間に挟まれた谷部で水田が検出されている。日詰遺跡においても調査区北・東・西側には水田が広がることが推定でき、水田を生活基盤としながらも土錘や軽石の存在から筑後川を基盤とする漁撈も行っていた集落と想定される。

今回の調査においては弥生時代前期の土器の出土は、同じ段丘上に位置する大的遺跡、水分遺跡との比較、また他地域の様相の比較を視野に入れることで、筑後川中流域における弥生文化の導入の在り方を検討できる資料である。また土坑出土の黒色土器は浮羽郡内において早い段階のものであることは注目され、律令期の様相を知る上では良い資料となるであろう。

今後調査が進展し、今回の調査成果が生かされることを期待したい。

参考文献

片岡宏二　1996　「1．環境の変化とその文化」『田主丸町誌』第二巻上　田主丸町

栗原和彦　1985　「4．水分遺跡の遺構確認調査」『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第２集　田主丸町教育委員会

水ノ江和同　1994　「Ⅱ大碇遺跡出土弥生土器について」『堺町・大碇遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集　福岡県教育委員会

日詰遺跡Ⅰ
図　版

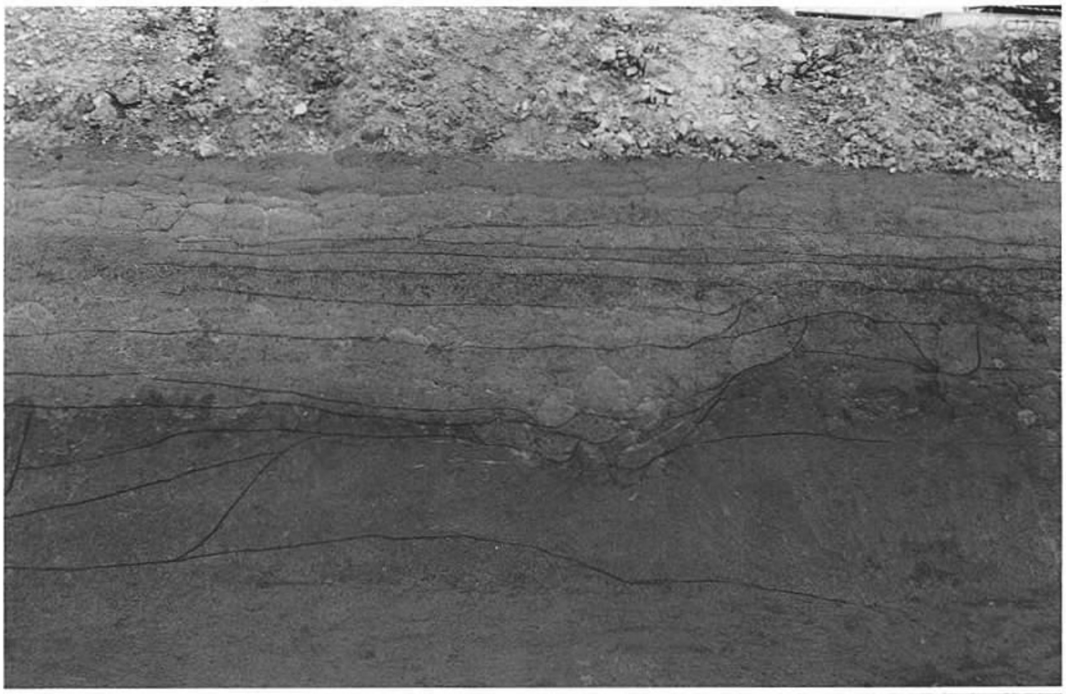
1区第2遺構面空中写真
（西から）

1区第2遺構面空中写真
（東から）

1区第2遺構面空中写真
（上から、上が北）

1区第1遺構面全景（東から）

1区住居跡集中区中央
（北から）



調査区東壁中央土層
（西から）

調査区東壁南端土層
（西から）

調査区西壁北端土層
（東から）

1号竪穴住居跡（南から）

1号竪穴住居跡カマド
（南から）

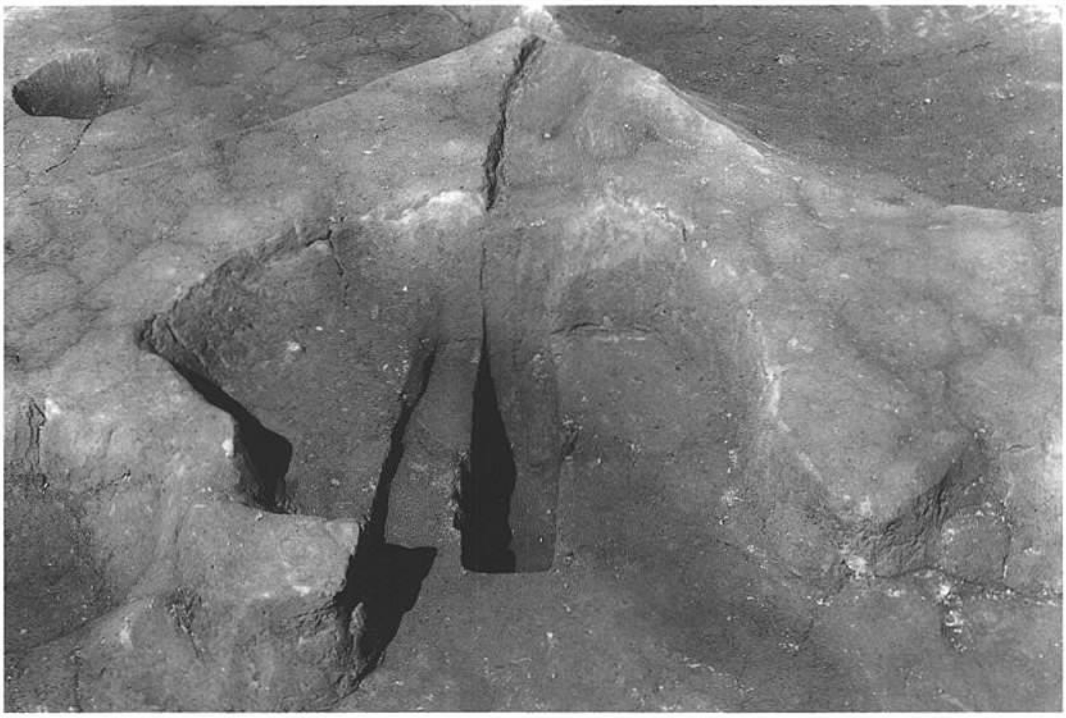
2号竪穴住居跡（東から）

2号竪穴住居跡カマド
（東から）

3号竪穴住居跡（西から）

3号竪穴住居跡カマド
（西から）

4号竪穴住居跡（南から）

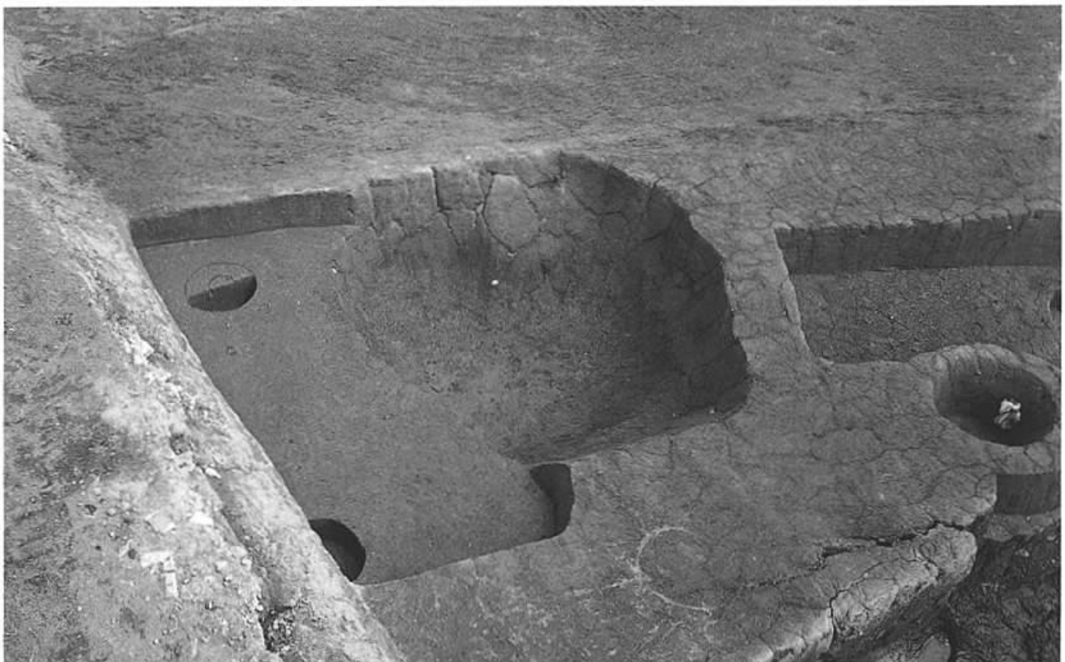


4号竪穴住居跡カマド
（南から）

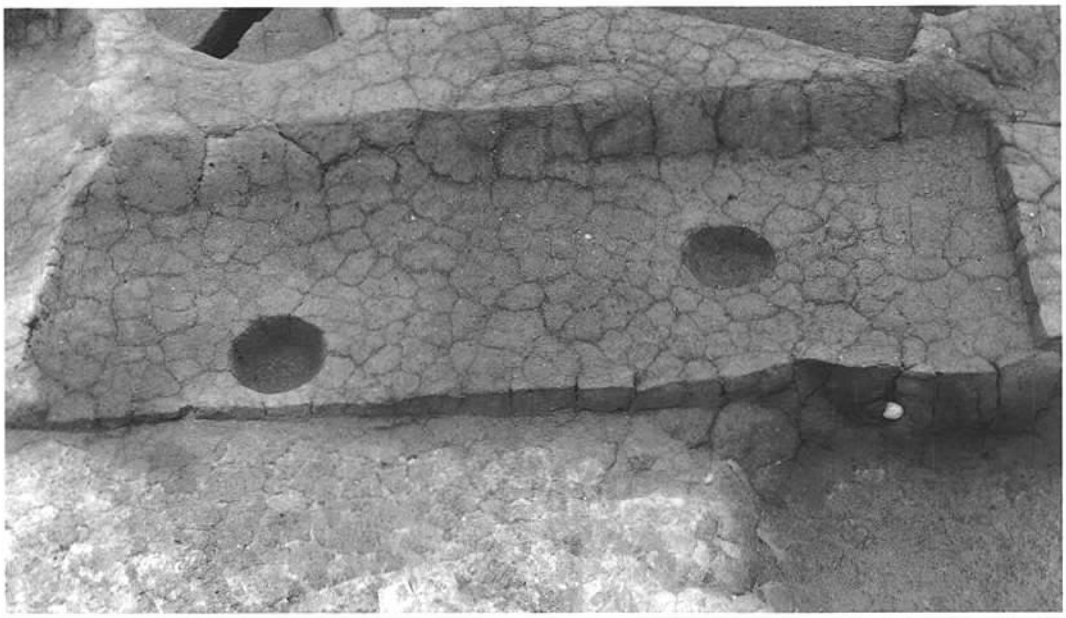
5号竪穴住居跡（南から）

5号竪穴住居跡カマド
（南から）

6号竪穴住居跡（東から）

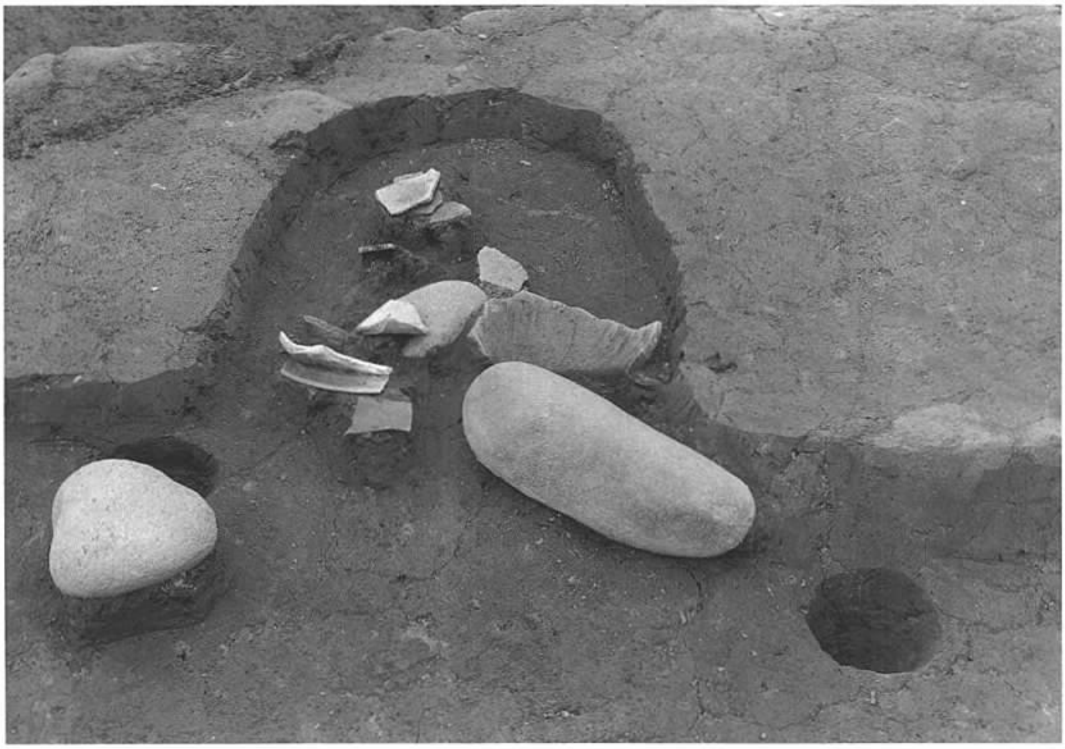


7号竪穴住居跡（南から）



8号竪穴住居跡（北から）

9号竪穴住居跡（南から）



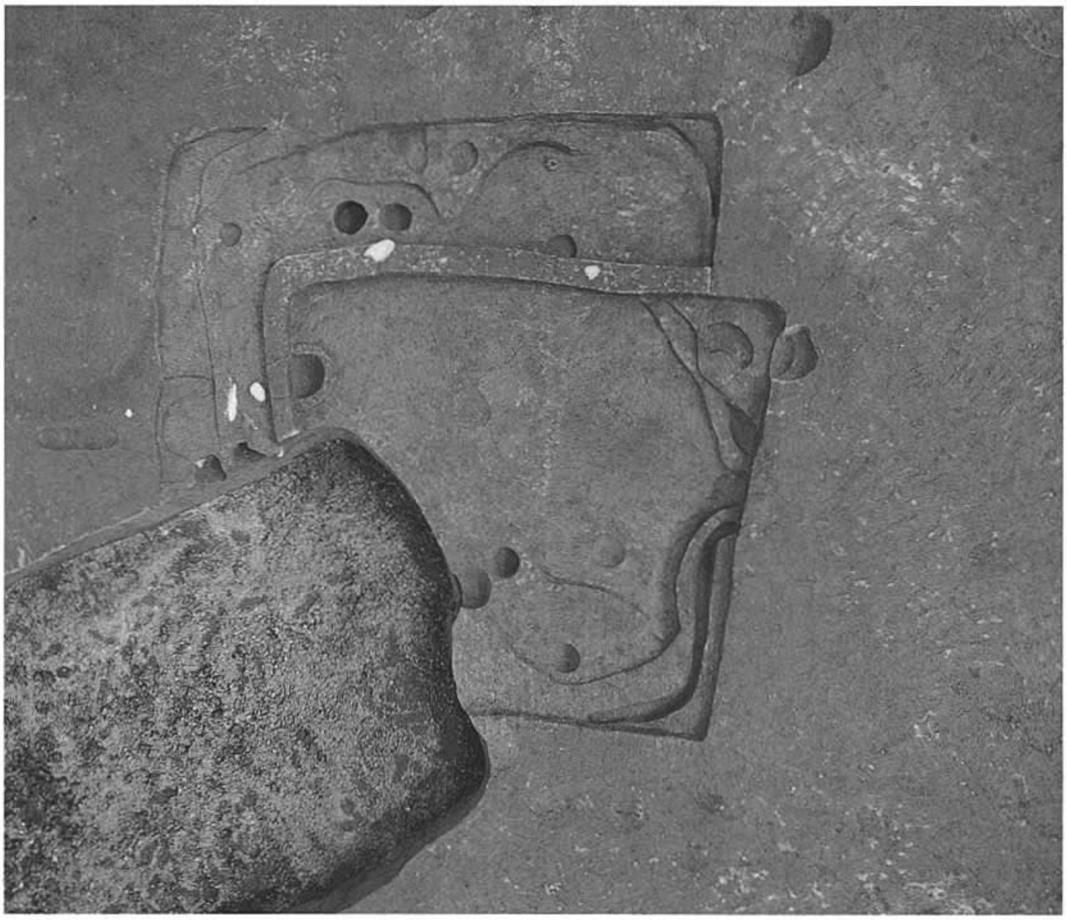
9号竪穴住居跡カマド
出土状況（南から）

9号竪穴住居跡カマド
完掘状況（南から）

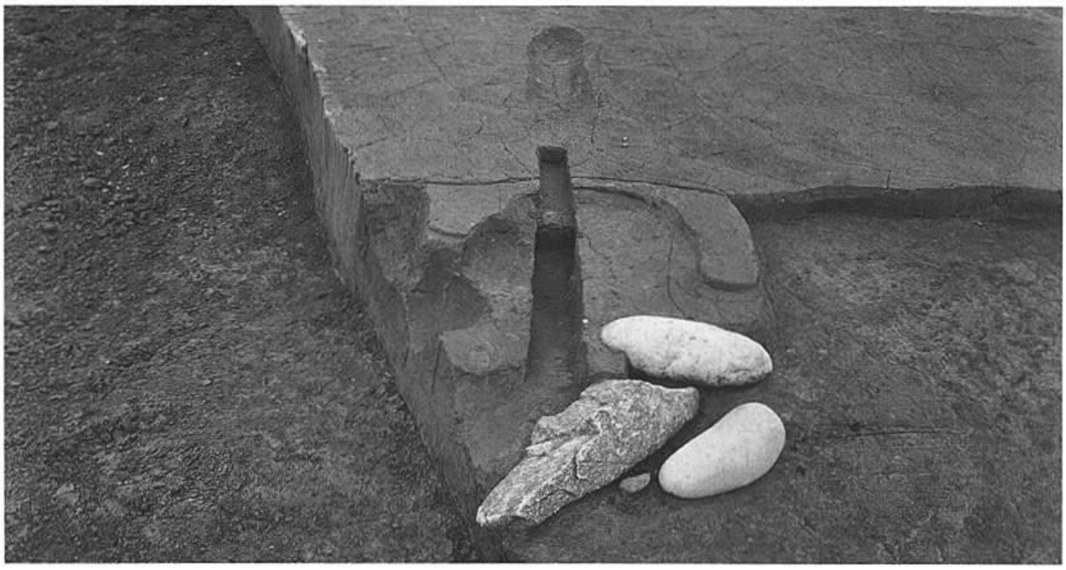
10・11号竪穴住居跡
（南から）

10号竪穴住居跡カマド
（南から）

11号竪穴住居跡カマド
（南から）



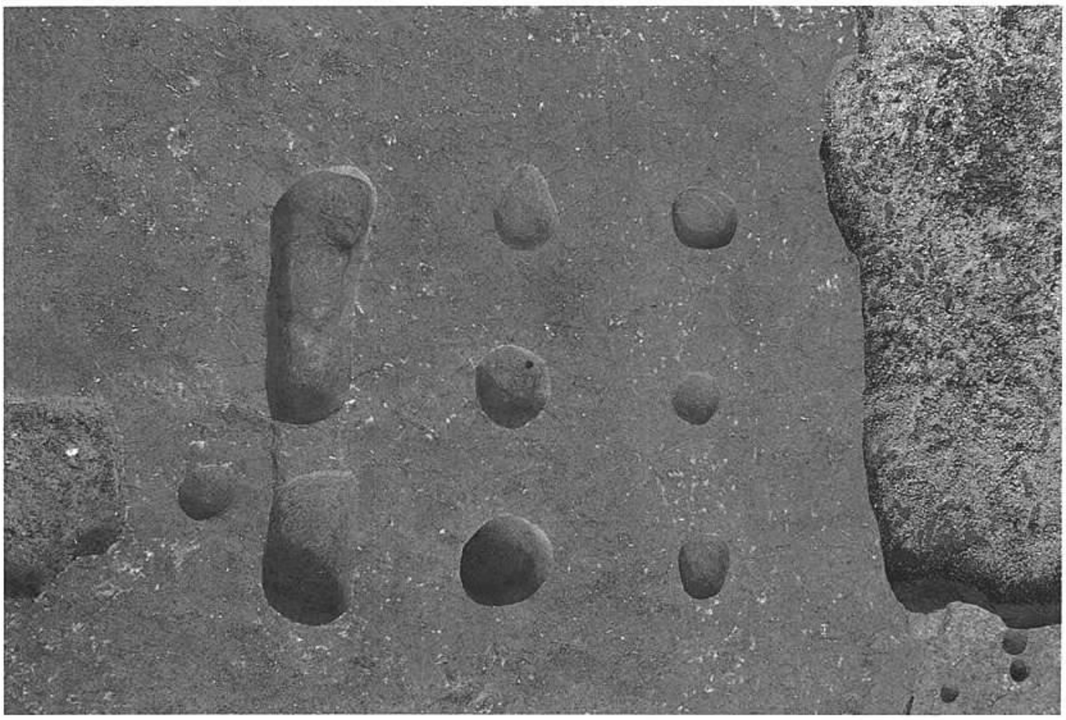
12号竪穴住居跡
（上から、上が東）



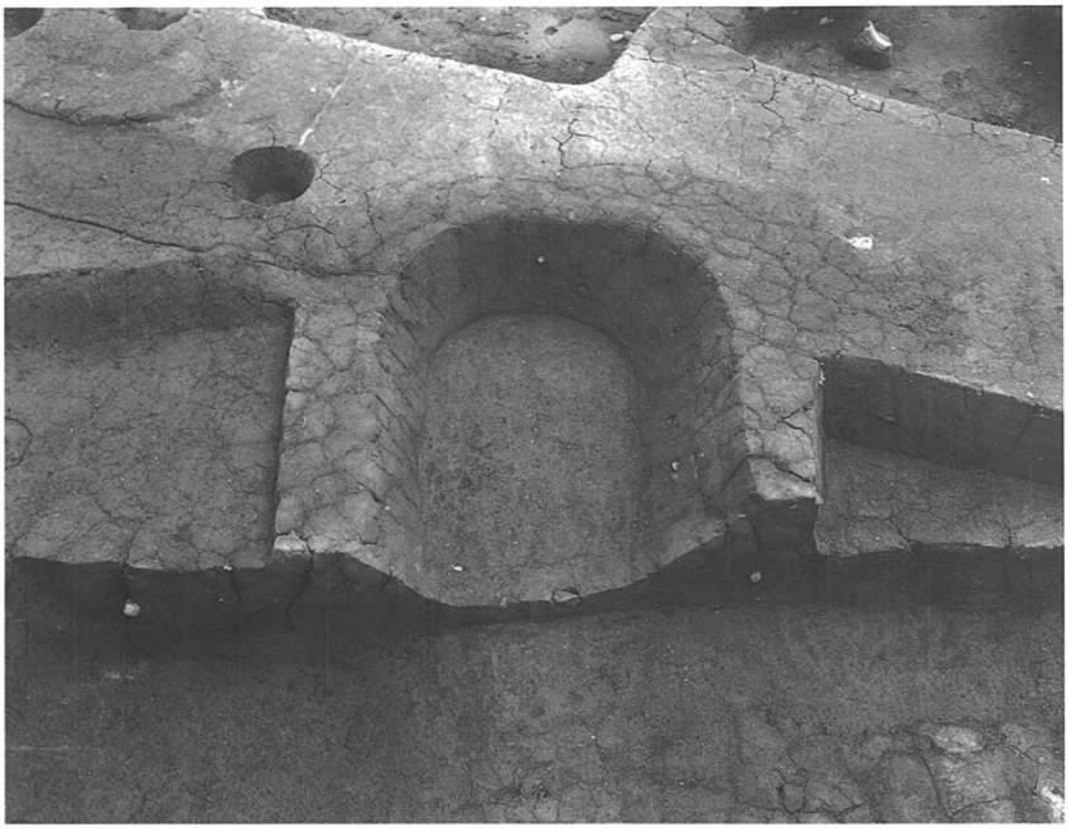
12号竪穴住居跡カマド
（南から）

12号竪穴住居跡
カマド断面
（南西から）

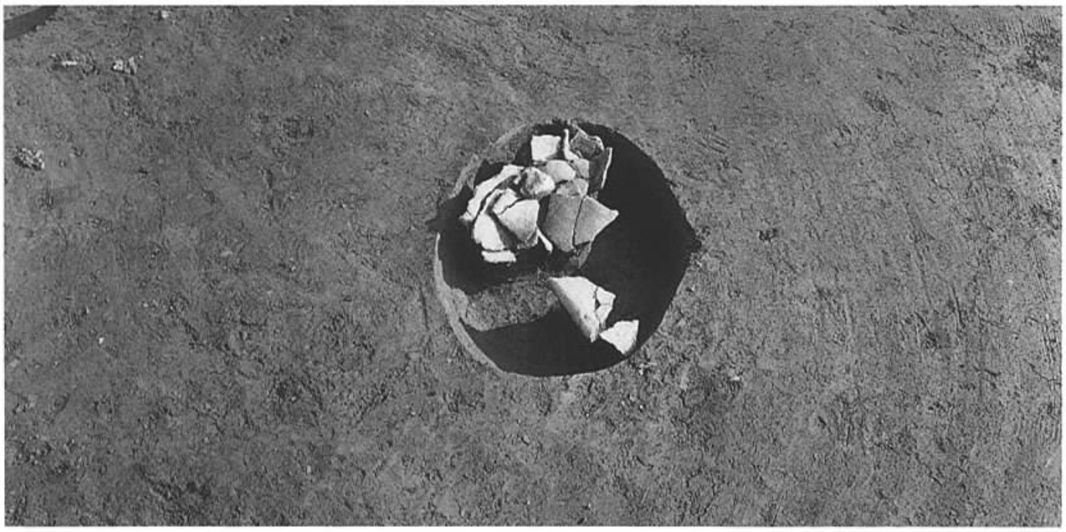
1号掘立柱建物跡
（北から）



1号掘立柱建物跡
（上から、上が北）


1号土坑（北から）

7号土坑（北東から）

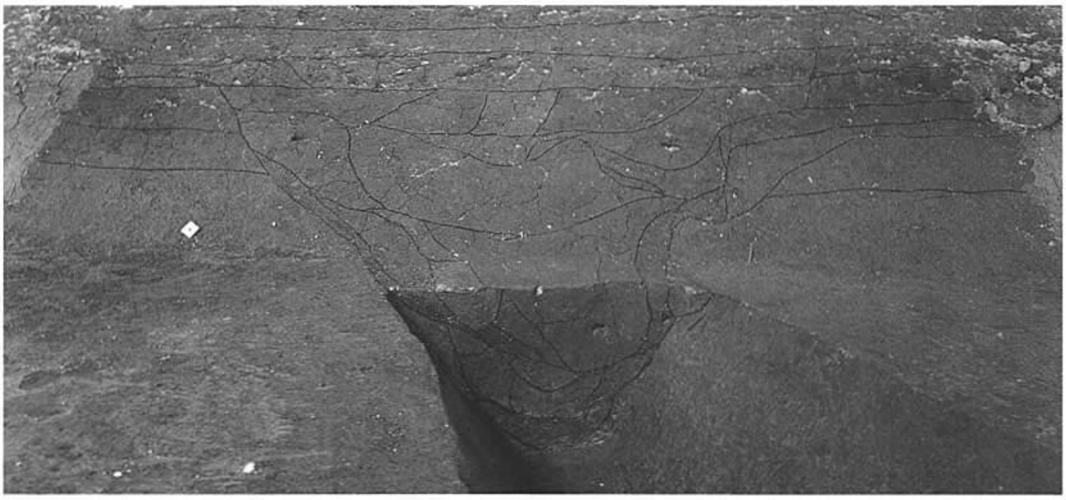

8号土坑（南から）

7号溝断面（南東から）

9号溝断面（南東から）

10号溝断面（北東から）

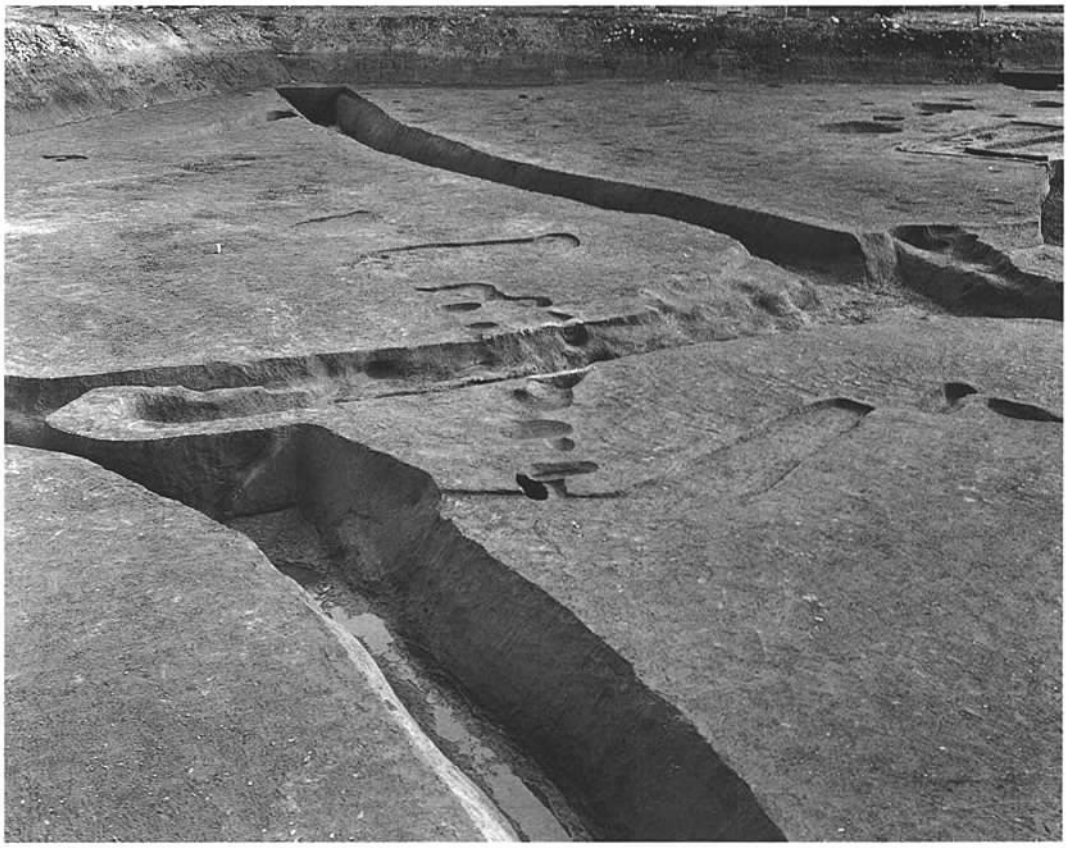
11号溝東端断面（西から）



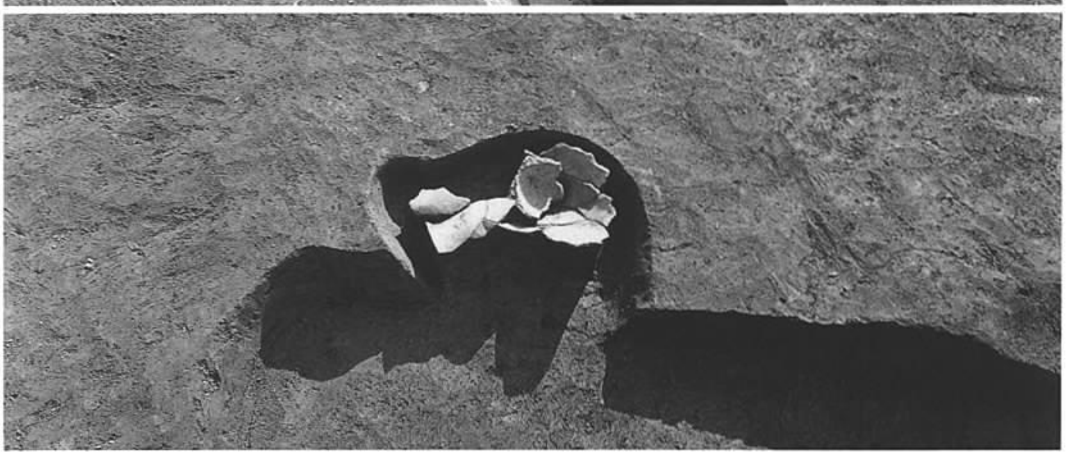
11号溝北端断面（南から）

道路状遺構（上から、上が北）

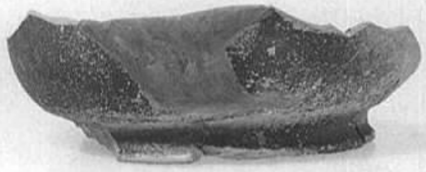
道路状遺構検出状況
（北西から）

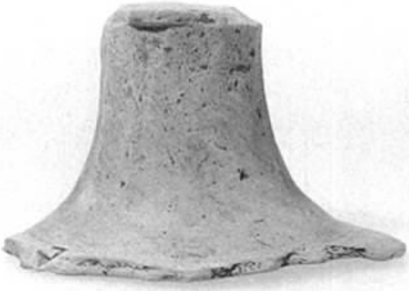


道路状遺構完掘状況
（北西から）

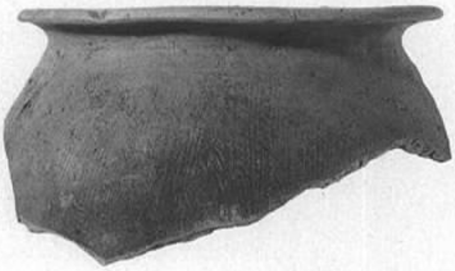


P24土器出土状況
（北西から）


59−9


59−19

70−1


70−3

75−4

75−5

75−7

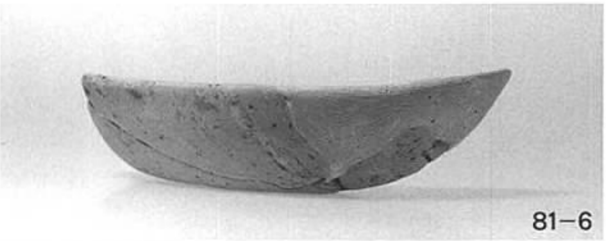
75−8

75−9

79−5

79−7

1・2・9・12号竪穴住居跡、3号土坑出土土器

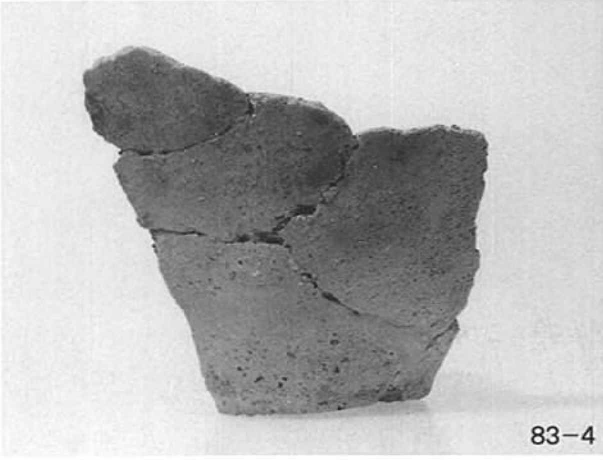

81-6

81-11

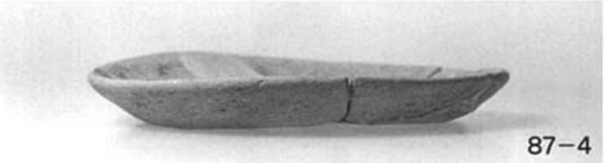
81-22

83-1

83-3

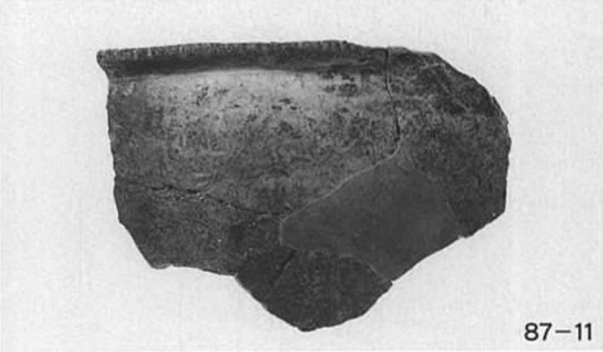

83-4

87-1

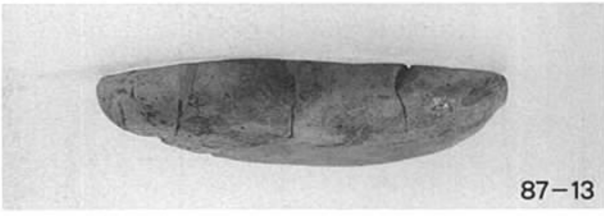

87-4

87-9

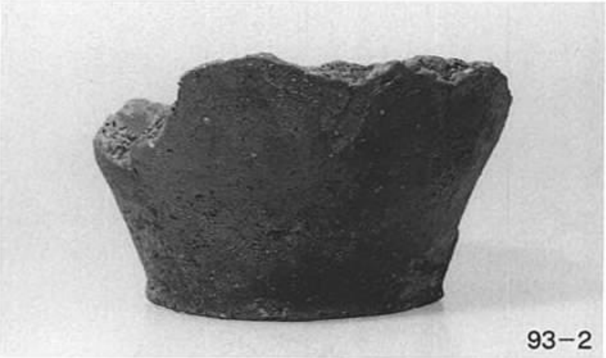
87-10


87-11

87-12


87-13

4・7・8号土坑、1・2・7・9号溝出土土器

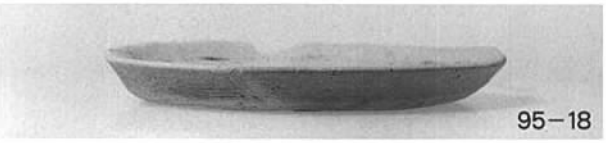


93−2

93−3

94−6

95−17



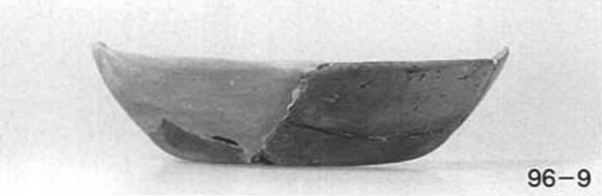
95−18

96−3

96−4

96−5

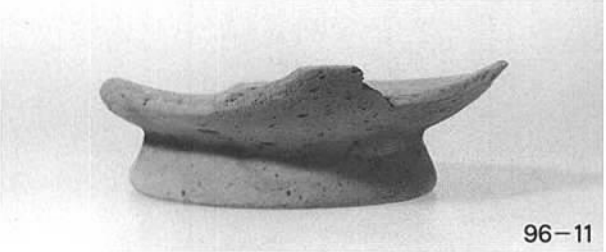
96−7



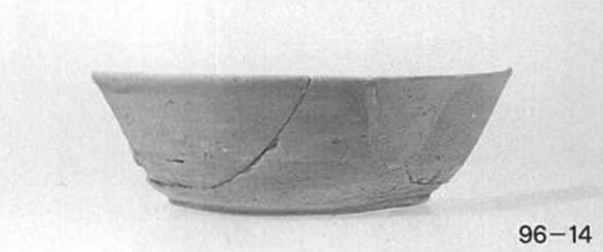
96−9

ピット、第1・2遺構面・包含層出土土器①

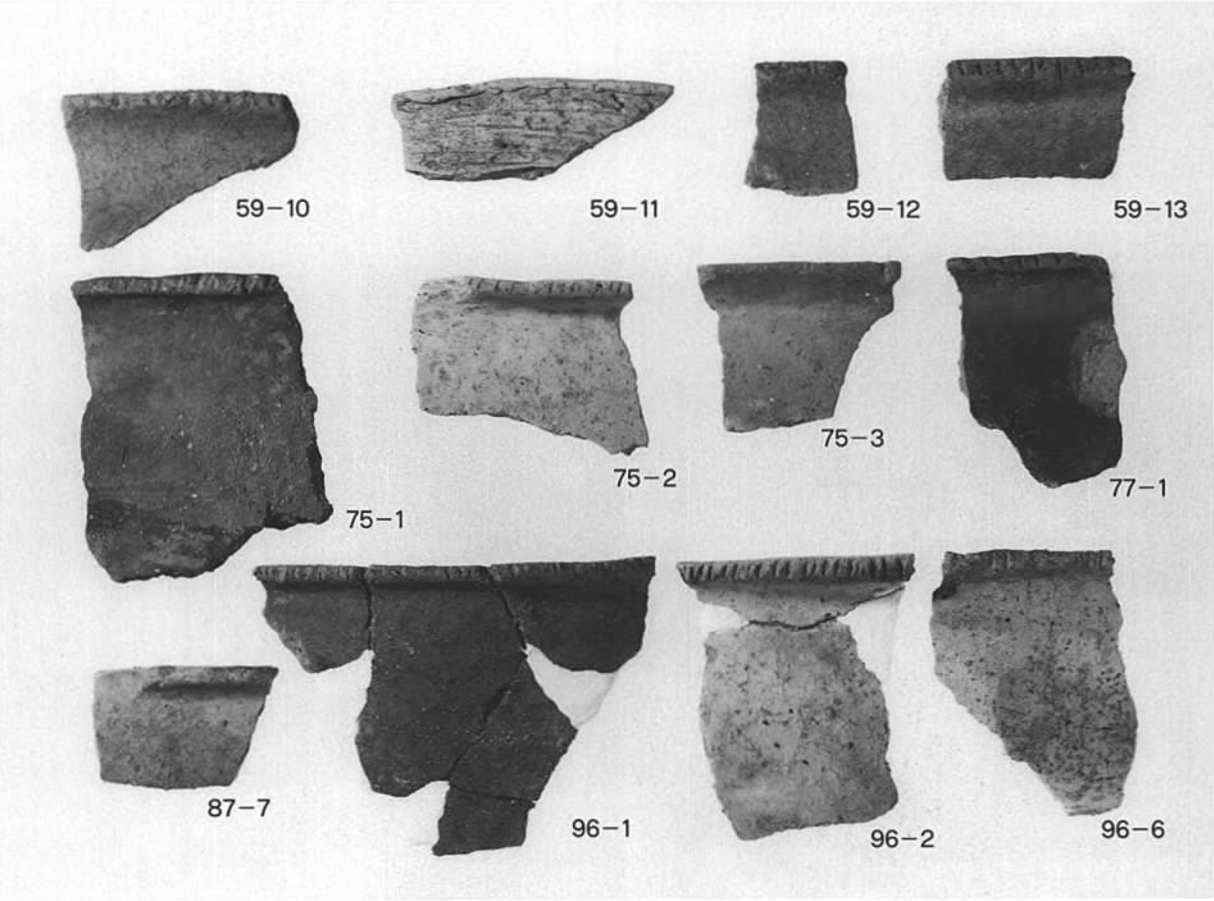
96−10


96−11

96−12

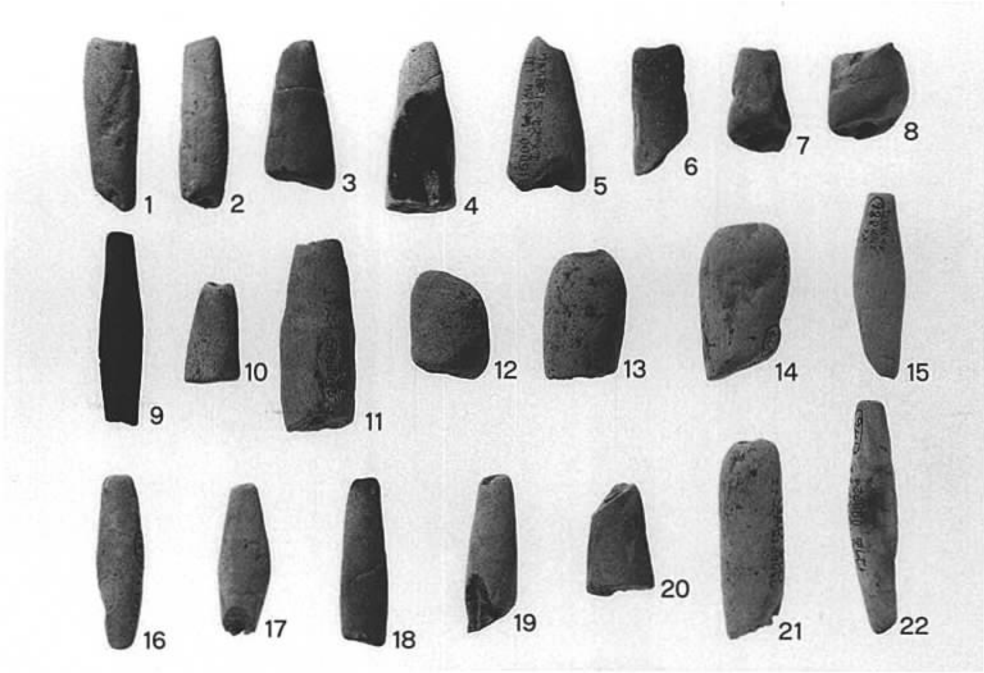

96−14

カクラン出土

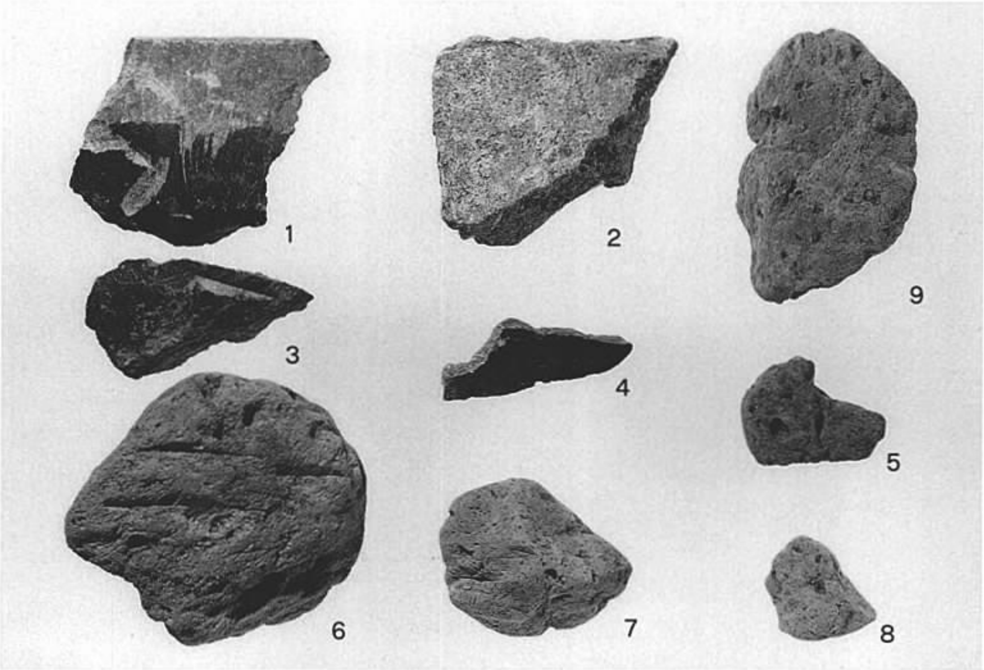


第2遺構面・包含層出土土器②、調査風景、弥生時代前期甕

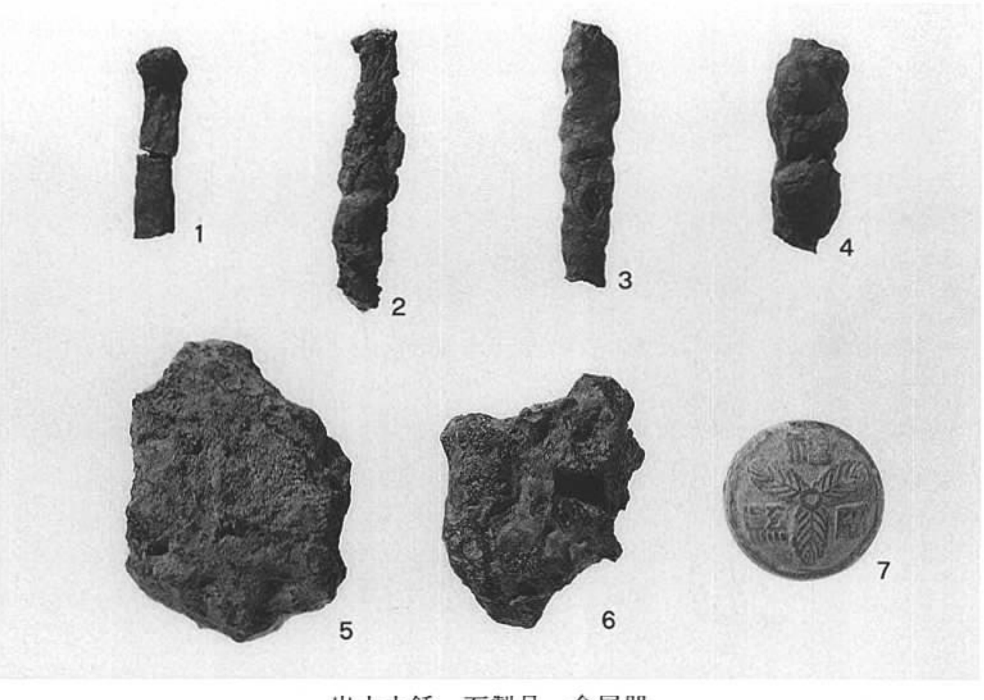
図版20



土錘



石製品



金属器

出土土錘、石製品、金属器

報告書抄録

ふりがな	おおまといせきいち・ひづめいせきいち
書名	大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ
副書名	福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	19
編著者名	今井涼子・大庭孝夫・児玉真一・小澤佳憲・坂元雄紀
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大的遺跡（おおまといせき）	福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸（ふくおかけんうきはぐんたぬしまるまちおおあざたぬしまる）					2000.5.8～2000.7.12 2000.11.6～2000.12.25 2001.11.21～2002.3.8	1,130	道路建設（一般国道210浮羽バイパス）
日詰遺跡（ひづめいせき）						2000.7.11～2000.11.5	1,170	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大的遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡、 掘立柱建物、 土坑、溝	弥生土器、須恵器、 土師器、土製品、 石製品、鉄製品	
日詰遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡、 掘立柱建物、 土坑、溝	弥生土器、須恵器、 土師器、土製品、 石製品、鉄製品	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 14	登録番号 14

一般国道210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第19集

大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ

平成15年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 マツオ印刷株式会社
福岡県山田市大字上山田1338-9